十月一日發行

女學世界





第十卷第十三號

博文館


美人の美しきは
常に乳白化粧水レートの使用を怠らざるが
故なり、即ちレートは美人を生み出す
べき、美の母なり
乳白化粧水
レート
東京 大阪 平尾賛平

今年の流行を御覧かたく

十月一日より三越へ御越し下されたし

第二十回新柄陳列會

寄せ裂れ見切り反物大賣出し

懸賞『新有職』裾模樣圖案陳列―懸賞新形ショールの陳列

第一回美術及美術工藝品展覧會

『天然と人』懸賞寫眞陳列會

和洋雜貨新製品陳列會

東西諸大家新作書幅陳列會

東京　駿河町

三越呉服店

第拾参號目次

一品一効

!!純無鉛!!

御料たつた白粉

●一品多能の望なきを主張する
吾製造各種の化粧料は常に

▲博士大家無害證明▼



▲新式中の新式白粉▼

●如斯美人を試金石とし着實に
善良の効果を収めつゝあり

御料あらひこ

▲一合の牛乳で洗ふより▼



▲一さじの御料あらひ粉▼

「欧羅巴宮殿式」

御料フード

▲水なしで化粧のできる▼



▲西洋風新式おしろい下▼

「化粧界新美観」

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々咯血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥褥の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に臨みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其法を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及び**印度バタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●五十日分十圓●七十日分十四圓▲遞送料十二錢●爲替局名は大森局宛

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり
用法及ひ詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖 川名助次郎
電話大森六十九番

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
横濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
北海道函館辨天町 國領平七
東京淺草並木 遠山藥店
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
靜岡市七間町 市川商店
埼玉縣熊ヶ谷町 櫛田金造

肺治散特約店

東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
越後國長岡町 藤井卯吉
東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀬戸物町 玉置金八
東京日本橋區上横町 安川晃榮堂
長野市大門町 小林傳兵衛
東京神田區鍋町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
馬關西南部町 賣藥會社
東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通 大野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 谷回春堂
相模横須賀汐入町 茶木商店
(全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す)





●佛國土産の最新白色新劑

色黒き、にきびそばかす等にて困悶の士女よ本院獨得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈して教ゆ

愛隣藥院

東京市東兩國小泉町二八



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

生徒募集

本科、特別科、及
本校及東京音樂學校入學豫備科

ピアノ、オルガン、バイオリン、唱歌
其他樂器及理論

入學志願者直接本校へ照會あれ

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町 衛生書院

女(いの二)

女（いの三）



菊乃露白粉
純良無比の原料を撰み皮膚に最も附着よき安全なる白粉は天下に菊の露白粉あるのみ
菊の露白粉
パール煉香油
スミレ黒香油
本舗
東京日本橋區横山町三
平尾銑也化粧品店
電話浪花百十番
振替東京百十番
煉小 二十錢
大 三十五錢

女(いの四)

さらば?



田中製版所三色版

◉婦人の幸福は如斯して得らるべし

結婚前に至つて健康なりし婦人の一旦他に嫁し未だ幾もなくて血の道癪に苦しむ者の非常に多きは事實婦人の生殖器が天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の繁殖するは當然にして結婚の機會に病毒侵入し其田畑を荒す故實際惡き土地の田畑に滿足な農産なき道理にて政治實業上外交繁き人の夫人及日常多くの客に接する婦人等は殊更其生殖器を害する機會多きを以て子宮血の道に苦しむ事の夥しきは此理由なれば一生の損害とならぬやう可要球を用ゆべし、方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を壓する獨逸伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に依る藥液をして直接に婦人の局處に作用せしむべく可要球(座藥にして內用藥にあらず)を調劑し幾多婦人科醫の實驗に供したる處殊に子宮內膜炎(俗下白帶下赤帶下)下腹筋張胸先差込子宮糜爛子宮出血及惡臭搔痒月經時疼痛痲毒性子宮病等の諸症に外用すれば驚くべく效力神速顯著なりとの稱贊を受けたり故に速に可要球を外用して病毒を根治せらるべし

可要球定價 三球入廿錢八球入五拾錢拾八球入壹圓四拾球入貳圓 特製百個入五圓

發行所 東京本郷湯島天神前(振替東京千五百番)
藥劑師 中西莊吉

賣特許

ヱンゼル香油

田原藥學博士の實驗 御證明 淸浦子爵 山高

三兩博士の實驗有効御證明 東京美術學校千頭教授の實驗

有効御賞賛狀其他大家より多大の高評を以て迎へられたる特許ヱンゼル香油は毛髮を黑化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる『ヘリオトロープ』『バイオレット』『ホワイトリリー』等の高雅なる芳香を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故別に他の香水等御用の必要は有ません又くせ毛の方はB號ヱンゼル香油御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升

紳士貴婦人專用高等香油



見よ!!

◉實價は小壜八十錢中壜壹圓大壜壹圓八十錢と天性縮毛用特製三円五十錢の四種で送費は市內は何れも七錢內地は小中壜迄は十一錢大壜及び特製十五錢です▲代金引替は一切謝絶す▼

東京市本郷區東片町十五番地
ヱンゼル商會
電話下谷二五六九番
振替東京二〇七四三番

女(ろの一)

ケーバー石鹸

舶來石鹸界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり

實用浮石鹸

レツクス



英國ボツソンエンドシンプソン會社特製品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは本品の特點なり

價格の低きは本品の特點なり

實用に適するは本品の特點なり

上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也

論より證據實地御使用を乞ふ

ケーバー香水

◎全世界を通じて流行品

最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝケーバ香水



定價

小瓶	金廿五錢
中瓶	金一圓
大瓶	金二圓
特瓶	金五圓

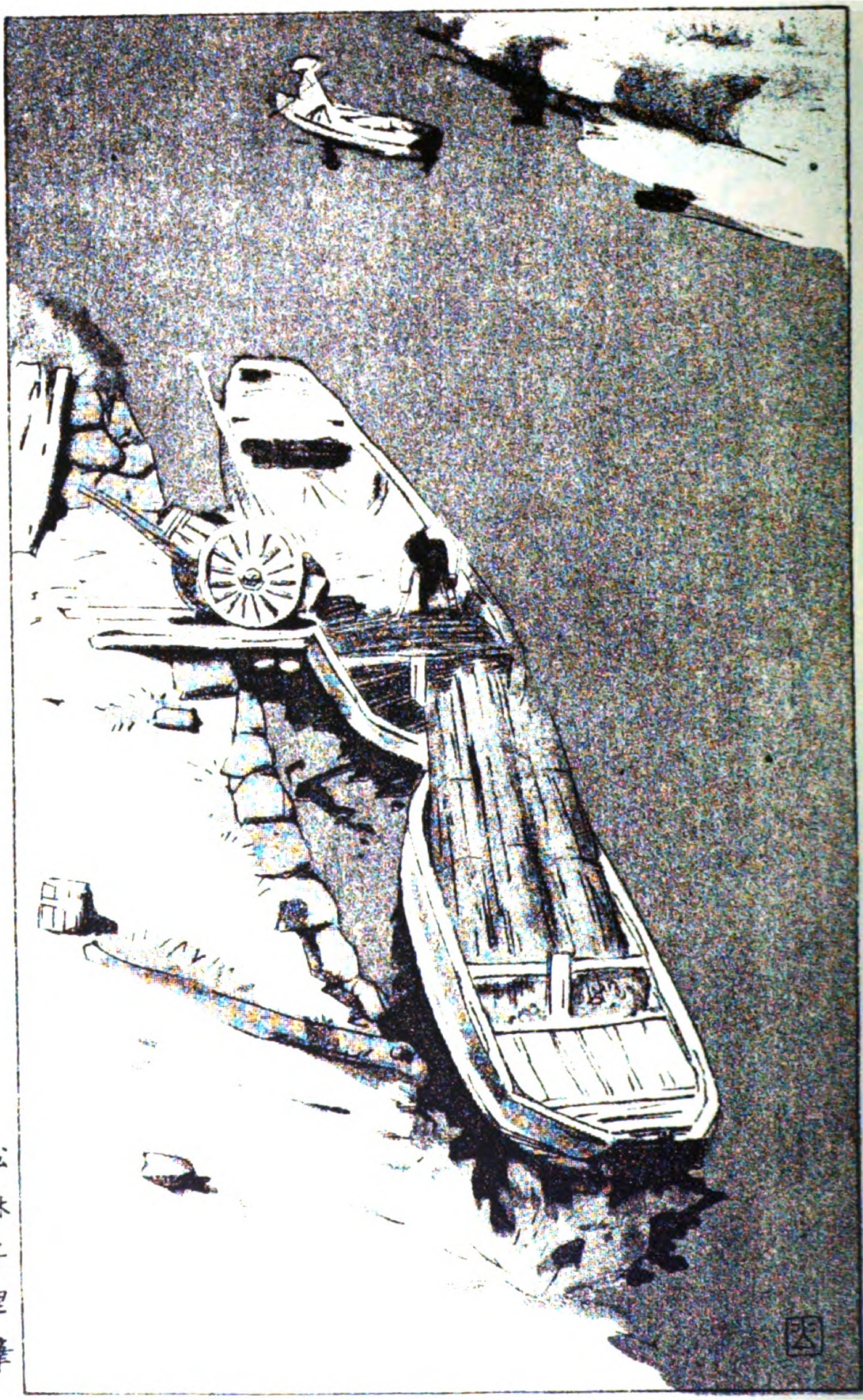
東洋一手代理店

竹間商店

●賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り升

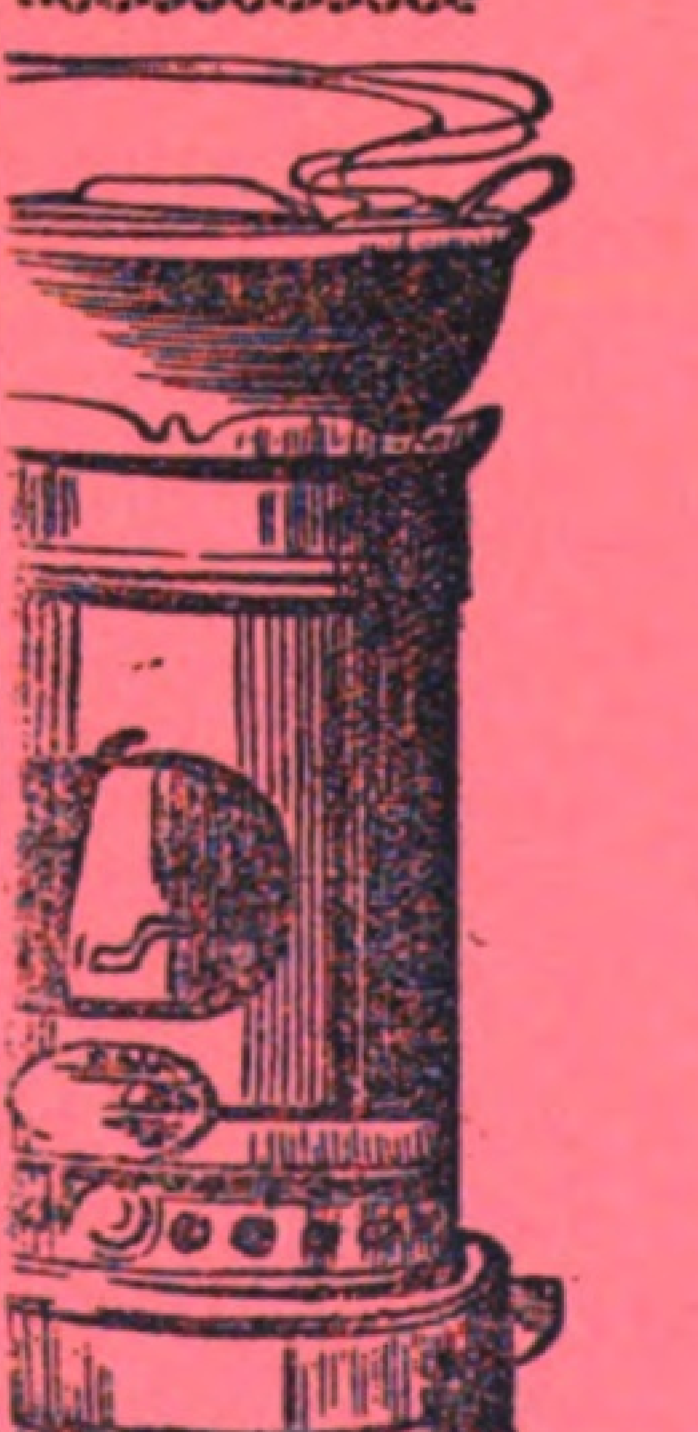
女(ろの四)

碧玲瓏



松林千里筆





女（はの一）

ムーレー及ランマン製・
フロリダウオーター

Murray & Lanman's
FLORIDA WATER

世界的流行の高尚香水

沐浴・洗手・髯を剃りたる後・疲勞せし時及び運動せし後皮膚に擦用すれば精神を快活ならしむ其他一般の化粧用



極上無比にして最も廣く愛用せらるゝ化粧用香水なることは毫も疑なし貴賤高卑を問はす又如何なる場合に使用せらるゝも神氣を爽快ならしめ恰も蘇生せしむるの快樂を得べし

登錄



商標

御購求の際は此の登錄商標を御注意あれ
僞造品を以て瞞着せらるゝこと勿れ

北米合衆國紐育市

製造元　ランマン及キヤンプ

LANMAN & KEMP, New York
Proprietors and Sole Manufacturers

日本帝國代理店　日本支那貿易會社

女(はの二)

新聞記者平山武者所著▲亞米利加の黒人女郎巣
報者と持て囃る軍人
哈爾賓の百鬼暗行等
艶ぽい書 價廿五錢

再版 **艶婦紙**

發兌 東京神田美土代町二の一 振替口座東京二〇四一六 博文書院

●小兒五かん 驚風 ●蟲おさへ

登録商標 (八)

本方 小兒虫一切妙藥 **奇應丸**

定價 金五錢 金拾錢 金廿錢 （送料金貳錢）

東京市京橋區銀座三丁目

發賣本舗 (八) 松澤商店

賣捌は全國諸々藥舗賣藥店に特約あり（電新五三〇）

男女 **ちぢれくせ毛** 赤毛は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

見よ◉月經なき女子◉病める婦人

▲勿驚……藥力最稱實…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止 月經滯り 月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞賛良藥 改良 **女月丸**

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◉肥滿病新藥

（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてより醜ぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶと〳〵ふとり◉血太り◉肉太り◉酒太り◉水太り◉顏赤◉にきび◉ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり誓て美顏美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸嬢姉の福音

美人となる



やせる藥

藥價	
一劑	一圓五十錢
二劑	二圓九十錢
三劑	四圓卅錢
四劑	五圓半
送料	十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七七番 **小宮愛生堂**

女(はの三)



十月一日より

今様髪の結ひぶり競技會

都下有名の女髪結師數十名が各々腕を揮ひて結ひ上げし流行の髪かたちを三階にて御高覧に供し奉り候

第四回

髪かざり新形陳列會

御婚禮用を始め新案流行の品々夥多取揃ひ候に付き盛大に開催仕り候間賑々敷御光來の程伏て奉願上候

東京京橋
南傳馬町

大西白牡丹

電話本局 三十番 三千番

女(はの四)

くさ草紙



榊原蕉園女史筆


サツパリしたお化粧の時季が來ました
文明的衛生薄化粧料としては、
水晶おしろいが一番よい
のです透明した水のやうですが、
附けるとすぐほんのりと白くな
り素顔の美しいのとしか見えません
で御婦人方に限らず紳士方も
盛んにお用ひになります
……（定價金三拾五錢……二拾五錢）……
特製
水晶
おしろい
通塩町
大和屋

（其の二）

◉本號より畫報の紙數を增加せり◉

婦人画報

十一月一日發行　十月の卷　一冊廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹圓五拾錢　十二冊税共二圓八拾八錢

畫報

▼湯の宿 中澤弘光筆彩色美人石版書
▼珍らしき盆栽と金石……
▼朝鮮婦人の洗濯と女學生の彈琴
▼婦人の能狂言 ▼跡見女學校應接室
▼母と娘の一日の仕事
▼大阪相愛信愛高女生の風俗其他……
▼豐臣時代と徳川時代の婦人風俗……
▼愛國婦人婦人同人神田婦人會慰問……
▼泰宮内親王殿下の御歸京
▼朝香宮兩殿下の御外出
▼季王殿下と同妃殿下
▼季太王殿下と同妃殿下
▼澳太利大使令孃の結婚御下賜品
▼ウイルミナ、プール兩女學校……
▼令孃鑑 ▼二學士の新夫人……
▼後藤遞信大臣家庭……
▼兩班の家族婦人外出、中流下流の婦人……
▼韓裝したる伊藤末松二夫人 和裝したる李朴二夫人……
▼十月の挿花 ▼女學校の授業始め……
▼文部省開催音樂講習會紀念撮影……
▼婦人矯風會員の水害地慰問……
▼名流婦人筆蹟 ▼樺太婦人會……
▼英國畫家の寫生になる日本婦人

讀物

◎皇后陛下の御歌……幸田延子
◎歐洲婦人と音樂……
◎假名の上達する法……岡山高蔭
◎大阪の京都女學校
◎勇婦かつ女……遠山稻子
◎應接ぶりから見た貴婦人
◎小兒衛生……弘田博士
◎危險なる婦人の思想　井上博士
◎慈善とは如何なるもの……小河博士
◎余が見たる朝鮮婦人……萩野博士
◎應用の才……下田學士
◎東京名物と料理挿花のたしなみ
◎忘れ得ぬ朋友のかずかず　玉水
◎特色ある一夫人
◎通俗婦人法律談……川名博士
◎新歸朝の米國文學士古谷孃訪問
◎能く働く信州の婦人　宮川すみ子
◎朝鮮婦人の長所と短所　三谷民子

東京麹町區飯田町四の四　東京社　電話番町二三三九番　振替口座一一八一八

女(にの二)

造花原料

東京九段坂

吉住商店

特長電話番町二〇五六番
振替東京六六七九番

◎營業目錄御入用ノ方ハ二錢切手ト此切取チ添ヘ東京九段吉住商店宛申込マルベシ
（女學世界十月號）

ニキビそばかすにて苦悶者

は藥學界の泰斗藥學士藤本理先生が半生の心血を注ぎて漸く發見せられたる特種の奇藥**クヴルー**を使用して速に苦腦を脫せよ但し本劑希望者は本劑購求前又は同時に本劑の說明書を要求せられ其特効たるを確信の上採用を乞ふ
◎藥價輕症用五拾錢送料市內四錢地方八錢淸韓臺灣卅錢[redacted]

東京下谷區東黑門町六番地 **長田彌平**
振替口座東京七六二九番
電話下谷二一五七番

らい病

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども！病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする賣藥主義の賣藥に非ず

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ナノサール 一ヶ月分 貳圓
強方ナノサール 一ヶ月分 參圓

本舖 三河國碧海郡刈谷町
醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**
振替口座東京貳參壹壹
電話刈谷參拾貳番

女（たの三）

悪筆は一生の損

習へば斯くの如く直ちに上達する

本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる性來の悪筆にても最も短日にて上達すること全く機械的也

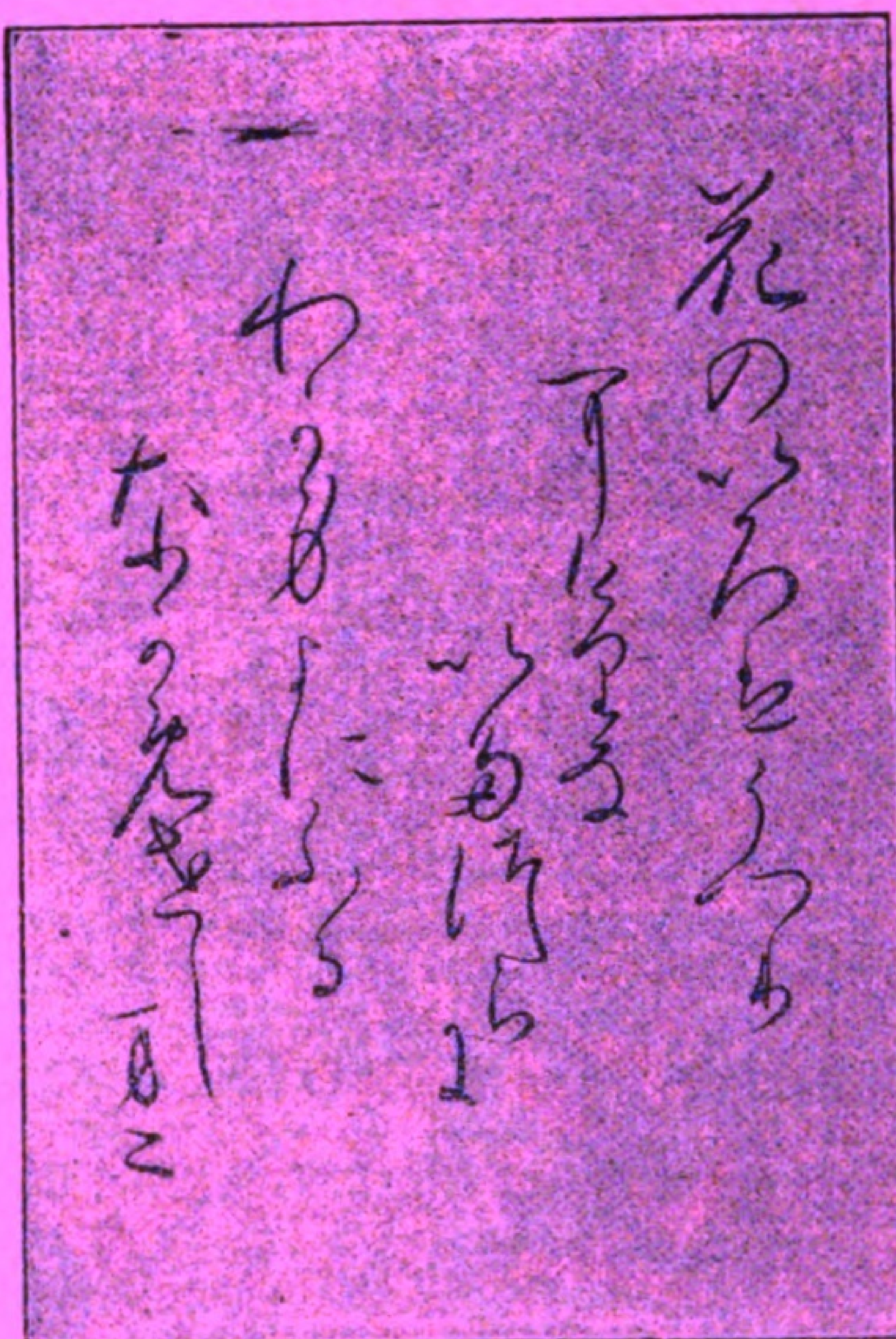
女(にの四)

▼女子部の書者
小野鵞堂先生

▼男子部小學部書者
稻川雲谿先生

玉木愛石先生

外講師大家……數拾名



三ケ月目の清書　大阪市會員　桝田安子

（見本詳細會則無代進呈す）

帝國習字速成學會

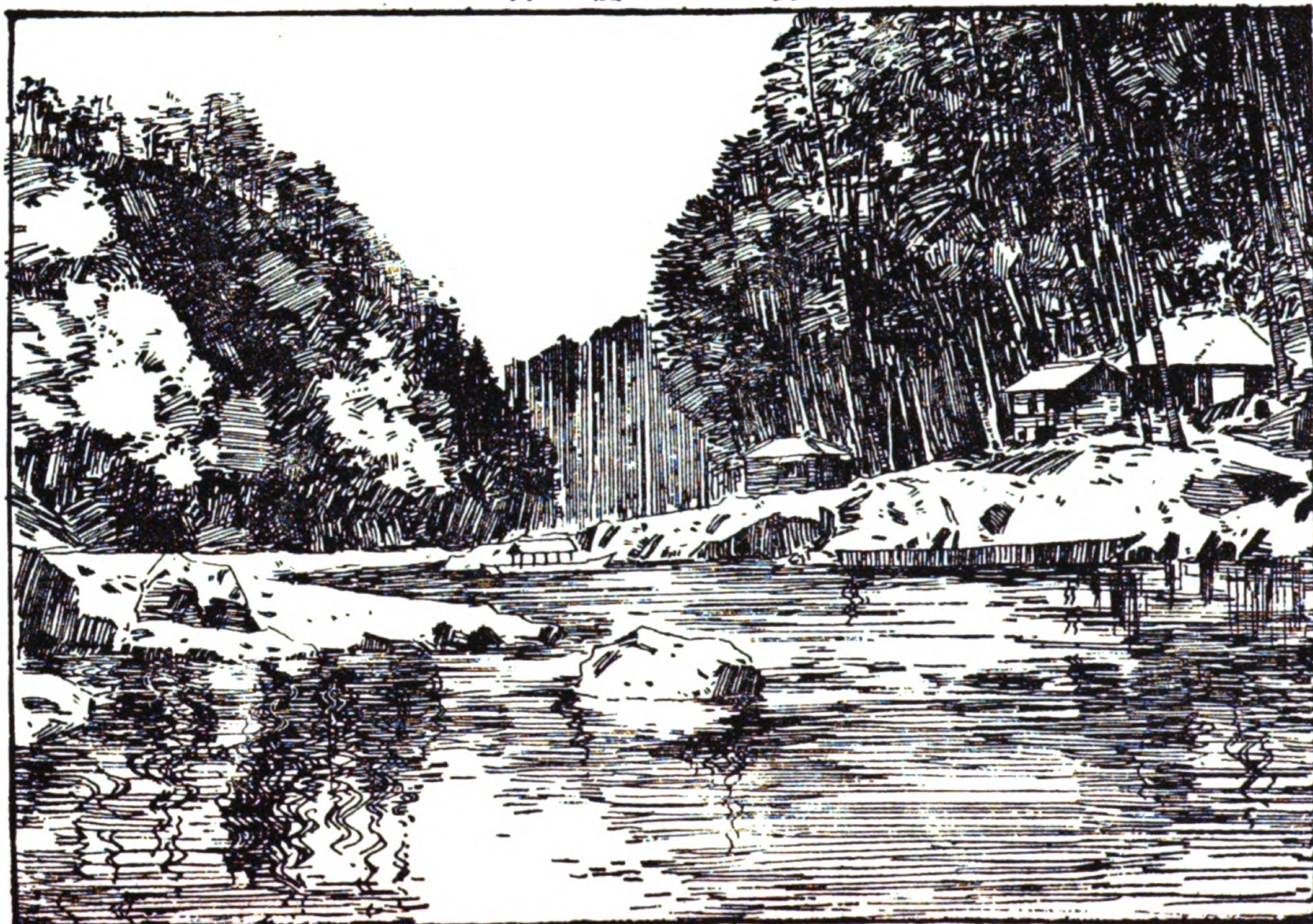
東京本郷區大學正門前
電話下谷三〇壹壹番
電話下谷三貳一〇番

藻に遊ぶ



加藤南山筆

秋の嵐山



宮川安信筆



(107)

見よ大發展せる本誌と大附錄

婦人くらぶ

十月一日發行 三卷 第拾號

一冊十五錢郵稅一錢五厘●六冊九十錢郵稅共●十二冊郵稅共一圓七十四錢

▲家庭の情味を忘れんとする女學生……鎌田慶應義塾長
▲母とも思って縋った姑……白木糸子
▲破產した名門の奧……植科松代
▲名流婦人月旦……小槐迂史
▲先祖の位牌で打擲される劇……阪谷男爵
▲赤坂區の女（東京十五區のうち）……國木田治子
▲私は金時計（滑稽小說）……千鳥女
▲藝術好きの女の末路……くれなゐ女
▲お嫁入の前後……小崎千代子
▲小公女（附錄家庭小說）……バーネット女史原著

臨時增刊十月十五日發行

定價卅五錢 郵稅二錢（口繪アート四 六倍版四八頁）

韓國併合記念 皇室畫報

我國の元首なる皇族方及び新王族の最近の御眞影を漏る所なく集め奉りて善美なる畫帖となしたるもの、宮內省別當會議の結果特に最近の御眞影御貸下げの榮を得たるものなり、韓國併合といへる曠古の大業を遂げたる記念として各家庭に一本を備へられる事を勸む

東京市神田區駿河臺北甲賀町十番地 紫明社 電話本局三六八四番 振替口座一七五五四番

女（ほの二）


鉛氣ない匂の高尚な
大學白粉
如何ほど荒れたる
肌も美しく滑かになる
大學化粧水

昌德宮李王妃殿下



昌德宮李王妃殿下は朝鮮貴族尹氏の出にして一昨年御年十五歳にして入内、頗る聰明の御聞えあり。

名流婦人



上圖、故陸軍少佐尾寺藤三氏夫人しげ子（總理大臣侯爵桂太郎氏令孃）下圖、梅津璉造氏夫人竹子（陸軍中將子爵三浦梧樓氏令孃）



千代田香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
特製 金七十錢
大瓶 金三十五錢
中瓶 金二十五錢
小瓶 金十七錢
東京市馬喰町
山岸三之助
電話浪花七九三
純白浮きスワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸
▲定價 二個入(壹本) 廿二錢
英國ポルトサンライト市
製造所 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇番

女(への二)


大英國皇室
撰技御用品
DIEU ET MON DROIT
美貌たらんとせば
ヴィノオリヤア
石鹼を愛用せよ
ヴィノオリヤア
製品は總て
品質優良なり
日本代理店
全國到る處
高等化粧品
商舖に販賣
ヴィノオリヤア齒磨粉
ヴィノオリヤアクリーム
ヴィノオリヤア白粉
ヴィノオリヤア香水
クローザー商會
VESTAL
ヴィノオリヤア會社
倫敦巴里 紐育



耳病

即耳だれ耳なり中耳炎鼓膜炎ゝ耳遠き人よ如何なる治療にても全治せず困難の人は二錢券封入御照會あれば詳記せる自宅療法書を呈す

東京々橋區南鍛治町三 東藥房

▲新宮藥館五大賣藥

天下一品 美身術

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらふとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる有効保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓廿錢 送費八錢



◀にせ物あり乞御注意▶

男女 生殖器科

●梅毒痳毒 生殖器障害 神經衰弱 ●婦人科一般 ヒステリー 月經障害 ●診察 午前午後 ●入院隨時●

明治療院

●東京淺草七軒町二●

中風 全治保証藥 ミフレギー丸

此藥は大學院各博士が協力發明の方劑にして効驗拔群禮狀山の如き一大保證藥也

價●十五日分一圓廿錢●卅日分二圓廿五錢●六十日分四圓廿錢●百日分七圓五十錢●小包送料八錢

らい病 根治新藥 レプラ丸

本劑は獨逸國醫學博士ボルマルセイ氏が癩病の病源より探究し多年の辛苦と數萬の患者に施藥實驗を經て終に成功したる靈藥にして如何なる難症と雖も本劑に依て全治するを得る一大奇藥也●にせ物注意あれ

價一劑廿五日用三圓二劑五圓五十錢四劑十圓小包料八錢

毛のはへる藥

多年實施の毛生劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓●三圓 ▲送料八錢

にせもの注意

肺病根治劑

本劑は肺結核の特効藥にして世上諸病殊に雜多の肺病藥と其類を異にし專賣の大奇藥なり輕症卅日以內數年の大患も五十日分にて必ず全治を確信す

●價二週一圓卅日二圓五十日三圓送料八錢

(全快禮狀店内に保存す)

新宮藥館

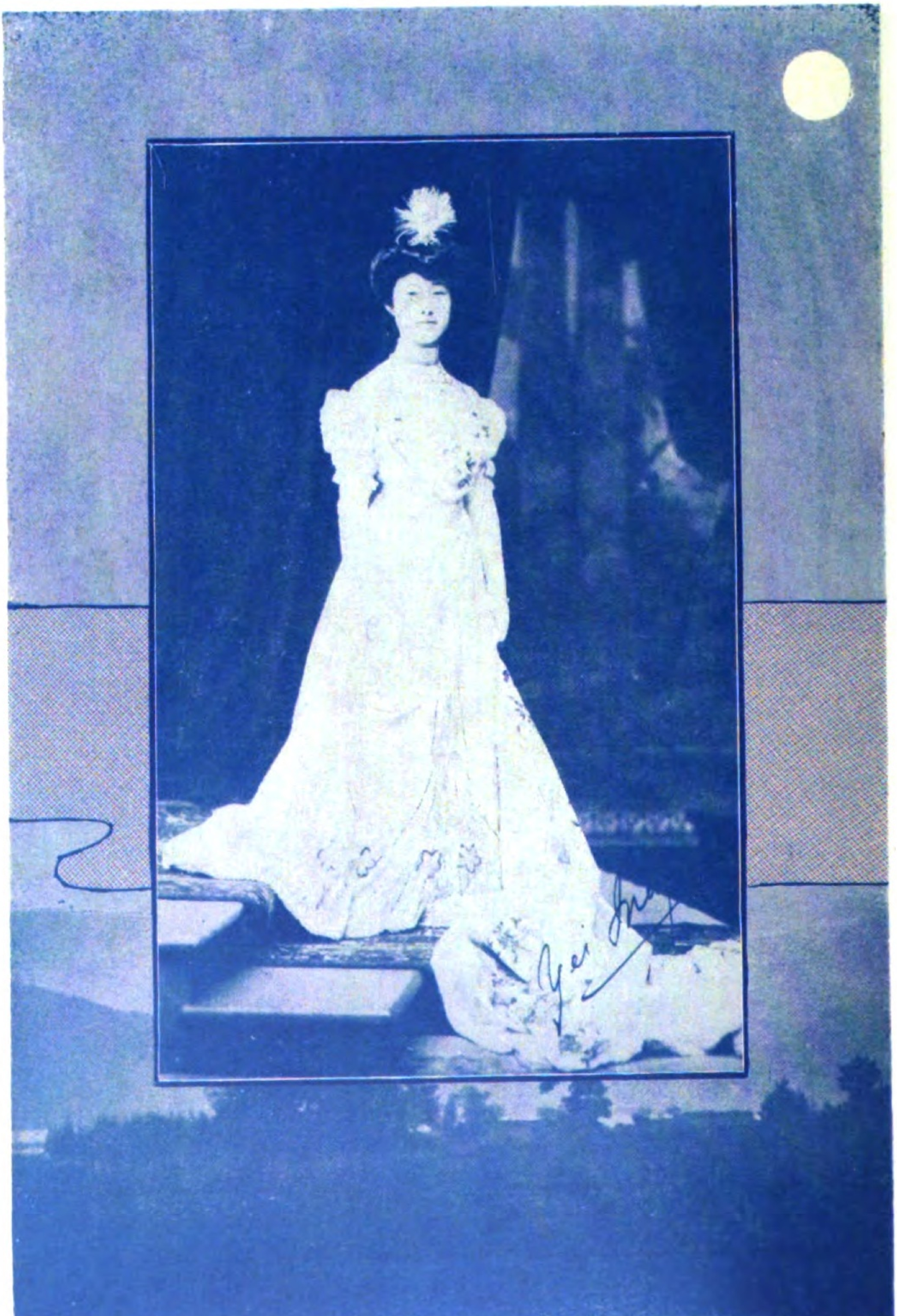
(振替東京一二五八四 本郷三丁目)

電話下谷二二一九番

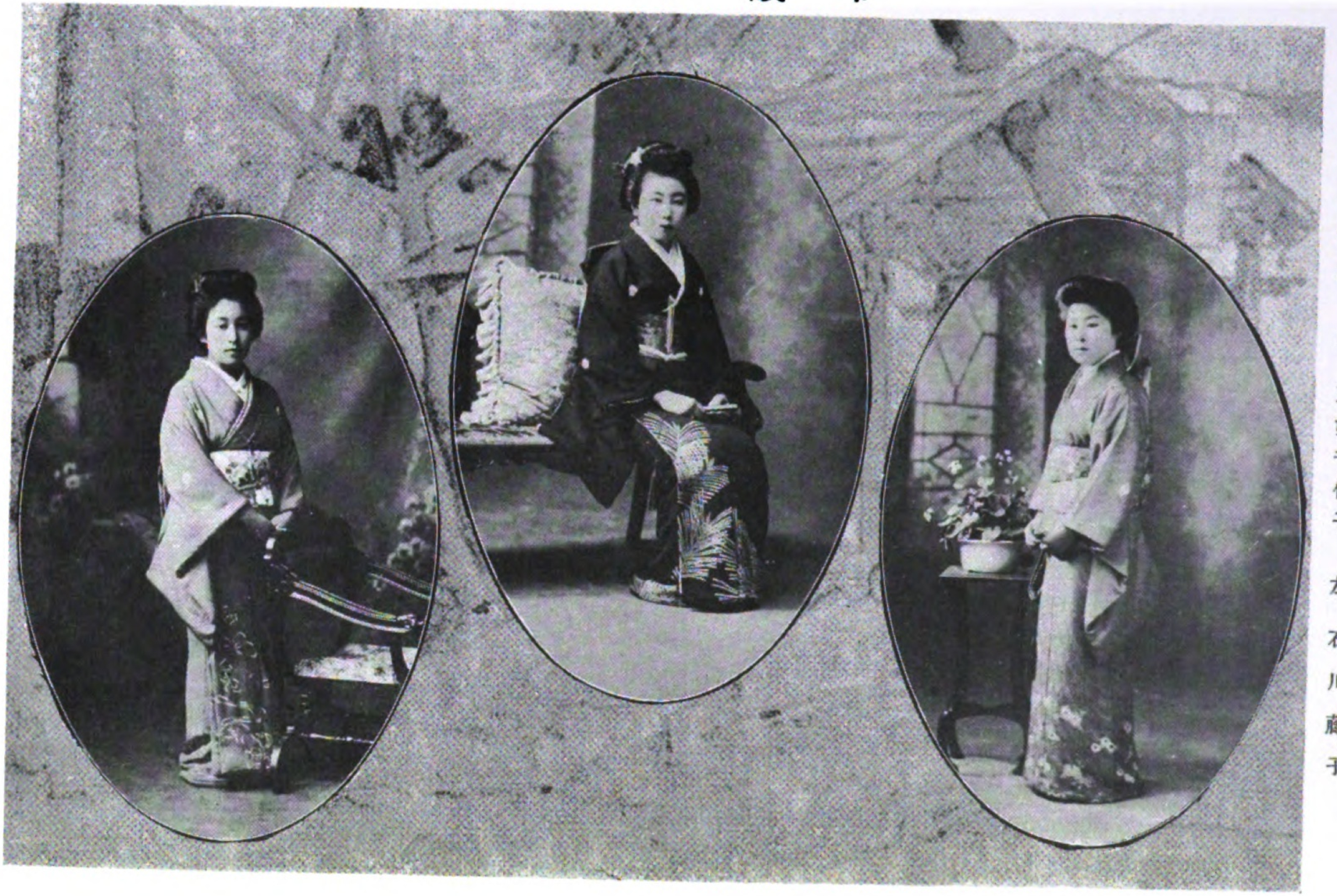
女(への三)

女(への四)

稻垣榮子夫人



令嬢かゞみ



右、井上安子　中、三好千代子　左、石川藤子

毛髪の艶を美しくする
椿製ランラン香油

ランラン香油は髪をさらりとして常に御使用被下候はゞ決して臭氣を發しませぬ



東京市内……到る所油店小間物店有……

價（大瓶 金廿五錢 小瓶 金十八錢）

發賣元 大阪市新町
福田源次郎商店
電話……西千六百〇一番
振替……大阪一四八五番

女(へとのこし

IVORY SOAP

アイボリー石鹸

Procter & Gamble, Cincinnati

日本輸入品に限り包裝紙に斜に「アイボリー石鹸」と記入し一見模造惡質石鹸と判別に容易ならしむ御購求の節「アイボリー石鹸」に御注意を乞ふ

禿、脱毛、薄毛、生際惡き人試みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舗 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

脚氣胃腸病者に告ぐ

百發百中効驗神の如し

卅日分卅五錢送料十錢（實驗報告說明書見本）
十日分十五錢送料五錢（六錢送呈製造元へ）

前東京第二衞戍病院長臨時脚氣病調査會委員
二等軍醫正ドクトル

都築甚之助先生御證明

糠精

衞生食糠

本品は化學を應用して米糠中より本質脂油を除き其有効成分のみを美味に飲み易くした特効食料品なり

證明書

尾崎兄弟飼禽場に於て試驗の結果尾崎氏製造食糠の脚氣病に偉効あることを證明す

明治四十三年六月一日

ドクトル 都築甚之助 ㊞

製造發賣元 陸軍省御用達 尾崎兄弟飼禽場 分場 舊大隈伯爵家養鷄場

特約販賣元 東京麻布霞町 電芝二一八二 南信堂藥舗 振替東京七八五〇番

▼全國到る處の藥店及食料品店に有り▲

女（との二）

面白くて實際爲になること日本一

婦人世界

十一月一日發行　第拾壹號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共一圓五錢

七晝夜水責めに遭ふ　福來博士夫人

▽日本婦人は自ら幸福を感ぜよ……村井弦齋

▽我が半生の哀史……女子高師教授黒田定治氏夫人　黒田鏗爾子

▽水害地を廻つて見聞した感心な婦人　金子貞子

◎結婚前の理想と結婚後の實際　櫻井中尉夫人

◎私が朝鮮王に謁見した模樣　目賀田男爵夫人

▽女學校の校長より米屋の主人となる　深田憲治

▽小兒病の豫防法……醫學博士　加藤照麿

▽明治初年に寫眞屋を開業した苦心談　江崎禮二夫人

秋季增刊『婦人と實驗』　十月五日發行　定價拾五錢郵税一錢半

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　（郵便振替貯金口座三二六番）　全國賣捌書店

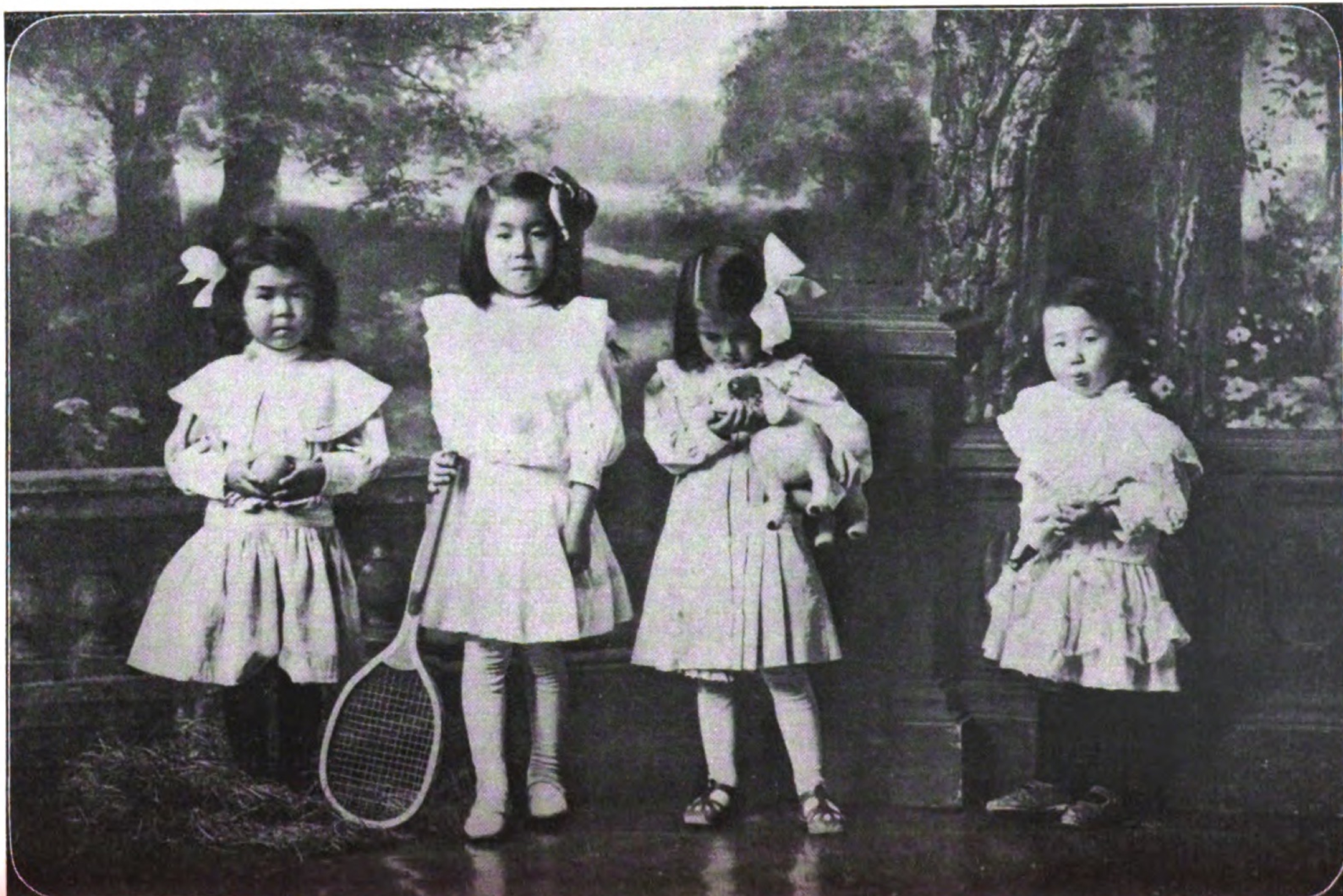
女(その三)


都の花石鹸
▲全國到る處の化粧品雜貨店に販賣せり
芳香の高雅にして品質の純良なるは紳士淑女の愛用と名譽の金牌とに依り知らる
大阪 野村製




紐育市滯在中の福井夏子夫人と令孃菊子

理想の子供服



女子共立會新案子供服

於內外諸博覽會名譽賞牌各種受領

專賣特許 連動蓄音器

新案 重函蓄音器

各種

獨逸國ライロホーン、ウエルケ會社東洋一手販賣

ライロホーン兩面音譜多數着荷

ライロホーン新曲譜歌集 實費金參拾五錢 送料金四錢

○御不用の蠟管有之候へば便宜御引取可申候

東京市銀座一丁目 長電話新橋九七九 四二〇四 振替口座東京六四二五

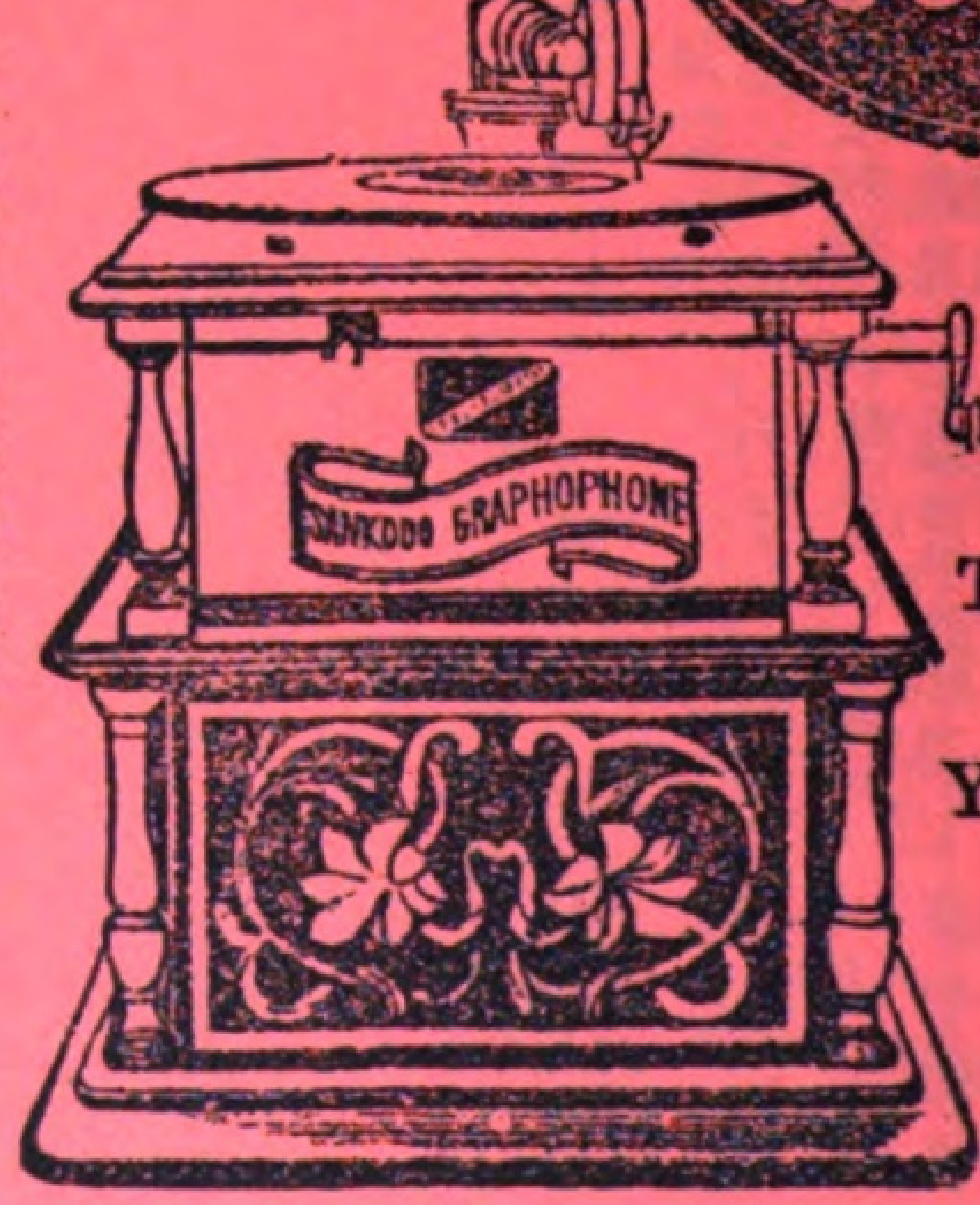
東京市淺草區並木町 長電話下谷九八八 振替口座一九八八四

大阪、博多、小樽





定價表歌目錄御一報次第無料送呈可仕候



新案特許 喇叭無し重函蓄音器

TYPE MN

YEN85.

三光堂

女(ちの一)

女(ちの二)



毛はへ薬

最新發明

●奏効確實 ●使用簡便

藥學の進歩と多年の專門研究により必ず毛のはへる最新毛生法發見す 其効驗如何に確著なるか諸大家の實見報告賛評等詳細は郵券二錢封入照會あれ

東京日本橋通四丁目四番地 公仁藥院

にきびとり……化粧水

本品は有名なる獨逸專門大家の調配にして多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧水なり常に本品を愛用すればいかなる吹出ものと雖ども二三瓶にて必治は實驗者の證明なり幸に御試用あらん事を乞御一報次第速に郵送す定價郵送料共一瓶三十錢（但郵便切手は一割增）

化粧水パヒロン發賣元 東京淺草千束町二丁目二三五 小林榮進堂

金儲婦人職業 通信教授

二ヶ月卒業遠近の自宅にて誰でも和洋造花●花輪花かんざし六十種の果實標本等は美麗に出來ること保證す販路は擴大にして年中無休相當收益あり案内書付製品見本は造花でも果實でも一種十二錢二種廿四錢郵券送れば直に送呈す

群馬共進會 二百ボルト電氣應用造花籠ニ陳列せり

東京市四谷區麹町十二の九 美術造花傳習所

第十一回 產婆學講義錄

通信教授會員募集

會長 陸軍二等軍醫正 正六位勳四等 ドクトル 渡邊鼎

規則要郵券二錢

東京市四谷區內藤町一ほの部 東京產婆看護婦講習會

產婆科六ヶ月卒業 看護科四ヶ月卒業

美術造花材料

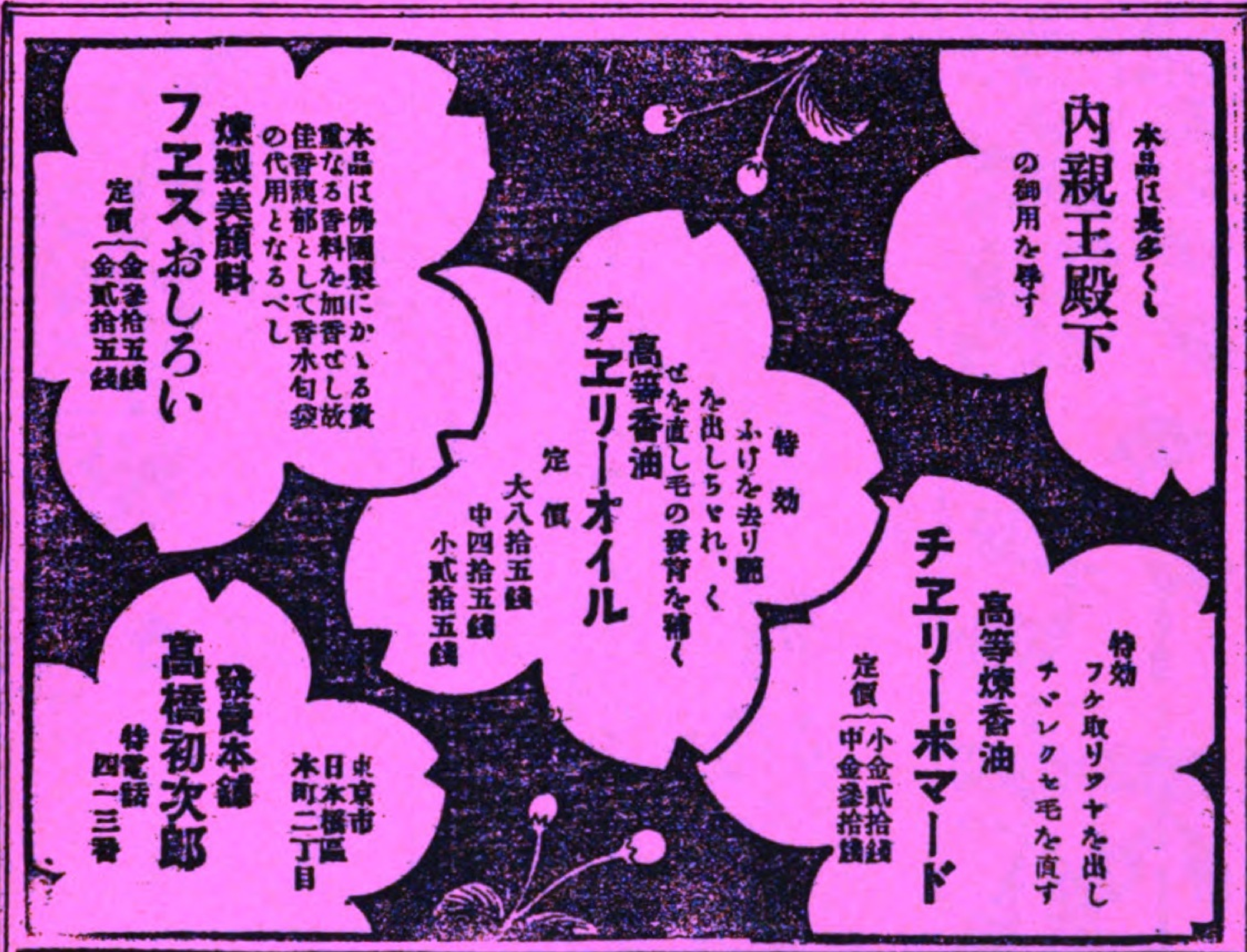
三國屋 關口商店

▼半製品、鏝、打拔類

東京淺草區駒形町十四番地 振替貯金一一六四二番 電話…下谷二八三五番

（御一報次第定價表進呈）

女（ちの三）


本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
フケ取りツヤを出し
ちヾレクセ毛を直す
高等煉香油
チエリーポマード
定價（小金貳拾錢
中金參拾錢
特効
ふけを去り艶を出しちゞれ、くせを直し毛の發育を補く
高等香油
チエリーオイル
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢
本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フエスおしろい
定價（金參拾五錢
金貳拾五錢
東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舗
高橋初次郎
特電話 四一三番


於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HICETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮内省御用達
千葉縣
田中玄蕃釀造
銚子港
ヒゲタ印醤油

朝鮮風俗







上圖、露店の雜貨商　下圖、婦人のきぬた打　中圖、大同江の水汲

上圖、婦人の弾琴　下圖　河岸の洗濯

花嫁百姿



右圖、中山太一氏（化粧品商中山太陽堂主人）同夫人ひろ子



左圖　長與程三氏（男爵長與稱吉氏令弟）同夫人ひさ子

飲む丈血になる

ボビナイン

病者は薬を飲む前に先づボビナインを飲め

▲総ての病者は薬物的療法を行ふと同時に滋養療法を行はざるべからず、然らざれば如何なる名薬も其効甚だ尠なかるべし

▲**ボビナイン**は以上の目的に最も適合せる滋養品にして欧米にては廿餘年前より貴重なる滋養品として賞用せらる

▲血と肉とを構成する**ボビナイン**は生牛肉中に含蓄せる總ての滋養分を最も嶄新なる方法に依り其性質を變んずることなく抽出したる理想的滋養品なり



大瓶二圓十五錢
小瓶九十五錢
送料一本八錢

▲**ボビナイン**が幾多滋養品中傑出せる所以は消化吸收力の速かなることにして如何に胃腸の悪しき人又弱き人にも直に消化せらるべきを以て幼児の滋養品として牛乳に滴下し用ふる時は其効最も著るしかるべし

▲一

適症　貧血、神經衰弱、産前産後、小兒の發育不良、食慾消失、肺結核

服用法はサイダー、牛乳等に混和して用ふる時は尤も妙なり

各地到る處の藥舗、洋酒店にあり　◎説明書御報次第進呈

ボビナインは飲むだけ血になる滋養品なり

【りの二】

日本總代理店

橫濱市境町二丁目

藥種貿易商　合資會社　友田商店　振替口座東京一九三八番

新案彫刻指環

(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(1) K22 プラチナ入片喰(カタバミ) 金拾八圓半

(2) K20 亂菊菊に水 金拾貳圓

(3) K20 蝶々の圖 金拾五圓

(4) K20 波の圖眞珠入 金拾八圓

(5) K20 菊水の圖 金八圓

今秋の新流行品各種取揃へ置候に付何卒御來觀の上御用仰付られ度候

營業目錄
送費四錢

東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西

電話本局二〇四〇番 振替口座一五二一四番

根治確證

わきが

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清潔驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用ひよ

毛のぱへる

増はへぎわうすき人◎まゆ毛◎口ひげ◎其他の所に毛なき人用ひよ毛髪
め生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

有力なる最新液にて毛をはやしたき人早く試みられよ◎ぬけ毛落毛を止

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製

色の白くなる液

本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾五錢本劑は貴紳淑女粋士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして

月やくおろし

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば直ぐ下る二三ケ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流す本質は如何に於て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製五圓卅錢参圓五拾錢送料拾貳錢

專賣 東京神田區小川町東明館前 オリエンタル藥舖

女(りの三)


十月一日より
秋期新製品陳列會開催
◎懸賞募集改良玩具陳列
◎懸賞當選優秀圖案陳列
善き品を廉く賣れ!!
寄裂見切反物大賣出し
尚店内には光線應用による千變不思議なる餘興の設備も有之候間何卒倍舊の御愛顧を賜り永當の御來遊御買上の程切に奉願上候 敬白
東京日本橋
白木屋呉服店
日本橋

(りの四)



女學世界

十月號

第拾巻第拾参號

詔書

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國カ禍亂ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ帝國ノ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ鋭意韓國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼ノ念每ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ增進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト瞭然タルニ至レリ

朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ擧テ日本帝國ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトナセリ

韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ增進スヘク產業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシ

而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈々其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムルコトヲ期セヨ

御名御璽

明治四十三年八月二十九日

各大臣副署

新學問の長所と短所

白菊女史

女に學問をさすと生意氣になる、柔順でなくなる、結婚をしなくなる、男性的になる。近頃斯う云ふ非難を又頻りに聞く樣になッた。之は女子に高等敎育を授けよと云ふ進歩的意見に對する保守的意見と見える。昔は民をして依らしむべし、知らしむべからずと云ッて、わざわざ民を愚にして屈從させた。今は女子を愚にして男子の勝手な玩具と奴隷にしようと云ふのか。

一體學問々々と云ッて何れ丈の學問をしてゐるか。自分の見た所では、今の謂ゆる敎育を受けた女子の多數は未だ何の學問もして居ないと思ふ。之は議論よりも實際に就て取調ぶれば何人にも直ぐ解る事である。

例へば女子大學の卒業生と云へば名こそ立派であるが、其學力は未だ一人の文部省檢定試驗に合格し得る者すら無いので見ても、如何に淺薄であるかと云ふ事が想像せられるのである。

女子大學の國文科を卒業したからと云ッて源氏物語榮華物語の一頁でも完全に理解してゐる人のあるのでは無い。英文科や家政科を卒業したと云ッても其語學力や數學力は大抵男子の中學の三四年生の實力と匹敵するか爲ないか位の程度に過ぎないのである。

其他美術史とか法制經濟とか課目の名は高尙らしくても、敎へらるゝ所は凡て通俗卑近の御話である。大學と云ふ美名の下に田舍上りのお姫樣が飯事をして居るのに過ぎない。之は自分が其々專門家に嚴密な意見を伺ッた場合に誰も一致せられた批評である。

女子大學の卒業生の中にも勿論或る一能に秀でた二三氏の除外例はあるでせう。併し概括して以上の如き

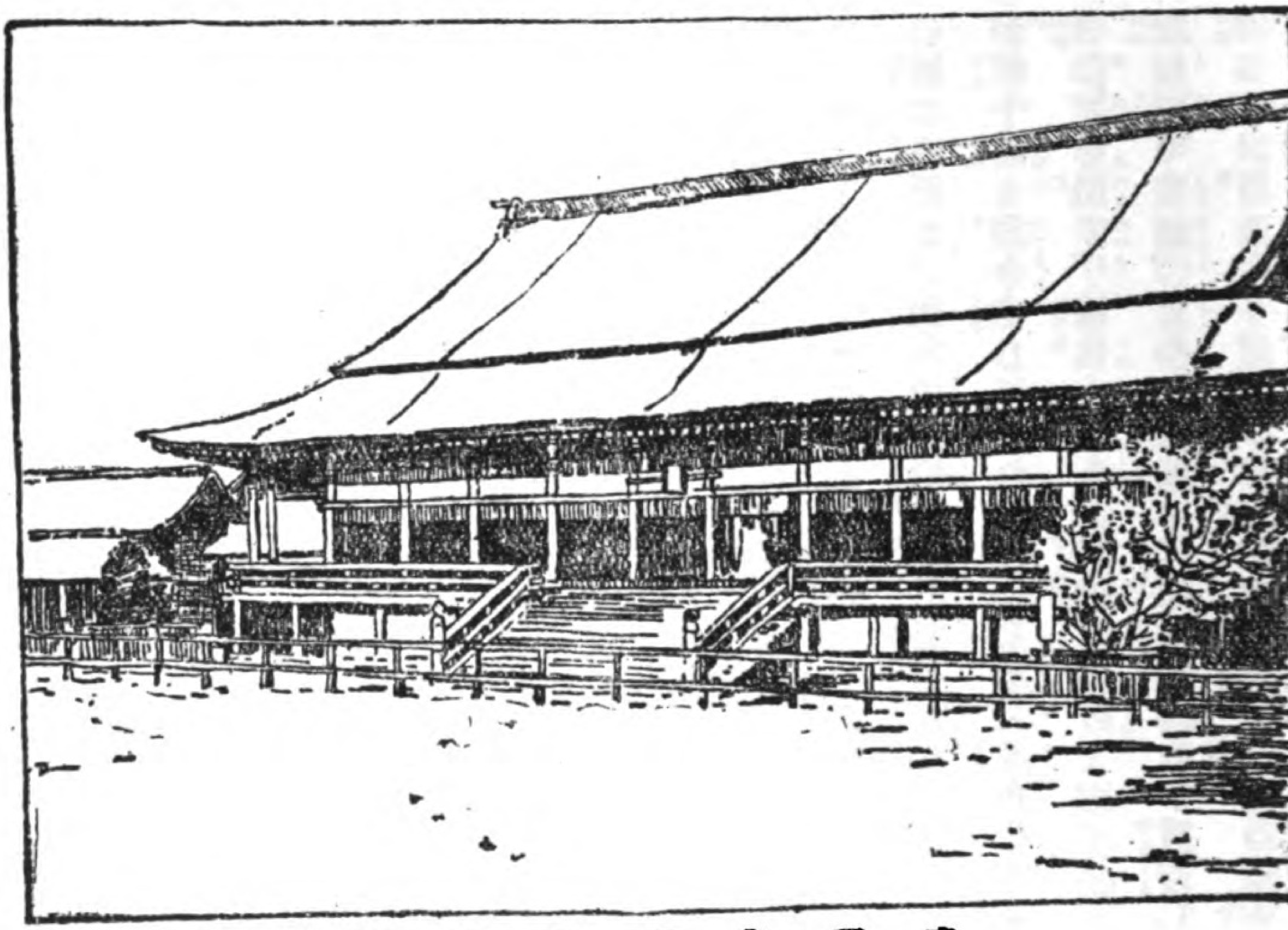
敎育程度であるとすれば、女子大學以下の高等女學校の學課と云ふものは、もう一層くだらないものであると云ふ事が想はれる。

抑も普通敎育が未だ學問と云ふ程のものでない事は明白である。男子が尋常中學を卒業したからと云ッて學問のある男だとは誰も云はないのである。然るに其中學卒業生の學力にも匹敵し難い程の微弱な敎育しか受けない女子に對して、學問をさすと何うの斯うのと云ふ非難は一向に當らないと思ふ。

×

男子に由ッて設計せられた女子敎育の方針は、まだ何うも男尊女卑の封建思想を脫してゐない。お情を以て女にも敎育を施して遣ると云ふ態度である。女の手を執ッて對等な文明生活を協同して營まうと云ふ高明慈悲な心掛が缺けてゐる。其れで敎育は施すが學問はさせたく無い。敎育の大部分は手藝とか割烹とか分娩の豫修とかの餘り智識を要しない手足の勞働を課して、其他は言譯ばかりに學術の斷片を鵜呑にさせてお茶を濁して置く、名は嫁入と子を育てる準備とで實は高等下女の支度をさせるのである。

中學生は生意氣なものである。高等下女も亦生ハイカラなものである。其れが厭ならば中學以上の高等敎育を授けるがよい。下女以上の文明婦人の人格を養はすがよい。自分は今の婦人に一册の帝國憲法丈でも眞に理解することの出來る頭腦を養はせたならば、其智識は聰明、其情操は高雅、其意志は堅實、文明男子の佳伴、淑妻、慈母として深味のある樂しい協同生活を營み得る事であらうと思ふ。充實した學問をして爲に女子が生意氣になると想ふのは杞憂である。愚論である。



京都御所內裏紫宸殿

×

新しい女子がいろんな新奇な物を欲しがる。其れを壓抑しようとするのは時代を深く研究しない人の狹い間違ッた量見だ。爲たい儘にさせてみるがよい。一時は虛榮にも流れやう、放縱にもならう。併し物には限がある。少しの弊害位は寛假して見てゐる中に、自然婦人みづからの經驗と努力とで得た新しい良好な位置に定着するであらう。斯う云ふ婦人解放說が坪內博士などの大家に由ッて唱へられるのは、女子敎育家父兄、一般の男子に於て參考として戴きたい事である。

新しい女子の心持は、譬へば古い衣服を厭うて極端に新しい衣服を欲しがッてゐる娘の樣なものである。田舍育ちの母親は、祖先から傳はッた物を洗ひ張して着るのが此村の習慣で、古い家筋の人程この習慣を守る。其れが堅義だとも儉約人だとも柔順だとも云ッて

褒められるのである。斯う云ッて祖母さんの形見の古着を着せたり、亡くなッた出戻の姉さんの帶などをさせようとする。娘は、そんな物は體に合はない。世界的でない。そんな野蠻な古着や縁喜の惡い帶を用ゐる位なら衣服は一切要らない。新平民と云はれてもよいから此村の習慣などに從ひたくはない。斯う云ッて、鋏でずんずん帶や古着を切り刻んで仕舞ふ。すると伯父さんが跳んで來て、

なんだ、貴樣裸だないか。不作法な。それが女のざまか。衣服が拵へたければ俺に云へばよい。さあ之を着なさい。と云ッて炊事服と看護服とを折衷した、筒袖の妙な衣服や、擊劍の道場で穿く男の袴や、伯母さんが何十年も着古してよれよれになッた茶色の繻子の帶などを出す。娘はくるりと背中を向けて、

厭な事ですわ。そんな黴臭い、地の切れた、重苦しい物なんか着るより、清淨な處女の素肌の儘でゐる方がよッ程すが〳〵します。

斯う言ひ放ッたのを聞いて、小心な乳母は父の書齋へ走ッて行ッて、旦那樣。お孃樣はお氣が狂ひましたと云ッて泣き倒れた。量見の廣い、目のつけ所の高い其父は、只一寸厭な顏をした丈で少しも娘を叱らうとは爲ない。娘の部屋へ行ッて見ようとも爲ない。机の上に擴げた天台大師の「摩訶止觀」卷二から靜に目を放して、

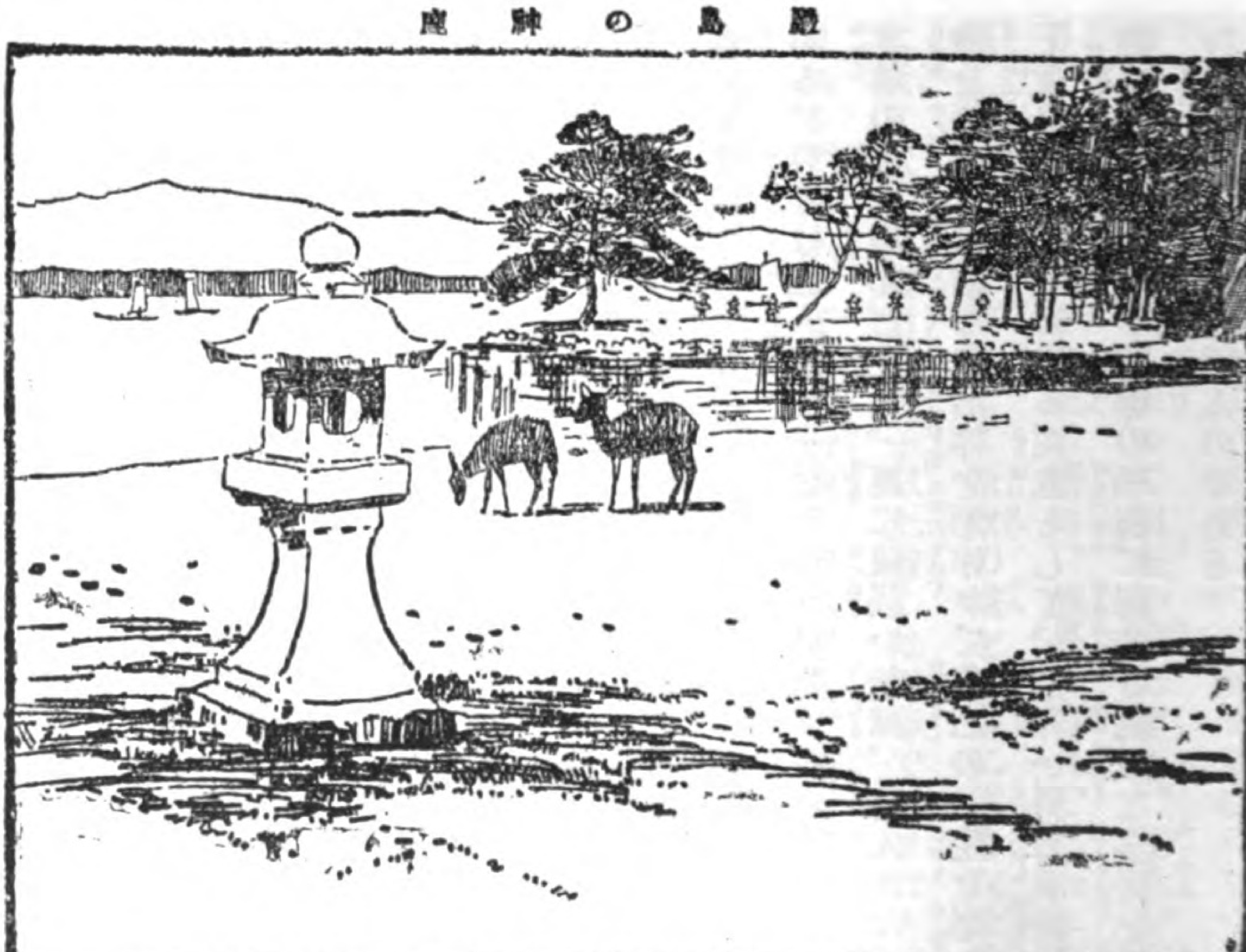
昔の女とは違ふ。あれにも考があらう。爲たいと思ふ事を隨自意三昧に遣らしてみるがよい。あれには世界的の書物が讀ませてある。わしが自身を信ずる如くあれも自身を信じて行る事であらう。苦い經驗をして空假の二觀が透破出來れば自然と妙有の中道實相觀に安住する事が出來る。と斯んな獨言を云ッて居る。

母親も伯父も乳母も女中も皆惘れて娘の部屋へ行かなかッた。而して幾日か經ッた。

娘は不用な著衣を捨てる爲にこそ自然、裸體に歸ッた、裸體が終極の目的では無い、一時の階段である。彼は智慧の光明で自身と自身の四圍とを照す事を知ッて居る。裸で道中がなるものかと云ふ諺の如く、やがて自身の無作法な事、社會的で無い事に氣が附くであらう。而して自身にしッくりと合ッた、人の見る目にも快く美しい、文明人の間に立交ッて淑やかに活潑な動作をなし得る新型の衣裳を工夫して縫ふであらう。又錦を著て絅を尙ふる奥ゆかしい用意をして純白の輕い羅を被る事をも忘れないであらう。又其上に帶とき姿の見苦しく、だらしない事にも氣が附いて、細やかに新しいコルセットで腰を締める事をも疎かにしないであらう。而して今にも部屋から現れて、見まがふ許り品のいゝ落著いた貴女の盛裝に父を喜ばす事であらう。

茲に細やかに新しいコルセットと謂ふのは、新しい

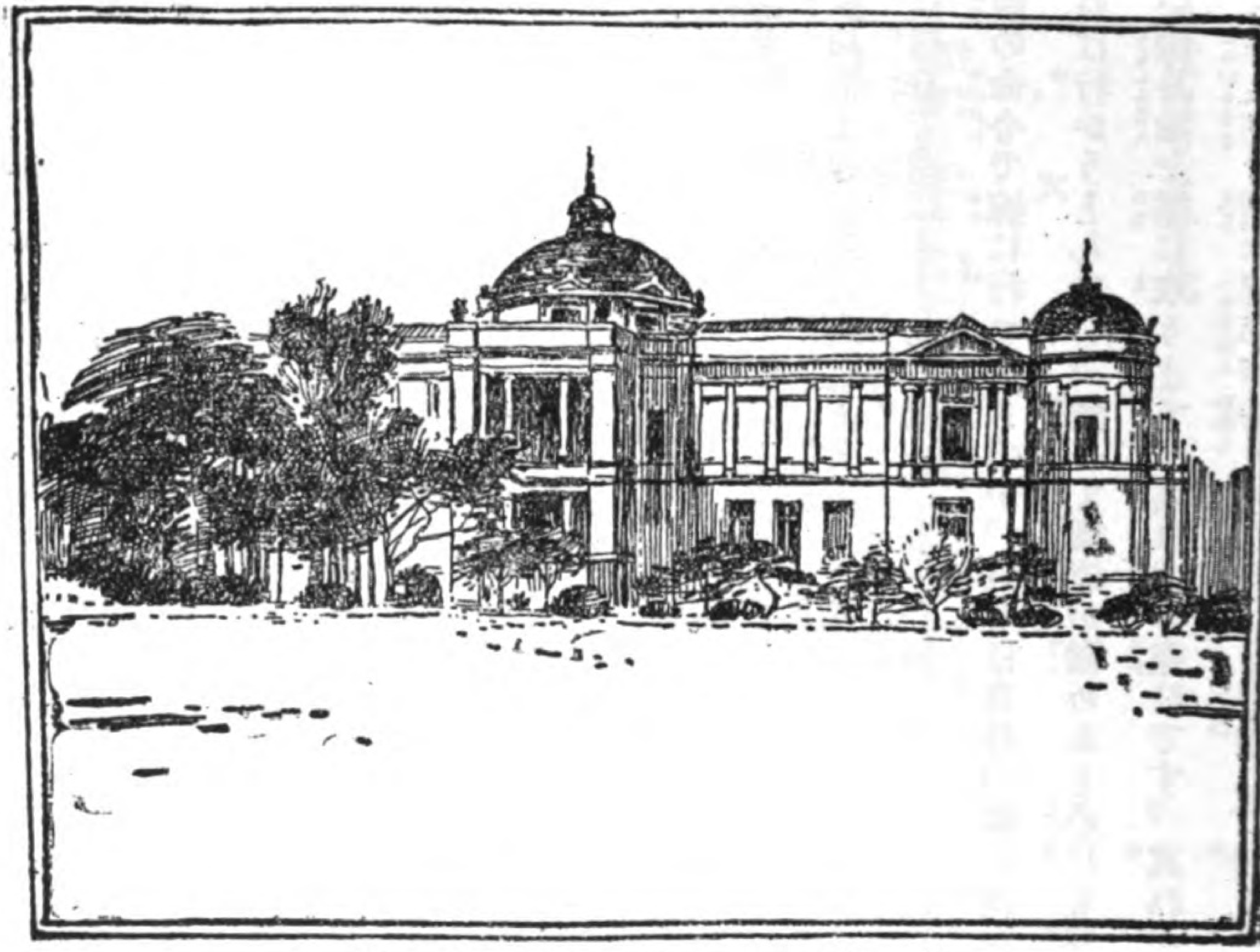
嚴島の神鹿



婦人が四圍に順應して自ら新しく建つる理想、節制、規律である。之を總稱して新人の自活律と云ひたい。新道徳と云ッてもよいが、自分は然う云ふ月並な言葉が嫌ひである。

×

併し其樣な新しい自覺のある婦人が實際今の日本に幾人あるであらう。其れを思ふと地にも入りたい程女の肩身は狹いのである。年齡こそ若い婦人であつても心持は依然其母其祖母の影では無いか。我は人なりと云ふ自尊心が無い。其れが高等の下女に甘んせねばならぬ第一の原因である。廣く世界の文明婦人を見渡して其れに伍せんとする野心が無い。智識慾が餘りにも缺乏してゐる。纏ッた一科の專門學を男子と對等に修めようとする者は殆ど無いのである。中學卒業生と同等の智識を持つた者さへ少いのである。纔に女子高等師範の卒業生諸氏のみは比較的學問を修めて居られるが、其れとても高等學校卒業生に匹敵し得られる程度には達して居ないのである。智識慾が無いから從ッて讀書の嗜好が無い。帝國大學生が讀む程度の書物などは全く目を通す事が出來無いと云つてよい。偶ま讀書を好む婦人と云つても讀書を好まない男子の讀む十が一も讀むのでは無い。只多くの女學生が娯樂的に讀む物と云ッたら「不如歸」以下の低級な小說、美文、歌集類と、寫眞と非美術的な挿畫と何々の實驗や甘ッたるい下手な紀行文などとを載せた雜駁な婦人雜誌とである。自分は婦人雜誌を讀むのを非難する者で無い。其等の物も讀んだ上に、更に根强い智識、込入ッた感情を養ひ、快活な自活律を形作ッて自己の一生を樂しく意味あるものにする用意として、是非一科乃至數科の專門學を修め、其等の學術に關する高級な書籍を讀む癖を附けたいと思ふのである。



上野公園表慶館

婦人が淺薄な練れない感情にのみ馳せる樣になつたのは、男子に屈從し初めて以後の事である。婦人が家長として母權を子の上に用ゐ、族長、酋長、君長（天照大神の如く）として祭政の權を民衆に用ゐた上古に於ては、其智力は男子以上若くは對等であッたと想はれる。婦人が子女の教育を專らにし、併せて男子の上に君臨するに際して勢ひ智識を蓄へる必要があつたに違ひない。其れが朝鮮婦人の如く男子に屈從して内房にばかり閉ぢ籠められるに至ッて、社會の活動と絶縁せられ、智力を用ゐる機會が無い爲に次第に其方は鈍ッて行き、却つて愚痴僻み、嫉妬などの無明煩惱に蔽はれる性質になッたのである。

今後の婦人は非常の努力を以て平安朝以後に失ッた智力を回復せねばならぬ。其れは婦人の心掛次第で不可能な事で無いと思ふ。男子に對し中心から對等の協同生活を望む婦人は、先づ何よりも自己を改造し修飾

して文明婦人の充實した資格を作るに如くは無い。初めにも自己、終りにも自己である。水が自身の道を作ッて流れる如く、新しい婦人は自ら進んで新しい道を切り開かれん事を望む。男子の教育者乃至男性化したお婆さんの教育者にのみ自己の教育を任せて置くのは男尊女卑の遺風に屈從するものである。

×

今の若い婦人が結婚を嫌ふと云ふのは事實の眞相に通せない皮相觀でせう。みんな結婚を望んでゐますよ。只以前と違ふ所は親達と仲人とで選んだ嫁入先を只今は自分で選ばうとして居る。も一つ違ふ所は、以前は親の命令で嫁に行ッたものが、只今は自分の氣が向かねば行かうとしない。強ひて親達が勸めると心にも無い獨身論を楯に取ります。其れ丈の違ひです。其れから嫁入先を選ぶ標準が昔と今と少しも進歩して居ませんよ。財産があッて、地位があッて、其上子舅が無ければ猶よい。舅姑が無ければ猶々よい。貰ふ方から云へば違ふが、嫁に行く方の最上の實際標準は親が選ぶ場合でも自分で選ぶ場合でも同じです。之をわたしは口惜しく思ふ。財産や地位を計算するのも當然であるが、なぜ良人たる男と妻たる女自身と雙方の人格を第一の標準としないのでせう。

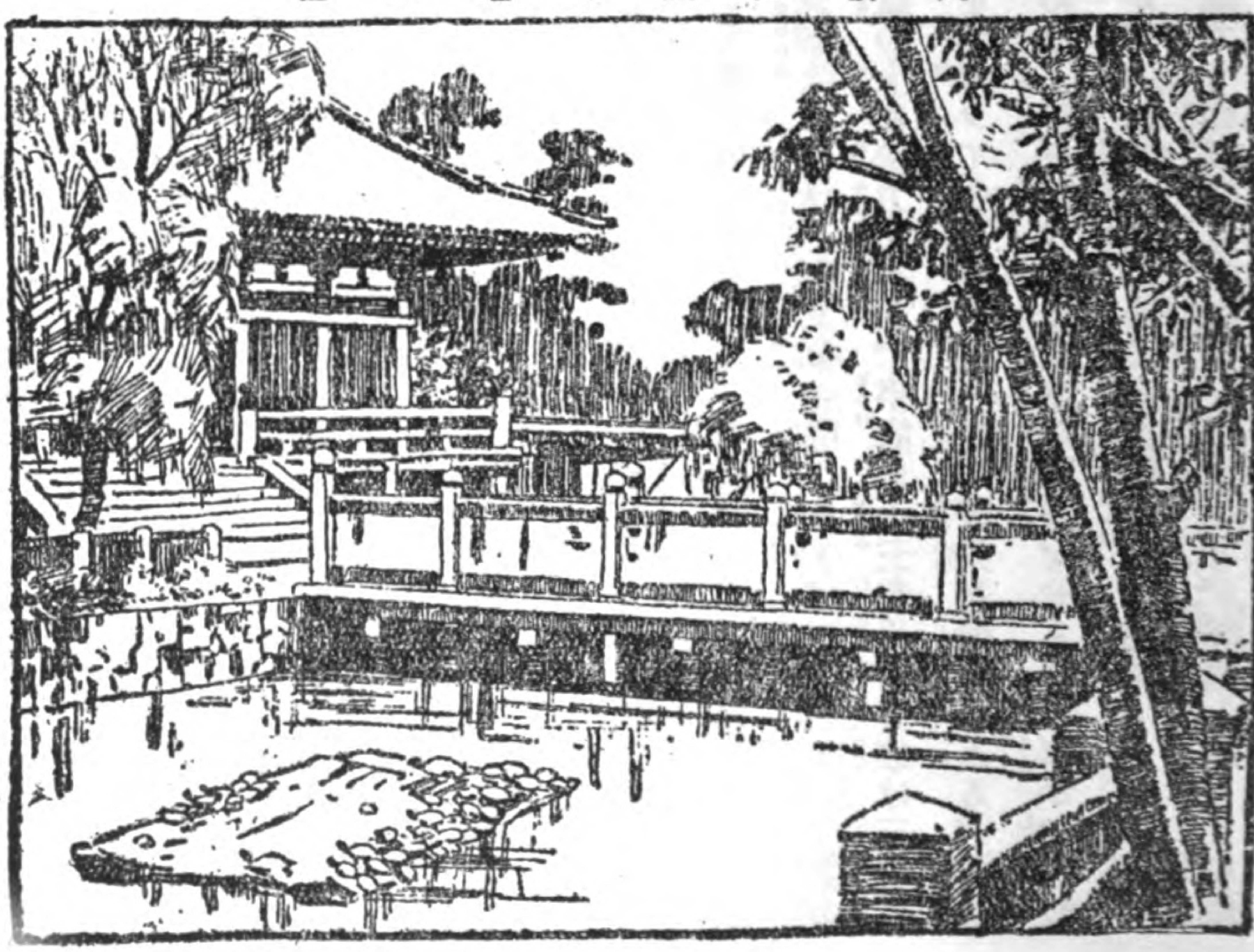
其れから間違つた獨身論を唱へる女のあるのを男子側から非難せられますが、わたしが男子なら獨身論を唱へるのをよい事にして、今の女學生などは嫁に貰はないで置かうと思ふでせう。智識の皮から云ッても何から云ッても男子の話相手となり子供の母となる資格は皆無ぢやありませんか。弦齋の書いた物や活動寫眞を喜び、中學卒業生丈の學力も附か無い女子大學の飯事やお產の稽古を立派な學問だと、鼻に掛ける樣な低級な女を妻にすると云ふ事は、文明男子の恥では無い

でせうか。斯う云ふ問題は男も女も眞面目に考へて見ねばなりません。

×

都會の家で益々感ずる事はよい女中の少くなる事ですね。女中までが段々自己を反省して目を覺さうとするのでせう。無理も無い事だと思ひます。主人側が高い俸給を拂ッたからと云つても次第によい女中は來なくなるでせう。主從と云ふ關係がもう今日では奮くなつたのですもの。遠い將來で新しい意味の主從の樣なものが出來るとも、一旦は此關係が破れて仕舞ふのでは無いでせうか。而して女中の代りには、畿內などで德川時代から行れてゐる雇人と云ふ者の樣に、每日二時間なり半日なり彼方此方の家へ雇はれて廻ッて、洗物や御飯焚や留守番やをする職業の男女が出來るのでは無いでせうか。

大阪天王寺龜の池



×

日韓併合條約の樣な圓滿な形式は空前だ、世界に先例の無い事だと言ふ。併しわたしは然うで無いと思ふ。日本では人皇以前に旣に立派な先例がある。大國主の御國讓りが其れである。須佐之男、大國主、少名彥は朝鮮に王となり乃至朝鮮を領土として高間が原朝廷に對峙した獨立國の主權者であッた。兩國の併合は諾尊以來の宿題であッたのを天照大御神の世になッて漸く解決する事が出來た。當時の天穗日命天若彥命などは全權大使若くは統監の位地であッたらしく思ふ。而して最後に將軍武甕槌命が經津主の劍の靈威に依ッて圓滿に平和的の談判を遂げたのは今の寺內大將の遣口と同じである、大國主との條約の個條に、大國主が全く國土人民の主權を讓る代りに、朝廷より大國主の一族を最高の貴族並に優遇し、大國主家永世の宮殿として日隅宮、出雲大社を、造營し、領田を附與し、宗令に天穗日命（今の千家男爵家）を任じ、儀衞の具として百八十の白楯を供へ、其一族の諸國を往來するに際し官費を以て到る處に船と橋とを作ッて便宜を與ふる事を約してあるなどは、よく今回の日韓併合と一致してゐる。政權に離れた大國主の子孫は各地に移住して神道の布敎に從事した。就中紀州熊野の三輪崎を經て大和に移ッた宗家は大三輪神社を神道の本山として四方の信仰を集め、伊須計餘理姬を神武帝の后に奉ッて皇室の外戚となり、崇神帝の頃までは諸國に天照大神よりも大三輪の神を祀る神社の方が多かッた程神道の上に勢力を有し、宗家は大三輪氏、支族は三輪氏を名乘ッて今日までも子孫の繁榮を續けてゐる。此度の李王の一族は何う將來の發展をせらるゝ事か知らぬが、あれ丈餘裕のある恩賜の歲費の中から、女學校を建てて朝鮮婦人の敎育を計ッたり、學者を聘して朝鮮

の大辭典、宗教史、法制經濟史、文學美術史、政治史などを編纂させたりする事に興味を持ッて力を盡して欲しいと思ふ。



母親の感化

母親が小兒の爲めに注意すべき事に就ては、是れを生前と生後とに區別することが出來る、生前といふのは日本でも支那でも昔から唱へて居る胎教といふことで即ち姙娠中の注意である。

昔から婦人が懷姙して居る時に片足で立つと跛の子が生れ、火事を見ると痣の子が生れるとか云ふのは、片脚立ちなどすると倒れ易く、又火事を聞いて慌てゝ飛び出したりすると飛んだ怪我をする、と直ぐ胎兒にも危害を及ぼすといふのを自然に戒めたもので、其の他塗物の上に熱い鐵瓶を載せると、禿頭の子が生れ、辣韮などを食べると腋臭の子が生れるなど、種々奇妙な喩を言ふのは皆な胎兒の爲めに宜くないことを感情の上に、或ひは心の中に堅く銘せしめて、殊更に敎へなくも子供の時から自然々々に覺え込んで了つて、朝晩一切の事を注意するやうにしたので、決して迷信でも愚なことでもない。然るに近來婦人の學問が進步する樣になつたので何事も學理一點張りで舊いことは玉石を分たず一概に捨てられる、夫れが爲めに却つて流產だとか不正形の子だとか意外の過失を仕出かすことが多いのである。

子供に最も大切なる教育時期は七八歲からでなくて、生れてから四五歲までの間である、此の間に賢良な母の深い注意によつて、訓育されたものは、身體は屹度壯健で、智育も完全で、又將來如何なる誘惑に逢つても其の淵から歸つて來るものである。生後四五歲迄が最も大切であると云ふ事は此間の子供の總てに對する感受力が奈何に强烈であるかを知れば解る。

學者の說によると小兒が生れて九日目には蠟燭の火をじつと見詰め、四十九日目に美しい色糸を見せた所が、手足の運動を已めて見詰めたさうであるが、小兒の目には、母親の大小の行動が蠟燭の火よりも色糸よりも遙かに珍らしく又熱心に感じるのである。一年も經つと愈々五官が發達して單に見る許りで無く、今度は見ることゝ聽くことゝ調和して實行的慾望を盛んに起こして來て、一度見たことは必ず實行しやうとし、一度聽いたことは必ず言はうとするものである、朝夕に感化される母親の力は豫想外に大なるものである。(江原素六氏)



歐米印象錄

文明國の高等批評

中村春雨

△四千哩の嫁入道中

次に婦人の事に就いて、見聞した廉々を云つて見ると、最初私の着いた桑港附近、即ち太平洋沿岸方面にゐる日本人約六七萬の中、男子に對する女子の割合は甚だ僅少である。正確な事を調べてゐませんが、桑港邊にしても十分の一とは無論行かない。二十分の一も覺束なからうかと思はれる。此れは一つは、渡米の手續が嚴しい上に、殊に女子と來ては、醜業婦取締の爲め、獨身者の渡航、或例外を除いては、殆んど絕對的禁止といふ有樣になつてゐるからでありませう。從つて、日本から桑港に行く汽船の中に、獨身の日本婦人を見かけても、何誰妻といふ肩書は必ず附けてゐる。併しそれは唯名儀丈の事かといふに、然うでもない。妻君は妻君に違ひなからうが、まだ自分の良人の顏を知らないどといふ風變りの妻君なのである即ち例の寫眞結婚で、双方寫眞で見合を濟まして、遙に米國にゐる未見の夫の許へ四千哩の嫁入道中をして行かうといふ人々である。

△桑港埠頭の悲劇

かゝる寫眞見合の結婚は一面、移民發展の政略としては必要といふよりか、寧ろ不止得次第でもありませうが、其結果、半面にはいろ〳〵の弊害が生じて來る。現に嫁入つて行く船中、乘合の男子客に欺されたり、自分から浮氣を出したりして、相通ずるといふやうな事例が少くない。又、往々、船員の中に、無道德な人間がゐて、他人の妻であらうが、處女であらうが、差別なく一生自己の玩弄物にして、それで單調な長の航海の鬱晴らしをやるといふ樣なのもあるから、それ等の手にもかゝつたりして、折角の花嫁が、米國へ上陸

する時には、已に處女でなくつてゐる事が甚だ少くない。花嫁もそんな花嫁かと思ふと、又一方貰ふ方の婿さんも婿さんで、本人は痘痕面の醜男子なのが、それでは嫁に來手がないといふので、友人などの色白の好男子の寫眞を替へ玉にして、見合用に送つたりするので、桑港の棧橋へ出迎へに行つて、花嫁に初對面すると、「私の良人はこんな男子ではない、人違ひだ」と云つて、いきなり泣き出され、結婚式處の騷ぎでなく、婦人保護機關たる支那人ホームへ引渡される。婿さんの方では、汗油を搾つた幾百弗の旅費を出して、遙々連れ寄せたものを、そんな我儘な振舞される筈がないといふので、大悶着が起る。中には忌々義理に詰まつて結婚式を擧げて、二三日して逃げ出して了つたといふので、男子の方では短銃を持つて、後を覘ひ廻すといふやうなのがある。或は一旦夫婦になつて、當分は治まつてゐるが、先に船中で關係した男子などに出會すると、直に變心して、駈落などする。夫は始めて欺かれたと悟つて、懸賞搜索廣告を桑港發行の日本字新聞に出して、逃走男女の寫眞を麗々しく掲出し、自己の住所姓名まで並べ、通告者には三十弗とか五十弗とか進呈するといふ赤耻を米國三界に曝らす者も度度ある。こんな事は寫眞結婚の場合のみでなく、一體に風儀の亂れ勝な移民地の事であるから、勞働者や仕事師の仲間の妻妾の奪ひ合ひ、駈落、失踪などが、斯うした形で、新聞紙上の笑ひ草となる事は、當然のやうに思はれてゐる。

△感心なスヰートホーム

併し寫眞結婚が、悉くかゝる失敗に了るといふ譯ではない。中には相和合して、スヰート、ホームを作つてゐる者もある。始めは多少の不平も不滿もあつたろうが、それを忍耐してゐる中に、馴染が出來、子供まで拵へると、自己の運命を諦らめて了つて、忠實な主婦となり、夫の爲め、家の爲めに、一生懸命働いてゐるといふやうな婦人も見た事がある。兎に角、前云ふ如く、男子に比して婦人の數が甚だ少いのであるか

ら、苟も婦人と名が附けば、蠅が集るやうに、男子等がその身邊に寄つて來る。ピストル騒ぎや、血腥ひ事件を出來したのであるから、何んな美人であらうかと想像して新聞の寫眞を見ると、女盤甲と云つた風の、大醜婦の面に出會すのである。相手の男子の寫眞の方は、兎に角米國化したハイカラの業平らしく見えるのに、これが何うしてこんな女の爲めに一命をさし出す氣になられたかと、奇蹟のやうに思へる例も屢々の事である。要するに、婦人のもてる處であるから、日本に居て相手も見出せないやうな不運の婦人は素より、積極的に海外に發展せんとする男子を助ける雄志のある婦人方は、渡來するのも一の好方便であらうと思ひます。併し普通の寫眞結婚は、前述の弊害に陷る恐があるから、誰か太平洋沿岸在留の日本の有力家や、信用のある宗教家等の證言に依つて、相手を見定めて、渡航する事にしたら、誤少なきに近からうかと思ふ。殊に近頃



米國の女――美術學校生徒

は、米國邊で多少成功してゐる日本人などが、細君詮索の爲めにワザ〳〵一時歸朝するといふやうな事もやつてゐる。斯ういふのは、寫眞結婚と違つて、幸福な結果が得られる事と思ふ。

△米國化せる日本婦人

斯樣に、一體に婦人がもてるから、元來從順な夫の尻に附いて歩いてゐるのが習慣の日本婦人も、米國へ渡ると、急に米國婦人化する。苟も手荷物などは必ず男子に持たせるものと心得、電車では席を讓るのを當然と思ひ、門の戸を明けてやつて婦人の先づ出るのを待ち、後から男子が蹤いて行くのを禮法として怪まぬといふ風になる。婦人が集會などを催ほしてゐる席上へ招かれて、講話をさせられた事があるが、皆が一向靜肅を保たない。起つたり、坐つたり許してゐて、其無作法なのに驚かされた經驗もある。後で一人の婦人に聽くと、それでも皆謹聽してゐたのださうな。

日本婦人が已に此れである。それでは米國婦人は何うであるかと云ふに、その見識の高い事は、素より比較にならぬ。上は富豪の細君令孃より、下は屋根裏住居のかみさん、娘に至るまで、兎に角婦人と名が附けば皆貴婦人なのである。時には醜業婦でも、自ら貴婦人と呼んでゐる。最もこの稱號は階級的の意味ではなく、品性的の觀念から來てゐるので、男子にしても、假令職業は勞働者であらうとも、品性上立派な人間は紳士を以て通るのと同じである。即ち勞働は神聖であるとは、米國人の標語となつてゐる。併し實際上に於ては、勞働者より資本家、貧乏人より富豪の威張つてゐるのは云ふまでもない事で、拜金國の事だから、差當り金錢が階級を作る唯一の標準であるのは止むを得ない事實である。

△女尊男卑の原因

さて此の貴婦人なるものゝ權力は、殖民地たるカリホルニヤ附近では殊に素晴らしいものである。一體米國婦人の幅を利かしてゐる原因は、凡ての移民地殖民

地の慣例として、移住人中には男子の數よりも女子の數が少い。隨つて、多數の男子が一人の女子を相競爭して我物とせんと努力する。その爲めには、あらゆる手段を盡して、機嫌を取る、媚を呈する。遂にはその前に拜跪して女子の靴の紐まで解いてやる事になる。これが女子をして自と頭を高からしめ、肩を聳かさしむる事となるのである。尤も男子が



米國の婦人——[illegible]士

女子の靴の紐を解いたり結んだりしてやるのは、西洋諸國一般の實例であるが、これは女子がコルセットをしめる爲め、腰を曲げる事が出來ないので、男子が手を藉てやるのださうな。理由は何れにしても、日本の男子には一寸眞似が出來兼ぬる事である。

△貴婦人の權力

殖民國の米國でも、カルホルニヤ州は殊に新開地で

あるから、この女尊男卑の風は依然として行はれ、例へば路傍で男子同士の喧嘩事が起るとか、醉漢が亂暴をやるとかして、巡査に拘引されて行く場合でも、通り掛つた貴婦人が留女に入つて、自分に預けてくれと云ひ出すと、仁王さんの出來損ひのやうな大兵肥滿の巡査先生、ペコ〱頭を下げて、一言の異義なく、貴婦人に引渡して歸つて行くといふ風である。若し又、貴婦人から無禮を加へられたといふやうな事で、一時の疳癪まぎれに毆打なんかやらうものなら、男子が理非曲直を問はず、直に警察へ拘引されて、早速投獄の憂目に逢はねばならぬ。短氣な日本人など折々この手でやられる事がある。又米國人同士の夫婦喧嘩にしても、夫が妻君を毆打などした場合に、妻君が巡査に訴へると、此も直に投獄處分を受けるのである。

一體に、婦人の威張る風は、東部へ行つても然うである。階段代りの昇降機の中へ入つても、若し、貴婦人と同室なら、男子の方から帽子を取つて目禮位せなくてはならぬ。電車の中で席を讓るのにも、男子が帽子を取つて一禮するといふ習慣である。尤も近頃は、男子の方でも大分反抗心を起して、知らぬ顔をする風が、少々流行しつゝあるといふ事である。併し、感心な事には、眞實の意味の貴婦人となると、例へば汽車の中で、男子の隣りの空席へ腰をかけやうとする場合にも、「こゝは明いてゐますか？」といふやうな挨拶をして、此方の承諾を得てから腰を下す事にしてゐる。

△豪奢生活と暗黑面

家庭に於ける貴婦人は、日本のおさんどんの代用も勤める細君とは宛で行方が違つてゐる。假にも中位の生活をしてゐる家には、料理番と給仕人位は別々に傭ひ入れてある。それ以上になると、寢床を作へる室婢やら、電話番人やら、衣服の世話係の侍童やらそれぞれ專門の傭人を使つてゐる。支拂ふ給料も、最低廿弗位から、最高六十弗、七十弗、或は百弗以上と云ふのもある。

平民國を以て任じてゐる米國人は、その實貴族的生

活をやつてゐて、自分では手一つ下さず、傭人に依つて萬事を形附けて行くといふ豪風な所がある。然うい ふ次第たから一家の主婦は、食事などの事に氣を使ふ必要もなく、又洗濯物などは一々出入の洗濯屋が持つて行く。會計の事も、家事管理を置いてる家では、その擔任となつてゐる。子供があれば保母が附いてゐる自分には新聞や雜誌を讀んだり、小說や文學を味つたり、手すさびの編物もしたり、芝居やオペラの見物に行くとか、音楽のお稽古をやるとか、交際場裡に出入するとか、まアそんな事が一日の仕事となつてゐる。尤も中以下の貧乏人は、斯ういふ贅澤な眞似は出來ないのは勿論で、女子の職業問題といふものもその爲めに起つて來てゐる三越のデパートメント、ストアーを今少し大規模にした米國のデパートメント、ストアーの賣子は、皆この種の女子で占められてゐる。或は料理屋——と云つても一膳飯屋を高尚にしたやうな風の



米國の女——老女優

安料理屋の給仕も、皆女がやつてゐる。それから事務所では、タイプライターも女の職業となつてゐる。斯ういふ職業丈ではまだ金が不足なのと見えて、傍ら副業を兼營してゐる者も甚だ少くない樣子である。中に最も奇拔だと自分の感じたのは、髮油を賣る紐育市の商店の玻璃棚の中に、丈の長きブロンドの髮を振り亂し、客の方に背中を向けて、活きた廣告人形になつてゐる妙齡の少女のあつた事である。

△玩味すべき傾向

學校や圖書館をのぞいて見ると、出入する女子の數がナカ〳〵多い。コロンビヤ大學の圖書館で、男子と伍して哲學の書物を研究してゐる中婆さんや、妙齡の女子なども屢々見かけた。男女の討論會など大學で開かれる場合に、女子の方がナカ〳〵論理の立つた事を云つてゐる場合も多い。この國の男女混合敎育といふ事は、一方に弊害は免れないが、同時に他面、女子をして男子を眞の友人あしらひにし、同じ人間といふ立脚地にあつて同等の交際を結ばしめ、結婚する際にも、大抵三人や四人宛はある男子の友人の中から、情意と智見とを以て撰擇を行はしむる丈の餘裕があり、又修養があるやうになつてゐるのは、我國女子敎育の上にも、多大の參考になる事と思ふ。

英國の女子は家庭的及び宗敎的といふ方面の特色があるやうに思ふが、近頃は例の婦人選擧權要求の運動が盛んで、所謂女壯士なるものが續出し、總理大臣アスキスなども、その爲めに大分手古摺つてゐるといふ有樣である。その運動ぶりの軍隊的で秩序も立ち、命令も行はれ、捕縛されて牢獄へ投ぜられても、屈せず撓まず、飽くまで初一念を貫徹せんと力めてゐる處など、日本の婦女子諸君の想像だも及ばぬものがある。可否は別問題として、婦人の自覺といふ點からいへば、此にもナカ〳〵學ぶべきものが多いと思ふ。

△獨逸の婦人

獨逸の婦人は、全然家庭的といふ點では、日本の婦

女子諸君と似寄つたものが多く、英米の婦人とは餘つ程違つてゐる。

子供の教育などの事には頗る注意を拂ひ、クリスマスの盛大なのが世界でも名物になつてゐる。そのクリスマスは、子供が本位なので、當日には、デパートメント、ストアーなどは、巨大なサンタ、クロースの立像を作りそれに一ぱい子供への土産物を飾り附ける。子供の喜ぶやうな動物園の飾り物などまでして客引の種とし、いろんな珍奇な、又隨分高價なオモチャなどを店中一ぱいに列べ立てるといふ風である。その爲めオモチャの發明など、獨逸が最も進歩して、年々海外へ輸出してゐる額も幾千萬マークに上り重要な貿易品の一とまでなつてゐる。



米國の女——大學生

かく家庭を重んずる婦人であるから、男子に對して

威張る風も少ない。男子と途で逢つても、婦人の方から會釋してかゝる。昇降機に同乘しても、男子は帽子を着たまゝでゐる。電車で席を讓ると、丁寧に禮を云ふ。手荷物など自分で提げて平氣で市中を通る。荷馬車屋なども、夫婦が馭者臺に乘つて、おまけに子供までも連れて、共稼ぎといふよりか、一家總出の勞働に從事するを厭はない。殊に南方天主敎流行地に行くと、電車のポイントメンまで女が立つてやつてゐる。選擧權要求などいふ事は、殆んど別世界の消息のやうに思はれてゐるらしい。

併し主婦としての見識とか、貴婦人としての地位とかいふものは無論自覺してゐるから、日本の婦人程に、何んでも彼でも夫に默從するのを妻たるものゝ本分と心得てゐるやうな事は無い。晩餐會を開くにしても、主婦が正席に就いて、當夜の主人公たる氣位を落さない。社交界に立つては、無論男子の尊敬を受けべきものとしてゐる。

西洋人殊に米國人などは、「妻君にするなら日本の娘に限ります」と、お世辭ならず、本氣でいふものが屢屢ある。妻君の生活のために、一生勞働してゐる米國の男子の述懷談も、幾分同情に價するが、併し然う甘く見られてゐるのは、日本の婦人の誇りとも云へないやうに思はれる。賢母良妻といふ事も、時勢と共にその意味や内容が變つて行くべきものではありますまいか？。

女郎花匂へる秋の武藏野は
　常よりも猶むつましきかな　貫之

なびけども露の契や愼むらん
　露てもみゆる女郎花かな　景樹

手折る岡に秋風立ちぬ女郎花　大江丸

折るちからなくて又折る女郎花　梅室

私の放浪生活時代

横幕武良子

女史は現に愛國婦人會主任幹事をして居る方で、同會中の立て者でありますが、其の自由にして多事なる經歴の中には、又一種の教訓を含むものと信じてこゝに掲ぐる事に致しました。

△一生獨身で通さうと決心す

私は岐阜縣大垣に生れ、二十一歳で他に縁づきましたけれども、其家に居るのが面白くなくて、間もなく實家に歸りました。そこで、縱令何んな事情があつたにしても、女が夫を捨てたのは宜しくない、自分はもう決して再び他に嫁いで人の世話になるやうな事はしまい、一生獨身で通さうと決心し、そして獨立をするには何か身に素養がなくてはならぬと思ひましたから挺身を冒して遂に大阪へ飛び出しました。これが私が放浪生活に踏み入つた第一歩でございます。

で大阪へ參りましたが、一體私は昔から他の人とは毛色が變つて居て、實業に大層趣味をもつて居つた處へ、丁度其頃同地で親戚の者がメリヤスをして居つてなか／＼盛んでしたから、私もそんな事をして見たいと思ひ、相談いたした處、あなたのやうなお堅い方には迚もこんな商賣は出來ない、それよりは教員にでもなられた方がよからうといはれ、自分も成程さういふものかと存じて、遂に教員志願を思ひ立ちました。

△婦人は大抵分數で腰を折ると言はれて憤慨した

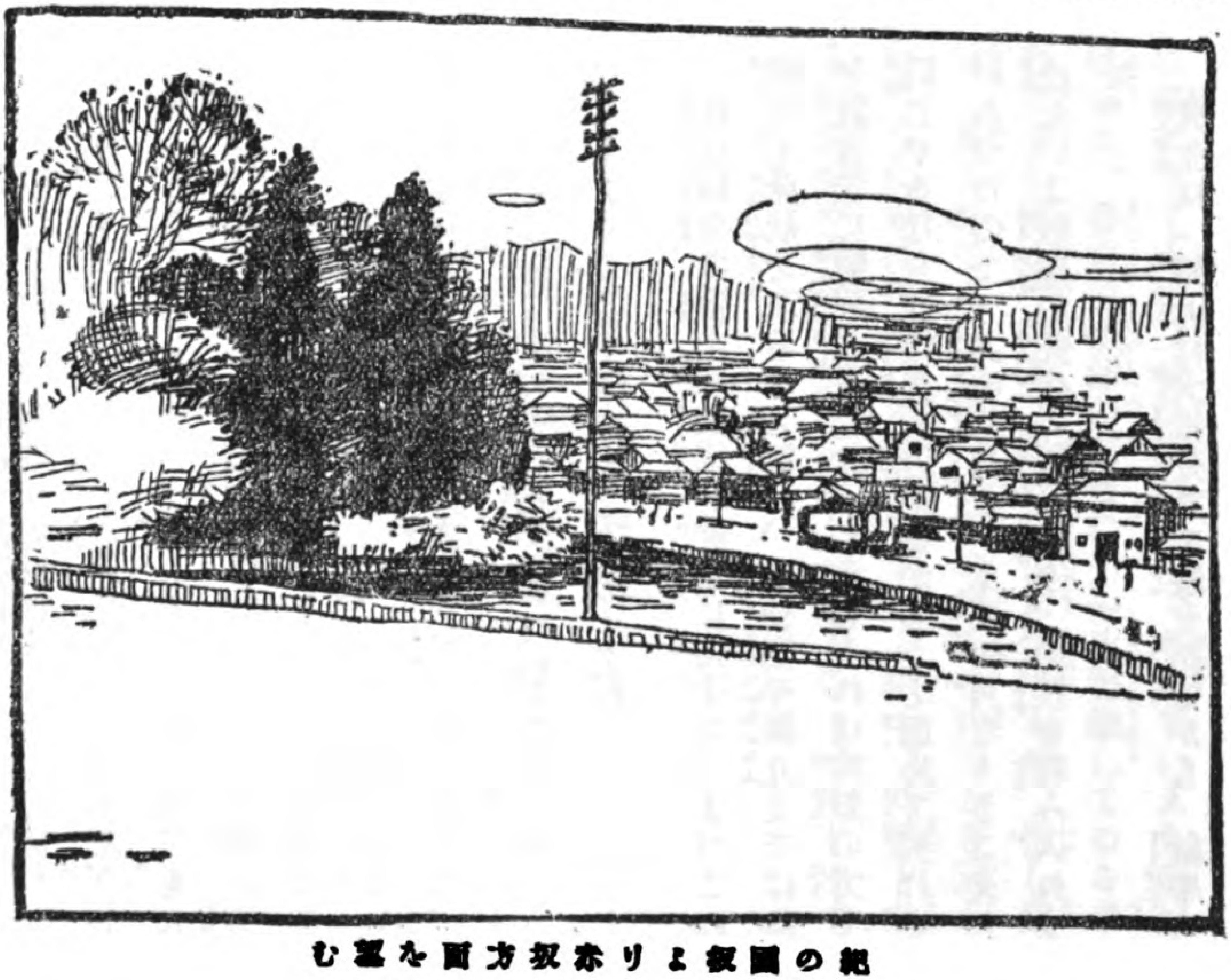
私は幼少の頃から數學が非常に得手で、まづこれに依つて免狀を取らうと思ひ、其後開平開立までは師匠を取らずに勉強しました。しかしそれは和算の方で、同じやるならば洋算の方がよからうと勸めて與れる人があつたので、其頃川口といふ處で可なりきこえた高松といふ數學の先生の許へ參り、教授を頼み入れました。

先生は「婦人は大抵分數で腰を折るから、數學の勉

強は思ひ止まつた方がよからう」と言はれるから、私は負けずに「先生も私も同じく人間で御座います、男女の違ひは筋骨の仕事でもする上に於てならば兎も角も、學問をする上には別に變りはありますまい」となかなか氣焔を吐きましたが、兎も角も先生は承諾せられ、其日はまづ加減乘除の式丈け教はつて歸りました。

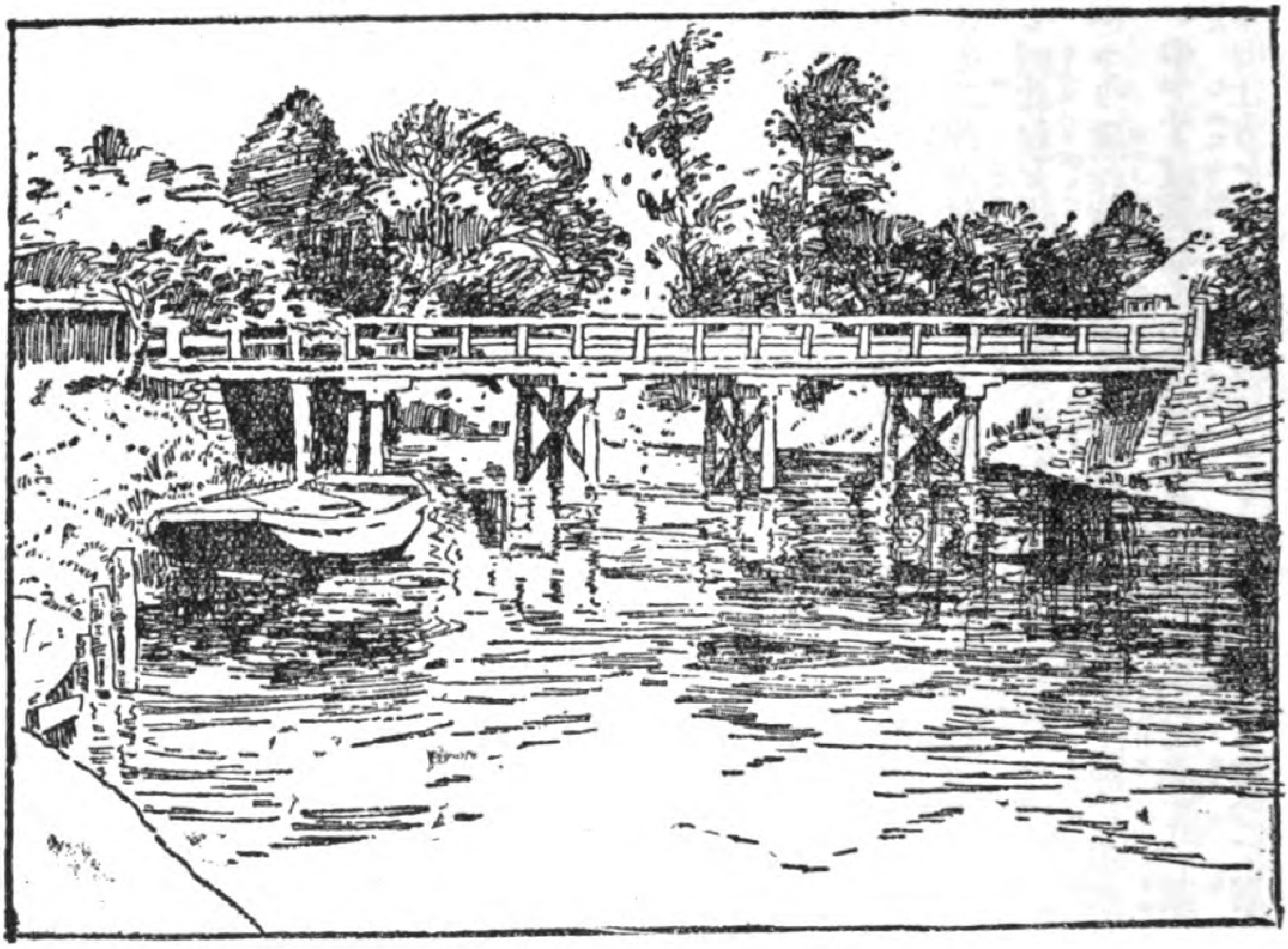
△問題を解いて稽古を斷らる

翌日からは一冊の本を携へて參り、それによつて稽古を進めて居りましたが、分數も故障なく過ぎて比例になると、一つ難しい問題が現はれました。よくは覺えませんけれども、何でも千幾百人かの兵士がある一つの險阻を踰すのに、一人の距離が一尺五寸づゝであれば、幾時間かゝるかといふやうな事でしたが、高松先生には何うしてもそれが出來ないので、終にはこれは問題が違ふのだといふ事になりました。しかし其本には今迄一度も答が違つたのはありませんし、私には何うも合點がゆかなかつたから、家に歸つていろい



紀の國坂より赤坂方面を望む

福岡栗山川の清流



ろと考へて見ると、人數から一人減いておいてやらなければならないといふ事に氣がつきました。嬉しくて先生の許に驅けつけて、「先生合ひました、かう〳〵すれば出來ます」と御話すると、先生は「成程私は其處まで氣がつかなかつた」とていたく感服されましたがしかしそれ限り稽古を斷られました。そして、先生は「あなたは私のやうなものを先生にして居る人ではない、幸ひ知合で兵庫に鹽田といふ人があるが、その人ならば十分敎へて上げることが出來やうから」と言つて、そこへ世話して下さいました。

△今思ふと冷汗が出る

で兵庫へ參りますと、前以て高松先生から紹介の手紙が參つて居りましたゝめ、先生は大層下手に出られ敎へるといふ事も出來まいけれど、ともかく御相談相手になりませうとのことでしたが、一週間許りするとまた御斷りといふ事で、今度は神戸の橋本といふ先生に紹介して下さいました。そこで私はまた神戸の方へ

來ることになりましたが、隨分性の惡るい事をしたもので、この時は先生の力を試すために難しい比例の問題を三つ持つて參り、先生に御目にかゝつて一通りの挨拶が濟むと、何うぞこれをやつて見て頂き度いといつて出しました處、橋本先生のいはれるには、私は和算を敎へて居るので、洋算は弟の方が上手だから其方に往つて見て呉れとの御話。弟さんといふのは山手の師範學校の先生でしたが、私が參つて前の三問題を出すと、矢張りお出來にならない。そして之れは一體比例ではいけない、轉算式にしなければ出來ない問題だといはれますから、小生意氣にも、それでは轉算式で宜しう御座いますからやつて見て頂き度いと願へば、比例を習つてるものに轉算式を知る必要はないと聲を高くして叱り付けられました。それでも押しづよく願ふと、止むを得ず居合はせた先生方も一緒になつて三人がゝりで一時間ばかり頭を痛められたが、終に出來ないのです。實はこの問題は私が既にやつて見て、其運算の仕方を書いたものをチヤンと懐中して參つて居つたので、先生方がいよ〳〵出來ないと見るや、よせばいゝのに、徐に用意の紙を出して、斯樣にいたせば答は間違ひなく出來るので御座いますが、これで果して本當の式に合つて居るものか何うかと存じて先生方に願つて見たので御座いました。いかゞなものでせうか」といつて先生方に見せたのです。今から思ふと實に冷汗が流れるやうでございます。

△十二時間說法を聞く

其後私は人に勸められて、山手の異人學校に入學しました處が私は英語がわからず、先生には日本語がわからないといふやうなわけで、數學の勉強などは少しも出來ないのです。のみならず耶蘇敎ばかりしきりにすゝめられるのです。うるさくてなりません。それで私は校長のトウカツといふ人に向つて、嚴重な談判を開きました。私は今修業最中の身ですから、耶蘇敎をすゝめる丈けは止して下さい、地獄に行くのが恐しさに、自分の犯した罪を神にぬり付けるやうな事は嫌ひ

たと申して、終には學校へも出て往かなくなりました。すると學校から村上といふ漢學の先生が御出でになつて、熱心に耶蘇教を說かれました。其日は雪降りで、隨分寒う御座いましたが、先生は朝の十一時から夜の十一時頃までお茶一つ飲まずに話しつゞけられ、私がいろ／＼勝手な理窟を申しても少しも激する事なく、始終和やかにして居られたので、私は不幸にして御說教には服しかねたけれど、其熱誠をこめた先生の態度に敬服して、ために洗禮を受けやうかとさへ思ひました。

△意を決して山手の異人學校を飛び出す

しかしまた初志を貫かぬ内はと思ひ返して、學校へは手紙を出して體よく斷り、泉州堺の河村友雪先生は數學の書物なども著した方で、日頃この先生ならばと思つて居りましたから、其先生をたづねて參りましたお目にかゝつてまたぞろ例の三問題を持ち出すと、成程これは難しい問題だと暫く頭を傾けて居られたが、それでも卅分許りで說明して下さつたので、早速弟子入りを願ひました。そして此處で代數も難なく上げてしまひ、數學はこれで一通り出來上つたといはれた處で、今度の最初の高松先生の居られる川口に歸つて、更めて當時の普通學の稽古を始めました、家を出た時は一文もお金を持たなかつたから、かうして修行してゐるの間は隨分困難致しました。裁縫を內職にして何うか斯うかこれまでつゞけて參つたのですが、川口の財產家に油屋忠吉といふ人があつて、私のことを聞き込んで、子供等の見習にもなるから何うぞ來て宿つて居つてくれと申すのでした、今ならば家庭敎師といふ格で其家に參り、手厚き取り扱ひを受けて居りましたが、半年許りで、今度は江州へ數學の敎師に賴まれて往くことになりました。其方でも非常に歡迎して與れましたが、周圍の人が好くないので、何うしても居る氣になれず、荷物を其儘に、一寸實家へ歸つてくると申して、岐阜に向つて出發いたしました。

△試驗及第の通知

此時の事を考へるとなか〳〵度胸が据つて居つたものだと自分ながら面白く感じますが、然し此時はもう放浪生活から免れる事は出來なくなつて居たのです。持つてたお金は僅に一分三朱即ち今の卅錢餘しかなかつたのを、其内一分一朱で五里の道を車に乘りましたから、岐阜に着いた時には、後に六錢二厘五毛を餘す丈けでした。而かも私は岐阜第一番といふ大旅宿に泊り込んだのだから驚くではありませんか。旅館に着くとまづ主人に斯うかけ合ひました。私は敎員試驗を受けに來たのだが、果して合格するか何うかは無論わからない、合格すれば宿料を拂ふのは譯はないが、落第すれば仕方がないから着て居る羽織を賣つて上げる積りだが、それで泊めてくれますかと言つたところが主人は低身して、何うぞ幾日なりともお泊り下さい、及ばずながら力を添へませうとて、それは〳〵親切にして與れました。宿の主人は感心ですが、私の仕方には皆様おあきれ遊ばすでせう。さて縣廳に參つて、受驗の事を頼み入れましたが、後できけば役人達は狂人にでも飛び込まれたものと思ひ、難かしい問題を與へて追ひ返す算段であつたとか。まづ卅分間に數學の問題六問題に答へ、それを濟ますと六時間に糸織の衣服を縫へとの事でした。裁縫の方はかねて早仕立に馴れて居つたから、いと易いことでしたが、數學の方は、何しろ餘りに時間が短くて、書きかけを取り上げられる始末でしたから、結果は何うであらう、落第でもしては面目がないと、內心々配して居ましたが、翌日の晝頃免狀を與へるといふ通知に接した時は夢かとばかり喜びました。

△兄の方へ無心に行く

免狀を受取ると、早速それを寫し取つて、親戚友人に披露に及びました。そのために思ひがけなく祝儀が澤山手に入りましたが、それの手に入るまでは、天保錢三枚限りで、何うすることも出來なかつたので、ふ

と二番目の兄がよい家に養子に參つて居ることを思ひつき、其處へ參りて金を借りやうと考へました。まづ二百で土產物として煎餅を買ひ、殘りの百で煙草を求めて出懸けましたが、參つて見ると成程立派な構へで、雇人なども大勢居ります。で試驗に及第したから披露に來たと言つて兄を悅ばせたはよいが、さて二百の煎餅はいかな事にも土產で候といふて出せなくなりました。初めて來るのに手ぶらで來られては第一私の肩身が狹いぢやないかと兄は八ケ間敷申ましたが、仕方がないので、雇人の方へは兄が一兩出して土產だといつてよいやうにし、母の前へは私からよく斷りをいふ事になりました。

△貰つた金をソツクリ寄附

こんな始末で、此上金を貸して呉れといふことは、兄妹の間でも流石にいひ出しにくいのです。兄の家內は至つて氣のきいた人で、私が衣ものは一寸よいものを着て居ましたが、下駄は如何にも汚いのを見て、うすうす悟つたと見え、下駄を一足出して、これは土地で出來たもの故何うぞ穿いて往つて呉れと申しました。兄の方はいろ〳〵に謎をかけて見ても、一向悟つて呉れない。仕方なく其儘暇乞をして出ると、兄は途中まで送つて來て呉れましたので、途々またかこつけ話をすると、辛と氣がづきましたか。「それでは披露に來たなどいつて、實はお金を借りに來たのか」と申ますから、本當は斯く〳〵の譯でした、と白狀すると、それならばと言つて、金子を三圓出して呉れました。これはいゝ按排と思つて宿へ歸つて見ると、先きの祝儀が方々から集つて居たので、皆で二十五圓許りもありました。それまでこれ程の金を手にした事がなかつたので、實際何うつかつたものかと思つた程でしたが、其時丁度大阪に火災がありましたから、何うせ人から貰つた金故と思ひ、祝儀金は其儘ソツクリ貧民救助に寄附してしまひました。マア隨分暢氣なものでした。

神戸海岸通



△棚橋まつ子と相知る

それから大阪の師範學校に暫く奉職して居りましたが、同地の今といふ醫者が、私に教員を廢めて醫者になつては何うかと勸めて與れましたから、それは面白からうと思つて、早速辭職して上京することにいたしました。處が眞直に上るべき筈であつたのを、ふと思ひ付いて新潟に居る友人の許に立寄つたが、幸か不幸かわかりませんが、とにかく同地で六年程過すことになつたのです。此間は師範學校に教鞭を執りながらしきりと教育演說などをして歩きましたが、此處で一人珍らしい婦人と逢ひました。それは棚橋まつ子といふ婦人で御座います。ある日私が政談演說をきゝに參らうとすると、途中に棚橋が立つて居つて、横幕先生と仰しやるのはあなたですかときゝ、今日何うぞ演說會へ御伴さして下さいと賴むのです。で一緖に演說會へ參つて、其日はそれで別れましたが、翌日棚橋は私の方へやつて來て、一體今後は何んな道を踏んだらよ

いかときゝますから、婦人と雖今後は兎に角學問するのが大切だと聞かせたのですが、それから私が漢籍などを敎へる事になりました。年は四十位だ、口は實に達者なものでしたが、字は實際いろはのいの字も讀めないのでした。氣のきいた風の艶な婦人で、打見た處藝者ともつかず、奥さんともつかず、一體何ういふ婦人かと不審に思ひました。

△私の見たる最大女傑

一をきいて十を知るとは、實にあの婦人の事で、それは全く偉いものでした。で外史まで敎へ、手ほどきが出來た處で、藤井といふ漢學者の弟子にしてやりましたが、三年目にはもう何んな書物でも讀めるやうになりました。何でも他に立派な妻君のある人と同棲して、金貸のやうな事をして暮して居るといふ事でしたから、あなたには惜しいことだ、是非正道を歩やうにといつてよく說つけましたら、私のいふ事は實によく用ひて與れました。第一女が裁縫をしないのは何より



半蔵門

の耻だといへば、早速翌日からは糸織の衣物でも何でもヂョキ〳〵裁つて縫ふといふ有樣、勿論上手には縫へませんけれど、其度胸のよいことは實に驚くばかりでした。さうしてゐると、ある時警察から私を敎誨師に頼みに來ましたから、それは棚橋こそ適當だらうと言つて世話をしてやりましたが、其頃はもうすつかり改心して居りました。其後棚橋は高田の監獄へ移つて熱心に活いて居りましたが、日露戰爭の起る前年には東京へ視察などにも參りました。其時久しぶりで對面して見ますと、見識人格ともに愈々高まりて、語學の勉强などまで出來て居つたやうでした。六十二歳で先年歿しましたが、私は今日まであれほどの婦人を見ませんでした。

△枠形張板の特許を受く

さて私は新潟に居ります中に、精神病を患ひまして腦がもぬけのやうになり、一時は非常に苦しみましたが、どうか斯うかよくなつて、遂に東京へ出で、加藤とし子の女子獨立學校（角筈村にありし）を手傳ふことにしました。私が枠形張物板を發明して特許を受けましたのは此後間もない事で、他にまだ模造煉瓦と裁物板との特許權をも得て置かうと思つて願出たのですが、張板がいよ〳〵特許になつたので着手して見ると、なか〳〵資本が大變なので、後の二つは願ひ下げとし、專心張板の方に力を注ぎましたが、何しろ金は少く、知慧はなしで、一向思つたやうに賣れません。遂に名古屋の時計屋へ二百八十圓許りで權利を讓り渡してしまひました。それで今度は其の金を資本に何か商賣を初めたいと存じましたが、小間物屋とか煙草屋とかいふものは、いかにも女の片手間仕事のやうで、儲かつた處が知れたものである、何か男らしい商賣をして見度いものだと思ひ、最初はまづ材木屋がよからうと、就いて聞き合はせて見ましたが、何うしても二百や三百の金では出來ません、次には鰹魚節屋は何うかと思ひましたが、これもなか〳〵資本のかゝる仕事で駄目でした。處が炭屋の類ものがあるが何うかとい

つて呉れる人があつて、きいて見ますと、得意が十一軒ついて四十五圓だといふ話。それは丁度よからうと買ひ求め、愈炭屋開業といふ事にいたしました。

△炭屋を開業して大いに當る

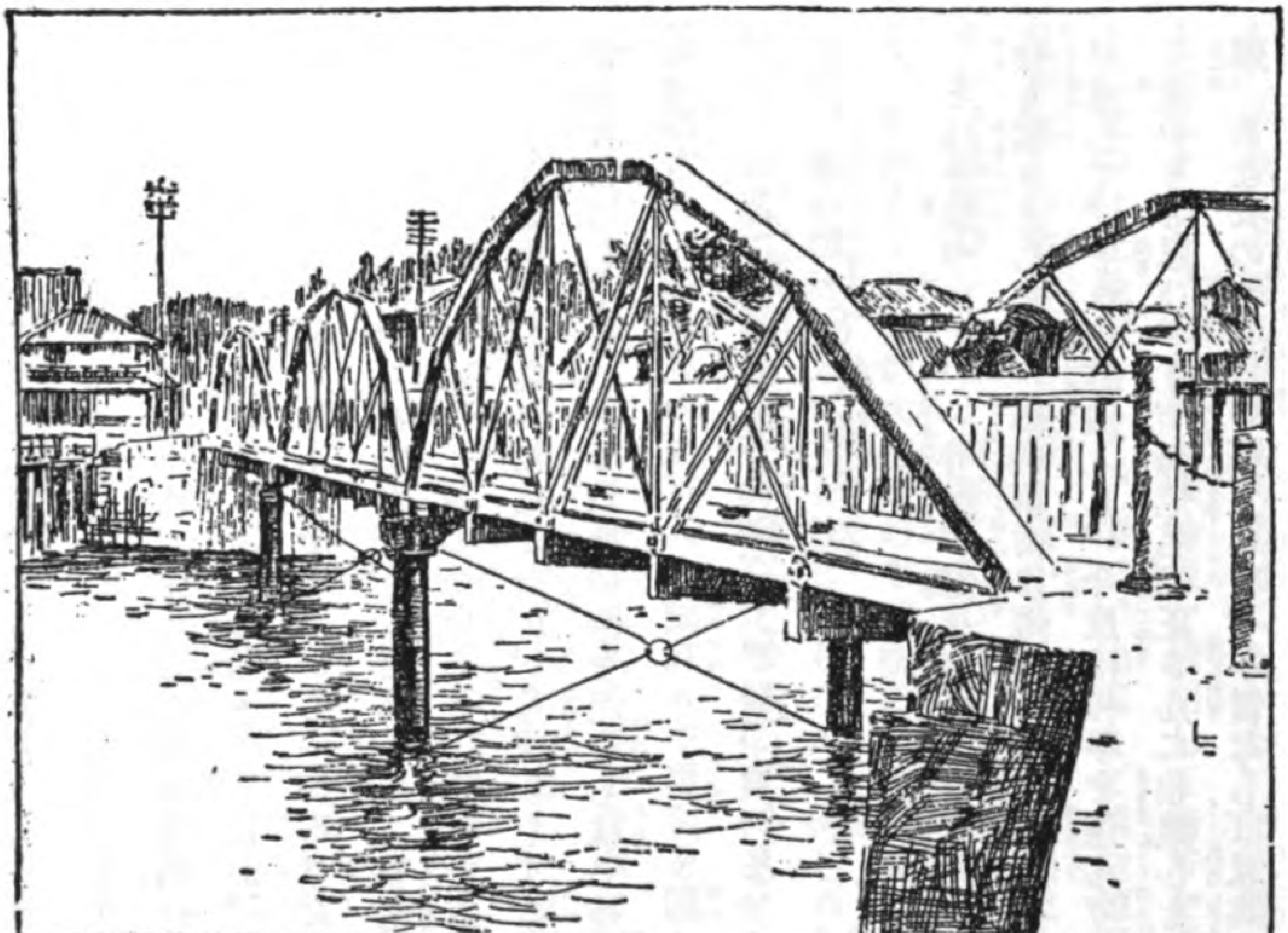
初は酒屋に奉公をして居つた甥をよび寄せて働かせて居つたけれども、それは間もなく暇を出して素人ばかりでやつて居つたので、半年ばかりは問屋の食物になりがちでした。しかし經驗といふものは偉いもので其内私にもこれはハネルとか、これは立ち消えがするとかいふ炭の性質がわかつて來て、だん〳〵都合がよくなり、どん〳〵儲り出しました。原より私の事ですからお得意をとらうと申しても懇意な先へ葉書一枚で頼んで上げる位のことで、別段骨も折らなかつたが、伊藤さんを初めよいお得意が多かつた御蔭で御座います。しかるに二年許りすると、實家の破産について美濃の大地震などがあり、かた〳〵私の方にも影響したから店は前の甥に讓り、私はこの駿河臺に隱居して、不幸な婦人を救ふを目的として、不幸女會といふものを組織しました。寡婦などがたゞお寺參りを事として徒らに坊さんの懐を肥すよりも、その金を集めて何か一つの仕事をした方がよからうといふ積りでしたが、愈々始めて見ると、何うも不幸でもないものが不幸だといつて續々押し寄せて來るので、いさゝか持て餘しました。そこへ或人が訪ねて參つていろ〳〵同情を表し、いろ〳〵盡力して呉れたはよいが、しばらくすると其會を食物にしてとつとゝ自分の懐を肥やしはじめたのです。

△慈善事業の相手を選ばんとして失敗する

それを氣づいて、一寸私が釘を打つたので、大分議論も起りましたが、慈善事業に議論でもなからうと思ひ返して、それは其儘とし、今度は相手を選んでやつて見やうと思ひ、まづ海老名彈正さんに相談しました處、あなたの御考は至極宜しい、本當ならば私共が率

先してやらなければならない處である、しかし下級の人を救ふ事は非常に困難だから、それよりも身分のよい人に力を盡した方が効果が多いだらうと言はれた。私はこれをきいて憤として了ひました。身分のよい人達は何不自由なく暮して、思ふまゝに教育も受けられるのです、何を苦んで、身分のよい人に便宜をはかる必要が御座いませう。で甚だ落膽しましたが、更に嚴本善治さんを訪ねて話して見ると、此人は非常に贊成して下すつて、私共の會を其の學校の附屬にしてやらうとまで言はれたのですが、さて愈々會員を其處へお願しやうとすると、一人に就いて六圓づゝ呉れろといはれるのです、何も六圓も出す位ならば、そんな處へ遣らずともお茶の水なり何處なりの高等女學校へ通はせることが出來るのですもの。あゝあの人も竟に僞善者だと思つつてそれも止めて了ひました。

　顧みれば實におかしな境涯でした。今日の人達には恐らく想像もできないでせう。けれども此等の經驗はしみ〴〵私に神の道なるものを敎へて呉れました。



德島名勝　富田橋

朝鮮の風俗一斑

△王家の御美徳

李王殿下の孝心深くましますことは著しい話であるが、李太王殿下の王を愛しみ給ふことも亦非常なもので、王は御齢既に卅七でおはすに拘らず、太王の王を見給ふことは恰も小兒の如うである。朝に夕に王を愛み給ふて一刻もお忘れにならぬ。少しでも王の姿を見給はぬ時は、直に侍臣を顧みて王の御様子を御下問ある程で、曾て太王が帝位を王に讓つて昌徳府に入らるゝ時の如きは、宛ら永劫の別れにでも逢ひ給ふたやうに別れを惜ませられて、相抱いて泣き給ふたといふことである。兩殿下の御美徳はたゞ此れのみには止らない。由來朝鮮人は非常の煙草好きで、勞働者などでも例も長い煙管を口にしながら仕事をするといふ風であるが、太王殿下を始め王殿下でも王妃殿下でも決して之を手にはなさらない。又酒などもお嫌ひで特に近頃は一滴も口にし給ふたことがないといふ。

△李王殿下の御一族

王殿下は太王殿下の第二子におはしまして、御母は彼の有名な閔妃である。義和宮は王の弟(張妃の生む所)で、目下我國に遊學中の王世嗣睿親王殿下は第二皇弟(嚴妃の生む所)であるが、王に御子がなかつた爲に立て皇太子となられたのである。其他現王の御一族を擧げて見ると、太王の兄即ち大院君の長男李載冕、其の長男の李埈鎔、先々帝の弟完平君、其の子の李星鎔、李陽君等の人々がある。又准王族には完平君の弟李載崑、李載克、李址鎔等の人々がゐる。



△才色兼備の王妃殿下

王妃殿下は韓國政府に永く大臣を勤め一度は首相の位置に立つた事のある尹容善の子の尹容榮の女で、今年は十七歳でゐらせられる。現王は曩に十一歳の時に閔氏を妃とせられたが、閔氏は早く崩れられたので、更に尹氏が册立したのである。其時の撰擇はなか／＼重々しいもので、先づ兩班の娘七十人ばかりを候補者として書き出させ、撰擇委員が其の中から三人を選む。之を三選と稱へる。此の三候補者を王の父君と母君とが見られて其の中から更に一人を選んで妃と定めるのである。其の選定の標準は才色兼備を必要とするが、又同姓相娶らないやうにも注意する。今の妃殿下は此の選に當つた人であるから無論立派なお方である。そして幼少の頃から家庭教師に就て修業を積まれたので、近頃は日本語なども餘

程上達せられ、御應對振りもなか〳〵お如才がないといふ。

△貴族兩班の生活

王室に次で是迄高い社會的地位を占めて居たのは兩班といふ貴族である。之れは李朝の王族功臣が封ぜられた者と前の高麗朝の遺族との兩種あるから斯く稱するので、日本の封建時代に大名が譜代と外樣とに分れて居たやうなものである。併し同じく兩班といふ中にも、豪華一世を空うする大官もあれば、裏家住ひの落魄者もある。故に一口に貴族とはいふものゝ、日本でいへば華族から士族の末までを含んだものと見ればよい。韓國で官吏になる資格のあつたのは此の兩班と中人と稱する階級丈であつて、其他の者は名からして賤民と謂つて甚だ卑しめられたものである。兩班の數は十三萬程あるといふが、其中には隨分惡いのがあつて、金が無くなると、時々下々の資產家を呼びつけて其の上納を命ずる。此の際素直に金を出せばよいが、若しも「只今一寸と手許が差支へまして……」などゝ言はうものなら、「余の命令に從はぬかッ、不屆千萬の奴だー」と呵られて忽ち牢屋へ打込まれて仕舞ふので、泣々金を調達して上納するといふ風であつた。但し之れも近年は餘程改まつて居たといふ。朝鮮人が、從來游惰のやうに言はれて居り、又實際其の傾のあつたのは、斯の如く生命財產の安固を保たれなかつた結果で、之を善く保護したならば決してそんな事はなからうと言はれてゐる。先年我が政府が京奉鐵道を敷設した時などは、多數の韓人を使つて日本人と較べて見たら、日本人よりも能く働いて、賃銀などは約二倍も得たといふことである。



△上流婦人の教育

貴婦人界の活動家としては李址鎔夫人、閔泳喆夫人、李載完夫人等が重なるもので、孰れも日韓社交界の花形となつてゐた。從つて其の令孃達も彼地にある明新女學校といふ貴族の學校へ入學して文明の新教育を受けてゐるのである。此の女學校は明治三十九年に日韓婦人の有力者が創立したもので、朝鮮人では嚴妃殿下が總裁の一人となつて居られるので、上流の女子教育は此頃は却々盛んになつて來てゐる。今日の此の盛況を見たに就ては淵澤ノエ子女史(六十)の功勞は沒することはできない。女史は嚴手縣の人で、早く米國に留學し、歸朝後京都同志社に入り、後ち諸方に教鞭を執つてゐる中に岡部子爵夫人に推されて三十八年に韓國に入つたものだが、それより熱心に教育に盡力したので、王家の御覺えも目出度く「王家の女子の教育は一に汝に委ぬる」と常に仰せられるさうである。

△嚴重なる男女の間

朝鮮は何分にも形式の國だから、上流社會では五倫の誡でも形式だけは頗る八釜しくて、男女席を同うせずとか、夫婦別ありなどいふ古人の格言を、其の儘に形式に於て守つてゐる。故に男女の間は全く區別されて居てまるで互に知ることが出來ない。即ち男は男同志の交際、女は女同志の交際となつて居て、どんな近い友達の間柄でも男の客を女が出て來て待遇すなどいふことは絶對にない。女は家のずつと奥に內房といふのがあつて其處へ引込んだまゝ決して出て來ない。そして此處へは夫の外はどんな親しい間柄の者でも男子は入ることを嚴に禁じてあるから、朝鮮の婦人といふものは殆んど知ることはできない。外出の時には駕籠の中に閉ざされたまゝ出でゝ歸へる時にはその儘で內房迄かき込まれる。婦人の朋友が訪れて來ても駕籠の儘で室へ這入つて行く。そしてかういふ場合にはもう他人の婦人が交るのだから、夫と雖も內房に入る事を許されない。しかし斯樣に用心堅固にしてある所に却つて隙間があつて、深く簾を下した駕籠の中に男を忍ばせて置いてもちつとも分らないわけである。

△美しい婦人の服裝



朝鮮婦人の服は色でも仕立方でも實に單純なものではあるが、日本婦人の服に比べると勝つてゐる所もある。例の雪と疑ふばかりの厚化粧をして、紫、赤、黃、萌黃、桃色などの服を着けた婦人が五六人も立たうものなら、まるで花が咲いたやうで、金ばかり餘計にかけて澁いとか凝つてるとか言つて嬉しがつてゐる日本人の黑な服裝とは比べものにはならない。地質は上流婦人は多く支那の織物を用ゐてゐる。夏ならば紋紗上等麻、冬ならば支那繻子といふやうなもので、どんな贅澤な人でも、又如何に立派な禮服でも、之れより上等の品はない。そして如何なる老婦人でも、又どんなに顏が醜くても、髮の毛を眞中から兩方に分けて鬢附油で額にこれつけ、眞白に白粉をつけて、額上に紅を差して、上着や裳をすらりと着流して立つた處は全く綺麗である。

△婚禮に就ての珍談

一般の風俗に就て言へば結婚前後の樣子などは却々面白い。朝鮮のお嫁さんは婚禮後に人に見られるのが羞かしいのか、人を見るのが羞かしいのか、二三日の間は目を全く閉いである。唯目蓋を閉いでゐるならばまだしもだが、鬢附油のやうなものを塗つて睫毛を附着かせて仕舞ふのだから珍である。婚禮の式には、お嫁さんの服裝は何のことはない日本のお雛

様其の儘である。婿さんは大抵桃色の服に、薄化粧をして、約束の帽子といふのを被つてゐる。此の式で婚禮の豫約が出來るのである。此の帽子は一見婚禮の約束濟の者といふことが分るもので、普通の帽子とは異つてゐる。かうして約束をして置いて半年とか一年或は二三年位交際をさせ、其の間にお婿さんはお嫁の方へ泊りに行く。さうして双方いよ〳〵宜いといふ處で更に眞個の婚禮の式を擧げるのである。お嫁さんの行列は嫁が駕籠に乘り、官妓が數十人附添つて、日本の盆燈籠のやうな赤や黄などいろ〳〵の提灯をぶらさげて二列になつて進んでゆく。式中は目を閉ぢてゐるは勿論のこと。そして其の儘男姑へ對面がある。又此の時に誰れでもお嫁さんを見せるので、人が庭前に一杯押合ひ犇合ひなか〳〵の賑ぎである。

△妻は夫のお守り役

中流以下の社會では、男子は多くは長い煙管をくわへ悠然として遊んでゐる。電車が出來れば面白づくに乘廻はるなど終日見物などに暮し、仕事をしてゐる時でも少し珍らしい物でもあると、それを打棄てゝ飛び出すといふ風であるが、女子は却々さうではない。一方ならぬ細君振を現はして甲斐々々しく働いてゐる。先づ朝起きて日光を見れば必ず洗濯をする。



これが殆んど一日の仕事なので、其の洗濯法は頗る面白い。十五六人の婦人連が河畔に揃つて例の白衣を眞白くなるまで根氣よく調子を揃へて砧打つのである。そして洗つて乾かした衣服は糊をつけ鏝を當てゝきちんとさせる。不潔と思ふときは再び洗ひ直すことを厭はない。又裁縫なども巧みなもので、殆んどミシン縫のやうに手縫ひをやる。刺繍なども其の綾や絲のとりなしなどか頗る上手で、凡てが緻密なところは日本人も及ばないかも知れない。最下層の婦人になると又ずつと烈しい勞働をする。一體朝鮮の夫婦は妻の方が年長で、十三四の男に十七八の女を娶すのが普通だから、妻は夫のお守を始終しなければならぬやうな譯で、若い時に夫が菓子をねだつて妻がそれを出してやるといふ關係が何時までも附いて廻はつて、年を取つた後までも女が働いて男が遊ぶやうになるものと見える。

彼の地で御馳走といつたら先づ漬物で、一番金もかゝり、美味く食られる。下等社會の漬物は菜に唐辛を入れた位のものだが、上流の漬物となると白菜、山東菜、芹、蕪等の外に梨子や魚類を薄く切り唐辛を入れて漬ける。押漬でなく水漬にして味が出るまで、漬けて置き、汁が澤山あるから其の汁ごと食べる。會食の時は此の漬物を眞鍮の壺に盛上げて出し、各自の皿に取つて食るのであるが、何分御自慢の馳走とて、貴族の家には漬物甕が七八百個もあるから、漬物時には主婦は非常に忙はしいのである。

現代婦人の必ず持つべき考

女子高等師範學校長　中川謙二郎

△婦人の潜んだ勢力

婦人は男子に較べると殆ど社會に勢力がないと言ふ人がある、又其の爲に婦人が政治に參與する權を要求してゐるやうな事實もあるが、私はさうは思はない。成程我國の婦人の昔の有樣や、又現在の朝鮮、支那、其他東洋諸國の婦人の有樣を見ると、孰れも外出する機會が少なく、從つて外で働くこともないから、或は其の樣に見えるかも知れぬが、然かも實際に於ては大なる勢力を有つてゐるのである。設令婦人に參政の權はなくとも、其の國家社會の事に携はつて十分働らきを爲してゐるのは事實である。其の勢力の盛んになると否とは參政權の有無とは左程關係ないと思ふ。野蠻時代の事は知らぬが、やゝ進んだ未開の民の間に於ても女子が相應に勢力のあつた所を見ても、參政の權はなくとも婦人の無能無勢力と言はれないことが分かる。それゆゑ婦人自らも、自分は餘程力のあるものであると深く反省して、自身の價値を覺らなければならぬ。そしてさういふ身體を附與せられて日本人の一人として立つてゐるのであるから、十分自重しなければならぬ。自重して居ないとは言はない。皆な夫れ〲に考へて品行智識を練磨し、國の爲に盡してゐるのであるが、尙ほ其の上にも一層の注意を煩はしたいのである。

△進歩に伴ふ思想

けれども、國家を富强にするのは男子の爲すべき事で我々女子の關する所ではないといふのも、强ち惡るいとは言はない。其の樣にして一家の整理に力を盡し子女の敎養が十分に出來るならば、詰り社會に力を與へることになるから、之れも決して惡るいとは申さな

い。たゞ社會の有様は、今後益々榮え、益々進んで行くだらうから、婦人の考もそれに伴ふて段々と進歩しなければならぬ。これは今日の婦人の根本要義である自分の子供は自分が生んだのだからと云ふのみでなくこれは日本人であるから、虚言もつかぬやうに、身體も壯健にと祈るやうでなければならぬ。こゝにこそ婦人の勢力があらうと思ふ。參政權を得れば婦人の勢力が増さうなどゝは少しも私は思つて居ない。

△男女教育上の相違

女子も男子と等しく日本人の重要なる一人である以上は、國に盡すといふ根本思想の上に學事を勵み、身を修め、其他總ての行ひを爲すべきである。又教育の方面からいへば、女子の普通教育の目的は賢母良妻を作るにある。其の爲に家事を治むるに必要な學科があつて、男子と少しは異る點もあるが、それを外にしては右の思想の上に男子と等しく教育をしてよいと思ふ或は女子は全然男子と異つたものだから、教育も全く別のものでなければならぬと考へる人もないでもないが、生理上心理上に少しの相違はあるにしても、等しく人なる以上、大體に於て異るものでない。

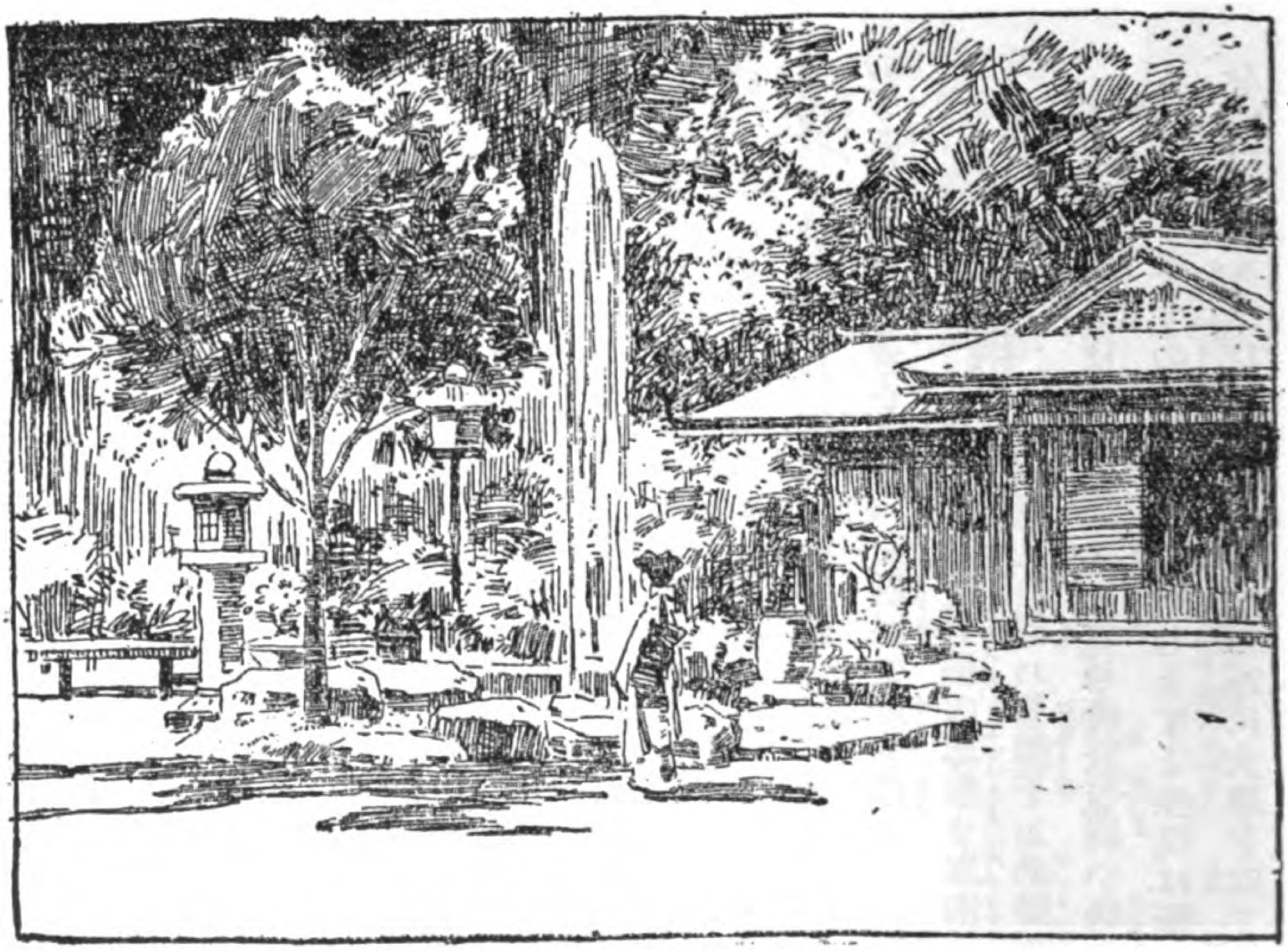
△女子教育の非難

そして一體に女子の教育は男子に非常に遲れてゐるのであるから、今後益々之を進めたいと思ふ。從來女子教育に就ては時には非難も起つたやうである。或は家事を執られないとか、或は家庭に合はないとか、其他色々非難があつたやうである。賢母良妻を目的とする普通教育を受けた女子が、家事を執られないとあつては、我々教育者は誠に慚愧に堪へないわけだから、さういふ非難は謹んで聞きたいが、然しかういふ事も考へて頂かねばならぬ。女子の普通教育は、女の子供の教育である。子供の教育を受けた者が家庭に入つて直ちに一人前の婦人の働らきを爲さうとは、實は教育者も豫期して居ない。これはどうしても其の女子が子供をも生み、相當の年も取つて一人前の婦人になつた

後に、果して役に立たぬか何うかと、そこで初めて問題にしてほしいのである。それに今一つは、教育を受けた者は何處かに異つた處がある。而かも今日は女子教育は却々盛んだとは言ふものゝ、年々女學校を卒業する者の數は、全國を合しても何程もないから、其の異つた所が格別に人目に觸れる。そこで其の婦人が餘り目立たぬやうに其の社會に順應すればいゝが、普通教育を受けた位ではまだ其れ程の智力もない。今一段高い教育を受ければ能く順應してゆくのであるが、それが出來ない爲に、人よりは異り者のやうに思はれて遂に非難も起るのかとも思はれる。どうか大切な教育を斯ういふ事の爲に誤らないやうに致したい。(談話)

秋風の松をしらぶる度毎に
岡べの尾ばな袖かへすなり
荷田春滿

一方になびき揃ひて花すゝき
風吹くときぞ亂れざりける
香川景樹



嚴島紅葉谷公園

實地教育の興味

日本女子商業學校主幹　嘉悅孝子

▲爲せと教へる主義

特別の腦力ある女子は格別、普通の女子を教へますのには理窟を呑込せることが一番困難のやうに思はれますが、この呑込せにくい理窟を強て教ゆる必要もないかと存じます。高等の學問を修める女子には勿論理窟が必要でございますが先づ高等女學校程度の女子には實地の方を先に教へて後これに伴ふ理窟を説明するのがよく頭腦に沁み込やうでございます。何々は爲す可らず、何々は爲さゝる可からずと廻り遠く口頭で教ゆるより教師自身がかやうに爲せと實行して見せるのが一番利目あるやうです。雜巾掛一ついたすにも眞理は含まれて居りますので新教育に觸れた婦人の實踐躬行したことはチヤンと理窟に結び付いて居ると存じます。

▲強ゆるのは宜しくない

校舍内外の掃除、雜巾がけ、雪隱掃除、溝浚ひ等まで私が先立になつていたしますから生徒は見やう見眞似に立働らき卒業時分には却々働者になるのでございます。他生に比べると少し働き方が鈍いと思はれるものでも家に歸つた後はよく働らくと申して親達に悦ばれ近隣の褒物になつて居ります。併し私は始めから決して生徒に勞働を強ません。生徒自身が進んでいたすのでなければ効はないものですから新入生なぞには唯私の働を見てさい居れば宜いと申てあります。傍觀して居る内には不知不識感化されて眞似が爲て見たくなるのでございます。

▲手綱の取加減

人の食べる物は食たく、人の見る物は見たいのは誰も同じことですのに頭から壓制しますと生徒は陰日向をいたすやうになります。丁度極端に大事を取て何も

食させぬ家の子供は他處で隱し食をするのと同じでございませう。私はお嫁の世話と觀劇が道樂だと評されます通り、觀劇は實際好でございます。これは父が大の好劇家で私は始終伴に連れられた習慣が天性となつたのでせうが、只今でも單獨や友達なぞとは決して參りません、父の歿後は母の伴をいたして折々出掛ますが、私は劇を觀ましても何處が良と印象的に味ふのでは無く唯茫然と打眺めて居る間に平生のごた〳〵した考をサラリと捨てゝ浩然の氣を養ふのでございますから新派の方は少しも興味がなく舊劇の所作を看るのが一番好でございます。お話が外れましたがこの觀劇なぞも確かに若い女子の理想の一つと存じますから、脚本の性質の良い時に限り卒業生位は代る〳〵連れて參ります。こんな風に或程度までは彼等の望を滿足させることも考へて居りますが、自然の情に斗り任せますのは勿論危險で制裁は是非加へなければなりませず大體の手綱は確乎と握つて場合に應じ伸縮いたすその呼吸は却々むづかしいものでございます。

▲水害地から得た教訓

此度府下洪水の際は生徒を引連れて被害地へ參り實況を視せましたが、想像以上に憐れな樣子は生徒達に非常な感動を與へ、心底から自分達の境遇を感謝して物を粗末にせぬ心も起り、又轍鮒の急を救ふのに必需な物品も知り得て、寄贈品に氣轉を利するやうにもなり、一方には慈善家の活動にも感心いたしましたが、唯避難所等へ堂々と旗を推立てゝ來る樣子が如何にも廣告らしく、出來るとなら喇叭を吹ずに同情を寄せたいと云ふ感じも起つたらしうございました。私は生徒達に水場に住ふ婦人は棚の釣り方、荷物の片付方等避難の方法を綿密に工夫すべきことを注意いたしましたが實況を看た頭腦にはよく理解されたやうでした。今迄の婦人は家の構造とか天災の用心とか云ふ側は男任にして、責任外に置く風がございましたが、爾後の婦人は一通り這般の智識を養ひたいものと存じ、家の繪圖引位は生徒に敎へて置たいと思つて居ります。そんな

ことまで學校で教へなくてもと仰る方もございますが住宅の都合なぞは男子の思ひ取れぬ緻密な考が婦人にはあるものですから繪圖を引く素養があつて良人の相談相手になりましたら、餘程利益があらうと存じます。且男子の仕事も追々繁忙になるばかりですから一家のことについては可成男子の術を輕くするやうに心懸なければなりません。下等社會の細君なぞは炊事洗濯、裁縫子守の暇に相應の荒仕事を爲て良人の手助をするのを、見受けるのでございますが、良人の出勤を送出した跡、暇多き妻君達は少し反省して臺所の棚や棚釣り位は研究して心懸がありたいと思ひます。



▲勞働者の妻から得た教訓

都新聞で勞働者慰勞會を催ふされました時、私方の生徒がバザーの賣手に賴れましたので、私も時々見廻りにまゐりましたが、あの會は御承知の通り慈善家の寄送した古着類を、三錢乃至五錢位の低價で勞働者に賣與へ、その上り高で角力を見物させる趣向でございましたので勞働者の細君達は先を爭ふて買ひにまゐり賣手は目の廻るほど忙しふございました。中には汚れた衣類もあつて最初の内は生徒達が氣味惡相につまんで居りましたが、買手の

恰ど様子に恥がついて平氣で取扱ふやうになりました私が参って見ました時、海草のやうな着物を纏ふた君婦人が、「野郎のと餓鬼のに（細民社會の言葉、即ち良人と子供の事）一枚で買たいと」申してあちこち見歩いて居りました。私は生徒の「海草のやうに着物を纏ふた婦人が自分の衣類を求める心もなく唯良人や子供の物ばかりを漁る。あの美しい心懸は、格別の勢力もせずに良人の汗を吾身の衣飾に費しても尚不滿足を唱ふる妻君達を慚死させる力があります。あの貧婦人は貴嬢方の將來に良き模範を示したのです」と話しました。

▲友愛の働らき

卒業生がこの學校から嫁入いたすことがございますと、支度萬端は、生徒達が、打寄て世話いたします。當夏の休暇中に結婚しました卒業生は都合上僅か四日間に支度を整へたのですが、親友が衣類は勿論夜具蒲團の仕立、その他一切の用意迄、手落なく整へました。學校の掃除や夏季講習會や割烹の手傳までいたす暇に整へたのでございますから實に忙しい働でありました私は悉皆出來上つた處を見まして私の精神をよく呑込で與れたものと非常に滿足いたし誰様にか見ていただきたいやうな心地いたしたのでございます。

▲最善を爲せ

最善を爲せ、最善を爲す者には最善の報ありと云ふのは私の服膺して居る格言でございます。私なぞ素より最善を爲すことは出來ませんが、唯時々刻々に湧て來た責任を精一杯に盡すのを表準にいたして居りますので、この報は決して豫期しませんが、責任を精一杯盡した快感が何よりの報と喜んで居ります。この暑中休暇にも何か最善を爲たいと考へましたが、奥様方が家計困難を歎たれることの多いのは畢竟簿記に暗いためで、收支の釣合をチヤンと定め豫算範圍内に於て毎月五錢でも十錢でも餘裕を作り數月の後には今月の收入を來月に使ふやうにいたすにはどうしても家計簿記

が必要と考へまして夏季講習會を開きましたところ、奥様方は大層悦んで學ばれました。私は聊かでも最善を爲したのであると悦んで居ります。

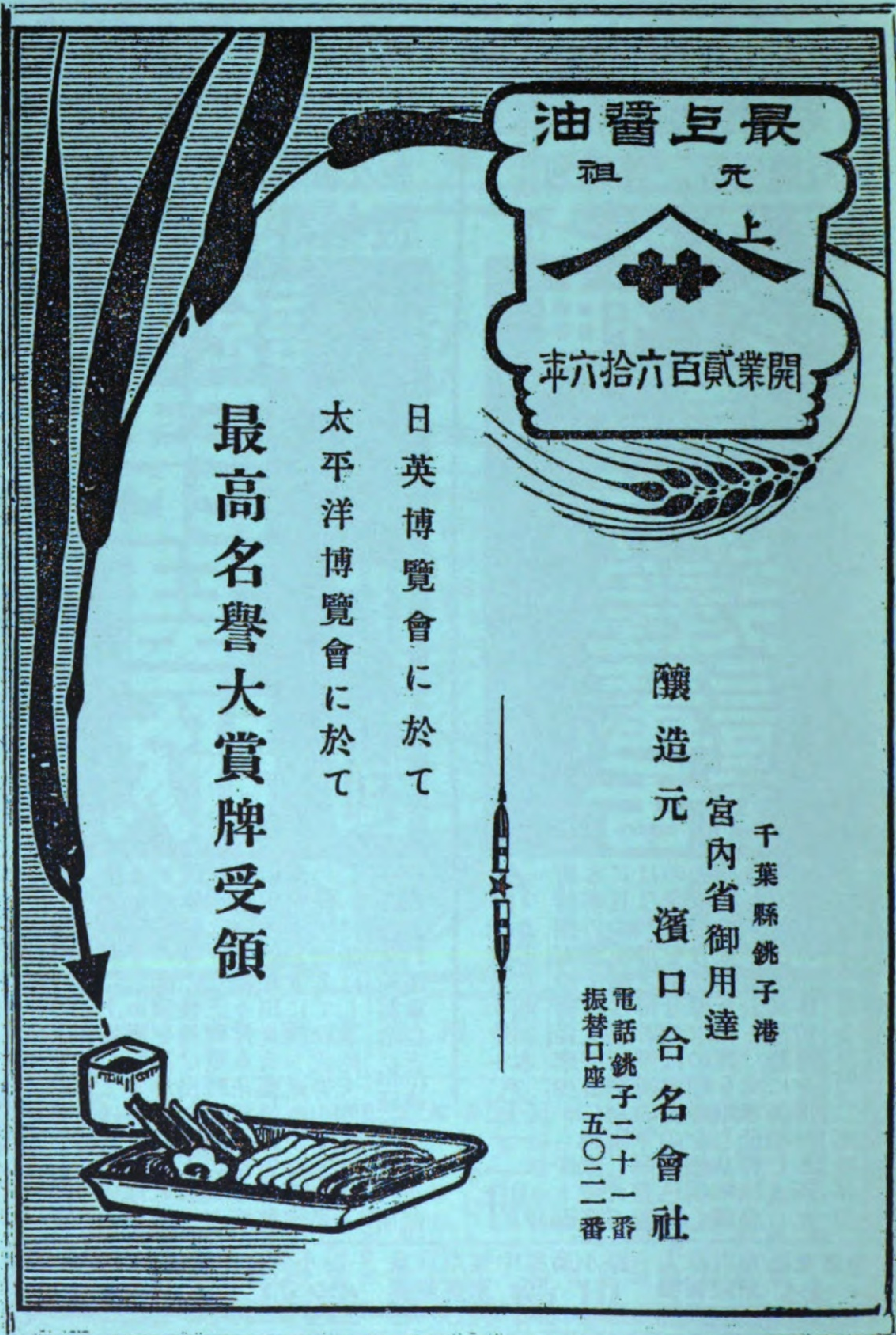
▲媒だちを爲た快感

私は前申上る通り媒酌道樂と評され、只今も二十人位の男子方からお嫁の世話を頼まれて居ります（素よりお世話だけで媒人は他にお願します）位でございますが、双方とも能く知つた方ばかりをお世話いたすので、大抵結果は宜しいのでございます。併し媒と申すものは却々むづかしいもので、纏めるまでには可なり心配もいたし忙しい時間も費すのですけれども一度成立して双方が滿足しました時は新郎新婦の喜に溢れた顏を見るのが限りなく樂しいので、先づこの男女に對して一の最善を爲たと悦ぶのでございます。私は他日學校の規模を擴張し得られたなら作法室を設けて結婚式まで擧させたいと希望して居ります。

▲借財時間

私の亡父は他人の爲に働らくのが道樂で、一生涯自己のことを顧らずに暮した人でしたから、殘した物は借財でございます。私は父より多大の薫陶を受けましたけれども借財もかたみに貰ひまして唯今以て根切にならぬのでございます。併し私の天性は何れかと申せば怠惰らしふございましたから、若し借財と云ふ刺戟がありませんでしたら今日のやうに働らき好にならなかつたらうと存じまして、借財も父の賜として感謝いたして居ります。この借財について私は先頭より職務の寸暇をさいて借財時間と云ふのを設け、この時間だけは何か生産的の仕事をいたして返財の方へ向ることを工夫しました。借財時間の仕事も勉強いたせば幾分か他を益する次第ですから矢張最善の一かと存じて悦んで居ります。

▲盡く感謝に値す



最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾六年
千葉縣銚子港
宮内省御用達
釀造元
濱口合名會社
電話銚子二十一番
振替口座 五〇二二一番
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞牌受領


東京銀座
松本樂器合資會社
電話新橋二二九八
松本ピアノオルガン
事實は眞價を證明す
松本樂器愛用者の一部
前田侯爵家
田中智學殿
緒方醫學博士殿
西園寺侯爵家
茨城炭礦株式會社
榊醫學博士殿
本郷教會
加藤醫學博士殿
みかどホテル
東京音樂學校
第一高等女學校
青山女學院
日清紡績株式會社
奉天府師範學堂
本居音樂校教授殿
小松學習院教授殿
國澤滿鐵理事殿
常磐小學校
伊井蓉峯殿
眞砂座
新版目錄郵券貳錢送附進呈

女(ゐの三)

新學期開講

第四回 會員募集

入會の絶好機

最も短期間に最も經濟的に女子處世上缺くべからざる一般の學藝を修得せんと欲する婦女は本講義に據らるべし

▼會則附き內容見本 申込次第送呈▲

女子大學講義

▼本月中 入會申込に限り 入會金全免▲

現代一流の斯道大家が平易懇切に解說し熱心に講述せるものなれば學窓にある人家庭にある人を不問新時代の婦女の爲め最も同情ある好伴侶、良師友たり

編輯所 小石川目白臺 日本女子大學校內 通信教育會

發行所 東京小石川區久堅町一〇八 精美堂 電話番町九三二 振替口座東京二八三八

會費一ヶ月金五拾錢二ヶ年修了

女（ぬの四）

如何なる化粧料、藥品を用ひても効なき人は、この化粧タオルを以つて美顔術を行ふべし
奇功壯烈、色を白くし艶を好くし醜顔を美顔に變する掌を返すが如し

關東代理店
松井號東京支店

化粧タオル



定價
一號（美顔料二百日分付）金五拾錢
二號（美顔料百日分付）金三拾五錢
美顔料（二百日分）金四拾錢

全國到る所の化粧品小間物洋品店に販賣す

大阪順慶町 ㊢山崎商會製

化粧タオル發賣元
タオル、シキフ御問屋
大阪市順慶町四丁目心齋橋筋西入
㊢山崎商會
電長南二三一七二番、振替大阪一〇八九八番

郷友、學友、戰友諸君の應援を祈る
商會主 山崎壽雄

新刊
實効確證 美顔新法
洋裝美本 全一冊
定價金十五錢（送料共）切手代用一割增振替送金一錢增
◉發行所 東京神田猿樂町二ノ三（振替東京一九八一七）三英堂◉

機械ヲ要セス便輕 早取寫眞インキ
金貳拾錢
大瓶、定價金卅錢發賣紀念爲千個限送料共特價

此術頗簡易他に又複雜なる藥品を要せず本品を塗りたる原紙と一枚の普通硝子を以て人物風景意の如く其通り速寫し得べき寫眞界最新發明品●本品を用ひ自分の肖像、入繪葉書、名刺を製せば頗る妙殊に弊堂發賣品獨特の妙技は幻燈用寫眞畫の子裝飾寫眞を製し得べし●説明書尤明細特に本品を應用し藥書名刺等萬般の美的印刷代用として其便簡易複寫インキ等に優る實益至大他の同名類似廣告品とは天地の差●速かに試みよ

發明製造元 皓文堂
岐阜縣高須町七二五
振替名古屋七七八七番

◉子を持つ親ある病人家人は是非必要特許品（特別製品各拾五錢上り）
定價●乳兒用九拾五錢●中人用壹圓貳拾錢●大人用壹圓九拾五錢

ね
小便袋



送料各拾錢

衛生最良德用輕便れ小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に淸潔なれば小兒病人老人の最も必要にして、ねおきたちすわり等に毫も差支なきは本品の特長なり（男女の區別あれば御注文の節御注意をこふ）

ルーデーサック
子宮サック

十二個五十錢 廿五個一圓
六十個貳圓 送料八錢
特製七十錢 二個一圓廿錢
三個一圓六十錢 送料八錢

註文切手代用一割增
發賣元 大阪市東區淸水谷西町 和泉屋商會
振替口座大阪八三壹〇番

女（ねの五）

學校家庭必備之寶典

兒童訓話の絶好資料として大高評を以て迎へられたる
本書は初版忽ち賣切れ今や再版發行す

巖谷小波先生校閲　沼田笠峰先生編述

兒童教訓 赤穗四十七士畫譚

全壹册　洋裝頗美本舶來紙印刷美麗　寫眞版六拾餘箇挿入　正價六拾五錢　郵送料六錢

本書は少年少女の敎養に經驗ある編者が元祿義擧の顛末を平易なる文章で述べると共に六十餘の鮮明なる繪畫を加へて四十七士の個々の行動をも詳細にあらはしたる者なれば虚弱なる日本帝國の少年少女諸君が士氣を養ふに最も適當なる讀みものと信ず。

大好評　大歡迎　續編發行

西川三五郎編

續 學校家庭 兒童百話

新刊

洋裝全壹册　正價卅錢　郵税四錢

學校家庭 兒童百話

拾版

洋裝全壹册　正價廿八錢　郵税四錢

今回更に最も嶄新にして趣味ある童話百餘種を蒐めて續編を刊行せり乞ふ一讀あらん事を

發行　東京神田下松町　文盛館　●　振替東京二〇四一六　東京神田美土代町　博文書院



女(ねの八)

困難に逢ふことが多ければ多いほど最善を爲す道を得られますので事として感謝に値せぬものはございません。これは私が永年の經驗で確めることができたのでございます。良人の不心得で難儀することを私に歎つ婦人がありますと、「決して歎ちなさるな、貴女が不心得したのなら心配せずばなるまいが、他からの迫害なら少しも悔むことはない、貴女の爲すべき道を働いてさへ居れば最善を爲し得られるのですからと申して居ります。

▲私の滋養品

私は食事を生徒と共にいたし牛乳その他の滋養品を用ゐたことはございませんが、御覧の通り鐵のやうに身體が丈夫でございます。一には體質にも依ませうがどんなことに遇ても悲觀することなく何時も喜びに滿て居りますのと、まめに身體を動かすのが好なお陰でありませう。私が忙しい暇に人に賴まれた用事をいたしたり、熱心に立働いたりいたすのを見て餘り身體をつかひ過ると心配して下さる方がございますが、文章家なぞが頭腦をつかひ過るのは格別、大抵の仕事なら働くほど健康を増すのでございます。一體婦人が家事を働らくのが如何程働いたつて過ると云ふことはありますまい畢竟働らく習慣のつかぬ內は疲れを覺え身體に障る心地がいたすものですが、追々身體を鍛えれば必らず働らき得られるのでございます。此校でも新入の生



徒には痩たのが多ふございますが卒業間近になつたものは勞働のために體格は著しく宜くなり皆大々と肥つてまゐります。こんなに肥つてはお嫁の口が遠がらうとすぐ縁談を申しましたが、近來頑丈なお嫁を望まれる方が殖え販路は益々擴張してまゐりました

（文責在記者）

面白い婦人事業

西洋では子供に關する一種の面白い慈善會が御座います、其れは海水浴とか溫泉とか云ふ場所へ大きな寄宿舎を作りまして、是れに身體の虛弱な子供や病後の子供を預つて三週間なり四週間なり保養をさせる一つの團體のであります、日本で申しますならば箱根とか輕井澤とか大磯と云ふやうな處に大きな寄宿舎が出來て居るのですが、私の見ましたのは僅か二三ヶ所に過ぎませんけれど、なか〳〵見事な規模でした最早秋に成つて學校が始まると云ふ時期でしたから、收容された子供も大變減じては居りましたものゝ、まだ百五十人の兒童が殘つて居つたのです、而して其狀況を見まするに、隨分嚴重なもので、何から何まで行屆いて居る、食堂、入浴場、遊戲室、音樂室、寢室等一切が完備してゐて、皆別々に出來て居りました、先づ入浴するにも風呂が二十ばかりもありまして、其れを看護してゐる人が兵隊を士官が連れて居るやうに整列させて歩調面白く浴室に行くのです、日本にも愛國婦人會とか、學校婦人會とか、婦人衞生會とか、其他隨分澤山に立派な婦人の團體が出來て居ますから、各々の事業の餘暇にでも盡力し下さつたならば、日本婦人の美しい精神が將來の國家を双肩に背ふ子供にも向ふ事が出來ると考へます。（弘田醫學博士）

裁縫を教ゆるについての難易

戸板裁縫女學校校長　戸板せき子

▲學科力の有無

私方の教授法は分解的で一齊教授をいたすのでございますから、器用な人でも不器用な人でも平均して進歩させることが出來ます。分解法を以て教へますと極めて簡易明瞭に早く要點を呑込めますから、よく〳〵の低脳者でなければ規定通り進めるのでございますが、唯學科力の素養なきものは教ゆる方も習ふ方も一寸困難を感ずるやうです。學科力と申しても簡單な加減乘除とやさしい問題の理解さへ出來ればよいのですから、高等小學卒業程度で十分なのですけれども、筆算も珠算も知らず黒板に向つたこともないと云ふ舊式の老婦人ですと技術の方の經驗はあつても分解法の理窟を呑込むのに遲鈍な點がございます。

▲裁縫速成は時代の要求

鎖國時代の日本婦人は裁縫を畢生の專門事業にして居ても濟んだのでせうが、二十世紀の婦人は活動の版圖が擴まり、責任が殖てまゐつたのですから、唯裁縫にばかり從事して居りましては、婦人の本分を盡すことが出來なくなりました。併し用務が殖たからと申して家族の衣類を一々人手に賴むやうでは目立ぬところに大きな缺陷を生じます。一枚の仕立賃は僅かなやうでも二枚三枚とつもれば直に裏地の一反位求め得る金高となります。又これを節儉するために洗張仕立直しを見合せますと品質はいたみ垢は溜つて參りますからどうしても自身で手早くいたすことが必要になるのでございます。従つて裁縫の學び方も迅速で多種類を習得

することが時代の要求となつたのでございますが、これまでの學び方は自然の熟練に任せるので年限のかゝる割に各種の裁縫に通じ得られず、二年三年とかゝつて上達しても單衣に一日を費し、七子の袷羽織に二日を費すと云ふやうでは、貴重の時間を裁縫に全消しまして誠に惜いことゝ存じます。

▲分解教授法の大要

私方では七ケ月で日本服裁縫の全部（僧衣莖衣の類まで）を教へ了りますが、一番最初に奬勵いたす運針法は二尺五寸の切を、五寸程の糸を通した針を以て、とめ無しに數回運針させますので、この際には縫目の如何を問はず早いのを勝といたし毎朝五分間位で、この競爭をいたさせます。次に針目を揃へた直線縫を練習させ大人物の裁方を教へて後、單衣を縫はせるのでございますが、この間は僅か十日でございます。而してこの十日間に前記の外に名稱、物尺、とめ方、しつけ、くけ等の種類を教へます。名稱は從來のと異なつたところがございまして假令ば襟肩を肩襟と稱へますのは身體にあつた上の衣服ですから凡て身體の名稱を主位に置くのでございます。物尺は東北地方へ參りますと、曲尺を用ゐますから鯨尺、曲尺、ヤール尺の三種を說明します。とめ方も五行どめ等まで教へますから枕のくゝり方もこの際覺えますし、しつけは祝儀、不祝儀に依つてかけ方の異る點などまでも教へるのでございます。

▲裁方は一の字を引くべし

裁方を知らずに他人の裁つた物を縫ふと云のは間違つた話ですから縫物にかゝる前に必ずその裁方を覺えなければなりません。黑板に圖解を掲げて裁方を教ゆるのは良い方法でございますが頭腦に入るまでに二三

回も鋏が要りますから私方では實物の裏地一反を以て說明いたし裁場所へは鋏の代りにチョークを用ゐて他種の稽古に複用いたさせますが實物ですと一遍でよく呑込るのでございます。衣服を裁つのは凡て一の字を引く觀念と同じく左から右へと疊んで左へ鋏を入れゝば宜しいのです。(但し肩襟だけは右へ鋏を入れる)一の字を左から右へ引く心得あるものならば決して裁方を間違へる心配はないものでございます。それから布幅の廣狹については機場では必らず何等かの必要に當はまるやうに織るものですから大人物に不都合な布幅は子供物の何かに適當いたし、無駄切を裁落すことはないのでございます。

▲灸處

單衣物を縫ふに先だつて覺ゆべきは四つの灸處でございます。即ち袖縫(人形及び丸味等)裾ふせ、前縫ゆきつけ。是さへ呑込ればあとは前に練習した直線法で出來る次第です。この例を以て其他の殊特な灸處を頭腦に入れて了へば單衣は一時間で樂に縫上り、七子の袷羽織なぞでも一日に二枚、早い人は三枚を仕上げられるのでございます。斯樣に早く出來ますのは運針競技の熟練と分解的に理解する爲で無駄な時間を少しも費さぬからであります。

▲秘傳は更に無し

從來の仕立屋で弟子に敎ゆるのに秘傳といたして居つた甲斐絹の太紕なぞは「ゆのし」を以て局部を延ばせば容易く出來る方法があるのです。その他奥儀めいた縫物も分解法に依れば實に樂々と早く覺えられるのですから秘傳なぞと云ふところは更に無い筈でございます。初めに要點を敎へずに縫はした物を此處が惡い彼處が惡いと何遍も／＼ほどいては直させ唯數をかけ

て開發を求めますのは、丁度お膳立もいたさないで御飯をすゝめるやうなものでせう。裁縫なぞは素より注入的のものですから、廻り遠く生徒の開發を待つ暇に簡易な方法を以てズン／＼進歩させ早く家庭の役に立てた方が良いと思ひます。前申し上る通り將來の婦人は裁縫以外に澤山な仕事があるのですから速かに全般を修了して速かに實技を働かすのが時代の要求に應ずる大切の覺悟でございませう。

▲有爲の精神は電力の如し

高等小學卒業位の生徒は入學して十日目に單衣を縫ひ、七ケ月で全部修了と云ふことを最初に覺束なく思ふて、とても出來まいと考へるものがあり、又五十歳以上の昔風の婦人は運針より始めるのを奇異に感ずると同時に規則づめに教授されるのを困難に思ふやうにも見えますが、實地に練習する間に若い生徒は容易に手際よく出來るのに驚ろき、老生徒は從來の難關が樂樂と通れたのを怡ぶのでございます。特に教師志願の老婦人なぞは實地に伴ふて教授法も解し得ますので頗る便宜を感ずるやうです。私はいつも新入の生徒に向つて、「世の中の事は爲さんと思ふて出來ぬことはありません、爲さんと思ふ精神は電力のやうなもので、この電力さへあれば百般の器械も動かし社會の事を爲し得るのであります。分解法で教ゆる裁縫なぞは餘程の愚者でなければ解し難いことはないのでありますから爲さうと云ふ精神さへあれば必らず豫定通り速かに達し得られるのです」と申して居ります。

萬事に快よき西洋の生活

福井菊三郎氏夫人　福井夏子

夏子夫人は江原素六氏の令孃で三井物產會社に樞要なる地位を占めて居らるゝ福井氏に嫁がれ曩には香港、新嘉坡等に、又近くは紐育に滯在されお子樣方と一緒にあちらの生活には最も慣れて居られる方です。

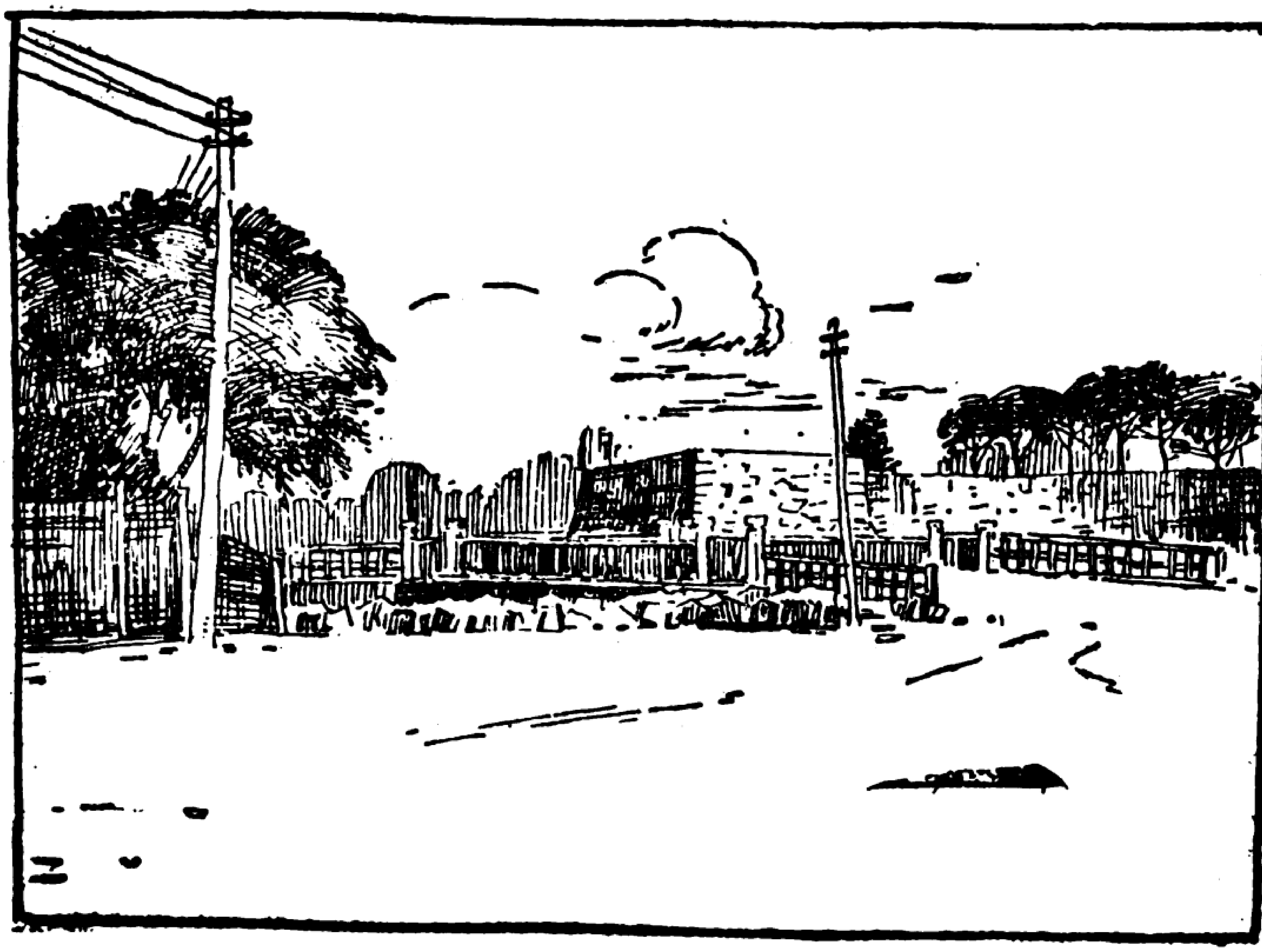
△子供が親睦の手引

私が紐育に居りましたのは、僅か三年間でございますから、外のお方に較べますと、外國の生活上の智識なぞはまことに淺薄でございます。たゞ私は子供を連れて參つて居たものですから、自然西洋人の方々との交際も親密になり、色々敎へられましたので、是れ丈はまことに仕合せだつたと存じて居ります。彼地へ參ります時には子供は四人おりましたのを、一番上は女でしたから、女は大きくなつても何も女學校卒業というやうな肩書を有たなければならぬことはない、何處に居てもたゞ心掛けて勉强さへすればよいと思ひましたから、之れは向ふへ連れてまゐり、次の二人は男の子でどうしても、順序よく學校をふませなければならなかつたものですから當地に留め置き、末は幼少でしたから向ふへ連れて參りました。そして彼地でも一人子供が生れましたから、彼地には都合三人居たのでございますが、此のやうに子供がありましたから、一寸何方かへ訪問致しますと、子供の事で又何彼とお話が出ますし、其の間に先樣のお子さん方とも懇意になりして、普通ならば應接室で歸るところを、ついお子さん方の室へ遊びに上れば、又奥樣のお室へも伺ふことになりまして、其の爲に色々利益を受けました。

△重寶な臺所の設備

家の内は何事も羨ましい程整つて居ります。お子達の室に致しましても、私の親しく伺つた奥さん方のお家では、大抵一人に一室づゝ當てがつてありました。

神田一ツ橋



そして男の子の室ならば簞笥なり玩具なり其他机の上の様子から室全體の裝飾を總て男らしく取りなしてありますし、又女の子の室ならば愛らしいお雛様を飾るとか、玩具も一々優美なものを選び、鏡臺なども備へて一體に女らしく飾りつけてございます。子供の爲には誠によろしからうと存じますから、こちらへ歸りましてからも、何うかさういふやうに致したいと思ふて居ますが、何分私共の只今のやうな荒屋では何うすることもできません。又臺所などでも餘程よく出來て居ります。仕事は皆な立つた儘で出來るやうになつて居て、そこへ必ず水の出る栓と湯の出る栓とを引いてありますから、非常に重寶でございます。何時でも湯の出る栓を設けるのはちよつと困難でございませうが、せめて立つた儘で仕事をするやうに致したならば餘程便利だらうと思ひます。坐つたり立つたりするよりは仕事は倍も捗取るのでございます。そして風呂棚などは、深さが大抵こちらの半分位ですから、何を入れましても、どちや／＼しないできちんと能く片附きます。

家の間取りの工合などでも夫々一體に工夫を凝らしてございます。

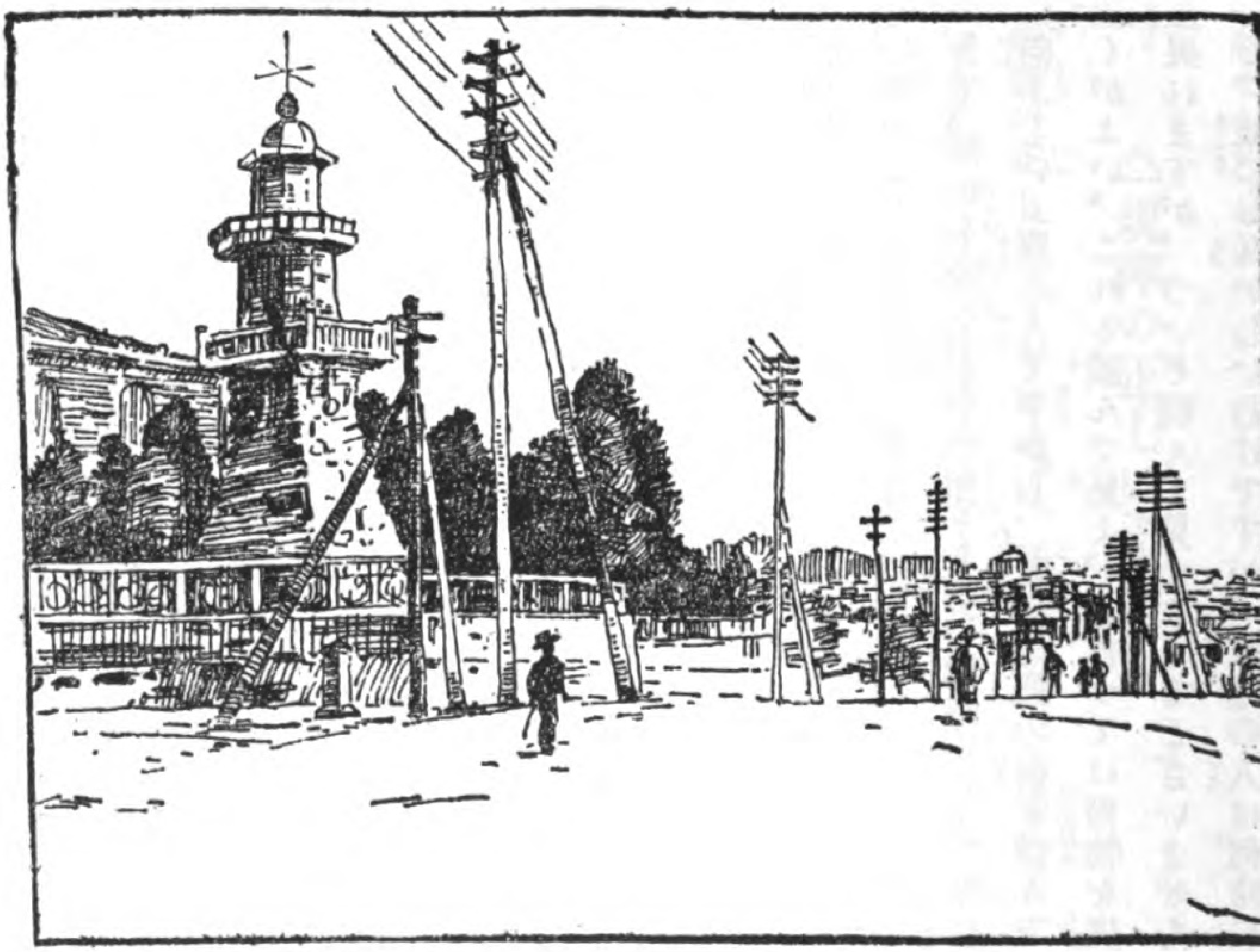
△日用品を調へる處

家の内部が其のやうであります上に、一寸外へ出ましても誠に便利でございます。餘程の上流の方々でない以上は、日用の食料品などは、奥様方が皆な自身で買ひ出しに出掛けられるのですが、それを賣る市場は何處に住つても必ず近い所にあつて、其處へ參りますと、魚類を賣る所もあれば、野菜を商ふ所もあり、其の隣りには肉類を賣り、次には砂糖屋、菓子屋などと總てが其處に集まつて居て、何でも調へることができます。私の父（江原素六氏）は餘程西洋風が好きでしたから、よく西洋々々と聞かされて居りましたが、成程都合がよいと思ひました。

△樂み多き交際ぶり

奥様方の交際は、溢れるやうな表情があつて、いか

九段坂上



にも愉快さうでございます。何か物を出せば喜んで召し上りますし、家の出入にも、道を行くにも、どうぞお先へと一言申せば餘り遠慮もなさらないで其の中の年長の人が先へ出るといふ風で、少しも手數がかゝりませんし、そして人づきあひのお上手なことは、私共にはとても彼んな眞似はできません。私の宅でも時々あちらの方をお招き申しましたが、非常に嬉れしさうにして歸へられるので、後で今日の皆さんの御様子は眞とうか知ら、おじようずかしらと疑ふこともありましたが、慣れて見て、皆なそれが心から出てゐることが分りました。喜びを包まないで表はしますから、全く樂しく交際ができます。

△交際法の習練

こんなに交際の上手なのは矢張り習練が積んでゐるからでございませう。これは子供の間からも却々注意を致します。彼地ではクリスマスとか誕生日とか子供の爲に色々の祝日がございます。其の時には親しい人や子供の友達などを招いていろ／＼饗應を致すのですが、其の際にも、親達は交際に慣らす爲に、クリスマスならば其の贈物を選んでやる位のもので、其他の趣向とか接待應接などは皆な子供を主にして致させます。まだ小さいお嬢さんが、まあよく入來つしやいました、どうぞ此方へ、などゝ言つて、上手に人を接待すところは、ほんとに可愛ゆうございます。此時分から人あしらひを習はせる程すでから、大きくなつたら尙更注意を致させます。

△忙はしい間にも讀書

感心なのは彼地の婦人は何時になつても讀書を怠らない事でございませう。私などは、父は非常に讀書が好きで、側から何と申しましても朝の四時から必ず机に向ふといふ風の人ですから、私にも此の書を讀んで置くがよい、これも讀んで見よ、と言つては書物を度度呉れますが、ついぞ讀んで見たこともございませんので、誠にお恥かしいわけですが、彼地の人は何時に

なつても讀書を廢しません。それゆえ皆様は修養が深くつて、お話をなさつても面白く、それで極くおとなしうございます。家事向の事は構はないで書を讀むのかと申せば、決してさうではありません。皆な良人の世話から、臺所の事、其他子供達の世話迄も自身でし乍ら暇を作つてなさるのでございます。

△讀書の餘裕のあるわけ

子供があつて、臺所の仕事も致せば、なか〳〵そんな暇はなさゝうですが、彼地の生活の有様を見ますと、それが又できるのでございます。平常一週間を色々に割り當てゝ、月曜日には洗濯をいたし、土曜日はお掃除をいたし、何曜日と何曜日には召使に暇を遣るといふやうにしありますから、召使が其のお仕事にかゝるなり暇を取るなりしますと、忽ち臺所はお留守になつて、奥様は始終忙はしいのですが、それでも仕事に規律が立つて居りますから、何事も速かに運んで、勉强の餘暇は十分得られるのでございます。實に羨ましく思ひました。

△規律の正しい子供

規律の正しいことを申せば、子供などでも感心でございます。一寸集つた時の様子を見ましても、一擧一動に著しくそれが見えて居ります。クリスマスの時でも、誕生日に招かれても、それはおとなしいものでございます。私共でも、歸朝しましてから、子供の誕生日に二度ばかり外のお子様方をお招き申しましたので、是れからも催す積りで居りますが、どうかこれが追々よい結果を見ますやうにとそれのみ祈つて居ります。

賑ぎにし野邊の眞葛は吹過て
岡邊にかへる松風のこゑ　　翠沖

武藏野と荒にし庭の淋しきに
そけら聲して秋風の吹　　永好

住宅を清楚にする嗜み

佐治實然

第一に不用の物を買つて來ないと云ふ事が根本義です、良く世間では「差當り用はないけれど餘り廉いから買うて來た」と云ふ人がありますが、是が實に間違つた話である、幾程安いからとて用の無い物は何所までも用がない譯だから、折角買つて來た品でも室の隅になど抛つて置く、すると夫は邪魔である許りでなく室が狹陰ましく見えて一入むさくるしい感じが起る、又隅に押込んでなど置く爲め手が屆かないから自然塵埃も溜り勝ちで、其塵埃は即ち蚤の巣ともなれば、病氣の問屋ともなるのです。

　箪笥なども入用の品には相違ないが、若し出來るならば座敷へ置かないで押入れに切組む樣にしたいものです、併し普通の借家などでは中々爾も行かないから座敷に置くのですが、其時には箪笥と壁との間には手や禾配の十分に入る位離して置きたい、左も無いと其間には塵も溜れば、又鼠なども其陰を利用して壁を喰ひ破つて緣下と座敷との通路を附ける樣になります、又洋服なども幾通りかあるのを洋服箪笥に藏ふとすれば、餘分の貨を費ふ上に大變な場所を塞げる事になるが、是を若し婦人の氣轉で、洋服屋の最初持つて來るボール箱に入れて、外に印でもして押入れの中に積んで置けば、大した場所も入らぬ上に、必要の時にも下から引繰返して騷がなくも直ぐに解ると云ふ便利も有ります。

　次は臺所ですが、此所は何れから考へても一家内の生命を支配する所と云つて好い位であるのに、中以下の家庭は勿論、可成の華族とか富豪の邸宅へ行つても玄關や客室が種々飾り附けられてあり掃除も十分行き屆いて居るに反し、臺所は唯用が足るれば好いと許りに打捨てられてあるのが普通の樣ですが、是だからチブスも出來れば、水道から蟲も出る事と思ふ、夫故に心掛の好い主婦は、西洋人と同じ樣に、臺所を下婢任せにせずに、常に自身見舞つて、戸棚の中には蜘蛛の



豊後の高濱

巣など張らせて置かぬ様、腐敗した食物など入れて置かぬ様、又水の捌け口が支へて居らぬかとか、魚の頭など捨てゝは置きはせぬかとか、極めて細かい所まで注意するのが肝要です。

經濟上と衛生上との整理は付いても、未だ何か物足らないのは室内の趣味です、此室内の飾り付けは夫々分に應じて清楚を旨としたいもので、無暗に金額の物品を並べて喜ぶ洋人の室や、門の鯱を光らして置くなど云ふ俗惡な遣方は、見る丈けでも暑苦しいものです私共は狹くとも庭があり、植込もありますから、別に座敷の方へは旋風器も盆石も何も無くても涼しく感じますが、是が地面に餘裕のない下町の高燥とか、小さな借家にでも住むのであつたら、床には涼しい花も活けやうし、軒の風鈴も必要であらうし、殊に苔の付いた盆石などに水を注ぐ事を怠らぬならば、夫を見る丈けでも深山の澤などを思ひ浮ばしむるもので、是等は孰れも主婦の嗜みにあるのです。

秋の趣味料理

近藤田鶴子

一新鮭の柔焼
二長芋のきんとん
三新蕎麦かき椀盛

一、まづ鮭をよく洗ひ三枚に下ろし、よき程に切り、テンピにバタを引きたる上に一切れづゝならべ、上下より蒸焼にする中途、二度許りバタを上に塗るべし。出来上りたらば、鮭を皿に取り、鮭の汁にメリケン粉少量を入れて薄きとろとろになし、塩胡椒にて味を附け、芹にても青みを加へ、上より注ぎて出す。

二、長芋をよく洗ひ、皮を去り、四五分許りの賽の目に切り、塩水にて煮るべし。まてよく煮へたれば笊などに移してさましおき、別に鍋に切りたる時前後左右より切端の出たるを（少ない様なれば見斗らい補ふべし）湯煮し、和らかになりたる時湯を捨てゝ擂鉢にてするべし。食塩砂糖にて味をつけ、裏ごしにかけ、是にて前の笊に上げおきたる才の目芋をあゑるべし。猶擂りたる芋にひき茶など加へれば殊に風流にて上品となる。

三、蕎麦粉を茶碗に一杯に、水三杯の割にてそろそろかきまぜながら、熱湯たぎる鍋の中に入れ、一ト煮へ立ちたれば火より下ろしおく。別に鰹節汁を極めて塩梅よくこしらへたるを椀に盛り入れ、其中に前のそばがきを箸にてよき程に千切りて落し入れ、上より葱又は浅草海苔を添へて出す。但しそばがきに玉子など加ふるもあれど、かくしては折角の新蕎麦の香味をさまたげるもの故却てなき方よかるべし。

けふは旦那様の御誕生日、平素よりは幾分か御馳走もしなければならないし、お赤飯も炊かればならぬが、お晝は母上と二人切りでつまらぬから晩にお祝ひとしやう。何かよいお魚はないかしらと自分見斗らいに行く。別に氣に入ったものもないが…鯔は出世魚だからといふ處を片身に、かます三尾程買っておく。そこで献立は、

一小豆飯
二ぼらのおさしみからし醤油
三くづしビステッキ付合せ粉吹にやが芋
四吸物結び魚、松茸
五じやがいもなます
六栗とち

一、小豆三合を水たつぷりにてよく煮置き、一升の米を小豆の汁にて仕立てゝ炊く。火を引く前に塩を入れて味をつける。

二。鯔の皮を引き、手ぎわよくおさしみに作り付合は、かれて塩漬となし置きたる貫菊を塩出ししゝて添ゆ。

三、肉屋から挽き肉として取れば、筋も堅い肉も共に挽きまぜるから、少しめんどうでも宅でたゝく。味噌の様になりし時少量のメリケン粉と胡椒、食鹽を入れてよくたゝきまぜ、又玉子

（肉百目なれば玉子小二個位）のほぐしたるをよくよくたゝきまぜて後、長方形に三分計りの厚さに肉の格好をならし、ラードにて揚げる。

四、かますを三枚に下ろし、腹部の骨た抜き去り、並びて薄鹽を振り置く。別に昆布煮汁を取る。前のかますをサツト水にて洗ひ、よく水氣をふき取り、又松茸もよく洗ひ、鹽水に放ち置きたるを水より上げ、再び魚と共に昆布だしにて煮るべし。

五、じやがいもなますは、先づ馬鈴薯の皮を去り、千六本に切り、笊にバラ／＼と擴げ置き、上より熱湯を一面に灌ぐ。全部色變りたれば風とほしよき處にて冷ますべし。別に玉子を薄く燒き、是も千切りとなし前の千六本のじやがいもと共に、三杯酢にまぜて（じやが芋の多さと玉子の多さとは二と一位の割合たるべし）皿に盛る。

六、栗三合計りの皮を去り、水に放ち、アクを抜き、おろし金にて下す。是に玉子三個（大小にて加減すべし）計りほぐし加へ、更に此容積の三倍程の煮出しを入れて味淋醤油にて味なつ

け、よく／＼かき交ぜ、松茸百合根、みつば（海老などあれば猶によし）等いづれも下煮したるものを入れたる茶わんにたつぷりと注ぎ入れて蒸籠ふかし器にて蒸す。吸口には柚子など用ゆ。蒸籠ふかし器の造り方は石油の空罐の上部を切り除き、よく／＼油氣を去り。別に罐の中に入る丈けの角板に數本の穴を穿ち（ブリキ板にてもよし）四ツ角へ四五寸の足を付けたるものを作り、是を罐の中に入れ棚となす。水は此棚の高さ丈け入れ、棚の上に茶わんにてもおさつにても饅頭にても何にても乗せて、罐の上部にピツシリと蓋をなしこんろの上にじかに其罐を乗せて置けば驚く計り早く且つ具合よく蒸せるものなり。

旦那樣がお生れの時、非常にお泣きになるので此度女の児だとお思ひになつたといふ笑ひ話など母上がなさるのでおもしろく御酒もいつもより餘計進んだ。お嬢さんも今日のビステツキは小刀や三ツ叉を使はんでもよいし、雪駄の皮を噛む樣でないから大層おいしかつたと、ほめられた。小刀や三ツ叉とはひどいですねと旦那樣がお笑ひになれば、なあに牛蒡は無理にあちらの小六ヶしい名をいはんでも、此方が早分りがするよと仰つしやるので皆々大笑ひ。お目出度く今日のお祝ひも濟んだ。

千草に置そう露踏わけて○○樣お見送りに行く道もとゞめぬ朝空を敏活に飛び交う赤蜻蛉の群れ打ち見つゝ、如何に心地よき秋の朝來よ。散歩唱歌の秋霞晴れて……と囀り歸しつゝ急ぎ足にお城裏の坂を上る。みどり色濃き若松にからまる蔦は黄色く楓は紅ひに、其色彩の美しさ如何に精巧なる友禪とても、龍田姫のすさびになど及ぶべきやは。右手を見下ろせば見渡す限りの田の面には黄金の波ゆら／＼と、早稲にやあらん既に刈り干したのもある。ほんにもう新米の穫れる頃だ。國に居ればうづみの時節だ：：そうだ新米でなくとも丁度今日は松茸の貰つたのがある、海老を工面して今晩はお國料理をこしらへやう。道すがらも晩餐の獻立案に耽つて略ぼ組んでおく。

一　燒鶏付合せ針牛蒡

二林檎のコンポート

三うづみ

一、鶏の肉（可成脂肪の少なき白身がよし）を百目程味淋醤油に五時間許り浸し置きたるものを取出し、網にて焼く（テンピにて蒸焼とすれば猶更よし）。後肉の纖維をよく調べて纖維の反對に、小口より薄く刺身の如く切り、上に胡椒を振りかけソースを添へて膳に上す。牛蒡はよくよく皮を去り、洗ひて暫時水に浸し置きてアクを拔く。後取出し一寸程の丈けに針の如く、細く刻みたるものを胡麻油にていため、醤油味淋にて味をつけ、鶏肉の並合せとして出す。

二、林檎の可成實の堅き（蔕の下と稱する種類のもの尤も可なり）ものを擇み、水一合許りに葡萄酒五勺許りと砂糖多量とを混じたるものにて煮る（半分に割りてしんを拔くもよしとす）。煮上りたらばくづれぬ樣に一つづゝ匙にてすくひ取り、別に其液汁をよく煮詰めて上よりかけて出す。

三、うづみとは何から出た名稱だか知らない。妾の國（備後）以外に一向こしらへない樣だが、秋から初冬にかけては實に適した料理で、しかも手數はかゝらないし、下戸にも上戸にも八方向きだ。まづ材料は米、豆腐、松茸、里芋、海老と是丈けのものを用ふ。右五種にて作りしすまし汁を椀に盛り、上に炊立ての御飯（新米なれば得もいはれぬ香氣ありて殊によし）を入れて蓋をなして出すなり。順序はまづお豆腐を才の目に切り、里芋を薄く小口切りになし、松茸も八分許りの長さに薄く切り鹽水に放ちおく。次におねぎを五分許りに切る。海老は皮と尾頭を去り矢張り少さく切る。すべて五目すしの具の如く皆大概平等に切りて、別に鰹魚の煮汁を鍋にたつぷりこしらへ、たぎりたる所へ海老と松茸と、里芋を入れ、一ト煮へしたらば豆腐と葱を入れ、お醤油を落し、又一ト煮へしたる時あん梅を見て軽くかき交ぜて火より下ろす。おつゆのさめぬ内椀に盛り、其上に温かき御飯をよそひ、蓋をなして出す。食せんとて蓋を取れば、新米ならずとも松茸、海老などの香味鼻をつき、大に食慾を増さしむるものなり。

お母さんはうづみを食べた昔を思ひ出し、昔は自家の新米が穫れると必らずうづみ一式で互に親戚を招き交はしたものだが、當節は中々そんな手間で打とけた事は出來ないと仰つしやる。成程昔の人は質素であつたといふから、イザといふ場合の外日常の家庭料理など手の懸るものはこしらへなかつたらうし、晩餐などゆるゆる食事に時間を費すといふ事もしなかつたそうだから、自然斯る時機を利用しては一家親族團欒したものであらう。どうしても團欒慰安の中心はお料理だ。益々研究したいものだ。

◎買物は成るべく現金にするを良しとす

◎利益を算するよりも實用に深く注意せよ

◎貯金は小なりとも月々怠らず手許に金錢を置くは得策に非ず

◎貯金とは不用の金を預くるものに非ず不自由を忍びて爲さざれば得ず

◎多くの仕事に手を着くべからず事業は凡て一事より爲さざれば遂げず



保津川の勝景

附三尾の紅葉

日根壽子

嚴冬中さへ霜柱など見る事もなき當地すら、きのふけふ俄に冷氣相まし候を、ほこりと風の名物と呼ばるる澁谷の御すまゐ、皆々樣御障りも入らせられず候や御分娩の其後は、赤樣日増に御成長、旦那樣の御よろこびさぞかしと御察し申上候、昨年の今頃はお隣同志の御心易さ、明暮庭の飛石づたひいまだ夜のものさへ御片付なきお座敷を、驚かせまゐらせ候ことも度々に候ひしを、今はつばさなき身の只御音信をのみ何よりたのしみまち暮らし居り候、お互樣に公の命によりて東に西にさすらふなる夫をもち候身は、いつ何地に轉任仰付らるゝや、はかられず候へば、別離あながち悲しむにも足らず候へど、何となく都の空なつかしく存じ候、併し轉任もかく度々と相成候ては、荷作りはかり上達いたし、次第に横着になり候爲か、今は只任地に近き名所舊蹟を心ゆくまでさぐりて、老後の思出の種にせんなどゝ、氣樂なことのみ考へ居り候。

されば私共は猛虎うそぶく韓國も、バナヽみのれる臺灣も、内地同樣の心地いたし、いづこも住めば都とやら、至る處滿足して愉快に生活なし居る次第に御座候。

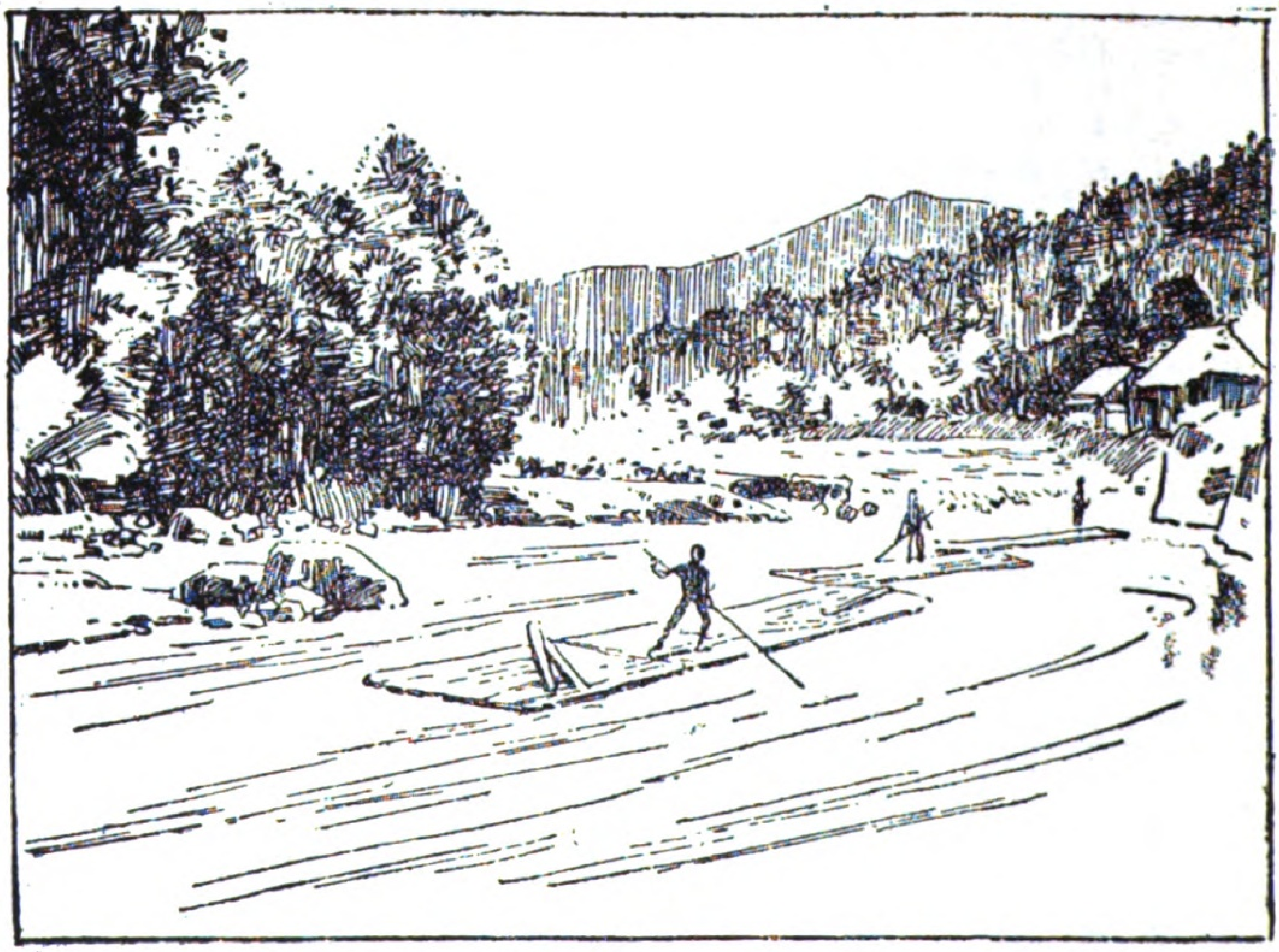
當地にまゐり候後は只管近畿の名所を尋ねんと、休日には京都や奈良、または宇治あたりへ出掛け、四季をり／＼の花のながめも見あき候、十一月の十四日は丁度また日曜日に候ひし故、名にしほふ保津川の奇勝を下りて、三尾の紅葉をさぐらばやと、前日より準備にとりかゝり申候、折しも過ぎし月、京都にて葬式

の際折諂をくばり候習慣とかや、御苦勞樣にも頂戴の光榮をになひ候人々、百何十人揃ひも揃ふて虎病の災難をうけ候よし。かまぼこにてとかまた玉子燒だとか申居候へど、とに角あまりいやしんぼうはせぬことに御座候、虎を市に放つてふたとへ其まゝ、洛西桂村はそが爲に寂びに寂びて道行く人もいと稀にあはれ趣深き桂離宮の秋をさぐらん人もなく、あたら嵐山の秋色も今年ばかりは見る人もなくて木がらしにむなしくくちなんかと思はれ候、されど幸に其筋の注意周到なりしと、氣候の冷氣とによりて患者も全く片づき各戸消毒の上漸う週日前無病地と決定致され候よし、さはれいまだ日數もあまりたゝぬ事とて發病地近くに晝食をとるは心地惡しと申候により近來になき手製の辨當持參することに致し候實に上方なればこそ辨當をとり候ても下女は心よく作りくれ候なれ御地などにて遊山の辨當など申出候はゞ、まあけちな御主人樣よと忽ちあいそをつかされ候ならん、お酒もビール瓶にては與やうすしと夫が多年長持の底深くひめ置き候へうたん取出で赤き絹ひも腰にぶらさげ候有樣、かの武骨なる日頃の人とも思はれざるまでに見まがひ候も、まゆねを境として黑白を別ち居り候顔にては、やはり爭はれぬもの、途中兵士の敬禮には一方ならず閉口いたし候。午前七時十三分發の汽車にて伏見驛をいで「京都につき候へば、かねて同行を約し置き候弟夫婦は、既に停車場にまたれ居り、八時三十八分といふに丹波龜岡に向て發車いたし候。

小春日和のいと暖かに、空清くはれ渡りたる日曜日とて、京都市の小學生徒遠足なすてふ二組と同車し大宮丹波口とすぎゆく每に、乘客がます〳〵加はるばかり、二條驛にては殆ど立錐の餘地なきまでに込み合ひ申候、されど次の花園驛にては半下車し、きやはんわらぢの姿甲斐〳〵しく、高雄に向て探楓に出掛け候人、列車より見れば、恰も蟻の歩むが如く列をなし居り候、嵯峨驛にては九分まではき出し候が、之は愛宕山にのぼるの人と、嵐山の狀をさぐらんとする人々の、皆思ひ思ひにわりごを手にし、お腰には主人とお揃ひのも

重たげにゆら〳〵いたし居り候、こゝを過ぎてよりはかの名高き温泉場のほとりより、トンネルに差かゝり出づれば、忽ち保津川の急流眼下に横はりて、其景色例へがたなく、清らかに御座候。車上より見候へば僅か半間にもたらぬ巾の流れまづ如何なる大きさの舟にのるにやといさゝか心細き感もいたし候内に、列車は次第に進み、老坂の下を都合八つのトンネルをこゆれば、かつて音にのみきゝし丹波路に私共は運ばれ居りて候。

此間のけしき、丁度箱根



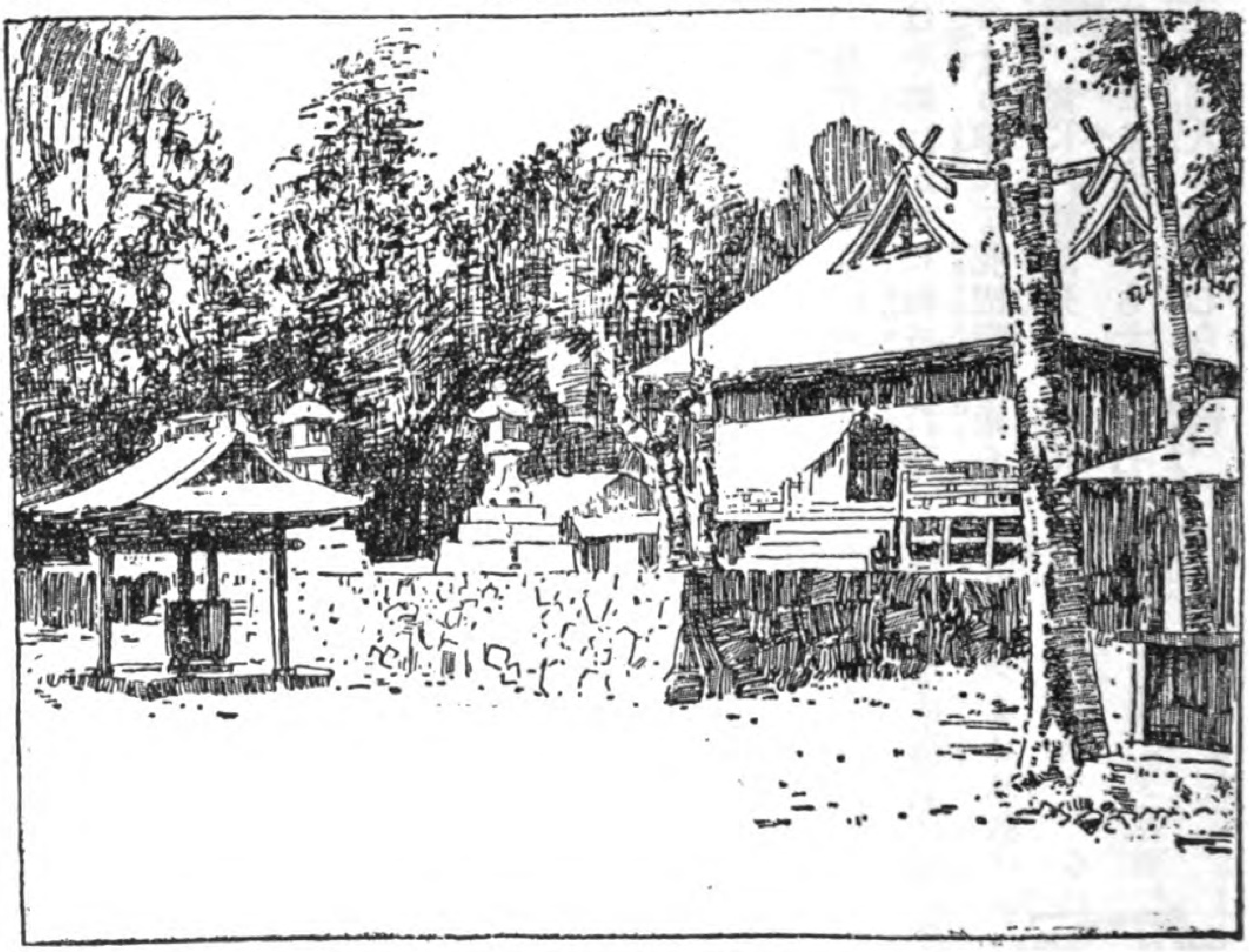
の線路によく似かよひ居らずやと為し候が如何にや、午前十一時と申すに亀岡驛に着、下車せし人は八分まで舟遊びにて候ひき、停車場より約三丁にて乗船場有之、そこにては誰も〳〵皆ゑはがきを買求め、紀念すたんぷを押して親しき友に送り居り申候、かの金岐の瀬のゑはがき御落手被下候ならんかゝる田舎の淋しき處に候へど、さすが外國人の多くすまゐ候土地柄とてスタンプもローマ字にて、日本保津の濱とは中々振つたものに候はずや、舟と申すは十人ばかりものられ候、比較的大きなるものにて、私共四人

丈のり、舟夫四名にてかぢをとりつゝこぎいでいで申候、水淸く流れゆるやかに、天高くすみ渡りていと心地よく候。

大曲りと申す處にて川はぐるりと曲り、其左方に祠殿あり、こゝは小赤壁と申とか、保津の神社の下に至れば流れ尤も急に、奇岩怪石幾十となく連りて、瀧の如くに直下いたし居候、其間を熟練なる舟夫は一本の竹棹もて上手に切りぬけ候、見渡せば兩岸は高からず低からぬ程よき山に、松のみどり靑々と生ひ茂りて其ひまに點々楓の色づける様、又海の底かと思はるゝばかりの大きなる岩石の、幾つともなく羅列せし其絕景、真に例へがたなく候。手鞠岩、烏帽子岩。くゞりが瀨。ちあみの瀨。鏡岩。八疊岩等を過ぐれば金岐の瀨と申すが見え候、此瀨と申す處は皆瀧の如くに、水は直下いたし居候なれど、中にも此金岐の瀨は尤も舟人の困難を感ずる處とか、右にも左にも突出せる岩石は幾十ともしれずして、流るゝ水は岩に當り、淵におちて飛瀑をなし、舟は急轉直下して其瞬時底板も爲にわれなんばかり、飛沫は飛んで乘客の衣をうるほし舟夫の一人は布を以て舟中の水をぬぐふ。あゝ何たる壯快何たる絕景に候ぞや、恰も仙境に遊ぶ心地いたし候。

小鮎が瀧を過ぎ大坪といふ處に至れば、また右岸の絕壁葛羅纏綿して直に水頭より聳へ、水尤も深く松樹影を落し碧緑細波に動き、舟も人も旣に畵中のものとなりしが如く、かのもろこしの赤壁もかくやとばかり思はれ申候、それより再び激流となり、高瀨、獅子ヶ口、二岐瀨、曲り淵など十數ヶ所の急瀨、深淵を過ぎ候へば、朝日の瀨と申す處にいで候、右岸かもめ谷より落つる細き流れは山城丹波の國境に候とか、鍋尻の瀨、壁石、練戸の瀨、鵜飼、板瀨等をすぐれば舟は次第に急下して兩岸の秋色恰も走馬燈の如く、出合石門といふ處にては淸瀧川の細流こゝに合して、かの有名なる大堰川と相成申候、御承知の嵐山はくど〳〵しうは申上ず、溫泉場を右に見て渡月橋畔に着舟いたし候、此水上四里、二時間を費し候が、實に川の少

なき御地などにては想像も六ケしきまでに壯快を覺え候。殊に兩岸岩石の間には洪水にさらはれたる枝なきつゝじたまになりて出來居候が、花の頃には誠に見事に候よし、舟夫の物がたりに御座候。今朝一番列車にて龜岡にまゐり川を下り候、舟は途中にて出合ひ申候。舟夫四名の内三名は麻繩を肩にかけて兩岸をたどり、一名丈舟中にかぢをとりて重き舟を流水にさかのぼりて引上居り候、げにやたゆまづうつ雨の水、岩をもほるゝためしありとか、日毎にかく引上候麻繩にて



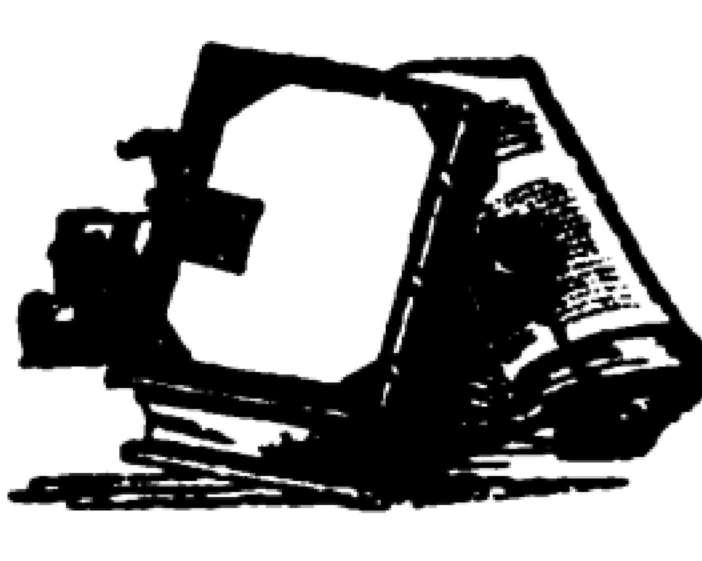
さしもに堅き岩石も、頂上は悉くなめらかにすれ居り、なほ瀬や淵の岩をさをにてつつき候處は、皆穴があき居り申候。

櫻に名高き嵐山はまた紅葉の名所にて候、うすくこく染出せる楓の萬山、紅を呈すとまでにはゆかず候も、すて難き古京の秋色、實に美はしく御座候。

三軒家と申す茶店にいこひてわりごを開き、主人などへうたんの酒に柄にもなく顏に紅葉をちらしめてうらゝかに吹く風も心地よく、先頃しつらはれたる新らしき渡月橋上にたゝずみ候へば、數日

數十日の勞れも一時に忘れはつる心地いたし候、また來ん秋にはいづ地へ轉任の身となるやもしれねばと、之より三尾の紅葉をさぐるべく、時刻は少しおそきかとも存じ候へど、兎に角反對の方向にむかひてすゝみ申候、釋迦堂山門を過ぎ、やゝけはしき道をこゆれば、梅が畑八幡宮の前にいで、こゝを左して一筋道をたどれば、高雄の入口紅葉屋の前につき申候、直に山峽を下り、橋のたもとより仰ぎ見候へば、空をも見せぬまでに重なりあひて、染なせし幾多の楓は細く清き流れに影をやどして、其さびたる秋色げにや古より名にしほふも理にこそと思はれ申候。

東北二三丁にして槇尾山、更に四五丁にて栂尾山、此三ヶ所にて三尾と申せば、是非にと申され候へども秋の日のいと短かくて空ははや暮れがてに相成、汽車の時間も心にかゝれば、こゝより車にて花園驛に走らせ、六時何分發にて京都驛に、更に八時幾分といふに伏見に歸り申候 京都に永住なせる人さへも十中の七八迄はあまりに出掛ず却てとつ國人に多くしられ候、保津の奇勝や、京都の奧樣達清水寺のふもと新高雄とか稱せる小さき公園に滿足なし給ひつゝある間に、旅より入りし田舍者所謂お上りさんの私共は、古より名高き眞の高雄をさぐり候ことゝて、大ゐばり致し居り候、御一笑被遊度候。あまりにたのしく心地よく感じ候まゝ、此絶景をまだ見ぬ友に御しらせ申上んとまはらぬ筆にかきつらね申候、あゝもしも私にかの秋雨樣や内藤千代子樣のような御文才御達筆の十分一だに有之候はゞこの豐けき詩材にとめる美はしき景色を見候なれば如何ばかりか面白くけふの紀行をものされ候半ものと心に思ふ萬一もあらはし得ざる口惜しさよあはれよく／＼言外のけしきを御想像の上御推讀被遊度候。なほ御寸暇の節にはなつかしき都の御有樣御漏らしたまはり度願上候旦那樣へもよろしく。



親の有難味を感じて
幸福に嫁ぐ人

澤　子

一

「たつた二人の兄妹だもの美代は何處へもやらないがい〻。」といつもお祖母樣は仰しやる。私これまでまだ結婚といふ事に就ては何の考へも持たなかつた。それでも私が何處へも嫁かないとすりや、つまり養子だわお〻いやだ！！　昔から養子の價値は大抵きまつてるわ。つまらない人に來てもらつて一生悲しく送るよりもどんな處でも嫁つた方がどれほどい〻か知れやしないといつも思つた。學校へ行つた時分お友達が數人集まつてはよく理想とか結婚問題に就て語りあつた。私はその席に仲間入はして居ても嘗て何事も話したことはなかつた。私がいつも默つて居るので秘すといつて隨分責められた。けれども私には實際何の考へもなかつた。別にこんなことを考へる必要も認めなかつたし又早いと思つて居た。お友達も遂々「何に子供でせう！！」と笑はれて、それから「みよちやん」で通つた。私には笑ふお友達が却つておかしい位であつた。

今日は日曜で父樣は朝から御在宅。お休みといつても早くから引つきりなしの御客樣だもの。午後から美術展覽會へ伴れていつて戴くお約束だのに。氣の知れないお客樣と思ひながら今朝届いた女學世界を見て居たらきよが來て「お父樣が御召し遊ばします」と云ふ。すぐにいつものお部屋へ行かうとしたら「あの應接室で御座います」と注意されて長い廊下を急いで行く、お客樣は誰方かしら、一寸着換へして來ればよかつたと思ひながら室の前まで來たら中からお話聲が手に取るやう。まあいや。お客樣とばやり思つてたらお祖母樣の靜かなお聲と母樣の細いお聲も交つて居るんだもの。

「健一は西洋へ行つてるし今あれを離したら淋しくつて仕方がない。それにたつた一人の娘だから家へおく

方がいゝぢやないか。

　またお祖母樣例の御口癖だわ。「おつかさんはいつもそう仰しやるけれど家へおいて養子するのですがさあそれがいゝ人が來て吳れゝばいゝけれどね―　それよりもやつた方があれの幸福ぢやありませんか。子供らしいけれどもう十八だし、こんな都合のいゝ處はありませんよ」つて父樣のお聲、戶の處に暫らく立つて聞いたらこんなこと云つていらつしやる。あゝこれで分つた？　この節父樣や母樣が何だか相談したり人が來たり行つたりしていらつしやる。この爲めだらうと思ひきつてあけて中へ這入つたら父樣も母樣も何時になく眞面目な顏してゐらつしやる。

二

　昨日あんなことを云ひ渡されたので何だか變な氣がして昨夜も床へ入つてから長い間眠れなかつた。別に嬉しくも悲しくもそんな感想は起らない。只困つた事だと思ふ。斷わりたいんだわ。けれど父樣は隨分もう九分まできめてしまつて私は否とも應とも答へる餘地のないやうにしてから相談なさるんだもの。相談といふよりも體のいゝ壓制結婚だわ。つまり宣言されたも同樣。もし私がどうしてもいやと云つて承知しなかつたらどんなお顏なさるだらう。幸か不幸か、私にはまだ何の考へもなかつた。御兩親がたの御眼鏡に叶つた人ならと萬事親委せだから。私は兎に角あの御祖母樣がよく承知遊ばしたこと。もう明日か明後日かに居なくなるやうに幾度も「お前が居なくなつたらおばあさまも樂しみがなくなるし淋しいよ」つてお云ひなさる母樣は母樣で「これまでにして置いて他家へあげてしまふのはほんとうに惜しい氣がしてねえ」と淋しさうなお顏で私を御覽なさる　私どうしていゝかわからないわ。私だつて心細いわ。今更こんなこと云つていらつしやるなら何故早く斷るかどうかなさらなかつたのかしら。

三

　話もいよ〳〵きまつた。私は相變らず色々お稽古にいそがしい。時にはこんなことすつかり忘れてしまふ

位。まだ未來の事の考へは起らない。自分ながらどうしてこんなに呑氣かとあきれる。私が嫁くといふ方は兄様と同級生で二三度家へいらつした事があるが親しくお話したことはない。兄様は大學校出てすぐに英國へいらしたしあの方は今外務省へ出ていらつしやる。靜子様の理想の外交官だから靜子様ならどんなにお喜びなさるだらう。此の間水野の叔父様の所の園遊會の時に逢つたら兄様のことをお聞きになつたのはあの方であつた。こんな話になるとは夢にも思はなかつた。留學中の兄様から御手紙が來た。親類や知人からも御祝物が來る。何時のまに知らせていらつしやるのか。御手紙はしの早いこと。お祖母様と母様の騒ぎやうつたらない。まるで無中な女中や車夫まで忙がしさう



肝腎の本人が一ばん落ちついて居る。

毎日呉服やとか

染物とか調度類とか一々見るのが面倒でいやだわ。どうでもいゝわ。私そんなに澤山欲しいとは別に思ひません。人が見たら。あすこのうちはお祖母様、母様が御嫁入りなさるのかしらとおかしく思ふでせうよ。私は買つて下すつたもの等を見ると嬉しいよりも有様いよりも勿體ないと思ふ。何もこんなに飾つても私の人格が上るのぢやありませんわ。又一時に着られやしないし。朝も草花の手入して居たらお祖様母は、そんな暇に自分の着物でも見立てゝおいでと仰しやる。今でさへ二人が大騒ぎしていらつしやるのに又私があれもほしい、これも買つて頂戴と云つたら二人とも氣が狂つてしまやしないかと心配する。今のうちにと思つてマガレツトに大きなリボン兄様が送つて下すつたのを結んでピヤノの先生の所へ行つたら見知らない奥様が「學校はどちら？」つてお聞きになる。「あの四月に卒りましたの」と云つたらマジ／＼と顏を見ながら「おや。女學校？」つて又お聞きなさる。「はあお茶の水のねえ」「おやまあ私まだお十六にもなつてちつしやるかしらと思ひましたの。何てお若いんでせう」つて。だからいやよ、人は十八となんか見てくれやしない。その瘦身の丈五尺と六分で學校でも大きい方だつたのに。自分では隨分大分ぶつてるつもりだのに。「これでももう四十日するとお嫁さんになりますよ」つて云ひたかつが、さすがに云はれなかつた。

四

おたつさんが來て私はお島田に結つてもらふ。また母様等お二人は鏡臺の横で見ていらつしやる。おたつさんは云ふ。「お村山様のお嬢様の御輿入の時も私が上りましたがまあ私あきれましたの。私がお嬢様の御ぐしあげて居ます間、奥様はね火鉢の前で新聞讀んでいらつしやつてちつとも出ていらつしやいませんですよ。ふだんは兎も角あの日には側からお世話遊ばすのが親で御座いますのにねえ。いくらまゝしい中でもあんまり冷たいぢや御座いませんか」まあ秋子さんはお可愛さうだこと。私なんか一人娘の末つ子といふので皆から甘やかされてまだそんな苦勞を知らないわ。誰でも

私の様なものと思つて居たら。やつぱし實の親や祖母はありがたいと急に感じた、ほんとうに私の爲めに夢中。叔母様が「そんなになすつたらみよちやんが嫁つたら二人とも寝つきますよ」つて御忠告なすつた位。人は私にあなたほど幸福な人はなくつてよと云つて下さる。やつぱり私は幸福にちがひはない。髪が出來上つた。二人とも滿足さうに前や後から眺めていらつしやる。生れて始めて島田が重くて仕方がない　皆よく似合ふ〳〵と云ふ。おたつさんと三人で又頭の飾りの相談が始まつた。



五

結納も納まつたし御祝の贈り物は奥座敷とその次とに一ぱいになつた。家の中は前よりも一層賑やかになつてまるで玩具箱を引つくり返したやう。目出度い目出度いの聲に送られ迎へられる私もさすがに呑氣で居られなくなつた。未來といふ事の考へも自から起つてくる。嬉しいよりも何よりも今までの樂しい呑

氣な娘時代の幸福から苦勞の多い妻時代に移らねばならないかと思ふと實に情ない氣がして今の景氣のいゝ時が何時までも續けたい。あゝこのまゝで世界が終りになればいゝとつく〴〵思ふのである。私のもので狹くなつた家を見ると親はありがたいと感じるその親にも別れねばならない。もう僅か十日しきや自分は娘で居られない。きまつてから嫁く日まで私は矛盾した生活をして居るのである。お祖母樣は「向ふへいつたらもう今迄のやうに樂ではない。いくら兄弟はなし御兩親もいゝ人と云つても男姑だから。せめて僅かの間だもの。美代の思ふ通りにしておやり。こんな子供を今から苦勞させるのは可哀さうだよ」つて仰しやる。父樣は父樣で「今から少しは手傳ひでもさしておかないといけない。可想がるのが却つてあれのためにならない。」つて。母樣は「美代はあんなに子供ですけれどもう大抵何でも出來るから心配することはありませんよ。私もよく云つてきかせましたから。まあ靜々可愛がつてやりませう」と、皆いろ〳〵な考へもつていらつしやる。私だつて何でも一通りのことは出來るつもりだわ。お勝手のことなんか女中を手傳ふから覺えたし。然し私お洗濯だけはそんなにしたことがないんだもの。父樣だつてあんなこと云ひながら勿體ない程大事にして下さる。私どうしたらいゝか分らなくなるあゝもう知らない人の中に交つて馴れるまでどんなに心細いだらう。父樣にも母樣にもお祖母樣にも毎日逢はれない。兄樣はあんな處へいつてらつしやるし、歸つていらつしやるまでこれから二年。私が居なくなつたら家はどれほど淋しいだらう。お祖母樣や母樣は女だけに一そう淋しがつて。どうなさるかしら？と思ふと堪へられない。吾れ知らず熱い涙があふれる。泣き顏見せては御心配をかけるからと思つて强ひて心强く忍ぶほど胸が苦しくなつて涙はかぎりなく頬をつたふ。



今様枕の草紙

磯千鳥

○騒がしきもの

若き女の四五人寄り合ひたる。鳥の寝ぎわ。提灯行列も騒がし。都の催物見むとて、田舎より人の來り泊りたる。鶏の卵生みたる程。」

殘暑はことに暑き心地するぞをかしき。土用過ぎたりと言へば、はや冷風も立ちらむと思ふに中々に暑く片びらと云ふ物着れどいかで。襟も肩先も打潤り、中にも帯の下は汗いとゞいでたるに、衣おし放つ様すれどいと心地あし。日頃汗多き女などの髪多くて、額顎などに汗母と云ふもの赤らかに出でたる。あるは鼻の上屢々布にて拭へば、只鼻赤くなりて手觸るゝだに痛うなりたるも可笑し。なべて暑き日は魚にもなりたき心地ぞする。日影ほのかにさす木蔭、さや〳〵と流るる流の澄み渡りたるに浮びたる小さき魚の三つ四つ二つ群をなして居るが、些の物音にもさと打散じ、復漸うに集り來るなどいみじう涼しげ也。それも東に育ちし女ならざりせば、雙肌、事もなげにぬぐべき物を等思ふ。されど上方の事はあり様に言はであらむ、今は其處に住む身にしあれば――

夏はあつけれど夕立の雨はいと清々しけれ。怪しげなる雲東にあらはれ出でたるに、「未だし」など云ひて物等縫ひてあるに今迄外にありし子等の、物引きかつぎて、雨だ、雨だと面白げに云ひつゝ歸り來るに、呀と驚きて、庭に降り、乾物、あはてふためき取り入るる時にとりて興あり。かゝる折、男は其手傳もせで緣

につゝ立ち。其樣をかしとひた笑ひに笑ふめり。

家に入りぬれば程もなく冷やけき風の一しきり重ねし紙などを打散らせたる。雨脚も漸くしげくなりぬれば少し離れし森は薄霞みて何處よりか香しき双の香のさと吹き込むも心地よき。逃げまどひたる家鴨などの籬の邊をけたゝましく聲立てゝゆくもをかし。

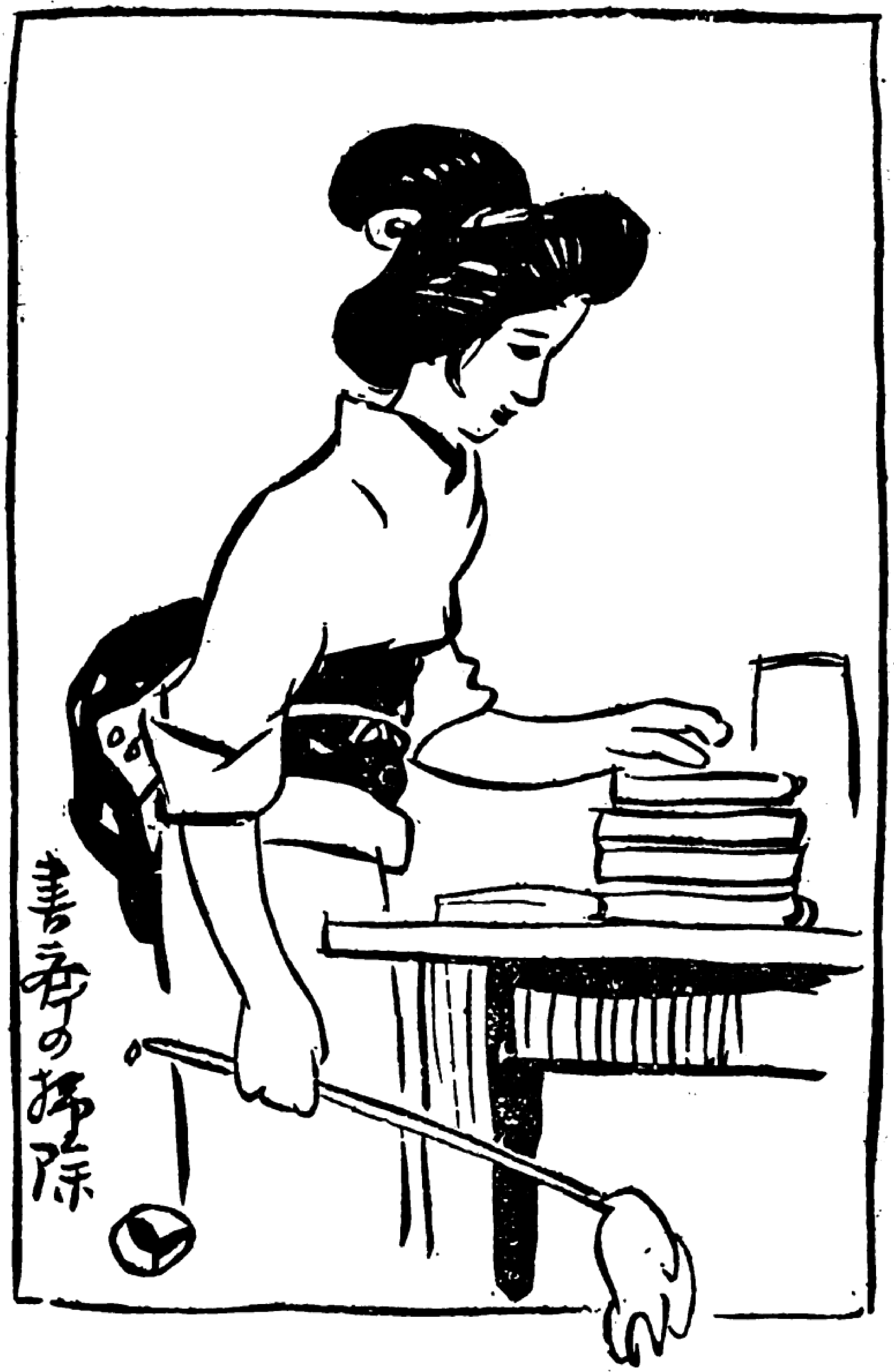
家に在りて、逢雨に道行く人の樣見るも興あり、そはいと罪深きわざなれど。大漢のにはかに子供の樣に走り出したる。若き男の雨と見て先帽子ぬぎ袖の下に隱したるはいかに尊き帽子なるらむ。されどおどろおどろしき杖持ち木綿の單衣着たるなどは濡るゝさへ厭はぬにや、知らぬ顏して雨の中を歩むに軒端に宿る女などの眼そばたでゝ見るに一入打廣ごりて行くも誇らか也。さては急の用あるにやあらむ軒傳ひに雨垂にうたれつゝ行くものゝ漸う知る人の許にかけつけて傘借る程もなく雨はや名殘なく晴れたるなど凄まじ。雨宿もする同志は身分の高きも低きも無うて親しげに言葉交したるが雨晴るれば見ず知らずの樣に別れたるは人の心も知られて淺まし。其ほか法華驅け込む阿彌陀堂もあるらむと逢雨の眺、何れもいみしう可笑し。

○一しは暑げなるもの

野道の草の埃にて白うなりたる。夏の鍛冶。裏ある風呂敷、石積みたる車。牛の顏も暑げなり、牛に似たる人の顏も暑げ也。馬の顏は清々しけれど馬の似顏もたるゝは清々しう見えず中々おどろ〳〵しうこそ見ゆれ、細帯にて子負ひたる女のゆすり上げ〳〵あへぎ歩きたる。

夏の說敎もいと暑きものにはあれ。講座の前には淸げならぬ翁、嫗の腰もかゞみて汗じみてゐたる。まだ講師の姿も見えねば、久しく逢はざりける人等の詣であひたると珍しがりて近う居寄り物語し、頷き、可笑しき事など語り出で扇ひろげて口にあてゝ笑ひ。あるは此方彼方うち見などして傍通る人の事など賞め譏り何がし寺の供養は如何なりしなど我物顏に言ひたるもいみじ。軈て講師座につけば思ひ出したらむ樣に珠數

かき手まさぐりにし名號稱へたる。」僧の君の咳拂して「皆の衆、有難くはなきか」と申せば、一同頷きづて、あな、有難し在難し、南無阿彌陀佛とひとり啣ち、いと物古りたる財布の紐うち解きて、賽錢なぐる。あるは暑さに打倦じて俯伏になりて熟睡したるもあり。說敎濟みぬれば寺男のいとむくつけきが、寄進の箱持ちあるくに、隙もなく打坐りたりければ皆打身じろぎて通すに足ふまれて顔しかむるもありけらし。本堂は香の香い、汗の臭と打混じて蝋燭の火さへ曇りて見ゆるぞ暑き。



○其名恐ろしきもの　鬼薊。鬼百合。蛇いちご。あぐりもいと恐ろしげ也。

○男の名は貫一、東吾など物語にある名なれば皆よし。茶目、與太郎、三太郎、田吾作さては杢助はとりどりにおどけたり。助は輔の字書きたるぞよき。何郎と申すはいとゞ世の常の

名にてみやびたらず聞ゆ、なべて親の名づくる折は心すべきにこそ、讀みにくき名つけられし子にして一人立する樣なり、我名讀み違へらるゝは心よきものならず。されぱとて太郎、次郎、三郎など生むが儘につけたるは何となく品物の番號に一號二號と言ふに似てそれもわろし。さる物堅き家の慣にて男の子に祖父の名繼がせたるなど、頑是なき子の善兵衞など云ひたるいと可笑し。大臣の君の御名なれど新平とはさても鄙ぶり也。太郎に長男には。豪武、正毅いとかたくるしう御面ばせの樣にて。

頃は四月五月、八月九月すべて折につけてひとゝせながらをかし。されど秋の頃は氣も心も清々しう、空の色の澄み渡りたるもゆかし、夏の頃はいつの夜か涼しくなるらむと喞ちゐたるに、はや眞晝にさへ蟲の鳴く樣なりにたる。朝顏の忘られて黃ばみたる葉の陰に漸く小さくなりゆくも哀なり。されど晝の程は秋の哀も覺えねど、夕暮時となりぬれば、あいなう日短くなりたるに愕かるゝ、入日の冷たげに立つ我影を細う長う投げたる。遙しげに行きかふ人の足並も折にとりて哀に、何處よりかする汽笛の此頃となりて異樣にふるえて聞ゆるも悲しげ也。

されど夜は秋こそ懷かしけれ、月よき夜よろづの處あけながら火點して文讀むに何處より來たる、蝶の一つ燈火のあたりはた〳〵と白き粉落して廻り飛ぶ。憐さに火少しひそむれば只の机の半までさし居たる。靜に羽つまみて窓の外に導けば、また彼方をさして飛びゆくもしほらしう。

春の七種は名のみにてすさまじけれど秋なるは皆とりどりに面白けれ。されど秋咲く花は多かるに、などて七草に限りしや、歌にも申し侍る。

　　秋の野に咲きたる花を指折り
　　　かき數ふれば七草の花

七草の花のみとはいと心得えぬ、などゝ百合、菊を加へざりつると言ふも可笑し。春の七種はさる事ながら秋なるをさへ名知らぬ人あるよ。今樣の若き女は何を學ふにや、學科の數のみおどろしく多けれど、いか

少女世界　第五巻第拾四號　増刊

▽十月十五日發行△

少女世界 月の巻



洋裝菊版紙數百廿八頁

口繪石版寫眞版澤山

正價金十錢　郵税壹錢

月のやうに清い裝ひをこらし、趣味に富み　敎訓に滿ちた增刊號は、秋の夜ながの讀みものとして、少女諸子の無二のお友だちであります。

◎口繪三色版——花の香　◎寫眞版八ページ

記事

◎少女對話 おみやげ　成女學校長 巖谷小波

◎少女訓話　宮田脩

◎少女雜感　沼田笠峰

△少女小說 生命の水　△少女小說 窓より　△少女小說 お友だち

△少女小說 烟突の烟　△誌友だより　△誌友想像記

△女學校問答　△試驗問題集　△愛國婦人 大葉子

△ナイチンゲール　△少女讀書會　△少女日記の一節

一讀者の文章、和歌、俳句、その他有益なる記事が澤山あります。

東京本町　博文館　發行



冒險世界 第三巻第拾貳號 増刊

快男子錄

大判（四六判二倍大）紙數百廿八頁 口繪豐富……十月廿日發行……

右の手にポッケット論語、左の手に貯金臺帳離さぬ様な先生達ばかり社會に殖えるのはアマリ目出度い事ではあるまい。金もいらぬ、名譽もいらぬ。たゞ人間として天地に恥ぢず、男らしく愉快に仕事をするのを樂しと思ふ男が殖えれば、日本の前途は眞闇だ。本誌こゝに見る所あり、秋季増刊として、東西古今の痛快男兒の傳記逸話、冒險譚、武勇物語を掲載して、火の出る様な劇烈な、血の湧く様な壯快な書物を發行する。巻頭の主筆押川春浪君の長編小説、以下の記事皆な一粒えり也。附錄には現代快書生（河岡潮風）外一編を添ふ。

……正價金拾五錢……郵稅壹錢五厘……

東京 博文館 本町

明治四十三年度入學試驗問題詳解

幾何ト三角

數學世界第四卷第拾四號增刊……十月廿日發行……

去月數學世界臨時號として明治四十三年度各種學校入學試驗問題中算術と代數に詳解を施し之を公にせり……

大呼して受驗者に告ぐ

今茲に幾何と三角に解答を施し之を發表せり本號を見て素より然りと頷く及第者もあらうハハアと頭を搔く失敗者もあらう

全一册

紙數百卅頁 洋裝菊判

正價拾五錢 郵稅(本號に限)二錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 振替口座東京二百四十番 博文館

實業少年 第四卷第拾貳號 秋季增刊

十月十五日發行

四六二倍大判
上等紙七十二頁
毎號寫眞版數十面
：（印刷美麗）：…

正價壹冊拾錢 郵税壹錢

實業上の秘密

禍を轉じて福となすべき秘密號の大要豫告

◎商戰の機密を保つて巨利を占めた人

◎商戰の機密を探り出す方法　實業界の諸大家

◎通信の秘密の三大要件

◎店員の秘密

◎小僧の秘密

◎旦那の秘密

◎商工業者の秘密奸策を暴露して奇々恠々を極む

◎商工業者の秘訣妙法を傾倒して一讀快哉を叫ばしむ

△通り符丁と店頭符丁△呉服屋△古着屋△屑屋△酒屋△菓子屋△砂糖屋牛乳屋△うなぎ屋△牛肉馬肉屋△寫眞屋△新聞社△鐵道從事員△株式製造屋△指物師△大工△漆工△石鹼製造者△齒磨製造者△產婆△下女△泥棒△其他數十の實業内幕、炬火を舉げて暗郷を照すが如し、

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

女(ろの八)

にしつるぞ己がはく袴の襞の數、七草の名さへ知らぬ

はし」など物古りたる媼は訝るらむよ。されど今様は、などさる事を恥とすべき、また老の繰言よと嘲り笑ふなる。

萩之花乎
花葛花瞿
麥之花姫
部志又藤
袴朝貌之
花

萩の花はこと様に美しからねど木の様いと優也。月待つ間の寂ら



陰に、丈なす枝のなよ〳〵としたる、さる草叢に待つ人もあらばなど思ふもをかし。尾花、葛花いづれも目立たぬ花にぞある。撫子はいたく哀也。秋の日の柔くさす磧等の石の間の根强るべうもあらぬ所に細ろかに生ひいでゝ一つ二つ紅の花つけたる、いと便なげの風情に見ゆれ。女郎花はさすがにしほらし、その葉のむくつけき迄長く葉の小さく痩せたる

女の様なるも興あり。朝顔は幼きより夏の花とのみ思ひしに七草の中なるは怪し、秋になりぬれば花いと小さくなり果つる物を。されど今は桔梗を朝顔に代へて云ふなる。かくては歌にすれば、又藤袴、桔梗の花ともよむにや、かの巻烟草の朝日に匂ふ武德と續くさへ思出されていと可笑し。

○ふるものは

いづれも〳〵よし。寢起きて見出でたる雪、水に降る霙。軒端うつ霰。されど傘の用意もなきに我肩打つはわろし。雪は殊に降り積みたるこそめでたけれ、その朝、高き屋に登りて眼路遙く都の様見るに様々の形なしたる甍屋に白うなりたる。軈て日影照り少し消え方になりたる程に死のめごとに入りて白う殘りたるも可笑し。

同じふるものなれど着る物、調度はわろがりなむ。

○日　は

雨後の日。夕立の一過して楓の葉など雫するに、きらきらしくさし出でたる日。雪の朝、さす日の暖かく雨垂の音、のどかにきゝたるもいとあはれ也。

○月　は

缺けて出づる月。船にして見る滿月。蜜月もいとよしされど生み月は何となく恐し。

○星　は

昴星。彦星。二つながら懷しき名なれば晴れ渡りし夜に立出でゝ見れど何れとも分かず。あれかこれか等仰ぎ論ふ程に顎のけだるくなるも可笑し。菫星と云ふ星はおはすにや。

○雲　は

灰色。薔薇色。紫雲。浮雲は墓なきものゝ譬にも云ふなる。夏の興晝窓などによりて雲の峰眺むるにむくむくと出で來るが、人の顏にも見え、獸鳥の姿にも見

ゆるがをかし」

幼子は罪なき物にぞある。四つ五つなる女兒の子供服ゆるやかに着、髪後に垂げリボン結びたるは一寸引きても見たき心地す。男なるは水兵服着たるが可愛く物問ひても、おめず答ふるがよし。指くわへ、物きけばおぢ隠れ、我家にてのみ打廣ごりたるは憎し。

若き女共は徒然に近きに住と幼兒呼びて打戯るゝに妙齢の好奇心に何くれとなく其子に尋ぬ。まづ父上は何處に出でますや、同胞や持ち給ふ。夜は誰と寢給ふ等の問より初めて、父の事、母の事さては暮し向迄きくに幼兒は己が知る事は皆言ふ。かくて可笑しき事言へば打笑ひ、尚も問ひもて行くに何等か女の慎を超えたる事をさへ問ひて我と我顔打ち赤らむる事もあり。

○心得ぬもの

娘の身を賣る親。物持をあてにしてゆく聟、このわたと言ふもの好く人もいと心得えぬ。割引して返す敷



金、女客に心盡しの馳走したるに多くは食はぬ、箸さへつけぬ皿もありて只椀の物のみ吸ひたるは上品と思ひたるにや、あるは禮儀と思ふるにやいづれにてもいと心得えぬ。

人に物遣す折り粗品と云ふはいかゞ、良き中にも良き品と思ひてこそ遣すべけれ、されどこは古き慣はれはいたく咎むべきにしあらじ。



稻垣未亡人の花の面影

霞女史

故稻垣公使夫人に會ふて見た記

なれて吹く名殘りや惜しき春風の、花の俤昔を問へば、丹花の脣徒らにぞれと答へねど、自ら薫ず名木の餘香は枝幹を失び、葉枝を離るれど、一枝なほ一枝の責を荷ひ、一葉なほ一葉の形を亂さず、散らば櫻の潔よさを心としてなほ殘る幾春秋を澄む月と共に逝らん未亡人が胸中推すればいたはしさの限りである。嘗て一世の才望を双肩に負ふて、到る所にその圓滿の人格と、滑脫の風骨手腕を發揮した生前の稻垣公使を記憶せる人は、必ずや其の片影を照し、良人の功業をして一層の光彩を添へしめた才色兼備の榮子夫人を忘れ得まい。夫人は山口氏の女、東京の水で磨きあげられた人である。お年は三十を二つ三つ越して居られるやうに伺つたが、見上げた所まだ花のやう、質素にして居られるうちにいひしれぬ優雅を感ずる。

△其の活舞臺

抑も夫人が活舞臺の序幕とも言ふ可きは、其月花にも擬ふばかりの容姿をひつさげて良人と共に暹羅の天地に赴任せられた當年の面影、其時であつたのだ。深窓の奥ひたすらつゝましう〳〵と育てられたお姫樣は一躍世界の檜舞臺に立つて列國の交際官と交語談笑凡て此方面獨得の手腕に俟つの外はなかつたのである。丁度繭をはなれたばかりの蝶々が俄かに知らぬ花園に投り出されて、扨どの花の香に醉はうかと躊躇ふかの風情に。

然しながら夫人の性格は先天的に外交官夫人たるの資格を有して居られた。かの一見した斗りでチャームせらるゝ恍惚とした温情のある眼、貴族的に發達した纎手細腰、懐々として言の流れを、否、女としては珍らしい程、よく活らく其頭腦を絶さぬ口元、一として其武器でないものはなかつた。

かくして花の如くうまれ、花の如く美はしく生ひ立ち、花の如き心を胸に秘めて、花の新生涯に入つた幸の人は、花の命もまた短かかつた。連理の枝を一夜西歐の秋風に誘はれてからは、恨みも長い青柳の糸の、さすがに思ひ亂るゝ心をきつと引き締めて、歸れば何れ故の土と、今は殘生を麻布三軒家町の綠蔭閑に送つて居られるのである。機を得て親しく其風貌に接し學び得た自分は聊か感じた點を擧げて其俤を映して見たいと思ふ。

見る目に美しき其態度

夫人に對するものゝ先づ第一に覺知するものは絶えず人を喜こばしむる笑みこぼれたる顔面の表情であらう、それもわざと作る媚態ではなくて自然に、人も我れも、衷心から苦を忘れるやうな明白な態度それである、賞めるものなら思ふ存分にその美點を指して賞める、また缺點と見る可き處は遠慮會釋なしに包み隱すことなく惡いといふ。だから夫人の頭腦は絶えずよく活動し、且つ公正である。卑屈な婦人がもし其心底を見拔かれたなら、片時もヂッとして居られまいと思はれるほどだ。從來の古い慣習にのみ拘泥して現代を論ずる人の眼には如何様に映ずるか知らぬが、眞正面から物を見ることの出來る婦人はまだ少ない今日の日本に夫人の此一點は敬服の外はない。さうして夫人自ら言ふて居られるのに、

「お世辭のうまく言へる人ならば何とでも人の氣に入るやうに出來ませうけれど、それの出來ぬものは偶ま下手なお世辭なんか申しますと、どこかに隙が出來ていつかは素地が露はれます、それよりは頭から、よいことはよい、つまらぬことはつまらぬとした方がよ

いとか思ひます、そしてそれが眞情からあふれ出たものなら、よし一時は氣に觸になつても、また笑談にして下さる時もあるだらうと存じます云々」と。

この心持ちで居られるから人を喜こばしむるのも難いことではないのだ。夫人には嗣子がないので、公使生前の時から人の訪れるのを大變に喜んで、出來るだけの滿足を與へて歸すのが此世なき樂しみであつた。然し雜誌記者などが突然推參してお話がうかゞひ度いと出たのなどは嫌いだと言つて居られる。



「いくら談の材料が豊であつても、矢張まとめて置いてからお話するのと一座の茶話にするのとは興がちがひますからね、前以てこれこれに就て伺ひ度いから何日何時にお訪ねすると仰つて下されば、存じて居る丈けの御用は足しますけれども不意うちではまことに恐れいります、お互につまらぬ物足りない思ひをしなければなりませんし、また一通りの上すべりのしたお談よりしか出來ない、つまり信用のない會見になるだらうと存じます

これではお互に暇のすくない身體に猶更損

な時間を空費する斗りで御座いますからね。」

△其の處世觀

といふと大分難かしくなるが、一言にして云へば夫人は世の中を樂觀して居られる。物を解釋するにも善き意味に〱と其方面を執つて行かれる。

「そんなに一とつ〱氣にならないといつて、もがいて居た日には一日も生きて居られません。ことに日本などとちがつて外國の人は一體の氣質が快活な方ですからしめり込でなぞ居りますと却て此方のほうが耻かしくなる位で御座いますからね、地體私が淑しくない處に持つて來て此の習慣に染んだお蔭でせうか成る丈けものを、悲觀せぬやうに致しますのです、苦しんでも悲しむでも、浮世は同じ五十年…といふ柄ぢや御座いませんけれど、出來る丈けは物事をよい意味に解釋して心を濁さずに暮した方がよくはないかと存じます。」

ともすれば婦人の缺點の第一に數へられる諸種の方面から湧く不平不滿といふものも此の心を持つて處して行くなら餘程其の度を減じられることであらうと思ひます。」

△かくれたる苦心

「外目には只華やかに絕えず歡樂の天地と思はれる其の境界にも這入ればまた言ふにいはれぬ苦勞があると思ひます。ともすれば禮に外れ、といつて禮に泥んで粹の利かぬ素振などのないやう、四方八方に氣をくばらねばならぬのは勿論、最もしにくいのは次のやうな場合であると思ひます。」

「それは自分よりずつと先輩のお年寄りで酸も甘いも場所も禮儀も心得て入らつしやる方々がお並び遊ばして入らつしやるのに、まだ年少い何も知らぬ自分が、主人の位置の關係から必ずしも全體をリードせねばならぬ日などは眞實に心苦しう御座いましたこと、それから言語もまだ碌々出ませんのに大勢の婦人の方々の中に立ち交るやうな場合、かういふ折は泣きたいや

うで御座いました」

それ故にこそ、夫人の胸は反射鏡の如うに常に錬磨せられて居つたのだ、人を飽かせぬ潮のさし引き、無礙なきやう温容の態度、凡て人情の機微を吞み込んであらゆる方面に處して行かねばならぬのであつた。氣の弱い婦人であつたなら、當人ばかりでなく、其良人たる人の苦心は慘澹たるものである、然しながら前條に擧げた態度、確信が先天的の美德になつてしまつて居た夫人は滿身の誠をさゝげて盡す可きに盡し、努む可きに努め、さうして良人の聲望をして一入高からしめたのであつた。それもこれも今は昔、花の御世が變らねば最早や二度と見るよしもない。

△其の趣味と日常生活

概して趣味は廣い方である、今は畫(西洋畫)を勉強して居られる相だ。其先生の揮毫にかゝる故公使の像は古雅なお座敷が一際目立つて見えた。そして次のやうなことを微笑みながら、

「只今のやうな境遇になりますと、心に何か興味が湧きました時、何かの機關によつて表はさうとするのは普通の話しで御座いますが、さういふ處から別に文章も思ふやうに參りませんので畫を初めて見ました。以前は日本畫をやりましたが只今は油畫の方で――否まだ花ばかり畫かされて居ります」――と語られた。

目下の處では暇なやうなものですが、それでも一週に二度は畫の爲めに、また二葉會の方にもお掛けになるので中々いそがしい相である、偶々暇を得れば片瀬の別莊に病を養ふて居られる夫人の母堂の許に昔語りをせられる相である。

坊間傳ふるところによれば稻垣夫人は近日良媒を得て名聲江湖に高き實業界の風流才子某氏に再醮せらるゝといふ、果して信ならば枯木春に遭ふて花再び咲き、埋もれんとせし天成の麗質、又更らに一段の光彩を放つことならん、されど運は容易に信じ難し。



伯爵家の奥樣へ

澄江

私は今さるお屋敷へお宮仕へ致して居りますのよ、エ、お屋敷のお名、それは申されません、たゞ、伯爵家の奥樣附とだけ、但し舊大名華族ですよ。

私が何して御奉公なんかするかつて仰有るの、そのお疑は御もつとも、これには色々しさいのある事まあお聞き下さい。

私は末子ですから、父も母もなめる樣にして普一通りの可愛がりかたではありません、その不足のないのを母が心配致し、どうせ他へ嫁くからだ、今までさんざ家で甘つたれて居たものが急に世間の波風に當ればそのつらさが一しほ、それには少し御奉公でもしてはと有がたい思召し、私だつていつまで何んにも知らぬ箱入娘で居られる年でもなし、少しは上流の家庭でも見習つておかばやと、それで御奉公致す事になりました。

支度ですか、別に大した事も致しませんでしたか、それでも母樣が、朋輩に恥かしからぬだけのことはといろ〳〵心配遊ばし、白茶地厚板の丸帶、絽の模樣、その外色々手まはりの道具類は一さい新調致しました。

さて御奉公に上つて見ると私のやうな御連中が大勢いらつしやるのにはおどろきました、それも、呉服の間、お臺子、御膳所等の役女中は別として、行儀見習の爲に上つてゐる方ばかり。

私が御奉公に上つてからこのかた一通りならぬお世話下すつた、奥向取締をして居らつしやる老女樣の事をお話致しましよう。

お名は君江樣と申上げ、今の奥樣が御當家へお輿入れの際、お里からお附人としていらしつた方ですの、

奥様のお里もやはり舊大名華族、そして老女様は舊藩士のお家より御採用なされたお方、奥様御幼年の時お琴のお相手として上つた處大そう御氣に入りで御當家へお輿入の時とくに御兩親様へお願ひ遊ばしわざ〳〵お附人となられて居らしつたのです。お年は四十の坂を七ッとかお越し遊ばしたとやらですがお美しいのでまだやつと、三十四五位にしかお見うけ申されません。

きめのこまやかな細面、生ぎはの濃い、眞黒なお髪をいつも一糸みだれぬ丸髷に、私いつもそう思ふのよ老女様お髪をかたはづしに遊ばし、裲襠を召したら、まあどんなにおりつぱにおなり遊ばす事かと、ひとり胸に想像して居りますのよ、それこそ、豐國の東錦繪の老女姿など遠く及ぶところでないと思ひます、なにしろお品がいゝ處は大抵の人はそつつきませんわ。

讀書は云ふに及ばず、茶の湯、生花、琴曲、笛、に到るまで皆奥儀を極め、又、小笠原流の作法正しく、それ故はじめて御奉公に上つた者は、皆お傍で少しの間躾けられてから御前へ來る事になつて居ります。

奥様は何んでも彼では君江〳〵と仰せられて奥向御用の衣裳又は調具類は大抵老女様の御意見が行はれて居ります、ですからその權力は大したもの、時としてお表のお役人も一目置て居られるとか。

昔からお大名の老女を勤める方は皆大抵意地悪で、奥女中や、部屋子を虐めるものと相場がきまつて居りますが、君江様はそれに反して、女中達を、我が子の様に可愛がつて下さる、しかしやさしいばかりではなくどこか威厳が具はつて、さすが大名のお奥を預る方とは誰が見ても一目でわかる。

されば、皆お屋敷中で老女様をおしたい申さぬ者とては一人もありません。

朋輩同士にお縫様といふのがあります、二重瞼のパッチリとしたお目、高い鼻、色は少しあさ黒く、しかしそのあさぐろいのがかへつて品よく見えます。

お家は日本橋へんの大きな呉服屋さん、御兩親はお幼年の時おなくなりになつて、今は兄様がお一人、と

かく嫂樣との折合がつかず、しじうお家がもめて居るので御自分でもいつそ外へ出たらと思つて御奉公を遊ばして居られますの、さすが大家のお娘さんだけあつてなんとなく起居振舞もしとやかに少しはでなお召でも召して薄化粧遊ばした時など高髷によくうつゝてまるで繪にかいた侍女姿そつくり、中々お上のおほぼへめでたく、たゞ皆さんとあんまりお話をしたり笑つたりする事がおきらい、もう少し陽氣だつたらと思ひますがそれもいろ〳〵とお家の事を御心配なさるからでせう、お年は十八とやら。



次はお靜樣と申して丸顔のきれいな方、よく高髷がおにあいなさる、お家は當お屋敷へお出入の酒屋の娘さん中々あいけうたつぷり、學校は小學校だけとか、長唄がお得意で時々奥樣の御前でおくめんなくすきとほる樣な聲でするものだから大そう奥樣のお氣に入りで屢々お賜りものがある御當人樣大よろこび、いつもにこ〳〵おこつた顔を見た事がないと云ふほんとにつみのない方。

その次はお千代樣と申し脊のすらりとした面長のお顔お色はさまで白くありませんが一寸可愛らしい方、お家は質

屋さん、御姉弟は弟様お一人、お幼年から何一つ不自由なくお育ちなすつたせいかまことにやさしい、鷹ような御方、それで中々英語がお達者、時々お家から私たちの好物なおすもぢや、水菓子を澤山おとどけになりますのその時は皆さんして、お千代様のお部屋へ上つて御ちそうになりますの、これも皆我娘の可愛いためですわね。

それからお芳様と申すのが朋輩中で一番おく病、夜などお召しがあると、ぶる／＼ぶるへながら、お願ひですからどなたかかはりにいらしつて頂だいな、そのかはりひるまの御用は私致しますからつて、いつも夜のお召にはいつた事がないのよ。

誰しもあの長いうすぐらいお廊下を夜一人でばたばたと歩くのはあまりいゝ氣持はしませんがこの方のは又特別よ。お年は二十三とかですがまだやつと十八九位の氣でいらつしやるのよ、職業學校の出身だけあつて中々刺繍などたくみになさる、時々奥様へおなぐさみに差上げる。奥様も大そう御滿足の體で居らつしやる。

その次はお貞様脊のあまり高くない一體に縮つたお顏立、外見はおとなしさうに見えますが、中々いぢわるでひがみやさん、外の方が上からお賜りものでもするとそれこそ大へん、いやに目を光らしていやみを仰有るのよ、何しろ小間使の中ではこの方が一番の古狸それ故中々羽根をのばしなさる。

あまり朋輩の事を素破ぬくと後のたゝりがこはいからこの位で御免こうむりましよう、そのかはり私の日日の務をお話致しましよう。

朝は大抵五時に起きますそれから部屋をかたづけ、エ、部屋ですかはあー、一人に一間づゝ老女様は三間一間は部屋子のです。お掃除がすむとお化粧して着物を着替へます。

女は化粧してきちんとした服裝をして居れば、たとへ足がだるくて出したくても出されず、心から引しまつて來るものですから身のまはりはとゝのへておかねばならぬ、常お屋敷中で髮をみだしたり、又着物を下

前さがりに着て居る人は一人もありません。そして寢卷でも帯を締めて臥ります。これは夜中何事があつて起きても取亂して居らないようにとの事で、これは皆老女様の躾けです。

身仕舞をすませそれから女中溜室へまゐります、お上は大抵六時半頃のおめざめですからそれに間に合ふやうに。

奥様お起き遊ばすとすぐお化粧室へ入らせられます私もすぐまゐつて何くれとなくお手つだい致します。



そりや奥様のお美しいつたつて實に見とれて了ひます、お色の白い中高顔、すゞやかなお眼、締つたお口許、生ぎはの濃いふさ〳〵したお髪をいつもお丸髷にその氣高いお姿はその昔何十萬石の大名の奥方として誠に申分の無きお品、お化粧は約四十分間の後お召更となる、エ、お召ですか、お平常は大概風通かお召ぐらゐの處をお用ひになり、そして二三日毎にお召物が更ります。

お化粧後は奥庭を姫様と御散歩遊ばす、エ、姫様ですか、今年お四つでいらつしやるがお母様の御氣質をおうけあそばして中々おりこう、時々お附の方達も舌をまく事がございます。

御散歩遊ばして居らつしやる間にお居間のお掃除、奥様御本がお好で書棚には物語類のがぎつしり、お机の傍の料紙棚や違棚などすゐ分おりぱなもの、それよりもあの御手文庫…總ふさつきの紐で結へた總金の高蒔繪で却々お見事なもの、とても下様では見る事は叶はぬもの。

お掃除がすむと朝餐のお給仕、私も部屋へ下つて頂く、それから十一時までは別に御用もなしその間に本を見たりお手紙でも書く、奥様は四時頃まで何くれとなく御書見又は老女様お相手にお作歌など遊ばします。

又時には私達もお居間へ上つて、お琴や點茶のお相手を致す事もあります、か丶る時にはつく〲親のありがたみが身にしみます。御前へ出て朋輩が色々お相手をなさるのに自分ばかり何にも存じませんと、もじ〲隅の方へちひさくなつて朋輩のお相手なさるのを見せつけられたその時の心はまあ、どんなでせう、親は自分の娘にそんな思ひをさせまいと思へばこそ、ものをかけて色々習はして下さるのです、あ丶、それを思へば實に親をゆめおろそかにはおもはれません。

夜は大抵女中溜室で皆さんとお下りのお菓子など頂きながら、學校時代の滑稽談をしたり中には本を讀む方もあれば、時にはかるたも致します、エ丶、夏でも取りますとも

朋輩の中で一番寢坊なおしづ樣、朝はもう皆さんお化粧がすんだ時分に起き、夜はあかりの顔さへ見れば上めと、下めと、仲がよくなる此の間も皆さんして種種おはなしをして居たらいつの間にかポートコギ、それから皆で相談の上紙へ大きく、寢坊の親玉即是なり、と書て、結ひたての高髷の一へ針で留めて、皆さんして、「おしづ様お上のお召ですよ」つて云つたらび

つくりして起上りいきなりお廊下へとび出したら丁度そこへ老女様が居らしつてそれへ突き當り見つかつてお目玉頂だいするやら、笑ふやら怒るやら、大さわぎ。昨夜も姫様のお相手で、あのお奥のお廣間で目かくしをした處、丁度お芳様の鬼、皆さんして手をたゝきながら、鬼さんこちら、手の鳴る方へつて大さわぎして居る處へ奥様そうといらしつた、するとお芳様いきなり奥様のお袖をとらへた、私があつ、それはおつて云ふうとしたら、奥様默つて居ろと、お目でお知らせになつたから皆しづかにする。

やがてお芳様つては、奥様のお胸のあたりから、お顔へ手をかけ暫く考へて居たが、いきなり大きな聲で「お千代様ゝ當つたでせうきつとお千代様だわ」つて仰有るから後へ行つて目かくし取つて上げたら「あらつ」つて仰有つたぎり、皆大笑ひ奥様までお笑ひ遊ばす。夜はずゐ分大さわき致しますよ。

時々老女様のお部屋へ上つては、押繪を敎へて頂いたり又昔のお話を伺つたりしてきつと上る度に何かしら御馳走になる、私これが何よりのお樂しみ。

何しろ私達は別に役女中と云ふのではなし、唯ほんの見習奉公の事ですから、こま〲した御用を勤め後は遊んで居るも同様ですから人目にはさぞたのしさうに見えませう……エヽ、そりやずゐ分たのしい事もあり、又、面白い事もありますが……何しろかうやつて他人の中へ入つて居るのですものその氣苦勞は大抵ではありません、寢るも起きるも自分の自由にはならず、時には口惜しい事もあり、又、悲しい事もありますが、皆、これが自分の身の爲めと思へば、はらも立たず、艱難は汝を玉にす、と申しますから人はなんでも苦勞致さねばだめですわね。

私の様なこんながらくた者でも大そう奥様の御意に叶つて、此の頃では三度のお食事も、みな私のお給仕そして大抵毎日お居間へ上つては、何かと御用をつとめて居ります。

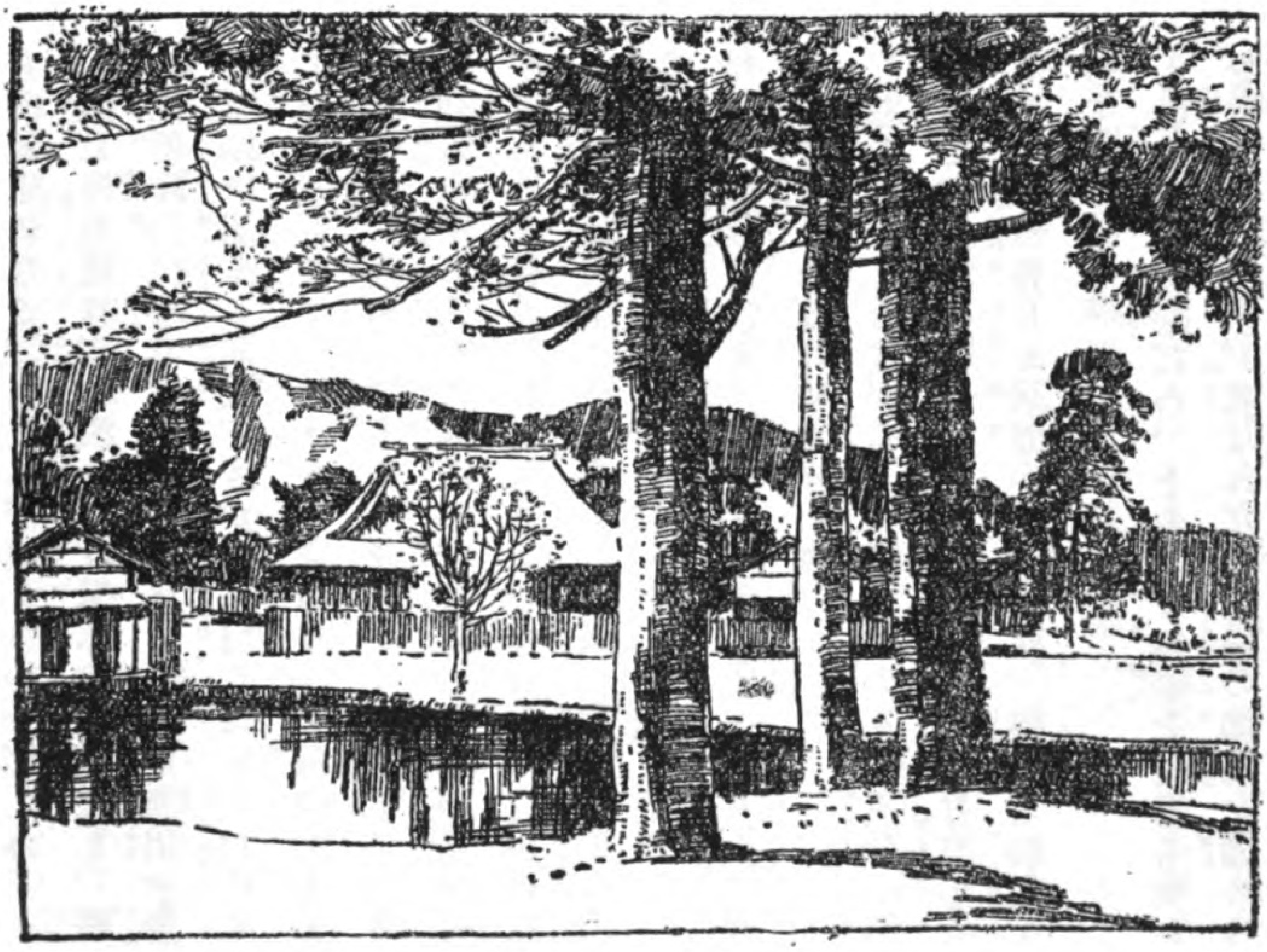
おやもう五時だわ、そろ〲御膳をまゐらせお給仕を致しませう、私なんだか奥様の御用を勤めるのが

うれしい樣な又樂しみな樣ですわ、家へ歸つてからこの樣に働いたらさぞ家中の人はまあどんなに悦こぶことでせうわけても母樣のお悦こびは……あゝ早く母樣のおよろこびなさるお顔が見たいわ。

髪はしやう高髷です家に居る頃はお正月よりほかに結つたことがありませんでしたから、初めのうちはなんだか重たくて重たくて、皆さんは平氣で居らつしやるから、伺がつたらなれゝば平氣ですわ、つて仰有つたが、私もなんだか此の頃はつらひ事や口惜しい事になれるに從がつて、重いのもだん／＼かるくなつてまゐりました、人はなんでも忍耐と云ふ事をわすれさへしなければよろしうございますわね。

朝日影さすやかき根の村草に
　蟲の音ながら露ぞ殘れる　　景樹

秋されば苅萱ましる淺茅生に
　おのれ亂れてこほろぎの鳴く　　千蔭



米澤松ヶ崎公園

富貴に包まれた無邪氣な令孃

上原綾子

あゝ、美しくも更けゆく秋の夜を見給はずや。

青葉を洩るゝ月光は、銀箭の如く露けき下草に瀉いで庭下駄の足許に鈴蟲のしらべ、サヤ／＼と葉摺れする芭蕉のかげに立たれた孃様は横かけから、肩から腰へ青白い月の光を水とあびて、さながら月の宮居の御使の様、いづこからとも無く悠く暢くベースのゐれたハーモニカの音がたゞよふて來る。

「きれいな夜ね孃様。」

「ベエトーヴエンがムーンライトソナタを作曲つた昔も矢張り此の月が彼の聾の家を照らしたのですわねえ。」

「コーラヌでもしませう、ね。遊ばさなくて？ 孃様！」

「私こんな晩にムーンライト、ソナタを伺ひたいわ。」

「ムーンライト？」孃様もヴアヰオリンきかして下されば……、中庭から上りませう。」

どういふ思召でか孃様は、露もつ水鉢の睡蓮をゆらゆらゆすつて散らしてから、白つぽいセルを着流した華奢な體のお運びになる。

わざと瓦斯も點してないパラーの中はカーテン洩れてふき入る夜風が折々はら／＼と樂譜を繙して、鍵盤たゝく手にきらめく金剛石、投げざしのダリアのほの白み……。

美しき曲よ、樂聖ベエトーヴエンが月清き夜、盲目の少女を憐むで、盲ひたる眼には見得ずとも、せめて忍べと即座に編み出でし美しき「月光曲」……。

奏で了つてフラ／＼と半ば夢心地にピアノの側を立ち上ると

「有り難う、何遍伺つても好いのねえ、あゝこの魂が拔け出して月の光にとけてしまひさう……」

「暫くなまけたんで思ふ様に指がうごきませんわ、嫂様、今度はあなたの番よ。」
「迚もろくな事はできやしません、あ、バルコニーに出ませうか、凉しいでせうよ。」
月に背けるやさしき人の、細い指に弓とつて、ふるふ様な悲愁のメロデイー、たかく低く、ゆるく速く、——あゝ嫂様、嫂様は全く天才でゐらつしやる、

△

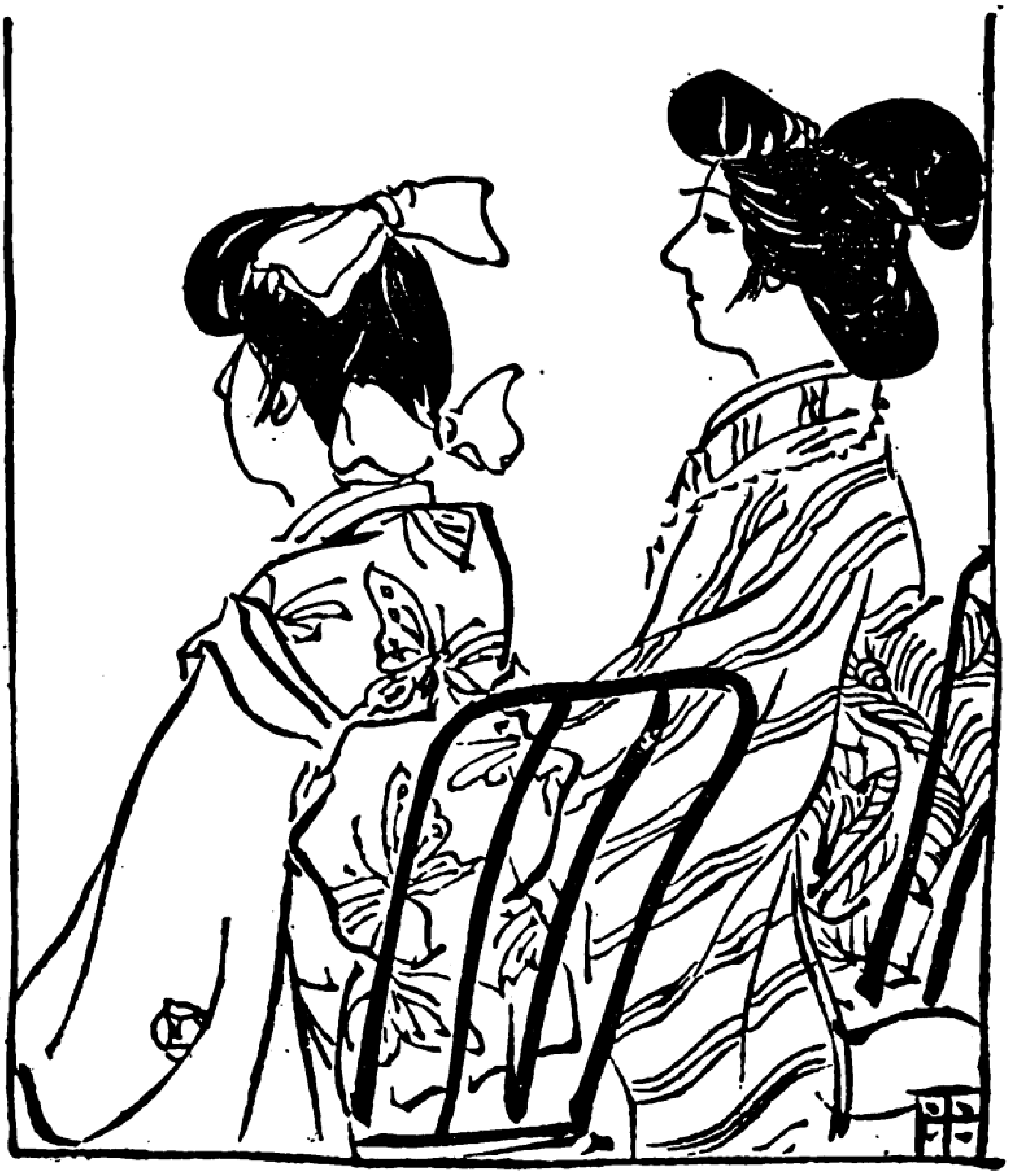
兄様は西部管理局へ出張で御留守、それに御歸京になつても一體、我家は無人で淋しいからといふ譯で當分のうち、從妹の多摩さんをあづかる事にかね〴〵定めて置いたが、(實の處は預るのぢや無い貸して貰ふ樣なものだけれど)いよ〳〵今日の日曜に來ることになつたので家の中が朝から何となく多忙しさう。
私も今までの居間の四疊半を多摩さんに明け渡すために南の洋館へ引越さわぎが始まる。
テーブル、椅子、本箱などは書生の岸上と女中の辰とに頼んで、自分では秘藏の石膏細工のウヰーナスと、巴里みやげの一輪ざしとを大切に抱へて廊下を通つた。
今度の室は客室に隣つた壁の白い明るい室だ。うす翠のカーテンと白いレースとをしぼつた窓の下に左から光線を取る樣に机を据ゑてウヰーナスは右の一隅に美しき姿を誇る。
澁谷の奥田畫伯から贈られた「木立」の風景畫、佛蘭西の女傑の自筆だといふパンジーの花束の額も金縁美しく白壁を彩る。
それでもまだ何となく物淋しいので隣室のピアノを運ばせて明るい窓の前に据ゑて、樂聖シウマンの寫眞を飾つた、晩年に發狂して果てたといふ天才藝術家は今、私の顏をピアノの上の銀框の中から見おろして居る。
まあ辰にも困る事、重い洋書を運んでくれたは有り難いが皆逆さにならべて行つたので、一々正しく置き直さなければならないのだもの、整理を終つてから古

巣の四疊半を一寸のぞく。

先着の可愛らしい机、本箱は南をうけた窓際に据ゑられて、あるじ待ちがほの座蒲團は黑地に燃ゆる樣ひひなげしの模樣、御伽噺の本を入れた箱までが來て居たので何だかそつと笑ひたくなつてしまふ。

午後多摩さんは書生とばあやとに送られて來ました(あゝお供にもう一人奈々子さんが――これは多摩さんの母樣が遙々東京から送られた御仲好の人形なのです、奈々子は水色の服を着て居る。

ふつさりした髪を附耳の上で巾廣な金茶のリボンで



しばつて紋織セルの派手な袂、これがことし十一の奈奈子の母樣、御茶の水(附屬小學)の五年生です、

おみやげの藤村の森巣子と果物の籠とを置いてばあやと書生は夕方小石川へ歸つて行つた。

四疊半は以前から多摩さんの御氣に入り、それ故もう大滿足で机の前に立つたり居たり大分御機嫌が好ささうで何よりだ。

美しい無邪氣な一分子を得た我が家庭は久々ぶりに賑はしい晩餐の卓に向ふ、新來の人を迎へる心祝ひに献立表以外の、新栗のきんとんとスパニッシュ、スチーキとが附いた。

食後には先刻の果物とお菓子とを召使にまで一統に分けてつかはす。

私達三人は八重を供につれて散歩に出る。彌生町から高等學校の横を森川町へ出て私達は灯あかき、秋の街を素足にかろく歩いたが香水が欲いので大學正門前の洋品店へ入る。明るい電燈のかゞやきに店内は華やかに照らされて、四人の姿は正面の大姿見にハッキリ映る。帯も、きものもリボンまでも。

先客は手袋を御買上げらしいヴエールかけた氣障な貴婦人とJつけた大學生の三人づれとばかり。

番頭が取り出す香水罎のオレンヂ色やうすみどり、細くて丈の高いのやら圓くて偏いのやら一々嗅ぎわけて居るうちに何が何だか却つて判らなくなつてしまふ。

「秋はヴアキオレットでも無いわねえ、嫂様これは如何でせう？」

六角形の華奢な半ポンド入のを取り上げると嫂様は細い指に受けて横字のペーパーをよみながら。

「ピノリア會社のヘリオトロープ――好さゝうですよ」と一寸鼻の下にお當てになる。

今度は多摩さんのおねだりで奈々子のクッションをいろ〳〵出させて見る。

地質は帯繻子、海老茶地にプリムローズの花束のとオレンヂ色にカーネーションを刺繍つたのとが人形の母様の氣に入つていづれとも決しかねてるから、派手な方におしなさいと云つてプリムローズのにきめた。ついでに私のテーブル掛けも撰る。模様は勤勉を意味するといふ紅いクローヴアー。

店を出て三丁目の角まで歩いたが秋の夜風の身にうすら寒いので異口同音に

「もう此の邊で引返しませう」が鉢合せしてしまつた。

休暇に四散した學生も大方揃ふ頃なので此處本郷の夜の街は着流し姿の大學生や制帽つけた高等學校のバンカラ連で一ぱい、夜店をいろどるカンテラの灯が、つのる夜寒にふるふもよその大賑はひだ。

わけても本屋の店頭はいつもかはらぬ人の山、美濃津の前にも若い學生が一群たゝずむ。

天高く馬肥ゆる秋は亦、學生のシーズンである、山に、海に、英氣を養ふて再び此處に集ひ來し幾千の若人だちよ、光榮の月桂冠を頂く可く君達の腦力の　君達の身體のつゞく限り、たちて潔く戰ひたまへ。

家に歸つてから香水の口をあけて、寢衣の胸にふり注いで、それから寢室の四隅にも四五滴ポタ〳〵とした〻らしてから靜かに快い睡眠に就く。



△

多摩さんを學校へ出すので大さはぎ、嫂樣も私もつききりで髮をいぢつたり着替をさせたり、何の事はないまるで魂の入つた人形でも貰つた樣だとひとりをかしい。

小石川から較べるば餘程學校には近くなつたがそれでも途中が心もとないので送り迎へは八重を出すことにきめる。

元氣よく挨拶してゆく多摩さん、今日は新型の洋服に刺繍入のエプロンかけて、紅いリボンが可愛いゝ事。

後姿の見えずなるまで玄關の式臺に立つて見送る。

十時に元富士町の羽野さんから電話、畫師〇〇先生の御婚式の御祝に就いての御相談故もしも皆樣御贊成下されば私は銀製の御皿とか花瓶器とかゝよろしくは有るまいかと思ひますがと御返事して置いた。祝賀會は來る天長の佳辰に華族會館で催されるとのこと。京都の別莊にゐらつしやる御兩親へ此の間の返事をしたゝめてから、中庭へ三脚もち出して暫くぶりで畫筆執つたが矢つ張り駄目だ、また少しひまになつたら麹町の黑田先生にお願しやうかしら、山も、木立も、何が何やら、顏色が混つて譯もないパレツトまで無茶苦茶に塗つて止めにする。

多摩さんは十二時にお歸り、新しい純白のエプロンにもう大きなかぎ裂きをこしらへてしまつた、

「多摩さん御轉婆しましたね。」

「えゝ、青山さんとブランコに合乘してゝれ、私だけ落つこちやつたのよ」

「まあ〳〵困つた姉樣ね、奈々ちやんが笑ふでせう、どこも痛くしやしなかつて？」

「えゝ」と云つたぎり默つて笑ひながら破れ目に手を入れてだん〳〵ひろげてしまつた、

午餐の時お給仕の八重に向つて間違へて「ばあや」と呼んだので大わらひ「そろ〳〵ホームシツクがでるんですよ」と嫂樣がおつしやる。午後總がゝりでお菓子をこしらへる。

（一）マーブル、ケーキ

（二）ロール、スポンヂ、ケーキ

（一）はまづバター六十匁、白砂糖壹斤、玉子の黃味七個かぶと鉢に入れてよく摺りませて二等分し置く、次にその一方へモラセス（砂糖蜜）大匙に五杯加へ十分にかきませ、更に卸したチヨコレートを大匙五杯加へてよく合せ、別に前に黃味だけ使用つた殘りの白味を泡立てゝこれも半分づゝに分けて双方にませ合す、

さて菓子型にバターをひきたる中へ右のものを双方とも一匙づゝすくつて入れませ、チンピに入れて程よ

く燒く、

(二)は玉子六個を深皿に割り入れ、白砂糖大匙に六杯加へ泡立器で十分かきまぜ、ポト〳〵になつて泡立器から落ちぬ樣になつたらばメリケン粉大匙に八杯を篩ひながら入れて靜かにまぜ合せます。

これをテンパンにバターをひき其の上に洋紙を敷いた中に移して平にならし、テンピの中に入れて燒く、狐色に燒けた頃一寸わらしべをとほして見て、もしドロドロのものが附かなかつたら、俎の上にぬれ布巾を敷いてその上にあけ、洋紙を丁寧に剝がして苺ジャムを一面に厚く塗り、布巾の端を持つて靜かに卷き布巾を除いてから三分位の厚さに小口切とし、グラスの皿に盛りワインソース添へて出す。

ワインソースはメリケン粉大匙三杯を二合のミルクで溶いて火にかけ、これに、葡萄酒一合、水五勺を加へてドロ〳〵になつた時、砂糖二十匁を入れて火よりおろす。

まあ、どちらも綺麗に燒つだ事、わけてもマーブルケーキの方は美しい紋斑が入つて眞實の大理石の樣だと思ふ。

午後の午Hはこんな事で譯もなくつぶれてしまつたので晚餐には手輕な雞肉飯と松茸の御吸物とが附く。

食後ピアノを練習してたら森川町の敏伯父樣が例に依つて例のごとくフラリとおでかけ遊ばした。

これだから下宿屋住居は呑氣なのねえ、この涼しいのにいつまでも白地の浴衣なんか召して――それでも感心に葉卷だけはいつも上等のをくゆらしておらつしやるが――これでまあ敏腕の大藏秘書官とみえやうかしら、その代り三十二のお年よりは四ツ五ツ若くお見えになるけれど‥‥。

「伯父樣、御飯は?」

「あゝ今、友人と散歩してね、淀見軒をおごられたばつかりだ。」ト

「ライスカレー? それから青木堂で紅茶が三杯でせうお髭に何かぶら下つてますよ伯父樣。」

「ハ‥‥馬鹿云へ‥‥時に今夜は大層靜かだねえ、姉さんはお出掛けかい? 多摩さんは何日から來た?」

「姉樣は貴を連れて小石川へちよいと。」ト

「わたくしれえ、昨日ばあやと來たのよ。」

可愛いゝ掌が伯父樣の太いお掌を握つて答へる。

「オナまあお賑やかで御座いますれえ、御辨手まで寶へまして御座います。」

入窗が笑ひながら先刻のマープルケーキを西洋皿に盛つてバナ、エールを添へて持つて出る。

「伯父樣 今れ練習つてたところで少し判ちないのが有るんですけど……はどかり樣ちよいと。」

「何だいそりやあア——シヤマンのノヴエレツトテン、へえ、大層なものをやるんだれえ。」

「どうぞ一寸。」

「これにきくのが一番早からう。」

眼でシヤマンの背俵をさしながら、それでも素直にピアノの前に腰をお下しになる

「斯うだらう。」

きれはな指づかひで二度ばかりくり返して下すつて

「伯父さんはもう暫くうつちやつてるんだからメイムが違ふかも知れないよ、娘さんにきくと可い。」

多摩さんの首に手をかけながら葉卷をおくはへになる。

丁度嫂樣がお歸りになつたのでお土産のお菓子を開いて今度は皆なでトラムプだのめかくしだのしてキヤツキヤツとさわいで遊んだ。

十一時が報つ、伯父樣は吸ひさしの葉卷を青銅の灰皿に投げて「あゝ寒くなつた、今夜は隨分さわいだねえ」とおつしやつてお歸りになる。

送り出づる夜の門の、足許ちかく露が光つて、冷い夜風がうなじに吹く、ふれなばこぼれん下弦の月。

△女子東京遊學案内　（今井翠巖君著）

本書は帝都二百有餘の各種女學校と地方の二三特種の官公立學校入學案内なり、上京の準備より、學校の撰擇、入學試驗の心得、着京後の注意、學費の豫算、宿所の撰擇、衞生上の注意、圖書館及卒業後の心得等有も上京遊學に必要の注意事項を懇切に記述し、各種學校の組織、規則、校風より束脩月謝の細項に至る迄公平に調査揭載し、卷頭には五六十餘の女學校の寫眞を挿入して美觀を添へ、附錄には印刷鮮明携帶至便なる最新の東京明細地圖を附し、その外特待券を挿入し、學校内部の現狀、宿所の周旋等從來に實例のなき事項を加へ頗る確實の案内書なり（博文館發行金五拾八錢）

貧しき官吏の妻君

紀内綠子

宵にチャンと目覺しを懸けて置いた癖に下女の春やが一時間も寢過したゝめ臺所は丸で火事場の樣な騷ぎ「春やア未だ御飯は出來ないのかえ、學校が晩くなるぢやないか、先生に叱られつちまもわ」尋常二年の君子は肉色のリボンを振りたてゝ、臺所をのぞきこみお汁鍋を下したりかけたり、湯氣と煙に咽んで居る春やの赤い腕を促す、「ねエ母樣、父樣だつてお役所が晩くなるはねエ、」全然で先代萩飯炊の場よろしくである。「其樣に晩くなるならさきへサッサとお包みの仕度をしてお置きなさい、」「だつてお辨當がつめられないんだもの、」ませた口を利く樣で　君子は矢張り尋常科だ。お辨當を下げて行くのが何より嬉しいと見える。

「オイ汁が大變薄いぢやないか、」

茶の間で主人の聲がする、君子の辨當箱へ詰め懸けたお菜の箸を置いて忙しなく立上ると、けふの飯はなんと云ふ牡丹餅飯だ、番茶をかけてちぎつて食ふなぞは餘り氣の利いた部でも有るまい、」私が炊いたのでは有りませんと云ひたかつたが、默つて汁の替へを盛つた。何時に初めぬ事だが夫は何でも彼でも固い物好きで御飯なぞでも鬼の角の樣にチク／＼して居ないと氣の濟まない性、

「俺も一ッ辨當を持つて行くとするかナ、うどんもさうさう毎日は倦きるし、さうかといつて西洋料理もうまくないし、……役所の西洋料理と云つたら、まるでコロッケーなぞはいもつけーだから治まらない、鰻か、三十錢の上等辨當も毎日では經濟が打撃を被むるし、……」

「では何なら先の樣に宅からお持ちなすつたら……」

「彼頃は雇の資格だつたから腰辨でも握り飯でも差支へなかつたが、今は何と云ふても判任官だからナ、同輩やら課長やらの手前もあるで……まさかに梅干や澤庵の皮包も開かれなからうぢやないか、」判任官は宅か

ら辨當を持つて行かれないと云ふ規則もあるまいに、夫も餘程見榮坊なと心では一寸可笑しくもあつたが、考へて見れば男だとて女だとて人間に變りはないもの課長の手前、同輩の面前、見えも張りたからう人情である、行きがゝりであるせめて、もう少し懷合の餘裕でもついたなら、羊羹色の脊廣も作り直させたい、洋傘も細卷の上等なが持たせて上げたい、然し思ふ斗りで靴足袋の綻びが漸と見苦しくない丈けに繼げて行く位なもの、何頃になつたらそうなれるだらうと指を折つて數へても、月給の上るにはまだ年限に間が有るし夫だとて年は年也、またいつ何時ふいと地震が起きて御免にならうも知れず、思ひ過してみれば心淋しくもなる私等の境遇だ。小びんにチラ／＼白髮も見えて來た。夫一人が杖とも柱ともひたすらの頼りなのだから。

「奥樣、大工樣が……」

裏手の木戸を開け乍らカギをガチヤつかせて春やが甲高な聲を出す、

「遂に割引の時間に晩れて了つた「とぶつ／＼口小言にしながら出て行く主人を送りだして、

「お火とお茶をね春や、」大工の棟梁は無性な烟草好きしかもまつちでは不味いと云ふ文久代物だから煙草盆の火種に中々心づかひが入る。

「今日は幾人來たえ、」私は主人のぬぎ捨てを疊んで押込れにしまひ乍ら床の間を雜巾がけして居る春やにそつと聞くと、「ヘエー」すもゝの樣な貌が突拍子もない返辭をしたので一寸思はずためらふ。「矢張り、棟梁樣とも三人でムいますよ、眞にけふはどこそするんでムいませう、流し元のくさつた閾を取替へる斗りにまア幾日懸るのでムいませう、あ、それからね奥樣、どうせ大工樣の手序ですからおへっついの後の處に一寸棚が釣つて頂きたうムいますネ、炭取りやら火消壺をのせときますは重寶でムいますから。すると、下が開いてお掃除も自由に出來ますし、それからあの奥樣、引窓の具合がどうも惡くつて、雨なんぞの時ポツ／＼もるのでムいますよ、一ツ仕替へて貰ひませんでわネ、

るう〳〵それであの此間から水はけの悪かつた前の溝でムいますネ。昨日大工の小僧さんによく見て貰ひましたら大きなおしやもじが支へて居りましたの…、」雑巾をグシャすと絞つてはピシャ〳〵となまぬるつこい拭き方をしながら仕切なしに注文をもちかける。春やはそうなつたら都合がよからうが、此方は此方で算用相談もあるし、中々思ふ様にはならない、いくら便利ではあつても便利に行き



にくい、詰り奉公人は自分の懐の都合以外だから容赦がなくつて氣楽でいゝ。餘り蟲がよくて返事も出來ないから「さうだネ、チヨイチヨイ大きい者がなくなるんだもの…」私は言葉を切つて苦笑した

君子はもう、とうにお友達が誘ひに來て、學校へ行つて了つた、餘りごみなので一寸庭前を掃く魚やが來る、此頃は一體しけでお魚が高いから氣楽にはとてもならぬ。然し、主人の丈けは一品何かしらお酒の相手に取らればならないので思はしくもないが、ホラの鹽燒を一人前 誂

へて置く、經驗のお惣菜は何にしたものか、今から氣になつて堪らぬ。そういへば大工のお茶受けも何にしよう、きのふは團子であつたし、一昨日は蒸菓子、毎日の事だからさう／＼同じ樣なものも出せないし、一層ごまむすびにでもしようか、それにするには御飯がチト餘計ぶりたいてないと……ないとすればパンとお煎のやうなものにでもして置かう。

三河屋の御用聞きが來る、八百屋が來る。恰度十五夜の序でゝはあり、旁、お月樣を出しに使ふ譯ではないけれど枝豆をあたつて見たがお月見なので格外の價だ、餘り馬鹿々々しいからお茄子の茶筌にでもしようと思つたが、呆れた、少さな／＼漬茄子が三錢に四ツと云ふ高じき、お魚を買つた方が餘程、安いと大笑ひ春やは唐茄子に頻りとお思召が有かして、よからうよからうと云ふけれど夫はきらひだし、それに今のは皮がこはくつていけないからこれもお預にして出ず入らずの馬鈴薯にする、これに豚でも入れて煮たら萬更惡くもあるまいと思ふ、草ぼうきを物置へしまつて裾の端折りを下してやつと長火鉢の前へ坐つてまづ一服と來るとつい新聞が讀みたくなる、然し今讀み入つて了ふと肝腎の裁縫が出來ないから面白さうな赤穂義士傳の讀物も繪斗り見て於いてこれも晩のお樂しみに讓る、南縁の明るい處で夫の袷せの縫さしをひろげてくけだいを出すや出さないに、洗濯屋が來る、シャツとカフスと襟を二枚代は二十七錢五厘だと云ふ、又つけかけた襟を一針とも縫はない中に八幡樣からお神樂錢を取りに來る、昨日來客で取つたちらし丼の代を綠ずしからとりに來る、店斗り看板に出してるやうでチッとも捗が行かない、時たまには必迫の餘りチト內職でもしたらなぞと考へない事もないが矢張り家の中をキチンと治めて行くには適當しない、腰は重くなる、氣が不精になる、勢ひ、子供の事も家の事もほつたらかして置かねばならぬ樣になる、すると、詰る處が却つて不經濟になるかもしれぬ、子供は汚染みたなりをさせて置いたら、家の內をだらしなくして置いて迄女房內職でもあるまい、矢張り消極の細々した家政向きを司どるのが婦女の天職なのであらう。

「奥樣お洗濯物は？」

茶の間の障子の處にボカンと春やが立つ。もう追々と涼しくなるので、これから要らなそうな主人の白地を二枚仕舞ひ洗ひさせて、序でに君の紺がすりと足袋を一足洗らはせる。夫婦に子供が一人、用と云つたつて高が知れたもの、せめてお針でも少し習つて呉れると大變都合がいゝのだけれど。それさへつかみ針同然なので、とき物か綻びつき位の間にしか合ないから洗濯でもドン〱やつて呉れなければ….。然し人が正直で悪がしこくないから當世の然も女工上りの下女としては上々の部であらう。

十一時すぎても平氣で湯殿で洗濯だ。お晝は夫も子供も留守で私と二人切り、お菜と云つたつてぶどう豆の少しも買つて置けば澤庵のお茶漬で間に合はすのだからいゝ様なもの、職人達が入つて居るからにはお茶をわかしてやらなければならぬ、仕方がないから鐵瓶の下を試みると、火種が皆無、片面に白く灰のついた黒い炭のかけ許りゴロゴロして居る、眞に此炭位立消えがして仕末の悪いのはない、今度行つたら亭主によく小言を云つてやらなければ….。

何の彼のと云つて立つたり坐りたりちつともしごとをしんみりして居られぬには困る、今漸く袖付縫つた位、今年は何でこんなに早く涼しくなるのだらう取月に着る羽織は昔のが一枚宛出來て居るから安心給もこれさへ出來ると、一寸は困らない、此度は綿入れに罹られねばならぬ綿入れと云へばたし綿が少しもなかつたつけ、晩に勸工場へでも行つて買ひませう。

御飯がすむ、春やが、「昨日お客様でおすしの丼が出たりなぞしたものですから大變、御飯が餘りまして…なんなら翌日はお茶漬にいたしませうか」と云ふ「そんならけふのお茶菓子そごま結びにしてやらうぢやないか、眞によそ様ぢやア職人のお茶うけなんか毎日どんなものになさるんだらうね。」思はず知らず、つまらないことを言葉にだすと、「あの奥様、おとなりで井戸を掘らせた時なぞ毎日々々馬鈴薯の鹽むしか、燒芋でしたとさ、」春やは相應な事を云ふ。

お茶うけをお結びにすると、澤庵と胡麻を買ひに行かねばならぬと云ふから二十錢銀貨を一ッ渡して次でにふかし芋を三錢買はして置く、三時に歸る君子の鼻藥である。

出て行つたと思ふと木戸口から春やは、味噌こしに風呂敷を被せたまゝあわたゞしく駈けこんで來て「奥様、もう眞に澤庵を買ひに行くのはこり〱で厶いますよ、上皮のはまづさうですから少し下を掘らせると左程大きくない處で一本十錢だと云ふぢやありません

か、何が何でも呆れて了つて…どういたしませう」

「十錢だつて仕方がないぢやないか、一本取つてお置き、」あつけらかんと突立つた春やは「さうで厶いますかね、」張合がぬけた樣に根のぬけた銀杏返しをグヲつかせ乍ら又出て行つた。

流しの敷居際から土臺を入れかへたのでタヽキもしなをしたり次でに腰壁もぬりかへたり、大層具合がよくなつた、矢張り「お金の力」のお蔭だ、然しよくなつたとは云ひ條、斯うして緣の下へやら臺所の隅に斗り、お金を注ぎ込んで了ふのは勿體ない樣だ、でも臺所は家中で一番必要な處だからキチンとなつて居ると居ないとは氣持の上でも大層な違ひだが…。それはさうと昨夕も大變犬が庭先へ暴れこんだらしい樣子であつたつけ、杉垣根がこないだのあらしこの方大分損じて居るのだもの、これも植木屋の手を借りずには置かれまい。借家へ入つて居れば詰らなく高い家賃斗り取られるし、自分の家を持つて居れば居るで高い地租やら家屋稅、ヤレあそこが腐つた、こゝがこわれた、でとかく面倒極るものである。

敷石を刻む小さい雪駄の音がして勢よく格子が開いたと思ふと、「母樣、只今、」お包とお辨當箱をペタリと疊へ投りだして君子はすぐと物ほしさうな目を擧げる「お辨當箱は春やに渡してね、ソレお草履袋迄こゝへ持つて來ては行けませんよ」するとおとなしく膝を合せて「ねえお母樣、けふ作文が渡つてね、私甲でしたのよ、」そろ〳〵遠まはしにお八つの催促である、今迄の物淋しさに引かへ、君子が歸つて來るとまるで春のやう何となく心うれしい。

夫の袷も裾とぢだけすると形がつく迄になつた、然し時計を見るともう四時すぎ、植木に水もやらねばならず、掃きそうじから晩の支度、春やの手の屆かぬ處はサッサと仕末をつけなければいけないので、して了ひたいとは思ふがさう〳〵慾もかはいて居られず、止むを得ず店じまひにする。

お辨立は整つても五時は打つても主人が歸らぬ、別段出懸けに 何處へよつて行くとも云つて 行かなかつたが、危ない電車で怪我でもしやし

まいか、又は病氣でもありはしまいか、なぞ平常から取こし苦勞の性分ならで私は一倍氣になつた。間もなく米の間に無事な夫の顔が現はれた「けう餘り見事な七福壽敎の帖を見當つたので是非欲し いとは思つたが生憎電車の回數切符の外に小錢もなく……よんどころなく芝から麻布の春慶迄歸つて金を借りて漸く買つたのだと、針の樣に細ののびた口元をムアく／＼さして心から嬉しそうに、ほろけた帖をみせびらかされる、何だかホヤけた樣な滑ならしいような、私なぞには面白くも變哲でもない然し主人はニコく／＼者で「一寸此位なのは見當らない」といつて鬼の首でも捕んだやうに、自慢をする。こんなくだらない物に高い お金を出されるなら君子に メリンスの羽織か、フランネルの一枚もと思ふたが、惡い樂しみぢやなし、書畫骨董なら何も贅澤ぢやとるとも安樂も拂つた言葉なり、さもしい 根性を云つては濟まないと心づいて、「貴様、御飯はお濟みでしたか、」と伺ふと「そうだつけ、悉皆忘れて居た、道理で 腹がへつたやうだと思つて居たつけ……、」呆れ歸る程、主人は無頓着だ、いくら結構な帖でも米さや飢がしのげやしまいし……



まアこんな事は餘計なにくくまれ口だが、然し年が年中ハゲチョロの着物で、「餘り見ともないではムいませんか」と申上げても／＼お聞き入れにならないのは一番こまる、「夫にあんなひどい形態をさして置いて平氣なのだもの……」と世間の蔭口が手にとるやうな、主人より家の者がいはれるのだから全く迷惑する。

お酒を頂くと云つても眞の一本だから御飯も直ぐ濟む、昔はお酒の癖もあつたけれど近頃は譯もなく寢て了ふ樣になつたので結句仕末はいゝ。

樂しく、大工から「一寸旦那樣に伺つて置いて下さいまし」と頼まれた相談をもちかけても、いゝ心地さうにグラ〳〵お舟なので更に齒ごたへのある返事がない。これにも中へ入つた私がかなり困る。

「母樣、お隣りのお小夜樣處ではお月さまにお團子だのえだ豆だの上つて居るのよ、家ではなぜすゝきのお花斗りしか上げないの、」子供は流石に羨しいと見える。「それはね、家々の風でね、上げる處も上げない處もあるの、」と云ふと、怪訝な顔して居たがやがて默つてお手習を初めた。私も小遣帳やら日記やらをつけて晝間の新聞を讀みはじめる。主人は柱によりかゝつてグウ〳〵いびきをかき初める、風を引くといけないからそつとドテラを懸けて置く。仲秋無月と云つて昔から十五夜は曇るものゝやうにとりきめてあるが今夜は破格の名月、君ちやんが十五の年もかうあつてほしい牛込の親戚の乙娘はたしかことしが十五、さぞ幸福な一生だらうと思ひやられて氣も晴々するやうな、お月斗りはいつ迄見て居ても飽きぬが露の冷えが身に迫るのでフランネルに羽織位では中々夜さむを覺える、こほろぎの聲が夜々しげくなつてかねたゝきの幽韻な音迄耳の底にしみ入るやうひゞく。

惜しいけれどしめつぽくなるので十時頃戸を閉めて了ふ、春やは雜巾つぎの手を忘れてポートに精が出て居る、さういふ私も新聞見ながら恍惚、目が朦として思はずコクリとした。蚊帳はとれたし、かけるものは多し寢心の極いゝ頃であるが、床へ入つても何故か、かねたゝきの寂しい音が耳について一時間餘りも枕につき乍ら寢付かれなかつた。女の常で昔の事やら君子の行末の事なぞが胸に迫る。鼠一つガタともしない。戸外はどんなにいゝお月なのであらう。

うと〳〵　夢に入りかけるととなりの犬が頻りとキヤンキヤン吠える。怪しいなと思つたが月の晩に入るコツ〳〵もあるまいしと安心して眠つた。

朝目がさめるか、さめないに春やがとんきやうな聲でどうした事か裏の柿が澤山落ちて居たと云つて私達の寢床へ迄注進に來た。

宮内省御用達

釀造元

千葉縣野田町

茂木佐平治

天下一品

萬

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

産科婦人科専門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病 自宅療法

發行所へハガキにて申込めば **無代進呈**

目次（婦人病の總論◎血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生、つわりの養生法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◎著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳説せり◎病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三六〇一番） **笹岡省三**

女（その一）

第拾六巻第拾参號

文藝倶楽部

十月一日發行

洋裝菊判紙數三百廿頁

精巧木版數十度刷錦繪及び
婉麗なる三色版寫眞版數頁

正價貳拾五錢

郵税二錢五厘



十月の蟋蟀が床下に啼く、と言ひけん實にも陰蟲の喞々たるを聞かば、哀感坐ろに胸を襲ふべし。しかもまた燈火の親しむべきは今なり。此の時に方り本誌は江湖の讀書子に對して、何物を提供すべきか。先づ卷頭を見よ**小山内薫氏**の新作小説「**霧積**」を載す。氏が現文壇に於ける名聲は既に定評ありこの篇**着想**のいかに**奇拔**にして**筆致**のいかに**妙**なるかは、記者の喋々を要せざる所なるべし。次に**武田櫻桃氏**の小説「**性癖**」**三津木春影氏**の小説「**濱田の日記**」を掲ぐ、共に再讀三讀倦く事を知らざるの名篇なり。

尚本誌獨得の讀物として喝采を博したる**新講談**は、進んで當代一流の名家たる**一龍齋貞山**子に囑して「**阿漕物語**」を口演せしむ。子が話術の妙は、紙上に躍動して、讀者を恍惚たらしむべし 若夫れ**雜錄**以下**百花園**に至つては、千花艶を競ひ 妍を鬭はすの美麗眞に目を眩するものあらん、謹で清覩を俟つ。

東京本町
博文館

女學世界衛生顧問擔當 糸左近先生著

女ばかりの衛生

定價六拾錢 送料金六錢

三六形總クロース金文字入 紙數三百八十頁

内容のあらまし

第一章 **標準女** 東西婦人を比較して頭の先から足の爪先まで解剖的にその優劣を說く

第二章 **月經に關する事** 月經前後の心得及び其の攝生法

第三章 **子宮病に關する事** 子宮病の種類を擧げ一々其の原因病狀攝生療法を懇切に面白く說く

第四章 **婦人科雜病** 生殖器諸病悉くを收む

第五章 **子の無き妊娠法** 如何なる人にもか、ア成程と合點の出來る妙法頗る面白し

第六章 **產科概要** 附嬰兒の保護**法** これをドン〳〵素人に讀まれたら產婆先生飯の食上げ

第七章 **ヒステリー病** ヒステリーの原因病狀豫防療法を說く事詳細

第八章 **美容法** 美髮法、白色法、ニキビ、ソバカス、ハタケ、ナマズ等其他一切の療法

附錄 **花嫁の失敗** 語るも哀れな花山文子の身の上噺、衛生を加味した小說的事實譚、未婚の婦人にはよい手本

東京銀座弓町四番地 **三立社** 賣捌全國書店

女(その三)

第拾六巻 第拾參號

少年世界

十月一日發行

洋裝菊判紙數二百八十頁 口繪寫眞版豐富…… 正價拾錢 郵税壹錢五厘

口繪

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女(その八)



不思議な求婚廣告

飛燕

親兄弟の係累無し、年齢三十一、風采高尚、身體強壯、性質快濶、常識に富み、特に愛情濃密、嗜好は音樂、文學、美術、旅行、品行は方正、學識豊富、有望なる發明事業に從事中、目下究境に甘んじ、内助の功を完ふし、將來の大成功を期する淑女（初婚者なれば年齢に制限なしされどなるべく若手を望む）にして、高等敎育を受け、不遇に悲しむ婦人を、義俠的に迎へたし、志望者は自筆の履歴書に寫眞添へ郵便にて申込まれたし（但し千圓の持参者に限る）

市内△△町一番地
栗屋務

太陽は秋雨霽れの青葉の上へ、猫眼石をばらまいた樣に、キラ／＼と光を放つて居る。今掃除を終へた斗りの机の上には、一葉の新聞と一輪の黄菊がレートの空瓶にスッキリと挿されてある。側へにはあぢきなの世を今日も面白可笑しう、幾多の小國民相手に一日の天職を完うすべく、時が來たならば理想と共に懷かれて出勤せんとの風呂敷包みが控へて居る。心地よささうに南窓押開いて此清き朝風を六疊の隅々迄も行渡らせやうとせる此室のあるじ星子女史は、今し素ノ下宿の主婦が、朝げの膳と共に引下るを、上わ眼遣ひに見送りつゝ、結ひ立ての大廂に、癖直しの苦心の名殘のまだ消えやらぬを氣にして、二た櫛三櫛前へ引き出す樣に搔き均し乍ら、しきりと額に寄するさゞ波を匿さうとしてゐる。

「ちゞれつ毛も程によつては天然のハイカラだけれど、どうして妾のはこんなに大浪の樣に、うねり／＼

として居るんだらう、チヨツ！」いま／＼しげに櫛を後ろの鏡臺――ビスケツトの空罐――へ、ほうり込んで手早く机の上の新聞引寄せた。第一の着眼はいつも同じく紹介欄。求婚の部‥‥

　年齢二十五、早稻田大學在學中‥‥」

「某外交官、結婚後妻は日本に殘留して老兩親、弟妹の扶養‥‥」

「數十萬の財産を有する地方實業家、男兒三人あり歳五十八‥‥」

「いやだねえ、今日も碌なのは有りやしない。早稻田は年下の歳二才、又いくら理想の外交官でも、殘留して舅姑に厄介な附錄付は御免だ。實業家の継兒三人は構はないが、なんぼなんだつてもう二三年すれば、本卦還りつていふのはあまり‥‥。あつ大層長たらしいのがあるよ。どれ／＼、

　親兄弟の係累無く、年齢三十一歳、風采高尙、美貌――、――、性質快濶、――、――特に愛情濃密――――」

「あら、是は話せるわ、嗜好音樂、――、――、――品行方正、――、――發明事業、――、――、――、――世の不遇に惱しむ婦人を義侠的に――、――」

「まあ奇特だこと。」

　一寸襟をかき合せ、廂にそつと掌を當てゝ見てニツコリしながら、

「目下の究境が缺點だけれども、其他は悉く理想通りだわ、迚も完全無缺といふ事はない世の中、發明事業といふのが面白い、どんな發明かしらないが、發明家の待遇は現時我國でも大分議論に上つて來て、追々優遇尊重される樣になるのは極まつてゐる、其上初婚者なれば年齢に制限のないのも嬉しいわ、先方が三十一に妾が二十八三つ位の差だと、子供の一人も生むと、姉さんの樣に見えだして困るけれども‥‥、今妾を二十八と見る人は誰もありやしない、此間も下宿のおばさんが、先生樣のお若い事、二十を二つ三つはお越えになりましたかといつたつけ、あゝそんな事はどうでもよいとして、自筆の履歴書に寫眞を添へ‥‥、オ、

丁度此間校友會の折りに、前髮が大層格好よくふくらんで、袴も折目正しい新調のだつたから、ヒヨのくづれぬ內にと思ふて、イザといふ時の準備に撮つて置いたのが、あるほんとに蟲の知らせとでもいふのだらうか、そうだあれを送ればいゝ、」

「まだ何んとかあるよ……、千圓の……ワーヤオヤヤワヤ〳〵ダ……大イ變、持參金……」

今迄の意氣込はどこへやら、手にせる新聞自暴自棄にかいのけて、

「駄目だッ！」

帶にからめる銀鎖を手ぐり見て、時の過ぎしにあわてながら、お納戸色の袴を着け、チト道を急がねばならない、馬鹿々々しい事で手間が取れた」とつぶやきつゝ、

「おばさん往つて參ります。」

「お出かけでございますか。」

茶戸棚の側から、からだをねぢつて、往つて入らつしやいましといふ暇も狀袋張る糊の刷毛は離さない。

△

今日はいつになく氣が變に鬱いで、自然生徒への當りが我ながら覺々しいと氣付いても　夫をどうしても制抑る事が出來ない。授業が濟むとソコ〳〵に、同僚には少し頭痛の氣味と斷つて、急ぎ足に學校を後に、道々自分と似たる年頃の奧樣らしきに出遇ふと、夫が譯もなく癪に障り猜疑、嫉妬の眼を射つゝ、歸宅れば袴とく勇氣もなげに机の前にベタリ。

夫れでも今朝の廣告が氣になると見え、未練にも又同じ處を繰返して、恨めじげにしばし沈思默考の樣であつたが、忽ちハタと膝を打つて。

「先んずれば人を制すだ、有力な競爭者が顯はれては事面倒にならう、履歷書の寫眞のと餘計な手數を踏んで居るよりは、手つ取早く直談をして見やう、突飛な奴と思はれて不合格だつたら夫迄の事だ、元々義俠的に結婚するといふんだから、持參金の件も事をわけて相談して見やう、今纏めての持參はなくとも、發明の

成功するまで、妾が奉職して居れば同じ譯だ。」

と自問自答、俄に變る雲の行衞はいづこ。

「叔母さん一寸お湯に入つて來ますよ。」

「もうお湯？　今日は先生大層お早いではございませんか。」

「え丶何んだかつむりの工合が惡い樣ですから、サアツとお湯を浴びて、運動かた〳〵氣の合ふたお友達でも尋ねやうと思ひまして……」

やがて湯から歸つた星子女史、名詮自稱ピカ〳〵と額も頰も光らせつ丶、机の上に大形の鏡たてかけて、御輿どつかと廂の手入、顏の造作、餘念なくつくろひてさて一分の隙もなく調へば、着物はあれに、帶は是れお太鼓さんざん締きつ丶、鏡の前でとみかうみ、果てはチーンと坐りて、への字のお口、結んで見たり、緩めたり、笑つた顏に眞面目の相、思ふ存分研究して、益々是でよしと、時計を見ればまだ六時、暮る丶に早き秋の日も、けふはわけてももどかしければ、又してもけさの新聞よみかへし、流石に黄昏る丶を待つて宿を出でぬ。

△

△△町は一番地、蕎麥屋と駄菓子屋の合の露路を僅にならぬ身を横に、榮螺の尻の行つまり、漸く尋ね〳〵て來しもの丶、先づ場所柄の意外に驚きながらも、ダイヤモンドも土中から眞珠も海の藻にひそむ、池中の蛟龍いつ迄斯くてあるべきぞ、天晴れ妾如き內助者を得てこそ雄飛もさる丶なれと、我身勝手の獨りぎめ、いつしか粟屋務と怪しき紙片も門札なれや、いと麗々しく掲げられたる前にた丶ずみ、ト見れば五軒長屋の二軒目、二間間口に奧行とても知れたもの、流石に星子女史稍々心細げの體、されど日暮れてのうろ〳〵歩きあやしと見とがめられんも本意なきわざと、鈍る心を鞭打ちていと物靜かに格子戶開けぬ。

△

今しも行廚屋に夕食の殼渡して、獨り机にポッネン



と二分心のランプと差向ひ、何やら電氣學の書物數多取散らし、未來を夢み現在にあこがれつゝ。

「明日は郵便、寫眞が澤山舞ひ込むに違ひない、會見所は何處に仕樣、日比谷はどうも俗惡に近いし、矢張り上野の杜の新緑したゝらんとする青葉の下がふさわしいな、次に難物は身裝だ、服こそ損料貸を借りても濟むが、時計の鎖は例へ天麩羅でもぴかつかさねば估券が上らぬ、靴は佛蘭西形の極華奢な奴でなくては此頭に釣合ないし……、そうだ、木取君が先日新調した計りのものを持つて居る、其他時計も帽子も一ツ借用の談判をして見やう、親友の好誼でイヤとはいふまい指環の一ツもほしいけれども、是計りは借る者も見つけ出せない、とうせ目下の窮境を告白して居る以上は左迄にしなくともよいわ、要するに身ぎれいにして、當世紳士の本領を失はねば夫れでよいのだ。」

「思へば我ながら感心する程、今日の求婚文はよく出來た、あれを讀んで心を動かさない婦人は恐らくなからう、併し千圓の持參が少々難物だナ、持參さへあれば御面相などは人一化九迄は我慢もするサ、何んでも今一ト息の處だ、資金を注入して、どうしても完成させなければ、理想のすべてが泡になつて仕舞ふ、アー千圓々々、千圓と結婚したい。」

取留めもなく空想に耽ける折柄なれば、格子戸開いた音など聞こえればこそ、一切夢中の石地藏、そこへ菩薩の御聲はがらかに。

「御免遊ばせ……」

△

壽美禮星子と記さるゝ金縁小形名刺を押し戴いて、

「ハヽア、では今日の新聞御覽下さつて……、イヤどうも甚だ恐縮、ヤ兎も角もお通り下さい、實に……ドーモ赤面の至り、ウ……ン僕がユー其粟屋です。」

風采高尙なるべき筈の其人は、黄色に汚れた白地浴衣に、縄の様なる紺絞りの兵兒帶〆て、ハイカラの刈け目もしどろもどろに、油にこばるふけと塵埃、顔色靑ければ成程眉目は秀でゝも見ゆるぞかし、是が

じはん許りに、髭ひねりつゝ、受けし奇襲に陣立もくるひて、挨拶さへもドギマギと、大まごつきの中にも押へられぬ嬉しさは其眼の燃ゆるにぞ知られぬ。

此方が當局者かと二度びつくりの墨子女史は、まことに思ひの外なれど、今更踵もかへされず、いわるゝ儘に玄關ににじり上れば、マッチのすりがら、手紙の反古、煙草の吸口に破れ團扇、帶てふもの此家にありや、まづ一張羅のお召が泣きぬ。

「實は履歴書に寫眞を添へ郵便でとの仰でございましたなれども……、是非お目に懸つて直とお思召も伺ひ私の精神も知つて頂きたいと存じまして、厚顔しくもお邪魔に出ました譯、失禮の段はお許し遊はして……」

しゆしよふに首うなたるれば、怱々度を失ふたる案屋は、

「イヤ決して失禮の何のといふ事は毛頭ないですが……、實は御覧の通りの陋屋ゆゑ、一應信書の往復に依而、可然き會見の場所をお打合せ致した上にする積りだつたのですが、イヤア併しイ、です、却て好都合です。單刀直入、何事も天眞流露で……、虚飾虚禮を卻ぞけて、實踐主義なる貴女の御精神は、大に僕の主義と一致したです、又僕に於ても此狀況を御覧下されて猶且、御同情下さるといふ篤志の淑女ならば將來甚だ安全です。

義俠的に迎へるのやら、嫁ぐのやら、主客正に轉倒せんとする此場の有様、墨子女史は徐ろに、氣取つて、

「先づ承はりたいは、御發明中のもの、」

夫は何んでございましようか、お差閊へなく」

「ハア、ナーニ、差閊へは決してないです、説明するです、エ、…！」

罪もない髭はしきりとひねり上げられて、下よりはとばしる氣焔萬丈。

△

「マア、ほんとに夫れはよいお思い付きでございます

こと、電車、電信、電氣燈、電話はおろか、無線電信に飛んだ領分違ひの感應で、人さわがせのあの世の中に電流作用の通心機とは隨分振つて居りますのね乾度社會から歡迎されるに極つて居りますわ。」

「面白いと思ひます、是れが成功してドシ〳〵賣れ行く樣になりますと、世の中にお世辭、輕薄、懸引、ペテン、詐僞などは全然跡を斷ちますし、青年男女が是を常に携へて居れば決して僞りの戀愛に弄ばれた結果が失戀の何のと悲劇の眞似する如き患はありません。又家庭に於てもです、來客の時などに、此お客は直ちに歸る決心で來て居るとか、或は又食事に有付く積りだとか、前以てチャーンと分つて御覽なさい、午砲が鳴つてから狼狽てゝ下女を魚屋へ走らせるなどの、不體裁を演じなくともよいし、實に數ふれば枚擧に遑なき程功用が多いです、必らず需要の範圍が擴からうと思ひます。」

「だから僕は一身を犧牲に供して國家の爲め成功を祈つて居るんです、總て發明といへば十中八九、歐羅巴人の頭腦から、生み出されるものと極まつて居るのは甚だ遺憾に堪へんです、マダ此器械は外國にも無いですから、成功の曉には我國のみならず、東西兩洋に跨つて大に販路を求め、物質上の成功は言ふに及ばず、粟屋務の名聲はワットの蒸氣、ニュートンの引力、と共に未來永劫、通心機發明者として、大に全世界に賞揚されるです、思ひ茲に至れば今日迄放擲した數萬の財產も決して惜しくないです、ハアー。」

意氣軒昂の有樣に不知不識煙に卷かれた星子女史は斯くも抱負の大にして、名譽ある大發明家を夫と仰ぐこと女子としての幸福何物にも代へ難し、目前の窮境何んのその、火を睹るより明かなる將來の大成功のたのもしさ、願くは中原の鹿を射て欲しやと、思ふ心は穗に出づれども、出でぬは持參金妥協の一條なり。

「マア夫程に御熱心で入らつしやいますこと故、乾度成功疑ひなしでございますわ、凡そいつ頃完成のお見込みで入らしやいますの？」

「それがです、其資本‥‥イヤ完成の期を早からしむ

ると否とは、どうしても物質的の關係が免かれないので……」

と行つまりのてれかくし、頭かゝへて、女史のみけしき盗見して返答如何にと待構ふる。

「夫は御尤もで入らつしやいます、いろ〳〵其事に關して御相談も申上たいのでございますが……、初めて伺ひまして餘り露骨に何も角も申上げますのも失禮でございますし、夜も大分更けましたから、今日は是でお暇いたしまして……、是を御縁に幾久しく御交際を願ひたう存じます、就きまして・私の宿所を……、一寸筆と用紙を拜借致しまして。」

さら〳〵と得意の走り書きに所番地に、現職姓名、教育に不足がありますか、といわぬ斗りに差付けて、最も難問題の答案丈けは此場合御猶豫願ふと、おのが心に獨りぎめ、話をうまくそらして置いて、今後屢々交際してゐる間は、不問不答の中に効果を收めんと、軸壁の妙計、手腕の程には我ながらの上出來と北叟笑みつゝ辭し去りぬ。

流石の大發明家も虚を突かれては如何にせん、赤裸裸の我境遇に切り込まれたるをなまじひに、弱音を吐かんよりはと、一しは虚勢を張りて滔々と、意氣稍はしたものゝ肝腎、主眼の持參金に就ては些の端緒も語り出されねば、我より夫れとも言ひ兼ねて、結局不得要領に終りし事の口惜しさ、名殘をとむるバイオレットの香なつかしげに鼻うごめかしつゝ茫然自失。

意外千萬、こんな奇襲を受けやうとは……、全く世の中は鶍の嘴だ、併し女史大に僕の明論卓説に感服したと見え餘韻を引いて往つた處を見ると、此境遇に驚いて辟易もしなかつたらしい、大に有望だ、他は總て合格だけれども主眼目條件の一點が氣に懸る……、其事に付いろ〳〵と相談などといつたのが怪しいぞ、ナニ全く成算の無いものが候補者と我から打つても出られぬ筈、嗚呼かゝる場合に於てこそ通心機だ、通心機が必要なんだ。……益々以て其成功が急がれる。


朝

スヰートホーム

榊田千鶴子

水色リボン引き延べた樣な澄んだ秋空！セルの着物では暑い位。今日は兄樣が向ケ岡の寮よりいらつしやる日曜嬉しい！何も手につかないので文机に向ふと本立の一番隅に紅のリボンで綴ぢた小形の手帳が、この夏片瀨の別莊で時々書いたものなつかしさに……

△

兄樣と私とは、書生と車夫とが先へ來てとつて置いた席につく。兄樣は一高の制服制帽。私は緋綸の絽縮緬の友禪の着物にクリーム色の地に朱で鳳を縦書にした靜波織の帶を立矢の字に締めて、マガレツトにはタフタの水色リボン。鞄もサツク入りのヴワイオリンも絹レースの日傘も網の上に上げられた。森山も松吉もお辭儀をして列車の外に出て窓の近くに立つた新橋のプラツトフオームは今雜踏を極はめてゐる。車掌、驛夫、赤帽等が彼地や此地に行つたり來たりして後ればせの客のいきせいてかけ出して來るのもある。歐洲にでも行くのか三十人程も學士連の樣なのが送りに來てゐるのもある。餘暑いので象牙のお扇子で風を入れて居る折しも發車の汽笛は高く高く響き渡つてさよならご機嫌やうの聲は方々で起つた。かの學士連は萬歲を大きく呼んで帽子を振つた。森山と松吉とは幾度も腰を屈めて「お氣をおつけ遊ばして」を云つた。かくして汽車は一搖して進行を始めた。車内はさして込んでゐない。外國婦人が三人向の隅で盛に佛語で話してゐる。それに隣つて若紳士二人玉突の談か何かしてゐる。此方の隅には早稻田と慶應との人が三四人新聞を讀んでゐる。外國婦人の少しこつちに虎の門風のこつてり

さんが二人お女中と腰かけて兄様と私とを先程からみてゐる。兄様は萬朝をみていらつしやる私は手提を膝に置いたまゝ窓にもたれて外を眺めた。朝風に搖ぐ青田、緑葉がくれの萱ぶきの家、夏草に埋れてゐる小川など迎へ見送るうち早小波浮び鷗飛ぶ品川も見えてきた。かゝる景色を見つゝ、恍惚考へた。あゝ私はあのやさしい婆や爺の待つて居る片瀬の別莊へ一年振りで行くのだ。去年は大兄様、小兄様。私の三人で樂しく暮したが今年は又一人やさしい兄様がふえた……思へば本當に不思議、今傍にいらつしやる兄様はつい去年の秋迄は小兄様のご親友の松下様と伺つてゐたばかりのが天長節の佳節に婚約の指環が取りかはされたとは……あの花電氣あかき西洋間に呼ばれて父様、母様、兄様方に聞かされたあゝその時どんなに嬉しく恥づかしかつたか、それからこつちほんとの兄妹同様、わがまゝもいへば叱られもするが千鶴さん〳〵とどんなに可愛がつて下さるか!!!そして一高風の雄々しい御氣性がおあり遊ばして……

「千鶴さん何考へてるの?」

ふいにかうおつしやつて兄様は微笑んでぢつとご覽になるので何だか恥かしくなつて下むくと左の藥指のリングがキラリ光る。

「え?」

つて又おきゝになる。

「ホヽヽいゝ事!今は申し上げられませんはあとで……………」

「妙な事なんだね」

つて快活にお笑ひになりながら。

「あゝバナヽでも出さう」

と鞄とつてお出しになるむいてさしあげ私もいたゞいてゐるとお笑ひになりながら

「ホネムーン?」

と小さくおつしやる

「あらツ」

とぱつと顏そめてホヽと笑ふと又こつてりさんたちがこつちをみる。横濱で外國婦人は下りた。早稻田、慶

應の連中だん〳〵大聲で話し始める。

「千鶴さん兄さまや達一さんは輕井澤からいつ歸るの」

「明後日頃でございませう。從兄が少し惡かつたんでおそくなりましたの歸ると直片瀬へ參りますつて」

「さう、千鶴さんお父様お母様きりで淋しかつたらう」



「えゝ。それに兄様は房州にいつてらしたし……でもお臺所へでてやりそくなつて笑ふ方がなくつてようございましたわ……」

「ハヽ片瀬へいつたら三人して笑つてやらう用心し給へ」

「おゝこはいホヽヽ」

△

耳慣れぬ波音で早くから目がさめた。もう爺はお庭

を掃いてゐるし婆はお臺所の方で何かしてゐる。髪をお下髪にしてモスリンの單衣に着替へて、庭に下りたつ。あゝ、なつかしい庭よ、築山の佇も池の涼しげな水も去年と變りはないが千鶴の胸は去年よりより多い樂しみをもつて來た……朝露に千代田草履濡らしつつ池の汀のベンチに腰掛けて思ひきり朝の靜かな清い空氣を吸つた。

『お嬢樣お早うございます、ハイ爺の作りました朝顔があちらに咲いて居りますから何卒ご覽下さいませハイ』

といふ。『さうかい』といつて築山めぐつて花園に行くと『まあきれい！』大輪の色樣々の朝顔が淸水燒きのお盃の樣に露に濡れて微笑んでゐる仰げばお二階はまだカーテンも絞られずホヽ、兄樣のお寢ぼうな？

香撫子折つてきて私の机の上の一輪ざしにさす兄樣にもとたちあがるとたん

『早いねせつかくのお天氣を心配だなあ』

とわざとルリ色の姿をご覽になる。

『あら隨分！兄樣こそよく今頃お目がさめましてね、私、朝の御飯はお夢の中かと存じましたわホヽ』

『お茶の水は口が達者と承つてゐたが成程なるほど』

なんてお顔洗ひにいらつしやる。

朝御飯後濱にいつて見やうとおつしやるのでご一しよに庭の枝折戸からでかける。薩摩下駄と草履の跡を砂にのこして。

手にとるやうな江の島の棧橋には早ゆきかふ人もみえてこなたの小松原には紅の襷の松葉かきが休んでゐる波は絹の皺でものすやうにザザアとよせてはスーとひくいそに可愛いゝ波のあとをのこして。かういふ時はきつと寮歌でもでるんだがどうしたのか兄樣も私も歌はない。何だか、かう、嬉しい樣ななつかしいやうな樂しいやうな思に胸はそゝられる。兄樣も何か憧憬れていらつしやる樣に遙か遠い水平線上の夏雲をおつとみていらつしやる。又波はざあとよせて磯に花と散る。堪らなくなつて兄樣とおよびしてみる。『何？千鶴さん』とみかはした目には希望の光輝いてあとは靜い

微笑に深い言葉をかよはした。

△

風通しのよいお二階の十疊。すぐ下を江の島歸りの人々が貝細工持つてゆく兄樣は安樂椅子によつて獨逸語のご本を讀んでらつしやる。私はそのおそばで枝折を編んでゐる。波の音が寢むさうにひゞいてくる。

「若あッ、博樣、お友達の方がお三方おみえ遊ばしました」

と婆やがいふ。ホヽ、婆が若樣若樣つて云ふのを嫌だ嫌だつて嚴しくおつしやるのだが家の兄樣方をさうお呼びするのでまだ少しでる。それにしても何誰だらうきつと鵠沼に被居るご同級の方方でせう氣まりが惡いから下りませう下りませうとお室へにげこむ。皆樣お二階へおあがり遊ばした樣おやもうあんな大きなお笑ひ聲ーお茶さし上げなくちや。でもお茶よりひやした麥湯とサイダーをはこびませう。「ばあや」「ばあや」おや返事をしない使にでも出たのかしらーすると私が持つてかなければならない。いやあね。仕方なく、前髪一寸かいて四人分のコップに麥湯ついでサイダーのせて勇氣を出して、兄樣何ておひき合せ遊ばすかしら。トン〱上つて皆樣に配つてさて靜にお辭儀する。大いそぎでねころんでらしつたのがおき上つた方もあつた。兄樣のお顏一寸みるとお笑ひになりながら。

「僕の妹です」

私の事皆樣ご存じなので

「うそつけ松下はブラザーと二人きりぢやないか」

とこれも笑つて私のリングお三方でご覽遊ばす恥かしくつて御免遊ばせといつて下にかけ下りる。あとで兄樣きつとからかはれてらつしやるにちがひないなんて柱に倚つて微笑みながら思つてゐたが、する事もないので先刻の枝折とつてこやうとスイミツとバナヽと持つてあがるとみなもううちとけて、

「さあ松下千鶴子さんヴワイオリン一つきかして下さいな」

なんておつしやりながら「オール持つ手に花が散る

ウウ……」なんて蠻聲はりあげておうたひになる。

「ヲイ松下一高とお茶の水はいゝ一對だねえ」

つて一人の方がおつしやる。

兄樣も快活に

「さうだねえ」

つておつしやる學校自慢の私、うれしくて微笑まずにはゐられなかつた。

△

二番で立つといふ兄樣方からのおはがき手にして兄樣と二人お揃の海水帽かぶりおもひきり派手な蝶の浴衣に肉天羽二重の帶締めて濱撫子の小路を藤澤にと向ふ。路々新らしい寮歌をそしへいたゞく。ステーションで待つほどもなく新橋發の列車はプラットフオームに横はつた。今か〳〵とお待ちしてゐると角帽と柏葉の帽子がめつかつた。大兄樣ッ。小兄樣。ッておよびするとお氣づき遊ばしてニッコリやあありがたう。

「博君、久し振りだね千鶴ちあん大きくなつたね」

ホヽ、束髮に初めて結つたものだから……

「千鶴ちやん輕井澤で華さんやかをるさんが來いつていつたよ」

「嫌でございますわあんな處！」

「え？こないだまでいゝ處だいゝ處だつていつてゐたぢやないか博君同行ならいゝんだらう」

大兄樣、小兄樣、二人しておからかひ遊ばすんですもの。兄樣微笑んで足元みながらあるいてらつしやる

その夜月涼しきおばしまに仲よき四人の談！どんなに樂しかつたか!!!とう〳〵ヴワイオリンはサックからとり出された大兄樣の尺八、兄樣、小兄樣のお歌で、譜箱の中あさつて合唱した。

月はさえにさえて明日の江の島行きは大當り。



社會觀察

救世軍婦人ホームに女士官を訪ふ

一記者

▲その起源

「彼等をして自ら助けしめんが爲めに彼等を助くる我等を助けよ。」

と絶叫して、十字の徽章異向に、努力の襟章つけて都大路を、神の爲め、人の爲めに平和の戰さをする、かの救世軍の一團の起源はいつであつたか。

一代の義人ブース大將は、西暦千八百二十九年（文政二年）英國ノッテンガム市で生れた一種の天才である。十五の時から傳道に從ひ、二十七の夏、感ずる處あり、一切を擲つて「東ロンドン敎會」を作つた。これがいま五十六國に跨がる救世軍の發端である。

英國での成功は大說敎家スポルジョンが「もし救世軍をロンドンより取除くならば、その代りに五千人の警察を增すとも詮なからん」と云つたのでもわかる。

英本國から派遣された救世軍士官の一隊が、始めて渡來したのは二十八年九月四日で、直ちに東京を中心として活動を始め、今では小隊分隊の數、四五十もあり、士官の數二百に垂んとし、機關新聞「ときのこゑ」の發行部數一萬二千と註せられて居る。

司令官はホッダー少將、日本人で一番上の階級は山室中佐で、その指揮の下には既婚未婚を加へて二十九名の日本婦人士官が百般の社會活動をやつてゐるのだ。

▲女士官はどうしてなるか

以前はクリスト敎の熱心な信者が來り投じて、女兵士となり、追々昇進して女軍曹となり、小校、中校と云ふ風に經のぼつたのである。三十九年六月、牛込區市ケ谷に救世軍の士官學校を設け、男女の志望者を、

候補生として享け入れ、十ケ月の教育をし、卒業の上は見習士官として各小分隊へ配置せられ勉强を續けしめる。

婦人の採用人員は毎學年三十名の規定で、學力よりも人物と、信仰に重きをおいて、あらゆる困難に耐へ得られる樣なのを採用する。それでも家庭の反對や、種々の誘惑の爲めに挫折して、三分の二まで駄目になり、殘る三分の一が、やう／＼卒業するのである。

全生涯を捧げたる神の戰さはこれから始まる。男兒は制服制帽であるが、女子（日本婦人）は和服で、あちこちと奔走して、惠みの箱を配り、往來の塵ぼこりにあたら花顏を晒して、道ゆく人々より若干の寄附を得る。富める家の女が美々しく裝ふて花見に出るときその花吹雪の下で太鼓を叩き、讃美歌を歌ひ、心なき醉どれから、

「ヨウ別嬪のヤツさん！」

など〻浴せられるに、先づ信仰薄き者は大抵ゐたゝまらず、逃げて仕舞ふ。殘るものは益々世の仇波と戰ふのである。

▲苦痛と快樂

されば苦しいと云へば毎日の仕事、一として苦しからぬのはない。――精神に於て、肉體に於て。

何がさて自分一個の榮達利益を貪る爲めの惡鬪ではない。從つて、士官と云へ、月給と名のつく程のものは貰はずに、僅少の手當で以て甘んじ、獻身的に、犧牲的につくすのだ。

近頃は救世軍の何たるかゞ、稍々一般に知られて來たが、夫れでもワカラズヤ先生達には高等乞食。舶來乞食。乃至は乞食軍の樣に思はれてゐる。此んなのに出くはすと災難だ。

誰故に受くる此耻かしめぞ。私利私慾に非ず。道樂半分に非ず。貧にしてまさに盗まんとする可憐の同胞の爲め、病みて醫藥なき薄命の兄弟姉妹の爲めではないかと癪に觸る事蓋し僅少ではないけれども理窟は禁物。人の子の罪を深めんが爲め十字架につけられて、

想ふだに肌粟する苦しみを享けられた救主、キリスト様の夫れに較れば、よしや踏まれて蹴られるとも何かあらんと、大勇猛心をおこして努めるのだ。

外國の或處で美人の女士官が克己週間の寄附金を集めてゐると、輕薄紳士が現はれて、キッスを許すなら十弗上げますがと、無體な提供をした。士官は一寸首を傾けたが、よろしう御座います。しかし先づ金をこゝへお入れなさい。と命令し、さて儼然として左の手をツン出した。まさか手の筈でないとも云ひ兼ね、キッスもそこ／＼に件の紳士は消え失せたさうである。日本にだつて今にこんな珍談もおこるであらう。

されば樂しみはたゞ神の御恵みにより、よき戰ひを爲し得たると云ふ一事だけで、正義の爲めに働いて疲れた夜の寢心地の又なくよいものであるさうな。

▲血にて救はれし婦女

「弱き者よ汝の名は女也。」

その弱き女を食物とする惡しき階級が此社會に現存してゐる。娼妓と稱するものが、吉原に何千と蠢めいてゐる。彼らの多くは決して好んで賤業に從ふものではない。救世軍はこれを救はうとして、三十三年八月今の山室中佐が中校の頃、同夫人受持のもとに開始した。大いなる決心を抱いた一隊が、彼らを自由廢業せしめん爲め、吉原に繰り込むで演説した處、下等なる妓夫、その他に迫害されて、石を投げられ、棒切にて打たれ、山室中校始め、負傷者數知れず、婦人連は宅にあつて、その傷の手あてと救ひ出したる娼妓の身の上の世話に忙殺された。雪白の繃帶物々しく、復た吉原で野戰をする。傷の上に傷が出來る。太鼓は破られ旗は折られ、果ては本營が燒討されさうな騷ぎとなつた。この難局を斬りぬけ／＼て、血によつて救はれた娼婦連を集めて、東京婦人ホームなるものが出來たのである。

▲惱める者よ來れ！

麻布區廣尾町三十五番地、電車通りを離れた横町に

廣けれども荒れたる一と構がある。街燈の文字は鮮やかに「救世軍」

これが東京婦人ホームである。悲しめる者よ來れ、さ迷へ苦しめるもの悩めるもの、捨てられたるもの、不平なるもの來りてわが温かき團欒に入れとばかりに、朝夕洋々たる讃美歌が靜かなる場末の空氣に響く。記者は一日猛風怪雨をついて行き、小校鷲見鶴子女史から色々の物語りを聞いた。

救世軍女士官の前身には看護婦とか、小學教師とか云ふ風なものも多く、中には女學校卒業の者もあつて英國へ留學さしたのもあるが、此婦人ホームへ來るのは、自由廢業の妓、夫に捨てられたもの、苦學せんとて家出したもの、虐待に耐へ兼ねて脱走した工女迚などある。工女の中には色々の吹出もの。夜になれば齋團を濡らす者もあつてキタない事夥しい。無論自ら來り投ずるのと、警察からつれて來るのとある。

これらをチャンと身奇麗にさせて、朝夕導き、字や縫物を敎へるのは中々骨だ。シダラク千萬な者、ヤンへ入れば遊んで食はせてもらへると思つて來たもの。多少の仕事をさせられるを忌み、逃げる者、ガヤ〳〵ゴチャ〳〵大變である。それでも幸ひに心を入れかへ藝をおぼえて嫁入りし、乃至は下女に行つてその儘收まるのも多い。年齡は十二三より四十位までゐるが、十八から二十一二までが大部分を占める。かつては函館にもあつたが、今は閉鎖され、大連にも一つ婦人ホームがあるさうだ。

▲生れかはつた娼妓

千葉で廢業した一娼妓は、數ヶ月仕込まれて、或人の許に嫁した。以前の馴染客が酒樽提げて訪ひ來り、「どうだ久し振りで一杯願はうか」と云つた。案外にも女から「妾は以前の妾ではなく、夫のある身、而も今は留守です。お酌なんか御斷りです」と答へられたので膽をつぶし、「それでは座敷だけでも」と折り返して頼むだが「こゝは貸座敷ぢや御座いません、救世軍のお世話で結婚した時嚴重に禁酒の誓を立てましたか

ら酒一滴たりとも、この戸口から入れる譯に參りません!」とエライ見識、嫖客先生消えるが如く逃げて仕舞つた。

又たある婦人は不義して夫に坊主にされ、小指を切り取られたのであつたが、婦人ホームでスッカリ人間を改造せられ、髪の毛の稍〻舊に復するの後、再び前の男の許に歸つた。切られた小指はアルコール漬にして永く〳〵保存し、邪惡の心おこる毎に神の御名を呼び深い正しい生涯を送る事を祈つた。今は小兒も出來て善き月日を迎へて居る。

野州の某遊廓出身の娼婦は堅氣になつてからは大の信者となり、飯を炊く折、思ふ樣に火が燃え移らぬと、一生懸命。

「神樣どうかシンのない御飯がたけます樣に、エスキリストの御名によつて願ひ上げ奉ります、アーメン」

と眞顔でやつてゐた。

京都の一娼妓は遊廓をぬけて姉と一緒に江州彥根まで落ち延びたが、汽車賃が盡きた。そこで、賣り食ひをし乍ら徒歩で上京し、芝口の救世軍に收容された。これを傳へ聞いて國元の老母は喜ぶまい事か、毎朝東の空を向いて、拍手打つて、

「南無大師救世軍の神樣。」

と拜んだ。此女今は京都の堅氣の商人のおかみさんとなり、小隊の兵士である。

▲蘆花氏を慕ふた娘

今年の三月頃、神戸の交換局か何かに勤めてゐた十六になる小說好きの小娘が、同氣相求むる仲間と小說の購讀會を組織したが、讀むに隨つて尊敬の心を深くするのは、蘆花氏の著書――わけても「不如歸」であつた。一つ此樣に自在の筆を振つて見たいと考へたのが始まりで、とう〳〵思ひつめては矢も楯もたまらず、金五圓を懷にして家を飛び出し、小娘の獨り旅、五十三次の汽車ゆられ〳〵て新橋に着いた。敬慕する蘆花氏の幽居は北豐多摩郡の粕谷と聞いたばかり、新

宿あたりの夕まぐれ時をウロ〳〵し、泣きさうになつてゐるのを巡査に怪まれ、果てはそれと知れたので、取り敢へず婦人ホームの世話になる事となつた。

鷲見小校がつれ歸つてよき樣に云ひ慰め、文章家になりたければして上げるから、まづ第一に勉强せねばならぬ。と二週間ばかり泊めておいたが、警察から親元へ紹介したと見え厚く禮を云つて御地で奉公にでも出して下されとあつたが、本人は急にホームシックをおこし、輕はづみを悔いて歸宅したいと頻りに賴む、親類の手前今更さうはならぬと兩親は拒むだが結局もとの鞘へ收まつた。

婦人ホームにあつたのは半月に足らない。シカシ一粒の種はその柔かき胸中に播かれた。機關新聞「ときのこゑ」を愛讀し、その克己の話に感憤し、先頃も身をつめて儉約し、金一圓を軍費にと送つてよこしたさうな。今、東京と、大連と函館の婦人ホームがあげたる事業の成績を合算すれば

一、收容したる婦人の數　九〇八

一、職業に就かしめたる人數　四九九

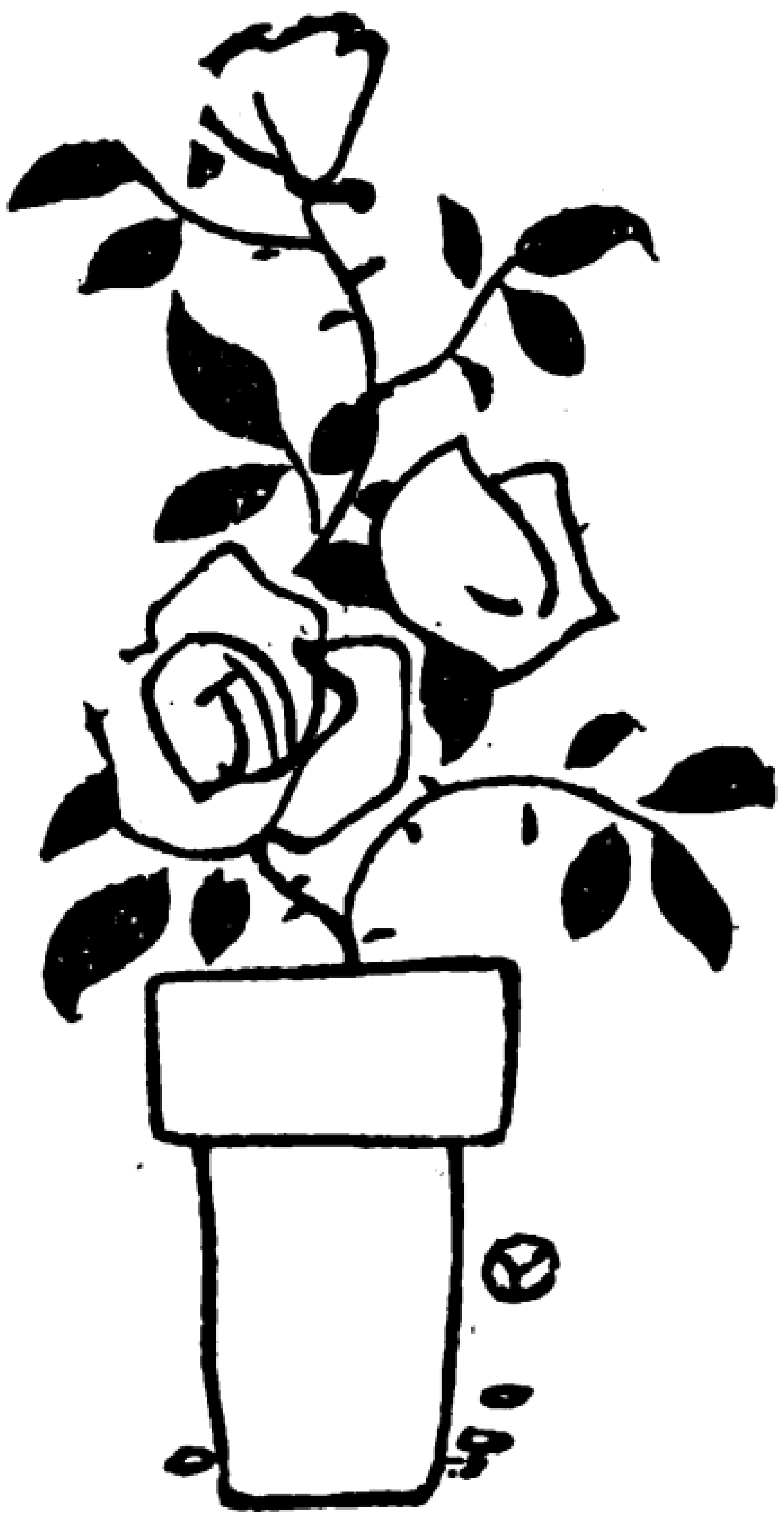
一、親戚知人に渡せし數　三〇九

一、不結果　七七

一、死亡　三

一、現在被保護者數　二〇

即ちこの社會に八百人の惡人の生ずるを防ぎ、その代り八百人の善人として世に出したのだ。爲めにする處なく、獻身的に働く救世軍そのものに、何人も感謝せねばならぬと思ふ。





嫁入前の一日

こほろぎ

　お湯から上つたら何だかもうがつかりして了つて、鏡臺の前にぺつたり坐つたきり立つのが嫌になつて了つた。私など何も忙しい事はなかつたのだが、今日は荷物を出す騷ぎに釣込まれて氣疲れがしたと見える。それに始めて島田に結つたもんだから何だか勝手が違つて、歩くにも坐るにも好加減氣骨が折れる。もう日が暮るのかしらん、お天氣の惡い故もあらうが此化粧室の暗い事、もう三月だといふのに今日はまた寒が來た様な時候だ、おゝ寒、さあ〳〵暗くならないうちに髮だけ搔て早く着物を着て了ひましやう、浴衣の儘でいつ迄も坐り込でゐて風でもひいたら大變だ、今日といふ日になつて。

　搔くと云つても眞實にまあ勝手が分りやしない、いいやどうせ又明日は結ふのだから、ざつと廻りだけ搔ておきましやう。お湯に入つたらすつかり癖が直つて我ながら鬘の様な髮つき髱つき、成程島田といふ髮はいゝ髮だ、こんな事ならもつと早くから結つて置いてもよかつたのに、私の様な者が島田になんか結つたら嘸見つともないだらうなどゝ、とんだ取越苦勞の爲に損をして了つた。一昨日、色替の方の振袖でお暇乞に廻つた時も、島田で花笄をさしたら、どんなに引立てよからうと母樣がくどい程仰つたのを、嫌だ〳〵つてカムレットで行つたもんだから、お口の惡い元園町の叔母樣は、ハイカラのお嫁さんだなんて冷かされて了つて。だけどもほんとに似合ふのかしらん、可笑かないかしらん、自分ではいつ迄も子供のつもりでゐるけれど、私もゝう廿だもの、結つて見りやまんざら似合はないといふ事もあるまい。あゝ〳〵いつの間に廿になつて了つたらう。此間迄は廿々と云はれる度に何

かの間違ひぢやないかなどゝ思つてゐたが、かうして髪でもちやんと出來て見ると、やつぱり年だけといふ樣な氣にもなる。考へて見ると夢の樣だ、此室も狹つて向が惡いので、學校へ行く時分は毎朝君ちやんと寒いの暗いの肘が支へるのとよく文句を云つたつけ、さういへば君ちやんは頭痛がすると 云つて鼻をぐつぐつやつてゐたつけ、風でも引たのかしら、一緒にお入浴なさいお入浴なさいと肩を搖つても、机に突伏したきり動かないんだもの、どうしたのだらう、お寒いさつさと着物を着て了ひましやう、そろ〳〵御飯になるだらう。さう〳〵明日はごた〳〵するからつて今夜赤の御飯だつた。あゝ私一人の爲に赤の御飯を炊て家内中が祝ふ――、さう思ふと嬉しい樣な亦恐しい樣な今迄は何處にあるか分らなかつた私といふ人間が急にかつきり浮出して來た樣で、ほんとに母樣の仰る通りもううか〳〵しちやゐられない。泣ても笑つても今日ぎり――今日ぎり――、私の生涯に一劃線が引かれるのだ。倉島の娘――お嬢樣生活の今日が最終、明日から新らしい生活に入る――、何だか嘘の樣だ事、自分の事の樣な氣がしないわ。全體世間の奥樣方は必ず一度はかうした場合に臨むのだが――、現在母樣がかうした場合を經ていらしつたのだが其時はどんなお心持だつたらう、私は去年、此縁談の始りに旣に驚愕、當惑、羞恥、理想 抱負やあらゆる想ひといふ想ひを掻き亂されて了つて、それから見合だの結納だのと段々上りて今日の荷物送り迄運んで來た故か、今となつたら別に考へる事もない。あ、また坐り込んで了つた。

「ハイ〳〵今行きますよ。」

餘り長いもんだから、どうしたかと思つてさきが見に來た。

茶の間へ來るともう一同がお膳に着いて、私の坐るのを待つてゐらつしやる。尾頭附きのお刺身だのお膳が何だか餘所行じみてゐる。亮ちやんは待兼てもう始めてゐる。母樣が小さい德利でお燗をしてゐらつしやるから私に飲ませてくれるのかと思つたら父樣が召上るのだつた。私の頭髮を君ちやんが珍らしさうに、し

けしげ見てゐるかと思ふと唐突、
「姉様お綺麗よ。」
「何云つてるの君ちやん、先刻姉様があんなにお湯にお入んなさいなさいと云つたのに何故すねてゐました、」と云つたら悄氣返つて了つた。母樣が、
「何ですね姉さん、今日になつて泣喧嘩をしちや困りますよ、」と仰ると父様が、
「いゝさ、なあ、喧嘩もいゝお名殘だ。」



私は默つて君ちやんの方を見ると、變な顏して下向いてゐる。私も變な氣持になつて了つた。
誰も出て來ないから私がお給仕しましやうと云つてゐる處へはつがお汁をつけて來た
「やあ此處にもお嫁さんが來出たな」と父様が仰るから何かしらんと思つて振返つて見るとはつが丸髷に結つたのだ。明日のお供はさきにしやうかはつにしやうかと母様迷つてゐらしつたが到々はつに極つたと見える。

大變老たけれども尤らしくてよく似合ふ事。やつぱり極りが惡いと見えて、柄にもないしなをしながら、

「降つて參りましたね、」と下を向て了ふ。

「やあ遂々降つて來たか、明日降られると千駄ケ谷まで大變だぞ。」

「でも却てようございます、見られなくつて、」

「なる程、さういふ便宜もあるのか。」と父樣も母樣も大眞面目だ。かういふ時に笑つていゝものやら惡いものやら解らなくつて妙に身體が固くなつて了ふ。

御飯が濟むと例の樣に思ひ〳〵の雜談が始まる。亮ちやんが何處で聞いて來たか、西洋花の栽培法を生意氣な口つきで父樣にお講釋してゐる。君ちやんもすつかり御機嫌が直つて、相變らず剽輕な事ばかり云ふ。父樣母樣は如何にもがつかり遊した樣にお元氣がなくさうだらうつて、此五六日は特別忙しくつて、御飯を召上つてもお箸を置くと直ぐお起ちになる樣な取込方私も何だか馬鹿に氣忙しくなつて一人で胸を躍らしたり鬱ぎ込んだり、取留もない考へ事などしてゐたが、もうすつかり用が片附て、かう落付て皆で面白い話しをしてゐると、やつぱり私はいつ迄も此家の人で、今日を限りに永く此家庭を去る人の樣にはどうしても思はれない。然し明日から新らしい家庭へ移つて、新規のお母樣と――何と――、こんな工合かしらあんな工合かしらと、一時想像がつきかけると直ぐまた他の考へに外れて了ふ。かねて、いよ〳〵明日となつた其日にはまあどんな心持だらうと、怖い物でも覗く樣にそつと想像して見ては胸を躍らしてゐたが、さて其場になつて見れば割合に思つた程でもない。下婢共はしやあつくなお孃樣だと思つてゐるかもしれないが、私は恥かしさうな樣子やそは〳〵した所を人に見られるのは心の底迄見透される樣で嫌なのだもの。

父樣が時計を見ながら、

「風呂が明てるんぢやないか？　一同入つたのか、」と母樣に仰ると、

「あ、さうでしたねえ、何だかもうぼんやりして了つて、」

「さうだらう御苦勞だつた、まあ湯にでも入つて疲れをぬいて早くお寝なさい。今夜は家中早寝にしやうぢやないか、一同疲れてゐるだらうし、明日は餘程手廻しせんと道が遠からなあ。」と御自分もがつかりした様に欠伸ばかりしてゐらつしやる。

母様がお湯殿へゐらつしやると、

「私も入つし來やうや御一緒に、」と君ちやんがのこのこ起つて行く。其位なら先刻入つて了へばいゝのに。

父様はお眼鏡を持つて御書斎へ入らつしやる、亮ちやんも勉強室へ退く。明日一日ぐらゐ休めばいゝのに試験前だからつて、あの子も勉強家で感心だけれども、父様に「え、どうしても休めません、」なんて餘り頑固な云ひ方だわ。



時計を見ると八時になりなんとしてゐる、女部屋で何を話してゐるのだか大さうしんめりと低聲でべちよべちよ云つてゐる、明日、明日といふ聲が異様に胸に響く。

うつかり束髪のつもりで亂暴に掻かうとすると髷が支へて、根の方が痒いけれども簪も屆かない。

茶の間には私一人ぎり、立ちかゝつた火鉢の火を繼がうともせず、別に何を考へるといふでもなく首を据ゑてぼんやりしてゐると、座敷の方で父様がお呼びに

なる。ハイと起つて行くと、二の間に所せく並んでゐた荷物がなくなつて八疊敷ががらんと廣い。父樣に何か言はれるのぢやあるまいかと思つて、はつと足が竦んだがどうも仕方がない。おづ〳〵唐紙を明ると、掛物の外したのを巻いてくれと仰るのだつた。掛替へられたのは榮川の筆の三幅對、一番御秘藏の幅である。一體家の座敷は極り過てゐて少し寂しい樣な趣があるが此三幅對が掛るとずつと床の間が引立て賑かになる。今朝お花の先生が來て活ていつた紅梅が何ていゝ枝振りだらう、私などは免狀ばかり麗々と持つてゐて、先方のお姑樣などが何と思めすだらう。

さきが來て、

「外戸屋の親方も參りました、」といふ。

「あゝさうか、上といつてくれ、あゝ茶の間で宜しい、」と父樣はいつてお了ひになる。如才ない親方で、

「今日は誠に有難うございました。生憎降つて參りたが然しお荷物が行着てからで結構でございました。彼方樣からも各自に頂戴致しまして、誠にへえ、へえ、」

などゝ切口上で述立てゐる、明日の車の事を父樣が種種交渉つてゐらつしやる。

大して降りもしないが、しと〳〵地雨になつたと見えて單調な雨だれの音が續いてゐる。火の氣のない廣い座敷に一人ゐても仕方がないから二階の部屋へ上つて行くと、机を片寄せて床が二つ、君ちやんのと並んでとつてある、一人先へ寢る譯にも行かず、さうかつて別に爲る事もないから机の抽斗を明て見たが古い鉛筆が轉つてる位で何にもない。君ちやんに與るつもりで殘して置いた繪端書を更に撰分けて五六枚破る。そこへ君ちやんが寢衣で上つて來て、

「あら酷いわ姉樣、下さらないの？、」と泣きさうな聲でいふ。

「大丈夫あげてよ。だけども見つともないのだけ破いたの。禮子さんや國子さんのは隨分をかしな事が書いてあるから、ね、さ、ぢや是だけ君ちやんの抽斗へ入れといて上るから安心してお寢なさい、」と云ふのに何か物足りない樣な顏をして、

「え……、いよ〳〵明日ねえ、」と溜息を吐てゐる。

「いやな人ねえ、早くお寝なさいよ、」と云つてもぐづくづしてゐて寝ない。何だか可哀想で妙に心細くなつて來た。

君ちやんとは寝るにも起るにも勉強するにも始終一つ部屋で、隨分喧嘩もした。私も年がひもなく、むきになつて、時によるとこんな妹なんぞない方が餘程いゝなども思つた事もあつたが、今になつて姉妹の樂しい味が眞實に解つた。私の方は是から新境遇に移る樂しみ——といふものもあるけれども殘される方はどんなに寂しいだらうと思ふと、もうお嫁になんぞ行くのは嫌になつて了ふ。



「君ちやん、姉樣千駄ケ谷へいつても日曜や何かにはちよいちよい遊びにいらつしやいよ、學校の本なんかも解らない處があつたら、持つて來りやいつでも敎へて上るわ。」と

優しく云つてゐる處へ母樣が上つていらしつた。

「をやまだ起てるの？　君ちやんはそんな薄着で湯冷がするよ、明日のリボンや何かはちやんと揃へて有ますか。先刻も母樣が云つた通り何にも悲しい事はありません。遠くへでも行くのぢやなし東京の内だもの、いつでも遊びに行かれるし、姊樣も來るだらうし、ねはゝゝゝゝ君子は十七になつたんぢやなかつて？　そんなに泣く人があるもんですか。」さう仰る母樣も少しお聲が曇つてゐる。君ちやんは「うん、うん、」と頷く度に淚がぽと〳〵膝の上へ落る。私一人超然と口の中でコチロンを唄ひながら机の緣を爪で彈いてゐるけれども、うつかりすると淚が零れさうになるそれを見られまいと思ふと、母樣の此處にゐらつしやるのが非常な苦痛で、早く下りていつて下さればいゝなどゝ、相變らず我儘な事ばかり思つてゐる。

　やつと、「ぢやあね、姊さんも氣を落付けて早くお休みなさいよ、」と下りてゐらつしやる。私は益々瘦我慢がしきれなくなつて、君ちやんと手を取合つて泣いて了つた。

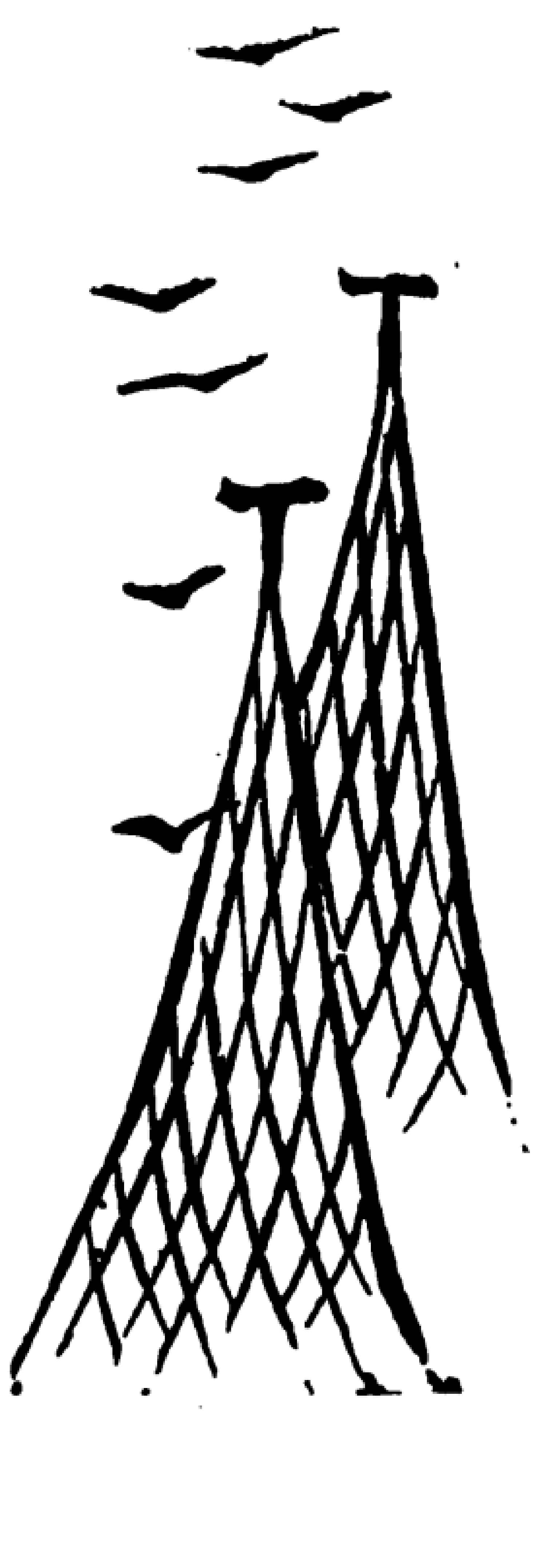
　今一時を打つた。どうしても眠られないから又起きて電燈をつけた。

　今夜は家内中早寢にすると仰つたのに、下婢共はやつぱり晩く迄起てゐたと見えて、女部屋の囁きが耳についてゐたが、それも疾に靜まつて雨だれの音のみが滴々と寂寞を穿つてゐる。君ちやんはあんなに泣たのを忘れた樣に好心持さうにすや〳〵眠つてゐる。前髮に癖が附くと云つて氣にしてゐたが寢た格恰といふものはありやしない。枕を外してまあ何といふ寢相だらう。然し無理もない、學校へ行くうちは運動やら勉强やらで、夜はぐつすり疲れるから。私だつて去年迄はさうだつた。學校へ行かない人が羨しくて〳〵、早く卒業して了つたらどんなに樂でよからうと思つてゐたが、あゝもう一度學校へ行く樣な身になつて見たい。あ。また時計が鳴る。あの時計があゝして二時を打ち三時を打ち、夜が明け晝になつて私を晴がましい玄關

先へ運んで行くのだ。時の力ばかりは如何しても爭ふ事が能ない。海軍〱と云つてゐた私が陸軍の軍人へ嫁く樣になつたのも仕方のない事で、またさう極るとよくしたもので、陸軍の方が好になつた。往來で立派な將校などを見ると馬鹿に注意が惹かれてかう——一種の感じが起る。あのお姑樣は九州辯のはき〱した物言ひで一見確乎した方らしいが、私の事を大變ほめてゐらつしやるつて、ほんとかしらん。山崎さんは噓をつく樣な方ではないけれども——。山崎さんといへば、あの奥さんの事だから明日は嘸おめかしだらう。私はお媒妁といふものはもつと年をとつた人に限るものかと思つてゐた。私の平常のお轉婆をよく御存じの山崎さんに、改まつた恥かしい處を見られるのは極りが惡くて嫌だ、ほんとに辛い〱、それが何より辛いどうしたらいゝだらう。去年御一緒に本郷座で喜劇を見た時私が、「お轉婆なお嫁さんだ、」と笑つたら、「あなたは御婚禮の時にあんな事しちやいけませんよ、」なんて笑談を仰つた事があつたつけ。私が伊井の繪端書を澤山買つたのも御存じだ。其方にお媒妁されるのかと、思ふとあゝどうしやう〱、胸がどき〱して汗が出て來る。あゝ苦しい。

餘り幾度も寢返りをしたもんだから島田が壞れて了つた。さあもう寢なくつちや——。あゝ〱もう今夜ぎりか！　氣を落付てよく眠ませう。

いろんな事が頭の中でこぐらかつて、何が何だか解らなくなつて了つた。今度こそほんとに寢ませう、



針もついとま

野菊女

竹になりたやしちく竹にもとは尺八中は笛末はそもじが筆の軸……●

「……冥想少時、忽ちにして筆をとれば、そこに玉の聲ある詞の花さく……。妙齢佳人の纎手に握られて……」

「オイ〳〵朝つぱらから、何、譫言云つてるんだい……。そんな、襷がけで雑誌なんぞ見て……」

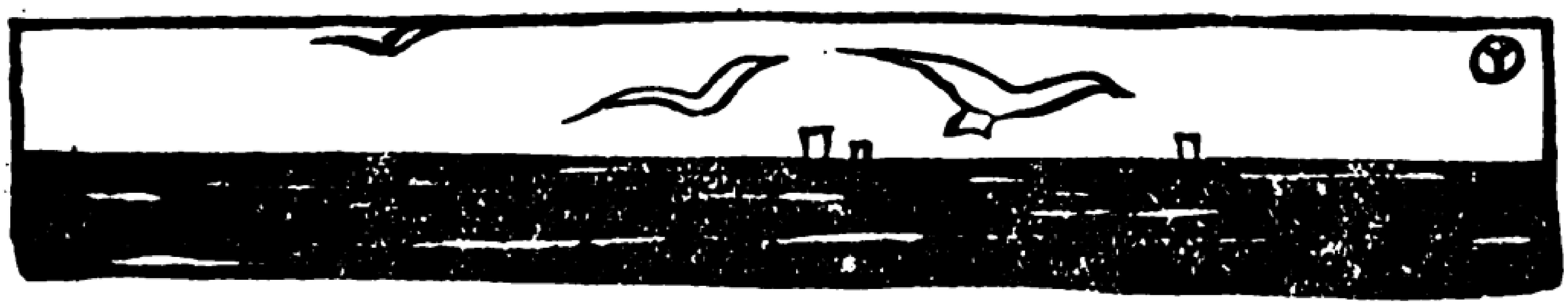
「まア驚いた……、貴郎こそ、どうなすつたの？　けさに限つて起されもなさらないでこんな早起……、私どつさりお洗濯物があるのに、又降られると困りますわ、おほゝゝゝ」

「オイ、だからお前はまだ寝呆けてるといふのだよ、も一度顔でも洗つてきて、時計をごらん……！」

言すてゝ、良人はさつさと、手拭さげて井戸端へ出かける。

ふつと時計を見ると、おやまあ……、もう七時過ぎてるのよ――

道理こそ、いつも「あなた、もう七時になりますよ、まあ遅くなりますから……、まあ」の百萬遍も繰返して、揚句の果には夜着引まくつてしまつても、夢中で頭を抱へて丸くなつて、ぐうぐう高鼾かいてなさる方が、ひとりで、ひよろりとお起きになる筈、まあ遅くなる遅くなる、けさこそ私がわるかつた。



全體又、いつにもなく、こんな早朝から、女學世界なんか配達してくるからわるいのよ、くれば一秒時も早く見たいもの……、片手に塵拂もつたまゝ、ばら〳〵とかへして見るとふつと目についた「懸賞の中日」、てつきりそれと急いで讀むとさうら御營遊ばせ……ね。

詩想縱橫、才華煥發、いづれを姉、いづれを妹、引ぞわづらふ花あやめ……、こゝに才媛の譽高き二佳人が、意氣相投じ、時機相到りて、初對面の握手の喜……、どんな光景であつたらふ？、あゝ私、其時、第三者として、ひそかに拜見の榮を得なかつたのを、殘念に思ひます。

さても電車の上下動、左右動につれて、紅美しき花の御唇ほゝ笑みながら、語り交し給ひしは、この數ならぬ野菊がことでムんすとや……。私、讀んでお二方様にお禮を申上げますわ。夏草茂る野の末に、あるかなきかの野菊が露……、よくまあお目にとめて下さいましたのね。しんぞ、こよなき光榮――、再びこゝに御禮を繰返しまする。

誠に以て、仰せの通り、ちと陽氣の加減かして、又候此頃の五月雨には、舌根震動のライスカレーぢやなくて、生實のヒス的で、胸がちり〳〵として居る際だつたもので、何だか沁々と紙上に嬉しくて、けさは貴郎、お恥しいお話ですが、例より二つ程多く、御飯のお代りをいたしましたのよ、おほゝ。

「けふもまた天氣は危ないな」といひ〳〵、良人は、重さうな雨具靴を引づつて、お出かけなさる。黒毛繻子の風呂敷包を小脇に、霜降セルの夏洋服は、いさゝか午砲を過ぎては居るけれども、隠れ多くも○○公爵閣下に酷似し奉るといふ定評で、又の名を公爵と呼ばれて居る私の良人……。この品格を有しつゝ所謂、鼻たらしエンゼルのお守を以て、自己の天職と精勵して居る小學教師の君……。

御様やらは、——なんかと、罵倒遊ばしたけれども、其なんかの妻たる私の眼には、襟から後光がさしてるやうに、尊く崇く見えますのよ、おほゝゝゝ、妙なものね。

「御苦労様で厶います、お早うお歸り遊ばせ」丁寧にお送り申す。

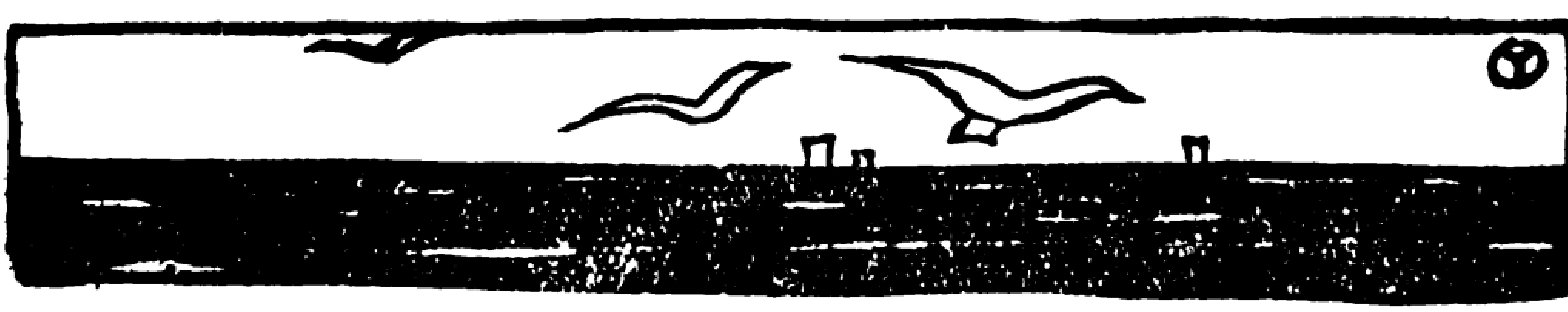
「あら、先生が！先生が光ちやんきいちやん、早くおいでよ、先生一緒に行きませうよ」

「先生——ッ、校長先生——ッ」

カラ〳〵コロ〳〵、小さい下駄の音が入りみだれて、木・色のリボン、すみれの袴、元禄袖、五六人の可愛いのが、跡を追つて、青葉の横道を駈けてゆく。

門に立つて、ぢれつたいやうな白はえの空を仰いでゐる耳もとへ「郵便」

置いたつてなんて、思はず「アア」といつたら、憎らしい……



若い異國人がクス〳〵笑ひながら、革嚢並べてスメ〳〵〳〵！

まだ禅定にこそ入り得ないが、事にあたつて、飽せぬ工夫は、折にふれて試みて居るつもりの私も、こんな鄙夫の一撃食に蜜ぐやうぢや、いざ鎌倉といつたつて、物の役に立つべうともほえず、心細くもまた、なかしき次第なりけりだ。

肝を冷やした一撃が齎らしたものは、遠く布哇の丘上に、瀟灑のホームをつくられた、君子夫人からのと。花枝さん（夫の妹）の例の美しい自筆の繪端書。もう一封は、杉本の伯母さんのお手……、お家流の水の流るやうな筆の跡で「——子どもにと、例ならず大へん分厚の……、美文句らしい。

ゑはがきは、ちよつとかいた花菖蒲だが、どことなく、粋粋として、げに其姿らしいゆかりの色、隅にちひさく花として此間贈つてあげたものゝ、お禮状だけれども、字も美しいし、中々氣がきいてゐる。此筆法でもつて、海のあなた、テキサスの野の約婚人に、血汐は燃ゆる甘い囁きをこめた、ラブレターを通はすのかと思ふと、我義妹ながら、何だか妬ましいやうな氣がする、おほゝゝゝ、まあ私としたことがー、これも矢張陽氣の加減かしら。

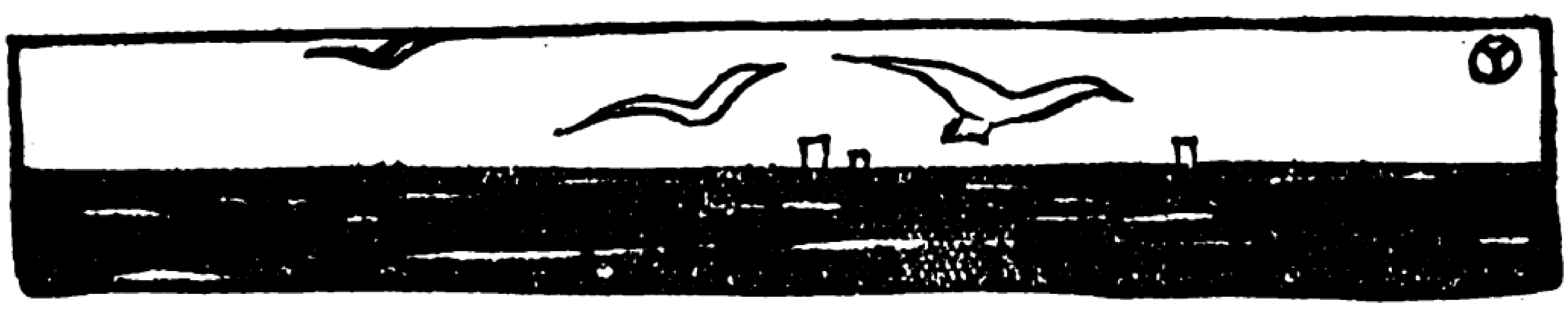
久しく、お便りがないと思つた君子夫人は、長く病床に臥しんで居られたとのお文だつた。いつぞやのお便りにも、いかなる風土の關係にや、當地在住の日本人は、日を逐り年を重ね

候につれ、追々と皮膚の色、蒼白を呈し來り、終には指など候づけ候て、中々血も出でざるやうに相成り申候。さる人の申候には、こは、こゝなる黒鏽色なせる土壌が、赤血球を吸ひとり候ものとか、氣味あしう存ぜられ候……」

なんて、いつておよこしになつたことがあるが、とう〳〵、そんな熱病なんかに、犯されなすつたと見える。異邦にあつて、お夫婦揃つて、重い枕につかれた折の感慨……まあ、どんなであつたらふとおいたわしい……。とりあへず、鳥渡御見舞の手紙をかいて遣く。

伯母様のは、いやに長いお手紙と思つたら、大へんなお叱り文句なの！。

「さのふ五月雨のつれ〳〵なるまゝに、淑子が机のあたりより一册の女學世界もてきて打開き候處に、はからず御身が署名ある、何とか日記とやらんいふを見いで候て、眼鏡の曇、拭ひもあへずよみゆき申候」とあつて、「何と申す、たしなみなき筆の跡にて候ぞや、人の妻たる身にして、あだし男か女かしり申さず候へども、とに角に、男性らしきものなどゝ文通いたし候さへあるに、其事柄をあからさまに我名の下に雑誌に掲げられて、多くの人々の目にふれしむるとは、返す〴〵も、つゝましからぬ振舞、これこそは其の妻君がものしたるよなど噂せられては、賢様(夫の名)の御名にも、さしひゞき申すべくと、口惜しうこそ候へ……」と、それから例の女大學やら、新大學女訓やらから、いろ〳〵の訓言をひいて一般今の世の女性が、放縦になりゆく様を痛歎してある。



ほんに伯母様のやうに、○○家の奥に奉公して、堅固な武士氣質に鍛へ上げられ、二十年來の寡婦生活に、人から後指もさゝれないで、二人の兄妹を御養育なされた方としては、こんなに憤慨(？)なさるのも御無理ぢやない。それにしても、あのふたりの子達に、當世の學校教育など、うけさせなさるのが、寧ろ、をかしいやうだ。更に又、此伯母様のお胸から、精さん見たやうなハイカラさんが、よく生れたものだと、一しきり感心して、くる〳〵と迸らした墨の匂ひを香返して見る。

今までにだつて、偶には此雑誌御覧になつたこともあらふ、野暮といはれた分ぢや、お分りにもなるまいに……、何だつて又記者様は、あの文に、私の名なんかおかきになつたのでせう……、おうらみ申しますよ、おほゝゝゝ。伯母様も又伯母様ねえ、えりにえつて、そんなの見ないたつて、精さんのお嫁さんの候補者でもお見つけなさればよいのに、おほゝゝゝ、どなた？、だれがあんな方に……なんて、仰しやるのは、おほゝほゝ。でも、親身つてありがたいものね、こんなつまらぬ事でも、伯母様なればこそ、これ程にむ配して、こんな長い手紙もおかきなさる……、あだに思つてはすみませんわね。

精さんはもう山へ出かけたさうな、一つ此顛末を報告してやらふ…かと思つたけれど、又、くだらなく痛快がられるのも口惜しいから、止めにしやう。

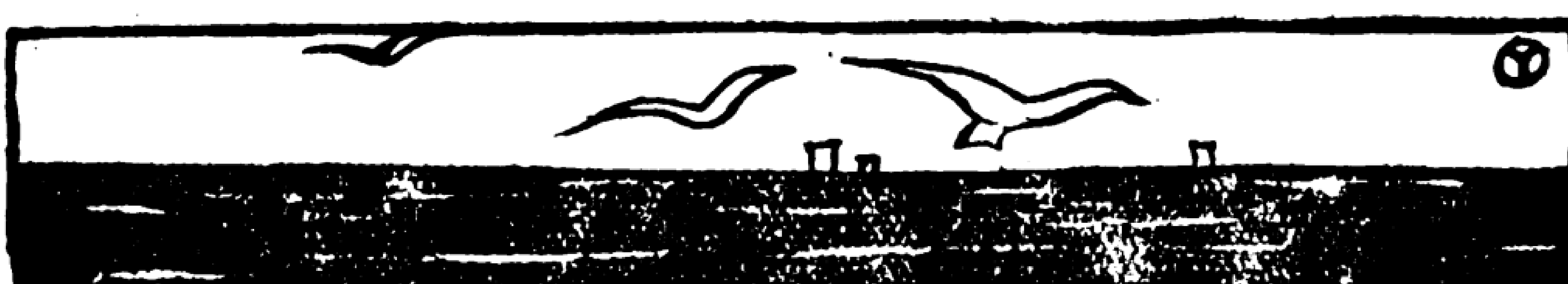
やつと干いた洗濯もの、露を吹いて疊んで居る所へ良人が御帰りになつた。早速、伯母様のお文をお目にかけると「フフム」と、笑ひながら繰返して、「伯母様は中々の學者だねええらいものだ、條理井然として眞情流露、「ぶるな」との誡め、只、良人に侍づいて、柔順貞淑なれと諭すあたり、殊に我輩の意を得て居る。野菊たるもの、夫、拳々服膺すべしだね」鬚を捻じて昂然たる體…、失笑してしまふ。

○

彼、綠野に鳴り歇みて、水無月風なく日は熱しぬ。

けふは、こゝの天王祭日。

ことしは不景氣だとやらで、例だんの附祭りや、興行物などはないけれども、でも午頃からは、大分、通りの人足が繁くなつて、美いちやんきいちやん、メリンス友染の長い袂などひらつかせて、軒提燈花やかな邊で、嬉々として遊んでゐる。もう町内の若衆連は揃ひの浴衣勢よく、深めの入浴に出かける。けふは錢湯では、神輿の若衆に限り入浴謝絶の接待風呂…。家主さんの茂ちやんが緣側に寝轉んで何か「よう、よう」と鼻をならしてるから「なあに…、茂ちやん



ときくと、お母さんが「ナニ今ね、これがいゝきものを着せてくれるつていゝますから、お前そんないゝのをきてるぢやないかつていつたら、こんな黒いのでなく白いのを出してくれといふんですよ」と笑ふ。見れば、新らしい紺飛白に、絞りの兵兒しめてゐる。「おほゝ茂ちやん…、白地でなくちや、いゝきものぢやなの?、」と顏を覗いたら、尋常五年生、眞赤になつて裏の方へ逃げてゆく。男の兒でさへこれだもの、女の子たちもつてる親達が、無理算段するのも尤ですねえ。…かうした子供達の、無邪氣な樣を見たり、よく親父樣に似てるとか、お母さんそつくりだとか、それ〴〵その家特徴の血を傳へられてるさまなどを見ると、何だかかう、一種の淋しい感情が胸にせまつてきて…、ふと熱い涙が頬をすべつて落ちる…。あはてて袖にそつとかくして傍をむくと、お松さん(若主人の妻)が、うつとりと筋向のお京ちやんの、愛らしくお化粧した、人形の樣な姿に見入つて居る。あゝと大息したら、驚いて振返つた目は、怪しく光つて見える。

「ねえお松さん、晩にはそこらまでいつて見ませうかね」

「えゝお伴いたしませうよ、詰りませんものねえ、奥さん…」貴女も、もう嫁らしつてから六年目でせう…。私は七年になりますのよ…」

と、お松さんは木に竹をついだやうなことを云つてる。

「あ、あ、千代ちやん!!、浦島のちいちやん!!、」

あはたゞしく女中のきちが指す方……、おゝ美神—、小町娘と名をとつた、人の十九の夏姿……●

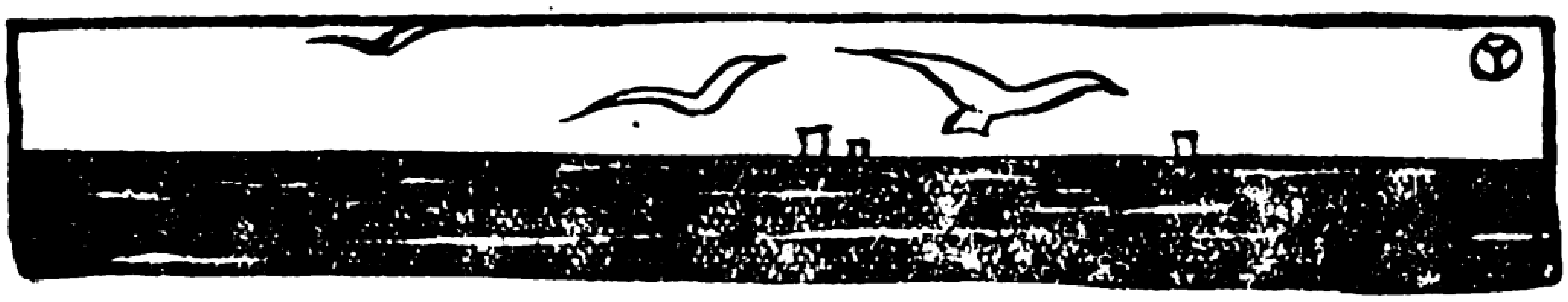
「ほんとにいゝ器量ねえ……、どうしたらあんな美しい人が生れるのでせうね、羨やましい……」

「いつ見ても綺麗なのは、よござんすわねえ……、僕だつてあの年頃にはね……、おほゝゝゝ、廿過ぎも、もう五となつちや、ほんとにだめですね」

お松さんは憮然として、あてどもなく、物を探るやうな目つきをする。

あゝ青春の花蔭に、我世の栄を誇つた少女のほゝゑみが、こゝには七年、やゝにあせゆく双頰の、この面影を誰に遺さんよすがもない、淋しい思ひに、なく身とならふとは……、夢かきのふの春—●

夕方早く入浴して、うつすりとはいた紅の露、おゝいゝかをり—、けさお隣さんに結はした丸髷の、薫入水晶の中ざし涼しげに光つて、翡翠玉の根がけに、クリーム色の手柄、鬢の毛ふわりと撫いて、うしろにそつと、小まい銀簪さしてゐると、もう蚊がぶん〳〵と来襲する。えゝ、こゝは「オホカ」様の[illegible]下、蚊の多いのと、葱の甘いのとは名物でムんすの—、おほゝゝほゝゝ餘り結構な名物でもムいませんのねえ……。



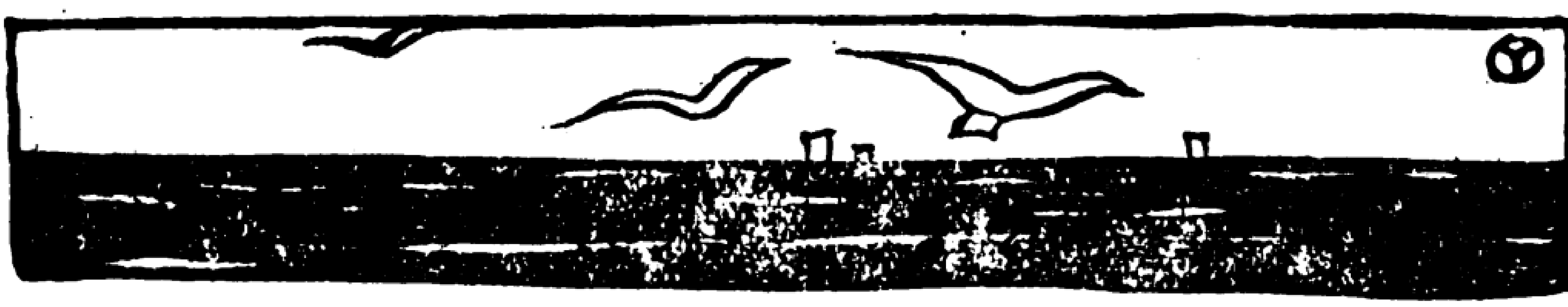
「奥さん、お伴いたしませうか。旦那様も……ね、おほゝゝゝゝ」

艶めかしい笑聲を先に、お松さんの美しい姿、けふは、むもち模の下つた銀杏返しに珠の根がけ、[illegible]の[illegible]は[illegible]の襟を健むが如しとでもいひたいやう……、わざと櫛も簪もさゝないで、すつと抜いた襟足は白く見う……、白地絞りの粋な浴衣に、水色の羽二重帯。

嫉ましい程、美しく水々しい人と並んですつと立つと、青葉を渡る夜風、爽かに袂を吹いて、ほんに氣も晴々とする。

白絣無雙作に着流した、夏人の後に續いて、通りへ出ると世はがらり變つて、今宵ばかりは歡樂の巷、白地、中形、浴衣、種々の衣香袂影も夜目遠目、見渡す限り、青々とした楓を押してうつた、軒提燈の赤い色、店々にきらめくアセチリン瓦斯の青い光りが、往きかふ姿を、くつきりと浮かしてゐるさまは、とんと、活動寫眞でも見てゐるやうだ、隣町近く、御輿の渡御する、アツシヨイ〳〵の聲々、木遣の方から聞えてくる風神樂のはやし、[illegible]、何となくざはめく人聲物音……、氷、氷、ひやつこい氷、氷と、手傳ひの男が客を呼んでる、よつちやんの店も大分繁昌、涼しさうな風鈴の音、玉簾ゆるぐ奥、赤毛

客の床几は、顔面も見えないやうだ。
○○呉服店の飾窓が、大へん美麗だといふから、いつて見る。
意氣で、美しい、お松さんと、肩を並べた根上りの丸髷、かう並んでいつては、僕は、とんだ引立役だけれども、醜い人と連立つたのよりは、どんなにか嬉しい、行違ふ人が振返つて見ると、何だか自分の事のやうに愉快でたまらない、殊に背丈も同じ様だから、背頁きもちがいゝんですの―。僕は一たい人と並んであるくのに、自分より背の高い人とでは、何だか無暗に、自分が小さくはかなく思つて、氣がひけて〳〵、泣きたいやうになりますの……、といつて、自分より低い人とでは、いやに威張つて、向うを見下してるやうでこれも嫌ひ……、妙な癖があつたものね。
ずつと片よつて、そろ〳〵ゆくと、隨分いろ〳〵の人がゆくくる、めつたにお店へも出ないやうな、大家の内儀さん達も、軒近く床臺もちだして、往來の人の足並をながめてる。
生花、盆栽などの陳列を見て、もう歸りませうよといふと、
「鳥渡れ、此間御祝儀のあつた、△△さんのお嫁さんを見てゆきませうよ」
「いやれえ、よそのお嫁さんを見たつてつまらないでせう、それよか、早く歸つて、此さん(お松さんの旦那樣)が見た方がよくつてよ……」と、小聲でからかふと、
「あら、いやな方―、あんな古顔なんか、ちつとも珍らしかありませんわつ」、どつちがいやな方なんだらふ、頓狂な聲を出すものだから、四邊の人が一齊に振返つて見て、きまりのわるいこと夥たゞしい。



アッシヨイ〳〵の聲が近づいて、ドドドーと人なだれ、提灯打ふる巡査が制止の聲も嗄れてしまつて、熱しきつた若衆は、白精粋に麻襷き、九十餘貫の大神輿を、あつちにアッシヨイ、こつちにアッシヨイ、アッシヨ〳〵、ドスーンと地響きさして、大地に投出しては呼吸をいれる。
汗の臭氣、油の匂ひ、ごつちやになつて蒸あついから人垣かきわけて踵を返す。人いきれでか、心持がわるくなつた、「ついやに頭痛すること……」と、僕がいつたら、お松さんが、「矢張れ、陽氣の加減でせう」……だつて。
雜家の前でか、休んだ神輿に、お御酒でもあげたと見えて、若い衆が歡呼の聲……、シヤン〳〵〳〵、ヨサイ、シヤ〳〵シヤンと、勇ましくしめる手拍子……。
角で、お松さんと別れて、薄暗い横町を曲ると、お寺の方から、ほろ〳〵と尺八の音……、また美羅りの雜沓を、知らぬ顔の……、誰だらふ心憎いすさびは……。あゝ、竹になりたやしちく竹……末はそもじが笛の軸、しめし香らせ咲がしく。(完)

産婦の心得べき様々の實驗談

産婆　西尾きやう

◎十五歳の初産と四十二の初産

私の取扱ひました内では若い初産が妙齢十五歳で、晩い初産が四十二歳でありました。十五歳の初産は並んで寢て居たお母さんが知らぬ間に蒲團の中へ産んで「母さん何か出ましたよ」と澄して居た位で陣痛は夢の間にすんだのでございます。四十二歳の方は手間取れたゝめ醫師の指圖に依つて掛りの産婆の他に私を迎ひに寄越したのでしたが、使の者が私の宿所を尋ねちがへて二時間もかゝり私が參つた時は産れ落たところでございました。初産の難易は年の多い少いにも依りませんが、先づ極若いものは組織が軟らかいために分娩時間の經過が早うございますし、晩年者は子宮其他の肉質が硬うございますからどうしても少し手間取る氣味がありませう。併し産の時間は長くても母兒に異りがなければ平産で、産婆が間に合ぬほど早く生れても母か兒に異常があれば難産でございますから年齢の强弱なぞで一概に難易は定められません。但し餘り若い内の胎兒は實入りが悪いやうに思はれます。

◎擔架の用意ある伯爵家のお産

上流の御家は何れもお産の支度が完全して居つて、私共が御用のいたしよいことは申上るまでもございませんが、とりわけ某伯爵家の御用意は實に綿密なものでございます。私が先達て診察に伺ひました際、奥方のお附の方々が「御用の品々はもう悉皆お倉庫から出しましたが、未だ擔架が出て居りません。擔架さへ出せばそれで不殘揃ひます」と仰つていらつしやいましたが、この擔架は分娩の時、若し地震とか火災とか不慮の變事が起つて咄嗟の間に産婦が避難と云ふ場合のためにお具へになつてあるのだ相でございます。そ

れから夜分のお産のために電燈、瓦斯、ランプと三種の燈火をお具へになり、是が消ればこれと云ふ風に用意が出來て居りますが、この他に燭臺が幾つも具へてあり、懷中電氣とか申して一瞬に點火する器械まで用意してありますから如何なる變事が起つても暗闇でまごつく心配はございません。而して産氣に向はれると電燈の他にお廊下へズーッと燭臺を置かれますので御用をするものは夜分でも眞晝と同じやうに立働が出來ます。こんな設備は皆殿樣のお考で、これ程行屆いた殿樣ですから奥樣の御姙娠中から産後の御攝生について遺憾なく御注意になつて居られます。四回のお産もお肥立も極スラ〳〵とお濟になりました。

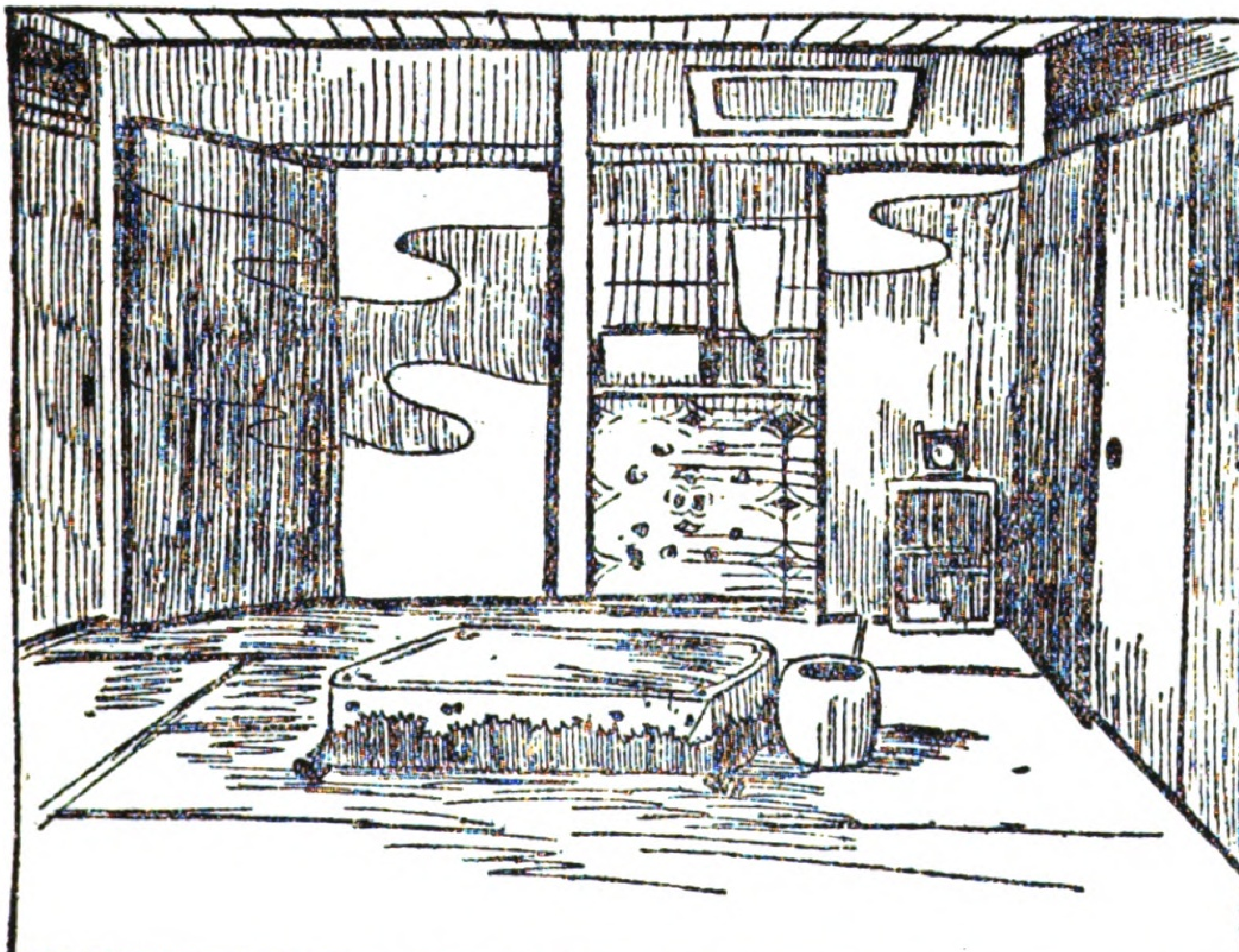
◎産婆が貧家を厭ふわけ

産婆が貧家を厭がりますとの唯慾一點張のやうに聞えますが決してさう云ふ次第ではありません。事實貧家は産婆の注文通りの養生が出來ませすし、無教育で無茶な眞似をいたし怪我が有勝でございますのにその惡い結果は凡て産婆に歸せられますので産婆が迷惑がるのも無理はないのでございます。助手の研究のためや内分の道樂で貧家へ參らうといたせばどうしても此方から衛生の準備を供給いたさければなりません。それでも往々災難を受て人に笑はれることがございます。牛込で[illegible]會を爲て居た婦人の産でしたが、餘り可哀相なのでお定りの分娩具、産衣、蒲團の他に手製の枕屛風まで車に積んで參り、月足ずの雙子を取上げましたところ、後で聞けば亭主は賭博專門の浮浪者で、酒狂ひを爲て妻を苦しめ赤子に邪慳にして私の與へたミルクも飮せぬと云ふ始末、それに一兒が死亡した時なぞは醫士の家へ怒鳴り込で困らせたり、妻も亡兒の埋葬料に差支えるからと私の處へ金の無心を申込みました。貸へば抱れうと云ふ相手にも往々出逢ふのでございます。

◎恐るべき乳房炎と産時の消毒

乳房炎は恐るべきもので、これが爲に一命を危くした産婦も往々見受ました。この原因は授乳の際、乳首に一寸傷が出來ます（俗に乳豆を吸出と申します）とそれから黴菌が入つて乳汁排泄口の焮衝を起し遂に四十度以上の高熱に上るやうになるのですが、産婦は惡寒と堪へがたき痛を起し手術を受けないと一命にかゝはると云ふ大事に立至ります。乳房が赤く腫出しても乳のしこつた位で捨置と取返しがつかなくなりますから專門の醫師に診察を受なければなりません。この病

氣にかゝるのは産後一週間目位からのこともありますが、三週間目位から起るのが多いやうです。これを豫防するのには授乳の度毎に乳房をよく掃除をして消毒した軟かい布でなるべく乳房を包んで置くのが宜しうございます。凡て黴菌は身體の衰弱した時に浸入し易いのですから産後には餘程注意が肝要でございます。便所へ往くことを禁じますのも子宮脱や出血を恐れるためばかりでなく分娩の際は裂傷がなくとも目に見えぬ微創は必らず出來るものだとお醫者が仰いますから便所の不潔物中の黴菌がその創面へ侵入するのを恐れるからでございます。産時黴菌に侵されますのは平常文筆とか裁縫とかにのみ親しんで運動不足の婦人に多く、農婦や荷車の後押女なぞは黴菌が入ても身體の勢ひで黴菌が死滅して了うのださうでございます。



室內裝飾（居間）

◎模範的の下流産家

衣服その他の虛飾に贅を盡して家族を優遇なさるやうに見えても眞の愛情なき御主人はお産のことなぞ冷淡なもので、産婦になる位な奴は藝妓の足許にも寄り附けぬ位に輕蔑して居られますから、萬事御用がいたしにくゝて、閉口するのでございますのに貧しく暮す勞働者

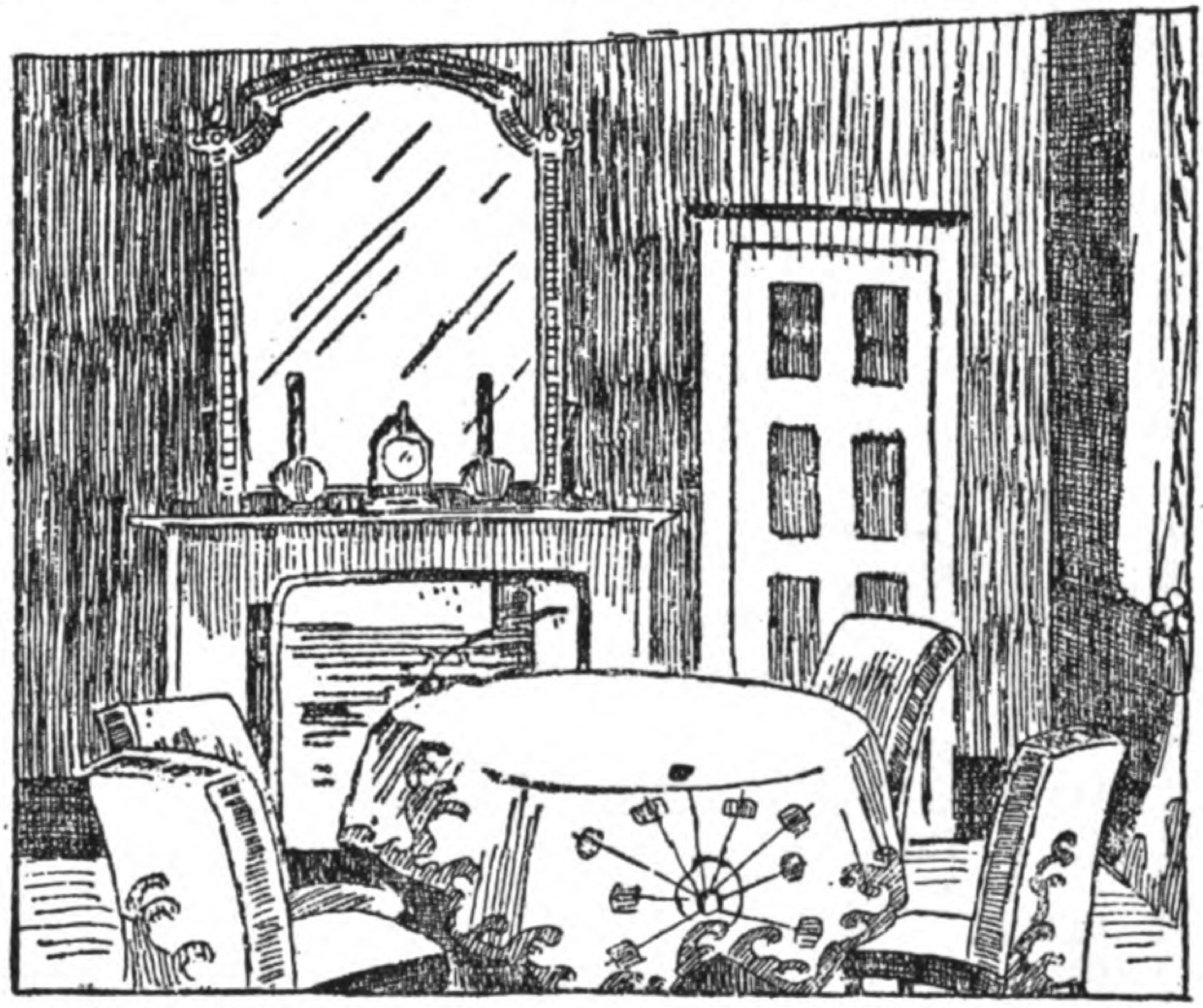
の中にも實に感心なのがございます。それは指ヶ谷町に住む砲兵工廠の職工ですが、平生人一倍精勤いたす代りに妻の產の時だけは必らず十日間休暇いたし、私の申す通り十日間產婦を便所へやらずに便器の世話をいたしますし、食物その他の手當も凡て私の申すことを守つて痒い處へ手の屆くやうにいたします。而して襁褓は勿論汚物の洗濯まで少しも人手を借らず子供の世話をいたしながら、忠實々々しく働らいて產婦を大事にいたすのでございます。今度で丁度六人目のお產ですがどの產の時もこの通り女も及ばぬほど優しくいたしました。かやうに親切な男ですから職務にも熱心で、妻を始め子供達まで誠に從順で誠が伏屋の内に春風が充ち滿つて居るやうでございます。

◎嬰兒の泣聲に對する注意

或家で女兒ばかりの中へ丈夫な男の兒が生れたので泣せるな〳〵と大切に育てゝ居りましたところ、七十日目位に風を引き咳嗽が強く風前の燈火の容體になりましたので、諦らめのため弘田先生の御診察を願ひますと先生が『この兒は何處も十分に發育して居るが肺ばかりは生れたての儘である。泣せぬやうに育てたのではないか』と仰つたので一同恐入つたことがございましたが、赤兒の泣のも或程度までは必要なものと存じました。併し餘り烈しく泣ますのは御腹が痛むとか小便が出て氣味が惡いとか襁褓の端で柔かな肌を刺戟するとか、附紐が堅く締てあるためとか何か原因があるのでせうから一通り調べて手當いたさなければなりません、若しお腹が痛むやうな樣子がありましたら灌腸して見るのが宜しく、それでも未だ痛めば蒟蒻を暖め、木綿の綿で包んでお腹を暖め、倘治らぬやうならばお醫者の診察を受なければなりません。又臍部の痛は一大事でございますが、衣服の上からそこをソッと撫ても烈しく泣くので分ります一體赤兒の泣度に搖つたり背中をたゝいたりして大人くなり又眠りますのは赤兒が本當に良い心地になるからではなく、腦や脊髓の神經が一時麻醉いたしますので、あの乘物でゆられる赤兒が必らずよく睡りますのもつまり昏醉するのでございます。優しい腦神經を度々しびれさせますと遂に異常を來すことになりますから御注意が肝要でございます。

◎樂園のやうな產家

今度で六回御用申上げます飯田町の某辨護士のお家も前の伯爵家と同じく御注意深いのには感心いたして居ります。矢張お產時の燈火は幾燭り用意されて鴨居に蠟燭が幾つも立るやうに工夫されてございます。夫から奥樣が便所で何か變事がおありの場合に大きい聲で人を呼ばれるのは身體に惡いと云ふので便所内にベルが具え付られてございますし、夏は旋風器や冷藏函を具えて凉風と新鮮な滋養品を姙婦におすゝめなさいます。又月が重つて奥樣の外出が億劫になりますと、珍奇な草花新刊の書籍は勿論、精巧な蓄音機まで具へて新らしい種を取かへ引かへお入れになります。御自分のお出入りは平生でも規則正しいのですが姙娠中から產後にかけては一層の注意をお拂ひになり、少しでもお歸の遲くなる折は必らず宅へ電話をおかけになると云ふ風で奥樣を大切になされます、奥樣も又貞淑な方で些細のことまで御主人に相談なされます、こんな美しい御夫婦間ですからお子樣方も皆出來がよく從順で自治心に富で居れらます。此處の御主人は凡ての康飾賢を節して精神の修養や衞生的のことに金を惜まれぬのでございます。私はこのお家へ上りますと特別の空氣に包まれたやうで樂園に在る感じがいたします。



室內裝飾（應接間）

◎名醫の力で異常產が安產となる

若い婦人が二回目の姙娠九ケ月で俄かに烈しい陣痛か起りました早速參つて見ますと產婦は卒倒せんばかりの苦しみ、外診は第一横位で胎兒の心音は聞えましたが、水と血が多量に出て居ました。急いで內診して見ますと、三センチメートル程開いて居る

子宮口から臍帶が出て居ります。而してそのきわに胎兒の手の指と足の指とが觸れました。私は驚いて妊婦の御懇意の專門醫を願ひました。而してお醫者のお出まで血と臍帶のたんと出ないやうにタンポンを入て消毒綿をあて手でおさへて居りましたところお醫者がお出で嚴重な消毒の上、内廻轉で容易く出て下さいまして後產を見て側前置胎盤だと仰いましたが、これは極むづかしいお產である上に早產、早期破水、横位置、出血、臍帶脫出、過激陣痛、四肢の脫出なぞと云ふ八つの異常產がかち合つて實に危險でございましたけれども、平常その家の人が注意深くよい專門醫を選んで置かれたゝめに親も子も命拾ひをされたのでございます。

◎產褥中の悲劇

家内の蒲團に縮緬のかい巻、お召の寝巻でお產を爲さる方でも包みきれぬ御心配を御察し申すこともあり。中には產婆に御もらしになる方もございます。先づ一般に苦勞のある奥様の方が多いやうに存じます。これは極端の例でせうが　某有名界隈では先づ目立つ位な門構への御家で車夫に書生、下女の三人も使つて却々ハイカラな御暮し、その奥様の御產の御用を無事に濟せて助手を附添に差上げて置きましたところ、お產がすんだ頃から召使がポツ／＼と下り、五日目位には一人も居なくなつて、助手がお三どん代りをいたして居りましたが、毎日借金取の應接にまで使はれて閉口して居りました　御主人はお產後少しもお家に寄附かず、奥様は心配ばかりして居られたところ、七夜に御實家から產婆への謝金が届いて私の前へお出しにならうとするとそこへ、御主人がお歸りで、その水引をはづし中味を懐中してツイと出て往かれました。その後夜逃のやうに引越されたことや、山師の玄關前であつたことなぞを聞いて奥様のことばかり氣になつて居りました、二三年經つてから懇意な產婆が神田の方でこの家に頼まれましたさうですが、御主人が、この前には西尾に分娩具一切と產着一揃を任せたと鷹揚に言はれたので、その產婆は金へと云ひ魚なりと云ひ、立派な產家と心得て居た上に私の前例と聞いて尚更大切に扱ひこみ、上等の分娩具と軟らかな綿の產着一揃を調進して置きましたところお產後幾日經ても何の御沙汰もなく、ハテ變だと思付た頃には最早夜逃した跡で、骨折賃は未だしも呉服屋のお拂まで背負込で了つたと云ふことでございましたが、產褥中に度々こんな悲劇にお遭ひになる奥様はどんなにお辛からう存じました。

◎產婦の我慢を試した姑

某家のお產の時御主人は出張中で、姑さんが萬事切盛して居られましたが、丸ホヤの大ランプを產婦の鼻の先へ据ゑ、平生お前のことを我慢強いと賞めて居たから、お產にどの位我慢するか、よく見てやりますと

云はれますので、私がこんなにカン〳〵明るくてはお產婦に障ふござ
いますと斷りましたのが癪にさわつた樣子でしたその內だん〳〵夜が
更てまゐり、姑さんが私や助手の寢道具を出し始められますの、で代る
代る寢りますから一組で澤山でございますと辭退しましたら、手前にも
夜具蒲團位に備へてあると仰つて、澤山に夜具を取出し天井まで積上ら
れたのには閉口いたしましたが、この險幕を見て居たお產婦は嘸辛かつ
たであらうと平生の御苦勞までお察しいたしました。

朝鮮王室の女官

合併以前の朝鮮の宮中に於ける婦人の席次は皇后（即現王妃）皇妃、貴人、尙宮、內人と云ふ順序であつた。貴人以上は皇族の待遇を受け二品若くは三品の位階を有つて居る貴人以下の女官である女官は皇帝皇后に仕へ其の職掌は尙房、藥房の二部に分れ尙房に勤むる女官は王、王妃の衣服萬般の事を取扱ひ藥房に勤める女官は飮食其他の事を取扱ひ、其の外に炊飯水仕事の雜役に從事するものがある。女官は十五六歲から八十歲位までのもので皆終身官であつた故に年老いて後は終身扶助料を與へて退職させる、若老人とならぬ前に退職するものには一時賜金を與へて結婚させる、在職中は王の御手元金から俸給を渡された、大概月給四五十圓以上百二十圓で、高等官の收入であるが、隨分衣服等に多額の金を要するので餘裕がない、女官は何れも自分の後繼者を作るため、幼ない娘を貰ひ受け養女として育て、職を退く時は其の者に位階も位置も讓る、斯樣な制度となつて居たから幼ない時から宮中の勤めに馴れ、次第に其の位置を進め、尙宮となり、貴人となり、遂に妃となるものもあつた。今の嚴妃などは、明治三十二年頃迄は尙宮と云た女官であつた、而して彼等の中には詩を賦する者もあり、文を作るものもあり、或は侍醫となり、或は親蠶官となり、宮中に於て絕大の權勢を有て居た、貴人以上には皇族をも凌ぐの勢力家がある故に、女官の閥族を作り、相結託して政治上に容喙し、爲めに大官の位置も女官の一顰一笑で動かさるゝ事があつた、甲午の改革以前は女官の數は三百四五十人もあつたが、改革後は李太王の德壽宮に六十人、王の昌德宮に六十餘人を置かれてあるばかりである、其の中には隨分美人もあるが、併合後は之が如何なるであらうか注目すべき事柄である。

地方風俗

山中の小都會

美篤女

△信州第二の都會松本市

山の中で寒國と云へば信州と云ふ位の所ですから町の有様だつてまだ〳〵文明の域には達して居りません然し昔しより養蠶の盛んな國だけ市中に白壁造りで二階三階などの一風變つた建物が所々にありますが之は皆繭藏なのでございます、當市は近在の農家の作物の出來不出來とまゆの産出高によつて市の景氣が變るのでございます、それ故まゆの出ざかりの頃は當業者は夜もろく〳〵寝ずにやつて居ります、製絲家が出張所を置いて買ひ込む所もあり又仲買一方でやつて居るものもあり兎に角大騒ぎでございます、店はいつぱいの繭でうづまつて居る中に、多くの人がそろばん片手にわや〳〵やつて居りますが、其内に話がきまり、シャンシャン〳〵と手打ちをする、其音は關係のない者にも一寸心よく聞かれるものです、此賣買は初夏より晩秋迄の事で、此時の景況が一年中の景氣いかんに關係して來るのですから大變な勢です、此時にウンともうけて後はふところ手で暮す人もあると云ふ風で、在方でも耕作のかたわら皆養蠶をやつて居ります、兎に角松本は信州の大阪と云ふ位で、商業も盛んなかはり、なか〳〵人も驕ふございます、商業地のせいか銀行の數の多い事、一寸數へても十何軒とあります。

商業の盛んな町は本町、博勞町、伊勢町、仲町などで六九町は東京のひかげ町と云ひ度ひ所です、本町は多く藏造りの家でございます、ラッパを吹いてガタ馬車が近在へ往復して居りますが之が田舍と云ふ感じを强くさせる一つでございます。

△生活の程度

時代の趨勢につれて諸物價は高くなつたと云ふ事ですが東京などに比べてはまだ〳〵安い物ですが、之は

永年町へ住み馴れた人の事、いづれも官舍のある土地は官舍相場があるとかにて隨分高い物を買はせられます。

氣候は寒むいには違ひありませんが大した事もない様です、最も松本は暖い方だそうで、雪も年内に降る事はめつたになく來一月二月が寒むいので、多い時は二尺位積りますが日光があたるとぢき解けて終つて日かげに少し殘る位なものです四月はモーのどかなよい時候になりますが花は五月でございます、夏は涼しく秋もその割に早くありませんからマー／＼凌ぎよい處で季候のせいか果物類は割合によく出來ます、野菜もいろ／＼出來ますが扔工風して珍らしい物を作らうとしないので、ありきたりの物しか作りません。

近頃は町に八百屋が出來てそれが靜岡、東京邊から仕入るので珍らしい物も食べられますが、其かはり價は大した物で馬鹿／＼しいと思ふ事もあります、魚類は皆直江津から參ります、其他は鹽物干物類でございます、魚屋がなまと申ても一寸鹽がしてあるのですから馴れない内は食べられません、そして皆目方で切り賣りをします、家々で漬る漬物は鹽種をしまつて置く風穴と云ふ所へ入れて置くのでいつ迄經つても味の變る事はなく、お菜漬なんかいつでも青々して居ます。

△人　情　風　俗

土地の人情は輕薄でなか／＼人が惡ふございます、まあよく申せばぬけ目のない、りこう者とでも云ふのでしようが、私共の目から見た處では人の惡い狡猾者に思はれます、他國人と見たり又お雛様ぶつたり八字ひげの役人風でも吹かさうものならそれこそ法外のかけ直を吹き掛けられます。そのくせ甚だ不愛想で之でも商人かと思はれる位で私共が參りたてに紙屋へ買物に入つて半紙見せて下さいと云ひますとへーと云つて一と〆の紙をポントそこへなげ出して勝手に御覽と云つた風又金物屋ではさみを買ふと思つてモット種種出して見せて下さいと申ました處帳場に居つた鼻目鏡かけた主人がそんなにいろ／＼ありませんとダツ

トにらめたので驚いてとび出したら先きに買つたパンソーコーを置き違れて來て終たので、こんな日はろくな事はないと思つて早速歸つて來たが、實にぶあいそうで客が店へ入つて來るのに叮嚀にあいさつして入つて參りますし番頭は何にしに來たと云ふ顔して居りますたまにおあいそうのよい家だなんて入るとおせじにまるめられてすつかりかけねされると云ふ譯でうつかり買物も出來ない位ですが、又買ふ方でもこんよくねぎつて居ります、たとひ五厘でも四厘でもまけさせない内は三十分でも一時間でも押問答をやつて居ます、ねぎるからかけ直するのか懸直するからねぎるのか其邊は分りかねますが兎に角終ひには負けるのですから云ひなりに買ふ者は馬鹿を見て終ひますが客の顔見てねぎりそうだと思ふとかけねをやります、少しなじみになればそんな事もいたさない樣でございます一寸町へ出てもそこいらの女房さんたちがヂツトよく見て居りますから、ハヽア私の樣子がよいので見て居るのだな、なんて自惚れて居ると大間違ひ、見る人は衣類の價よみをして居るので彼の着物がいくら位か、帶がいくら羽織がいくら總たいで此位の仕度だらうと實に驚くでは御座いませんか。

流行は都より二三年は遲れて居りますから其點は氣らくでございます、土地の人は爲め一方、長持ち一方でごくじみな物を好み、一寸人の目に附く風をして居ると思へば藝人かさもなくば官舍のある一部の奧樣方です。

お嫁さんの風は一寸面白うございます、髮はおさげ髮に水引かけてのしを附けて居ります、いくら進上するものでもと、おかしくなります、着物は袂附に帶はおたいこ、さもなくば打かけを着ます、髮は翌朝早やくに丸まげに直して鹿の子を髷の廻りにぐるりを掛けます。

近頃は又盆栽が大流行で、春秋には公會堂で品評會がありまして、一般の人にも見せます、謡曲も觀世流だそうですが、餘り盛んでもありません、女子は一體に引込がちで遊げいは餘り流行いたしません。

△敎育の普及

信州は昔しから敎育の盛んなだけ一寸した者でもかなり讀みかきは出來ます、漢語なんかつかわれて閉口する事もあります、普通敎育は大方出來て居ります、學校も女子尋常師範、中學校、女學校、其他專門學校もあります、小學校も男子部、女子部と分れて二三ケ所にあります、女學生の風は成るたけ目にたゝない樣にとの譯で髮かざりは一切用ひず、袴はしこん色です眞黒い顏に髮はよもぎの樣で足袋もはかずに雜木の下駄引ずつてあるきますが、扨それだけ眞面目です虚榮のおばけは一人も見當りません。

信州としては隨分えらい人も出て居りますが當市からは福島中將、其他二三人でございませう。

△祭禮と名所

四柱皇太神の例祭は九月三十日より十月の二日迄南信七郡の總社として祭典最も賑はしく俗に神道祭と稱へて近在から出て來る人で神社の近所は身うごきもならない位です、又筑摩神社の祭例は八月十一日で丁度夏のまつさかりなので涼みがてら出る人が大した者です此日は商店の人の安息日なので思ひ〳〵の燈籠を點じて出かけます、魚屋は魚の形のを持ち八百屋は西瓜の形のを持ちたりしてくり出し重詰をひらいて終夜遊ぶのでございます、又初市と申して一月の十日十一日に市内の商賣市神を祀り商品を飾つて市を開きますが俗にあめ市と申してなか〳〵の雜沓です、城山公園は市民の遊覽所で春は花秋は紅葉頂上へ參りますと目の下には松本の町が見え、南の方は鹽尻からはるかに木曾の山々を望み、西は遠く安曇の平野を一眸の下に集め乘鞍岳、其他信飛境の連山がならび立ち、犀川の上流、奈良井川などが帶の樣に見える處は、なか〳〵よい景色でございます其他新橋、清水の里、埋橋、女鳥羽川なんて市の名所にしてありますが、汽車で二時間位行きますと南には諏訪湖、北には姨捨山、田毎の月などがございます諏訪湖は避暑にはよろしい所で富

士の夕げしきはまるで畫のやうでございます、田毎の月は只名ばかりで丁度十五夜の頃は稻のまつさかりで月なんか一つもうつりません、田が山のなゝめになつた所へだん／＼に出來て居るので稻の未のびない頃は田の水へ一づゝうつるそうですが仲秋の月は惜しいかな見る事が出來ません、然し當市からは臨時汽車が出て大變な人出です、月は見ずとも食べてさわぐ連中が出かけるのです。

溫泉は淺間溫泉、山邊溫泉、白骨溫泉などでございます、淺間と申ても淺間山ではなく市の東北隅約一里許りの處で高臺の爲め眺望はよろしうございます、溫泉宿が八十餘戸多くは料理屋を兼ねて居ります、目の湯、西石川、千代の湯其他名の知れた宿もあります、泉質は單純泉で無色無臭に御飯をたくにも茶を煎じるにも用ひます、別にきゝめのある湯でないので只遊びにはよいといふ所でございます、山邊の湯は東方にありましてずつと田舍風です、リウマチス胃病に特効があるそうです、現に角湯はきゝめがあるので絕えず客が參りますが、とかくきく湯はきたないもので遊びには餘りむきません白骨は松本から十里許り西で乘鞍岳の麓で少し不便でございます。

△其他のいろ／＼

寒國なので十月の初めに神道のお祭りが濟めばモー炬燵を開けます、そして老人ならいざしらず若い者迄入りこんで居りますが馴れない者の目には如何にもだじやくに見えます、ツシチ炬燵の上へ四角な板をのせて其上へいろ／＼ならべ立てゝお茶をのんで居ります醫者でも先づコタツに入つてからお座つきをひくと云ふ風です。

名物は生そば、氷そば、氷もち、ぶどう飴など餘り結構な物でもありませんが只生そばは實においしい物です、然し之も好きな人の話しです、色の黑いコチコチしたそばです、信州は一體にそばが名物で、

信濃路はどちらを見てもそばが山
とかくからみであがるがよい

とか申して山とそばにかけてある位です。

産物は繭、蠶種、生絲、眞綿、手拭、美篶細工などで、美篶細工とは、美篶と云ふて竹をほそく裂いた物で之で行李や繭かご、手さげカバンなど其他一寸した物を造ります、眞綿はなか〱よく、四角に張つてあります、四十目一圓以内でございます、足袋も名産としてありますが甚だ形ちが惡るく、併し寒國のせいか足袋の先へ綿が入れてあります、之らが名物とでも申所でしようか、之とて一度洗へばゴロ〱によれて始末に困ります、其他一寸目に止まるのは善光寺參りのちいばあさん、御嶽參りの講中、女工などです、多く女工に出すので女中は拂底です。

月清みねさめて見れば播磨潟
　室のとまりに舟つてに鳬
知紀

村雨の雲間を洩れて我袖に
　笠やどりする月の影かな
永野



雜司ヶ谷鬼子母神

秋一週間の献立

ふみ子

◎月曜日

一茄子茶筅蒸し　すり生姜

二まぐろ山かけ　甘酢おろしわさび

一茄子の形のよきを皮をむき横に置しながらたてに細く庖丁を入れ、見た所、茶筅の如き形にしてすぐ水に放してあくを抜き蒸し器に絹を入れて上に茄子を並べ、蒸し上りたらば一個宛椀に入れ、その庖丁の目の一ヶ所にする生姜少しをはさみ一寸醤油をさして蓋をする、

二新らしき、きはだ鮪をぶつ／＼と賽形に切り酢の物皿に入れ甘酢を掛けその上におろし金にてすりたる山の芋或は自然生をかけるおろしわさびを添へ、上に蓼一葉あしらふ、甘酢は酢に少量の砂糖を入れ火にかけて醤油一寸入れる、甘酢を作り置けば長く持ちて重宝なり。

◎火曜日

一鰡じる　口そぎゆづ

二鯖てり焼　甘酢生姜

三枝豆鹽ゆで

一ぼらの鱗を引き一寸五分位の筒切りになし、味噌汁に仕立てる、

二鯖の切身を二三時間醤油に漬け置き、金串にさして焼く、てりじるは味淋を煮つめ醤油を割る、焼き上りたらば粉山椒をぱら／＼と振り掛ける。付合せには新生姜の細く柔かきを一寸沸湯を通して甘酢に漬け置きたる用ふ

三枝豆は鍋に蓋をせずにゆでて味噌漉しにあげ鹽を振る。

◎水曜日

一鯛のうしほ　實山椒

二里芋煮ころがし　おろし柚子

三鯛鹽焼　百合根

一鯛の頭を背の方より縦に割り、程よく切り置き。腹や尾のあらと共に目笊にあげ、鹽を強めに振り置く、鍋に湯をたぎらせて右を入れ二三度煮立ちし時鹽加減を見、醤油少々をさし。煮立ちたらば椀に盛り蓋の上には實山椒を一寸つみてのせる。

二里芋は一旦ゆでて笊にあげ砂糖味淋醤油にて煮る、小さき柚子の皮の所をおろし金にておろしながら、盛りたる芋の上にかける。

三鯛を三枚におろし切身になして薄鹽あて置き焼く前に一寸水にて洗ひ、ぱら／＼と化粧鹽を振りて火に上せる、付合せには小さき百合を蒸し器にて蒸し下から竹箸の通るほど柔か

になりたる時鍋にうつし味淋と砂糖にて弱き火にて煮込む。

◎木曜日

一蟹の鹽ゆで
二うま煮
三ずいきあゑ

一鍋に湯を煮立て鹽少し入れて煮立ちし時、蟹をその儘入れ暫くゆでる、丸の儘膳に上ぼせて、むきながら食す。

二あなごを開きて一寸五分程に切り砂糖味淋醬油にて煮、新蓮根を薄り切りになし湯でて砂糖味淋醬油にて煮、さや隱元の細きを、すじを引いて湯がき、砂糖味淋鹽少々にて蓋をせずに青煮とし、右三品小鉢に盛り合す。

三芋莖の皮をむき一寸五分位に切り水に放し湯でてかたく絞り、白胡麻を炒りてよく擂り、酢味淋砂糖を加へて又擂り、枝豆の鹽うでにしたるをはじき出し右の芋莖とともにあゑる。

◎金曜日

一里芋、なまり節餡掛　すり生姜
一黒鯛の洗ひ

一里芋の形よきを選び皮をむき、生り節を手にてむしり別々に蒸し器にてむして椀に盛り合はせ餡をかけ上に擂り生姜を一寸つまみのみせる。餡は煮出しに砂糖少々醬油味淋にて味を付け、久助葛をときて流し込む。

二黒鯛を三枚におろし、薄く作り身になし暫く鹽あてて置き、冷水にて何度も何度も肉のちぢれる迄洗ひ、刺身皿に硝子の簾を置きて程よく盛り氷の小片を添ふる、おろしわさびせん打ち茗荷など妻に用ふ。

◎土曜日

一玉子豆腐、芋根清汁
二天麩羅、メゴチ、車海老

一三ツ四ツの鷄卵をときてその量の中分程の煮出し汁にまぜ合せ鹽少々入れ、鉢に入れて鉢のまま蒸す、固まりたらば取り出して庖丁或は金杓子にてそぎとり、二〆そぎ程椀に入れ、根芋を一寸五分の短冊にして湯がきたるを相手にし、鹽味七分醬油味三分の清汁をそそぎ入れて出す。

二車海老は頭と皮を去り背より開きて背腸を抜き尾を付けたる儘、めごちも頭を去り開きて骨を抜き尾を付けたる儘、目笊を伏せて上にならべ置く、メリケン粉をとき鷄卵一個を入れ、よくかきまぜし衣を右の魚の尾を持ちて着せ、胡麻油にて揚げる。

◎日曜日

一鰹の摺流し　豆腐そら豆
二白瓜もみ　赤貝三杯酢
三鱚鹽燒

一鮮らしきかつをの背節の身を細かに切りて擂り鉢に入れてよく擂り、味噌汁を仕立て置きて煮立たせたるを少しづゝ入れてだん〳〵にとき鍋にうつし煮る、そら豆の皮をむきたると、そぎ豆腐を實として入れる、

二白瓜は薄くきざみ鹽にてよくもみ、洗ひてかたくしぼり、赤貝をおきて二つに割り腸を出し鹽にて洗ひ、右二品を盛り合せ三杯酢を掛ける。

三、前の鯛の照焼に同じ

今日は日曜、何ぞお茶菓子にと思つて欲しそうなものを拵らへる。

金玉糖

寒天一本に付水一合五勺の割にて（前夜から漬け置けば尚きゝがよろし）煮立て溶けたら布巾にて漉し砂糖百目程入れ火を弱くし、掻き廻しながら煮る、杓子にて掬つて見てねばり氣出でぽたり〱と落ちるやうになりしな度とし再び漉して器に流し込み冷やすべし

◎甘しい魚の焼方

單に魚を焼くとか煮るとか云へば甚だ簡單で何でも無き様に思はれるけれども、若し相當の方法を知らずして、猥りに取扱へば、其の味の不味になる事は勿論、客來の時等にも、十分氣持ちよく食べさせる事が出來ない、それ故折角大金出しての心盡しも、全く無意味に終つて了ふのである、こゝに簡易な焼き方を二つ三つ記して見れば。

△鹽焼　鹽を振りかけて焼くと云へば、子供にも出來る様であるが、扨て實際はなか〱さうは行かぬ。皮がとれたり、形が崩れたりして見苦しい物になるが、此を焼くには初めうつすりと酢を魚の兩面に塗り、其の上に焼鹽を振りかけ、串鐵架にでも、錆なきものに胡麻油を塗り切身ならば身の方を下にして火にかける。

△照焼　此の焼き方は醬油六に對する、味淋四の割合に混じて煮詰めどろりとして、濃くなつたものを、十分に塗つて焼くのである。又此には始め味噌を少し加へても宜しい。

△附焼　此は誰も知つて居る様に鹽氣のない魚を炙り、醬油を幾度となく注ぎかけるのであるが其の量が多きに失しぽた〱と多量にこぼれ落つる様ならば、皿などに取り置き、次ぎの時用ゆれば普通買立ての醬油よりも味のよいものである。

△漬焼　此は極簡單なもので、魚を數時間鹽水に浸し置き鐵架に胡麻油を塗り焦げつかぬ様に焼く。

△蝦焼　此は附焼にした魚の上に雞卵のよく溶いたものをかけ遠火でゆつくり焦げつかぬ様に焼くのである。

△魚田　此れは田樂と等しく魚に味噌をつけて焼くのであるが、白味噌の甘きものは其の儘、辛きものは味淋か、砂糖を少し加へて用ゐる、其の焼き方は最初何もつけずに炙り、過半焼けた頃よく擂りつぶし味噌を厚く塗り少し焦げる位に焼く。

◎價安しとて當面に必要を感ぜざる物の買置きを爲すべからず

◎炭は必ず切りて使用し割りて用ふべからず之れ勞を惜みて金を惜まざるの類なればなり

◎障子などは些々たるものなるも多く破りて全部の貼替へを爲すよりは常に小孔を切り貼りすべし

◎卷紙は用時に繼がず繼ぎ置きて使用すべし

◎一度翳したる傘は必ず乾さざるべからざるも日光に干すべからず必ず影干にすべし

◎洗ひたる履物は必ず歯を一度乾かして履くべし然らざれば減ること早きものなり

◎器物は總て何高くとも堅牢なるものを求め一時の間に合せなりとて安物を買ふべからず

呪ひ釘の心理作用

小夜あらし

催眠術に著しく堪能の人は、電車又は汽車の中で見ず知らずの他人を何等の暗示なしに眠らせたり、又は障子襖を隔てゝ己が思ふ通りに其の身體を動かしたり、甚だしいのは幾里も地を隔てた者に種々の意思を實行させることが出來ます。昔キリストが人の病を直したり、又は子供を活したりしたといふのも或はこんな關係もあつたのかも知れません。して見ますと人の心の活動は丁度無線電信の電波の樣に空中に心波を畫いて、他方の人の心に作用するといふ事が分ります．催眠術でなくつても寄席や劇場で前に居る人を、顧みさせやう〳〵と一心に思ひつめてゐると、其の人はソア〳〵して何とはなしに後へ向くのも此の道理で御座いませう。決してエヘンなどゝ咳拂ひも入りませぬ。よくクシヤミを致しますとアラ誰か私の風評して居るアなどゝ云ふのも、萬更不條理ではありません。

さて以心傳心の要件はといふと、第一作用の強弱は心波の強さに正比例します。いくら鮑の片思ひでも、煩ふ程の思ひは能く成功しますし、又知らぬ異鄕に悲慘な最後を遂げますと、親兄弟に亡靈となつて現れたとか、夢枕に立つたとかといふ事は度々耳にする處ですが、其れはさうありさうな事です。其の心波を強くするにはどうするかと云ふと、つまり注意を一點に集注して心界を極めて狹小にするのです。即ち一心を籠めるのです。一心を籠めると、其の力は非常に強いもので、平生持ち運びの出來ない簞笥が、火事の時にはかよわい女の手一つで安々と持ち出されたり、水垢離取つての御祈禱が利いて親や夫の病氣が直つたりするのです。孟子が「至誠にして動かざるものは未だ之れあらざるなり」と云ふたのも此道理であります。そして一心を籠めるには、先づ主觀的に十分努力して一の目的物を思ひ續くると同時に、他の雜念を排除して所謂無念無想の境に入らればなりませぬ。移り氣は大の禁物です。それから客觀的には目に觸れ耳に聞ゆる物事に動かされないことが必要です。祈禱者が山や林等の靜かな處を撰んだり、人を呪ふ者が特にあやめもわかぬ眞夜中の丑の刻を恐ろしとも思はず詣るのも、畢竟心念を專にして亂れさせない爲めであります。

併しこれも第二受動者の心狀に應じて、傳心の効果が異ひます。人の心が通ずるのは譬へば櫻の花が水面に寫るやうなもので、受動者の心の波立つて居らぬ時が一番明瞭に映じます。斯ふ云ふ實話があります。もニ三年前の事ですが、江川鐵心、森内貫一、梅子尼、鈴木信仁氏等が嵯峨の全生庵で茶杯吟じながら話をして居りますと、一座の有名なる峨山禪師が、卒然右の



諸氏に向って「私の近くで苦しめられて居るものがある、誰か行って救ってやんなさい」と云はれたけれど、諸氏は禪師は何事を云はれるかと、笑談として信じませんで應じる氣色がなかったものですから、そんなら自己が行って助けてやるとズンズン出て行かれるので、諸氏も物好き半分に随って行きますと、庵室より凡そ五六十間隔った墓地で、一つの小蛙が蛇に呑まれんとして大に苦しんで居るのを見付けたと云ふ事です。これは凡人と違って禪定によりて一定の修養を積み、心面玲瓏として一點の曇りもない禪師の事ですから萬象自ら映じて、自然に感通したのでせう。

これは催眠術でも容易く實驗が出來ます。即ち被術者が愈々催眠狀態　取も直さず無我無心で全く雑念が無い時になれば、どんな暗示でも影の形に随ふ如く、施術者の自由自在であります。此様に受動者の心に雑念がなければ勿論のこと、況んや眞情又は信仰あるに於ては、其成功は固より疑ひはありません。所が人は多く常に雑念に充ちたり、或は同情又は信仰がなく反抗心を持って居ったりするから、甲が乙を害ひ又は怨むことがあっても、其感通は甚だ微弱なのであります。さればこそ残忍酷薄な悪人が運強くして天網を免れて榮達したり、道徳家宗教家が反って天道是か非かと喞つので、誠に遺憾なわけであります。



併しこの不道理は決して宇宙には通りません。御覧んなさい寐起きの精神玲瓏として何等の雑念もない時、或は今はの断末魔の眞心に責めらるゝ暁、眞夜中に夢さめて心静かに熟し行く末を考へる時には、丁度あの催眠狀態と同じですから、罪のある人は眞心の苛責にも逢ひますし、必ず人の怨恨も感じます。悪い事をすれば寐覺が悪いとか、死際が善くないとか申しますが、實際爭はれぬ眞理です。丑の時詣りをするやうな人は決して悪報なしでは濟ごされません。人を呪へば穴二つのたとへにして、夢にも人を怨んだり呪ふたりしてはなりませぬ。何人にも幸あれかしと祈ってさへ居れば、怨まれる事も怨む事もありますまい。「女の一念岩をも通す」とよく申しますが、悪い方へは爽さない様にしなければなりませぬ。

蛇の迷信

△蛇を飼養すると其家が榮える
△蛇を殺す時はよく頭部を潰さぬと化けて來る
△夜分蛇を殺すと枕　元へ化けて來る
△蛇の脱皮を拾ふと吉事が來る
△蛇の夢は金錢を得る
△蛇の脱殻で顔を洗ふと綺麗になる

衛生顧問

糸左近

氣候と月經 ■私事夏季即ち七八九の三ヶ月を除くの外は月經少量に候が如何なる原因に候や、又冬になれば特別の方法を以て身體を暖むる必要有之候や(摂津井本ふじ子)

■貴女に限らず如何なる人も夏は月經多く、冬は少きものである。されば印度の如き熱帶地方の婦人は月經の量多く、エスキモー人の如く寒帶に住む者は夏期に一二度位かの月經を見るのみである。然れど我國の如き温帶地方に在りて夏と冬とに著しく月經量の相違なるは、身體が健康ならぬ徴であるから内科婦人科の兩醫に就き、其の診察を受けられたし。何れにしても座臥の腰湯を一二年間繼續することを肝要肝要。

腰湯の方法 ■座臥の腰湯は月經の不順を治し、且つ便通をも正しくするものだと某書で見ましたが、如何なる方法で行へば宜しきか。(佐賀の不眠女)

■胡坐をして頭以上出る位の深い桶に攝氏四十度程の温湯を盛れば腰まで來る位に入れ、食鹽を二摑程混ぜ、然る後着物を掛けて腰以下を温むること十分時乃至十五分時行ふのである。但し吹雪烈しき冬の夜も、蒸し暑き夏の晩も客來有つて忙しき時も月經時の外は必ず之を缺かすこと無く三年の間續けて行へば健康を增すばかりで無く顏色も美くしくなる。

僂麻質斯の療法 ■本年一月分娩後僂麻質斯に罹り、以來種々の賣藥及び醫療を受けましたが治らず困り居り候。何卒早く全治する療法を教へ被下度。(新潟の心配女史)

■藥用もせねばならぬけれど、其れよりも他の療法が肝要である。第一に乾燥したる暖地に轉居す可き事。第二に温暖なる衣服を着てゐる事。第三に温泉浴を一日に三四回位も行ふ事。第四に光線浴を實行す可き事。第五に按摩法。第六に電氣療法。其他體操砂浴などを行ひ身體內用外用の藥物も必要である。唯藥ばかりに依賴して他の療法を施さぬ如きは到底全治し難いものである。然らば藥物は何を用ふるかと云ふに、內用には沃度劑及び砒石劑を外用にはエーテル、イヒチオール及びコロホルムなどを實用するけれど、孰も素人療治の出來るもので無ければ御地の醫士に就き其投藥を乞はれよ。

安知必林疹の療法 ■七歲の女兒風邪に罹り、醫士よりアンチピリンを投藥せられたる所、其の中毒にて口の周圍に黑き疹を現し、今に除れず候が、此の療法を敎へ給はり度し。(京都の大阪女)

■ナフトール五瓦と酒精百瓦とを混じて一日に數回塗布せられ、効無くばレゾルチン二瓦と黃色ワセリンとをとを混じて塗布せられよ。何れにしても十日や二十日では治りませぬ。

若白髮は治るか ■二十歲位の婦人に白髮の澤山生えてゐるのは藥力で根治することの出來るものに候や、或人は椿油を塗

け百倍の食鹽水で洗へば治ると申しますが本當で御座いませうか。(京都の若お婆さん)(名古屋の心配女)(岡崎の一苦女)

■ 若白髪を根治せしむる方法は現今の醫術界では未だ發見せられぬ。唯染める法のあるのみである。故に食鹽水で洗へば黒くなるとは申すもの〻矢張染めるので有つて後に生える毛は矢張白くなります。椿油は幾分か毛色を美くするけれど、これは毛を黒くするものではありませぬ。

〔毛髪の衛生法〕■ 禿毛を如何様に手入す可きか衛生上宜敷候や(相摸の大山女)

■ 毛髪は毛根を傷めぬ限りは縦ひ脱けても又毛嚢より新らしき毛を發生するものでは有るが頭が痛るとか、或は身體一般が衰弱すると毛嚢に十分の榮養を與ふることが出來ぬ爲に、毛が段々薄くなるものである。故に少くも一週間に一度は刷子を以て垢や雲脂を掻き落し、成可は髪を解けて微温湯を注ぎ十分に洗ひ、乾いてから少し許の油を塗けて束髪なり島田なりに結ふが宜い。又時々毛の尖を少し切つておくと毛の新陳代謝を促し、發育を盛んにするものである。又、滋養食物を適度に取り、相當なる運動法を講じ、身體一般の榮養を盛んにすれば從つて毛髪の發育も宜くなるものである。

〔牛肉と菠薐草〕■ 世人の言ひ傳に牛肉と菠薐草を同時に食すれば痴病になるとの事、果して眞理に候や。(奈良五條小心女)

■ 小生は始めて之を聞きましたが、決して然うでは無いと思ひます。何となれ小生は幼少の頃より今に至るまで、牛肉と菠薐草を同時に食することが屢あるけれど、何等の異常が無いからである。牛肉は人の知る如く消化吸收の宜い滋養食物、菠薐草は野菜中で最も鐵分を含める良好の物、されば此の二品を同時に食すれば貧血者の食餌療法として理想の食物なりと信じてゐます。

〔皮脂漏の療法〕■ 皮脂漏の爲に眉の中まで脂の固まりが出來、石鹼にて洗へば眉毛脱け、實に心配でなりませぬ、何卒此の療法を十月の誌上にて教へ給はれ。(日本橋糸川百合子)

■ 重曹三瓦を水一合にて溶したる液で洗ひ然る後、左の處方劑を塗布し、又この重曹水で洗ひ、又塗布することを一日に二度宛繰り返されよ。

▲レゾルチン二瓦。ヒマシ油十瓦。酒精百瓦。百露バルサム半瓦。右四品混合して塗布。

〔瀉利鹽の效能〕■ 或人の申すには瀉利鹽を三月程續いて飲めば痩せるとの事、果して眞ならば其の分量等を教へて下され。奈良秋山ふじ枝)

■ 瀉利鹽は下劑であつて醫士は便秘の患者には二三日乃至一週間位連服せしめることあれど三月の長い日數を續けて用ふることは無い、若し一月の間用ふることせば必ず慢性下痢症に罹り非常に榮養を傷ふこと鑑に懸けて見るが如し、努々欺かれてはなりませぬ。

〔腸結核の徴候消毒法等〕■ 腸結核の徴候療法及び排泄物の消毒法等を詳細に御教示下され度。(岡山櫻井)

■ 本病は大抵肺結核に續發するもので即ち肺核の痰を不知不識嚥み下す所から遂に腸管

までが侵されるのである。けれども終には尿發することが稀い。兎に角其の徴候は頑固の下痢を發し、其の糞便は灰白色となつて臭氣甚だ少く、多くの粘液を交へ、腹部は稍膨れ、腹は痛み、病症々進めば肛門に腫物を生じ痔瘻になるものである。療法は肺結核と殆んど同じで、且つ止瀉劑を用ふるものあるか、斯る重病の療法を素人の力に教ふるは「衛生顧問」の本旨で無いから省く、されば御地醫士の診察を受けられたい。消毒法として喀痰には必ず二十倍の石炭酸水を注ぎ、飲食器は家人と別にして一々熱湯で洗ひ・便所も他人と異にし、其上糞便には生石灰を撒布するやうに注意せねばならぬ。攝生法としては鷄卵、肉滑液、牛乳、鮮魚の刺身などの滋養食物を取り、腹部には温濕布を當て、温暖なる海邊に精神を愉快に樂しませつゝ暮さねばなりませぬ。



秋の郊外散歩

物集梧水

▲草の露

雨霽れむとして又降りぬ。蕭々、寂々、限りなき淋しさを裹む日なりけり。

苔と痛ましくも荒れはてし尼院に訪れて、終日默然と庭面の景色を眺め暮す。垣根の際に添ひて高やかに伸びたる雁來紅の、或は紅く、或は靑く、或は紫褐色に、己がじゝ様々なる色彩に染出して、獨り秋の誇榮を傾せむとすれば、その傍らに二三本の鳳仙花ありて、早や盛りを過ぎたるまゝ、袋のやうなる靑き實を房々と着けたるあり、お白粉の花は手水鉢に倚りて咲きみだれ、秋海棠は燈籠の下に恥羞を含みて俯向きぬ、尙ほ其處此處の樹蔭より我れも花の仲間ぞかしと、長き紅條を差出せるを見れば、そは水引の花なるも可笑しや。

草雲雀の聲宛ら雨を潑ぐが如く鳴きて、雨却つて降り止みぬ。折から一しきり涼風わたれば、此處にも、彼處にも、雫の音はら〱と聞え、秋氣神骨に徹るかとぞ覺えし。

空は終に霽れずして夕暮に入りぬ、小さき白き胡蝶あり、幻の如く、破れし羽袖たゆたげに迷ひ來りて、夕べの宿を花の蔭に求めむとすれども、花は露の重きに堪へず、爭でか他に情を頒ち得む。哀れなる胡蝶はひら〱と飛び去りぬ。

庭面の隅に一叢茂き萩の花あり、胡蝶は其れに縋らむとすれば、ほろ〱ほろ〱と皆な飜れ落ちぬ。可憐しき風情や。

手帳に記して——

すがれし萩に、小雨、はらつき、
白き胡蝶の、羽袖、やぶれて、
羽袖のいろの、夕雲、淡く、
唯だ、蕭條と、秋の暮れぬる。

▲百　舌

百舌來ぬ、百舌來ぬ、來りて喧しく鳴きにけるよ、
彼の田畝の榛の高枝に。

春の鶯は其聲麗しけれど、夏の杜鵑は其聲悲しけれど、秋の鵙に至りては其聲何ぞ喧しく賤しき。去りながら鵙に就ては、我れに深き思出の種あり。

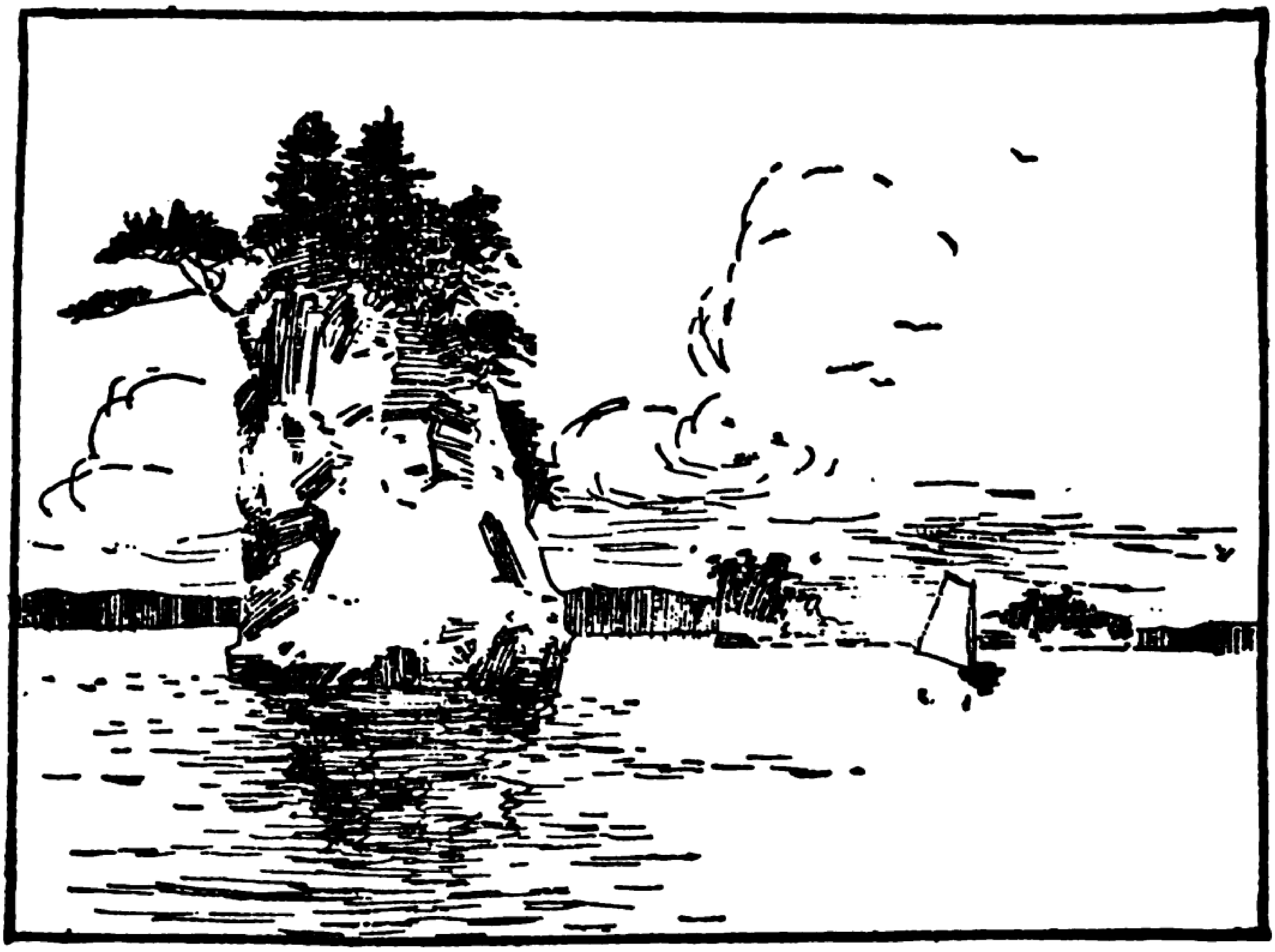
我れ幼少き頃ほひ、東京の西郊に住みて、村の小學校へ通ひぬ。途に櫟林ありき、途に小川の流ありき、我れ小さき風呂敷包をはすかひに脊負ひて、友達二三と共に此櫟林を通り、此小川の流を傳ひて、學校へ通ひぬ。

秋天清く澄みたる日、此櫟林を過ぐれば、必ず鵙高く囀り、此小川の流を窺へば、必ず鮒、鮠、目高魚など泳ぎてゐたり。小兒心の、空を仰いでは鵙を羨み、流に俯しては鮒などを掬はむと思しも幾度なりしか。

或日、學校にて友達の一人が密と我れを招きて机の下を覗かしむるに、何ぞ計らむ、日頃羨みゐたりし彼鵙ならむとは。彼れは得意氣に說明して曰く、此鵙を見給へ、眼を縫ひたるは他の多くの鵙を捕へむが爲めなり、今日學校の歸路に彼櫟林にて鵙引せむ。我れ何條否むべき、雀躍して賛意を表しぬ。

歸路、彼櫟林にて數羽の鵙を捕へ、彼友の家にて其眼を縫ひ、二三羽分與て貰ひて、欣舞しつゝ夕暮頃我家へ歸りしに、母君不興げに我れを迎へ、歸家の遲かりしを責むること大方ならず、其夜我れを諭して曰く、鵙は小なりと雖ども鷹の性あり、鷹は鳥の最も秀れたるものに非ずや、汝も大人くなりて後、鷹の如く秀れたるものにならざる可からず、速かに其眼を縫ひたるを解きて放てよと、先に立つて鵙の眼を解き、尙ほ孟子、司馬溫公、小楠公などの話して、將來必ず偉くなるやうにて、更ふくるまで繰返しつ、又繰返しつ。

その年の秋も未だ盡きぬ中に、母君俄かに逝去りたり。我れ小さき足に藁履を穿き、小さき手に位牌を捧げながら、彼小川の流に沿ひ、彼櫟林を過ぎぬ。言ふまでも無く母君の野邊送りなり。



三河蒲郡海岸

この折よ、彼櫟林に喧しくも百舌鳴いてゐたり。母君に釋されし島の、茲に來りて慟哭するかもはかりに。

噫秋は苦しきもの哉。昨日も、今日も、百舌來て我が胸を甚とゞなやましむる。

▲漁火

相州三浦三崎の附近に小網代と云ふ漁村あり、嘗て一日此處に遊びぬ。

鏡の如き入江を抱へて稍高き崖三面を包み、崖の中腹に小さき祠あり、いと古びたる注連繩の、颯々たる秋風に動き、一際茂れる森の木立に悲しき秋の聲あり。

夕陽海の彼方に沈まむとして、空に夕映の色あり。見よ、紅の雲、樺色の雲、金色の雲、融々として溶けむとするを、入江に浮ぶ漁舟の數々、皆な錦の波に漾ひて、夕陽に面する部分は帆の色金色に輝けど、さらぬ裏面は黯然として紫色を帶べり。

晩鴉一羽、南より北へ飛び、啞々として啼けば、餘韻長く波に震ひ、森に徹りぬ。いとも淋しく〳〵暮れてゆく。

渡船を渡りて、北の街より南の街に至れば、軒並賑はしく灯を燈して、物燥ぐ家に人々唯だ譯も無く忙はしげなり。巷は爪立に南へ向ひて、漠々たる畑地に出でぬ。その稍高き所に立ちて顧みれば、小網代の町は脚下に沈み、入江に浮ぶ漁火のみ點々星の如くに輝けり。秋風かよひ、欸乃唱ゆ。

畑地を通ずる路は一轉して西へ向ひぬ。其夜、月なき宵闇の、唯だ纔かに星の光を心當に歩めば、路のたづたづしきこと大方ならず、甘藷の蔓は細き路に手を伸ばして我が脚を捉らむとし、蜀黍の葉は風に鳴りつつ我が袂を握らむとす。

此わたり一帯は唯だ夫れ畑地のみ。人影なく、人家なし。首を廻して四方を眺むるに、燈火の影とては更にもあらず、茫々たる平野、蟲の聲のみ水の如くに流れぬ。

街は行くこと十町許りすれば、油壺の碧潮に臨み、老松 矮松 散在せる間に、三浦入道道寸父子の墓ありと聞きしも、餘りの寂寥に堪へずして踵を回しつ、元と來し路を辿り歸れば、天に折々稲妻ひらめく。

風わたる淺茅が末の露にだに
やどりもはてぬ宵の稲妻　　藤原 有宗

▲明月

曾て京都に住みし頃、夕暮れ鴨川堤に沿ひて、頻りに川上に 遡る。

河岸に數株の柳樹あり、その狀宛ら臈女の年齡老いたるが如し。秋風嫋々として吹けば、その葉一つ散り、二つ散り、三つ、四つ、五つ、見る〳〵吹かれて河面に散り落ちぬ。河の中には水嵩大方つきて、唯だ小央の所に一筋、二筋、僅かに細く流るゝのみなり。碌々たる礫の、何ぞ裸に横はれるの侘しき。

柳ちり淸水涸れ石ところ〳〵　　蕪村

今宵は月明き十五夜の夜とて、縁の端居近く青芒を

挿し、柿、栗、きぬかづきなどを盆に載せて、心靜かに月待つ家庭の諸所にあるなり。

鴨川の二條に分岐るゝ所に下鴨の森あり。夕靄淡かに立罩むれば、東の三十六峯、西の四十二峰、皆な薄絹に包まれて、唯だ下鴨の森のみ浮島のやうにぞ浮み出づる。淡麗の極みや。

下鴨神社に詣づ。老檜古杉欝乎として茂り、道の舗石緑苔滋く、人をして千年の古へを懐はしむ。

下鴨神社より上鴨神社に至るまでの間は、一帶の松並木兩側に生茂り、折々牛追ふ賤夫に遇ひぬ、その牛を見れば皆な黒くして肥り、歩むこと甚だ遲々たり。去りながら、更に其牛の脊を見れば、一把の秋草、露と共に發かむとせり。月、東山の端に出づる頃しもぞ、未だ詩にも繪にも描寫かれしことなき幽艶なる景致をあらはすなるべし。

上鴨神社は、下鴨の其れに比べて更に神さびたり。蒼古の情殆んど口に言ふべからず。

軈て華表を潜りて歸る比ほひ、東山の端より十五夜の月まんまると現れ出でたり。彼の肥りたる黒き牛は、何れの處にて此の月を見たる。

月に對して東へ歸る。下鴨の森は尚は夕靄に裹まれて、宛ら蜃氣樓を見るがやうなり。

水の面に照る月なみを數ふれば　　源　順
今宵ぞ秋の最中なりける

白露を玉になしたる長月の　　讀人不知
ありあけの月夜見れどあかぬかも

風のまに〳〵遠砧の聲きこゆ。思はず、「長安一片の月、萬戸衣を打つの聲」と口誦さみぬ。

正誤

前號增刊に掲載せる松村介石氏の談話にかゝる『心靈上の不可思議な現象』の中に、麻布邊に居る婦人を雇つて來て實驗を試みたる様に記しあるも、右は雇つて來たものにあらずして、心象會へ依賴し來りたるに就き試みられたるものゝ由なれば、玆に正誤す。



いろ〳〵の實驗

必ず貯金の出來る法

佐賀　八重櫻

私は最初貯金をしなかつたため、臨時の費用に甚だ困りましたから、其後どうかして貯金をしようと心を用ゐて居ます、少しばかりの收入ではともすれば怠りがちになりますから、左の樣にいたします收入がもし拾圓あれば、其一割一圓だけはないものと見て始めに引き去り九圓を收入といたします、又家計簿記を作つて出入を一々控へます。月末に〆て前月に差し引きし、もし前月のより買ひ高が越す時は、それだけ借用金とみて、其翌月注意いたします、殘金、臨時の收入は皆貯金します、一々出入を控へるとむだにお錢がつかへなくなつて、貯金に力めます、其おかげで、今では少し位の臨時の費用にはさまで心を勞しません。（寓）

珍味即席のおやつ

愛知　佐分華影

馬鈴薯をよく洗つて、わさび卸しでおろし、其れをキユーと布で絞つて汁は別にとり、絞つた物を小さく丸めます、丸める時ガタクリ粉か葛粉を混ぜて、それを煮え立つて居る鍋の湯の中へ少し絞り汁を入れてから入れます、すると暫くして浮上りますから、網杓子で掬ひ上げると、透明な物になります、それに黄粉に砂糖の混ぜてあるのを牡丹餅の樣につけますと、馬鈴薯とも解らず、お八つなどには至極妙です、お好みでフライにしてもよう御座います、西洋料理の飾りでもありましたらお試しなさいませ。（寓）

効果多き養生法

三島　春子

私、在學中に或先生から、人生保養上三大要件として、深呼吸、冷水摩擦、詳細なる日記、この三つの事を敎へられました、其後卒業して家事多忙の爲め日記は漸く家計の日記丈になりましたが、他の二つは今に實行してゐます、すると此頃はどんな嚴寒でも朝水をつかはれば着物が肌につきませず、深呼吸をせれば氣づまりでたまりらなくなりました、お蔭でこの三四年風一つ引きません、元來弱かつた私がかうですから、父母はじめ皆がよい習慣だといつも喜こんで吳れます、又

これを始めた方も多くあります、實にお金も入らず時間も入らず、そして効果の大なる養生法です。此の實價をつけるには今時分からが宜いのです、少し勇氣をお出しになりませんか、上中身丈でも御實行遊ばせ。（言）

不快な進物

大阪　華枝

先頃知己から菓子を頂きましたところ、中を開きますと、左右兩方に名の違ふ名刺が二枚入つて居りました、かくては折角の到來品も甚だ不快でございますから、到來物のこんな風のお除入はさせたくないと思ひました。

菊の新種繁殖法

信濃　靑木恒子

菊の繁殖法は普通は、根分け、芽挿、葉挿の三種でありますけれども、之れでは新種を得る事は出來ません、新種を作りますには、花粉の人工媒助を行ひますので、花の盛りに、欲する處の他の花粉を、柔かき筆の先に付けて來て、振り掛ければ宜ろしいのです、斯くして約一月を經て切り取り、其儘風通しの宜い軒下などへ吊し置き、翌春彼岸頃に播種遊ばせ。種々の新種が得られます、随分樂しみです。

切花の水揚法

鎌倉　秋野もみち

私花屋より聞きました水上げの仕方御話申しましよ、何によらず切口に鹽をもみつけて、火で黒くなる程こがし、新らしき水にいれますと、ただ焼いたのよりも生々して長くもちます、これは實驗致して成程と思ひましたから、一すおなぐさみまでに。

疊に垢の附きたる時

三重　藤田貞

臺所の疊は、汚れ安くて御困りでせう、之を美しく拭ひ取りますには、水一升餘の所へ木灰を五合計り入れて、一度煮て灰を沈まし、上汁を他の器物へ移して、之で拭ふのです。そして二三度拭ふた後、すぐに酢を木綿切に浸して一度拭ひます、そうしますと新調と同じ様になります。

火傷の手輕な手當

岐阜　宮田周子

先日二歳になる妹が、鐵瓶をかへして、足に大火傷をいたしました私は、かねて聞いて居りました通り、早速有合せの燒鹽を水に溶して適度の食鹽水をつくり、ガーゼにこれをしめらせ、やめる部分にあ

て、其上を油紙にておほひ、繃帯してやりました、そしてガーゼが乾いた時分には、また前の水に浸し、斯様に一日程絶えず取りかへてやりましたら、水ブクレにもならないで、あともなくきれいになりました

豐は必ず幾重でなくてはいけません。又、ガーゼは二重三重か四重にいたします。

脚氣と咳の療法

三重 あをやぎ

私共の父は、例年脚氣で水腫が酷く、醫者の治療は勿論、世に好いと申す事はいろ／＼試みましたが、麥と小豆が一番よくきゝます、本年も先頃から起り出したので、早速麥小豆各五勺宛、一緒に煮て用ひました處拭ふが如く腫がひいて全快いたしました。又此れから寒氣に向ひますと、誰でも風邪にかゝり易く、咳が出まして困りますが、水飴を御飯茶碗の底に少し入れ、其の上に大根を薄く切つてのせておき、二三時間たちて見ますと上にずつと水が出て居ますから、それを飲みますと咳には大變よくきゝます。

雨傘の保存法

松山 露子

雨傘は買つて直ちにさすのはよくありません、油がかれてからさすのです。そして使用後一年程して、油の少しぬけた頃、又油をはくと新しいものゝ様になつて、二倍以上も使用する事が出來ます、又つきぬけ骨の糸がはづれた時には、すぐに直さなければ、それがため傘の紙をやぶる様な事があります。

子供のしつけ

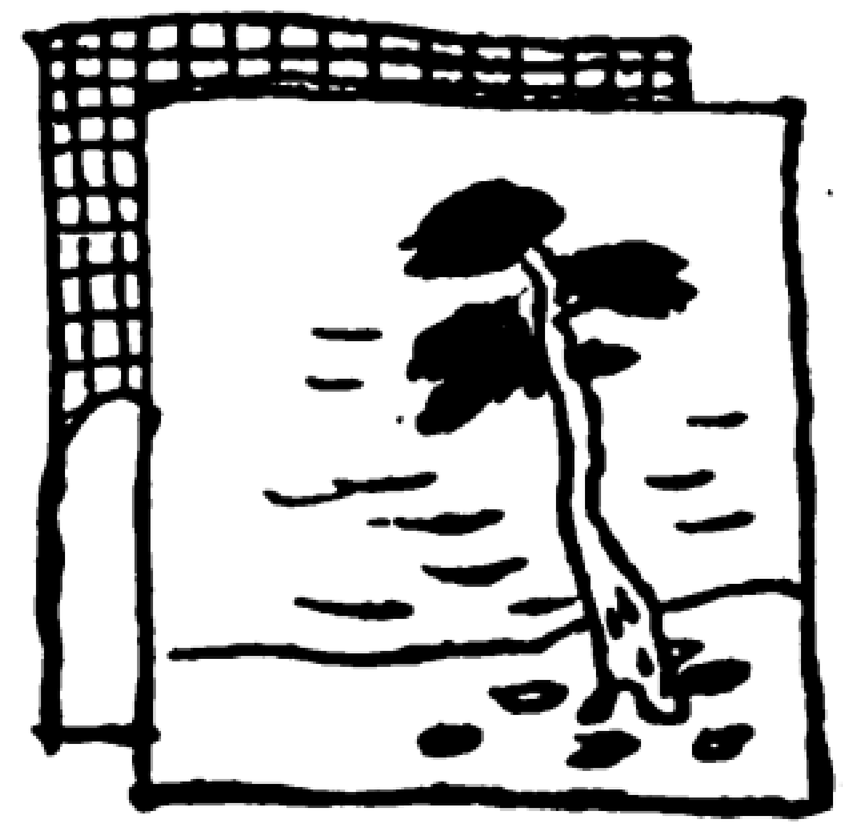
信濃 浦壁野百合子

私方の赤坊は昨年九月生れで御座いますが、誠にいたづらがはげしくて、御飯の時など時に困りましたから、種々考ひました末、赤坊を別室におく習慣をつけました、始めの中は、泣いて幾度も障子をあけ様といたしましたが、其度に可愛想だと言ふ念をおさへてとう／＼あけませんでした、其れが習はしとなりまして、今ではちつとも泣かずにおもちやを持つて遊んで居ります。來客などある場合誠に都合よくなりました、但しおなかのすかぬ時に限ります。

梨の珍料理

大阪 北野靜枝

先づ大粒梨五個程をずつと水洗し、丁寧に皮をむき、四つ割にして心を去ります、之を卸金で卸し、ふきんで汁を絞り取り、鍋に入れて煮立てます、別に寒天一本を綺麗に洗ひ、小くさいて前の煮汁の中に入れ、よく攪拌ぜ、砂糖を少しく入れて、能く溶けた時ふきんでこし、流箱に流し込み、冷水にて冷します、冷えてかたくなりますと、花型なり色々の型に打拔て、之をお客様に出します、誠に妙でございます。



和歌

佐々木信綱先生選

一等 ○ 下關 木本やすの

藍の香の身に心地よき袷きて松原づたひ秋の海みる

評 あるは殊更に物がなしきやうに、あるは殊更につかれしやうになど、わざとらしく作りなしたる歌少なからざる中に、こは何の飾りけも無く、平々淡々叙し下したるうちに、詩趣あふれたるをもて採る。

二等 ○ 下總 小出保子

蔓草をひけばはら〱果の落つる秋の夕べの森のかなしみ

評 しめやかなる趣あり。佳作。

二等 ○ 麹町 齋賀琴

なつかしな紫蘇の葉つみて母上の笑がほ求めしいとけなき日よ

評 原作初句なつかしや結句幼き時よ。

三等 ○ 美作 廣岡隆子

秋の日は御堂の壁を金色にいみしうもこそ彩りにけり

評 四句の「も」といふてにをはに語法上の病なきにしもあらねど、着想の新らしきをもて。

三等 ○ 豐後 菅原をばな

うすぐらき燈影のもとに子等の足袋つくろひをればこふろぎのなく

評 あまりにつくりかざらぬ歌にはあれど、田舎の秋の家の夜おもはれて

三等 ○ 信濃 淡紅子

偲びては倚るになれにし夕ぐれの柱ゝ寒き秋の雨哉

評 雨だりの音一しづく一しづくに胸にしみ入るおもひすべし。

秀逸

○ 常陸 淺海廬の人

わだつみとみそらがなせる碧き繪今朝白き帆のほのにうかべる

評 想像のうつくしきを採る。

○地に垂るゝ玉蜀黍の長き葉の靜にゆらぐ初秋の村　岡山　櫻井芳子

評　野趣あり。

○病みて臥す窓の夕日や梧桐に蟬來てなけるなやましきかな　埼玉　林　畝子

評　あつき頃の病みびとの感じよくあらはれたり。

○大空に投げし小石のはづみなく母なき家にかへる我かな　栃木　波多野嘉子

○只一人冬がれ野みち行がごとさびしく悲し君に別れて　明石　西岡たね

○稻妻のふときらめきて宵ざめしみかほを見たりやみのおばしま　奈良　中富よしみ

評　悽愴の氣せまりくるやうにて。

○洪水や街に舟さす午後の空雲のたえまに晝の月みる　攝津　和久ます子

評　下句あまりに平淡に叙し去りたるは口をし。

○山里や栗の實おつるせゝらぎに影して朝をかみ梳る人　芝　美江子

○舟とめて歌思はゞや鮎川の藻の花月夜月しづかなり　四坂島　渡邊梅子

評　鮎川はいづこの川と知られどうつくしく靜なる趣の浮びくる歌

○夕月に面わさびしくものいひし君を思ひぬ水引の花　堺　さくら子

○故鄕の美くし夢をたどりては寢られぬ夜半を雁の鳴くかな　廣島　加藤しすい

佳作

○月見草咲けばおもほゆみなし兒はかなしと逝きし面影人を　山梨　青柳初子

○[illegible]板にとんぼの夢のまどかなる眞晝の町を樂隊の行く　牛込　峯子

○もの皆の一つ〳〵をなぞの如ふるまひ給ふ君なりしかな　大阪　蘆香

○別れしは野茨白う咲きつゞく海浴びみちの夕まぐれどき　攝津　和久かつ子

○十月來淋しき樹々も匂やかに飾り花もつ君が家かな　下谷　矢佐久靜江

○みまかりし姉上きたりさめ〴〵と泣きます如き秋の夜の雨　水戸　中根雅子

○　小石川　平松富子

たえ〴〵に虫鳴き出でゝ中庭のやみにみだるゝ白萩の花

○　麹町　月岱草

花ちりぬ葉くちぬされど嬉しかり二人が胸の常春の園

○　本郷　松井晴子

雨水後のさびしき月に面ふせてわが運命のはかなさに泣く

○　群馬　萩原千代子

すがるべき一人の母もなき我を本郷娘の如く照らす秋の日

○　深川　佐久間貞子

きびの葉に夕かぜ吹けばこの年の秋は早くも来しかと思ふ

○　仙臺　栗花子

秋の灯や元結を切るつかのまの淡き悲の虫啼く縁に

○　臺北　田副きよ

旅にくれて雨降りいでぬとぼ〳〵と吾友戀し相思樹のかげ

○　羽前　瀧佐子

雨上り雲うす紅き落日に蜩たかくなきいでしかな

○　志摩　西操子

裳すそよしあづま遊びの舞姫や左右左さいうに袖かろらかに

○　京都　志田きみ

いく度かきえむとぞするたま棚のともし火のもとになき人をおもふ

○　四坂島　渡邊梅子

残月は霧の芒にとけ入りて朝風すゞし湖邊なはて

○　千葉　小島きぬ子

山査子に似たる花あり名をとへば君は答へずもの思ふらし

○　三重　清水さく子

故郷は花藤の蔭に風にほふ日ならし稀に南風ふく

○　門司　隅吉はるみ

何となう秋の来てより忘れ居し昔の友の上のなつかし

○　北米　星子

雨すぎてみあかしの影河骨にかすかにゆるゝ仁和寺の壁

○　群馬　板橋きみ子

遊し旅に供へし百合よ汝もまた悲しくあるか首うなだれて

○　備中　愛子

露深き庭に彳み木の間もる月影あびつ故郷偲ぶ

○　四坂島　渡邊梅子

長しなへ國の外に知食す國のそひ行く君が御代哉

○　廣原　暁の女

桐の葉は淋しう散りぬ只一人柱に倚て物を思へば

○　神奈川　會田よし子

圍碁の人まだいれやらで石の音のいとも寂しき秋雨の家

○　山梨　楓子

甲斐心女眉美くしう戀も知る来ませ色濃き葡萄熟らそ

○　石川　森きよ子

行く春をなつかしみゝる病窓の窓帷のうらに金絲雀のなく

○　岩代　石田美子

よく笑ふ友と別れて只一人うなだれ歩む黄昏の道

○　東京　もゝよ

秋は寂し虫のなく音にかこまれて都戀ふ身をあはれとおぼせ

○　大阪　智度利

秋の月四十路男の夜に入りて米とぐ家の軒を照しぬ

○　静岡　平尚深雪

云ひも得ぬ胸のおもひを引きならすことの糸音をみだす秋風

○　河内　林若柳野子

春くれは秋としなればうらみわび少女十九をかくて疲れぬ

○　小田原　紫　子

巾廣の帶の丈なが日に映えていくつか若くなりしといひぬ

○　愛知　尾崎あい

初秋の夕べは悲し萩の扉に蝶の片羽も見出でけるかな

○　京都　三尾喜賀子

君にあひよろこべる時白鳥の悲しみてたつ磯の夕ぐれ

○　三重　田中みれ子

黒川に映る樹の影ゆらぎけり蘆邊の鳥の立たんとするや

○　牛込　平塚白百合

秋の風馬よく肥ゆる北陸奥の野に鞭ふるふ弟思ひぬ

○　常陸　田中ゆかり

黄昏れて寂しみ迫る湖の岸に魚釣りかへる君を待ちけり

○　長崎　田中鳥子

停車場に香汽車入りぬほの／＼と夜明くる海ゆ吹くあきの風

○　沼津　稲野ふく子

かへる可きかたもおぼえず旅にゐて立つ秋に逢ふさびしごころは

○　秋田　政　子

白萩に飛ぶ蝶一つ又一つ草刈る賤の見かへりもせぬ

○　京都　川島芳枝

限なき悲抱き今日と云ふ日を送らんとして野邊に立つ

○　徳島　升田麗子

我が心かく焼けたゞれ寂びれ行く火事に亡びし街の如くに

○　奈良　中富よしみ

とんれるの啼鳥出でゝ故郷の森こそ見ゆれ初秋の風

○　美作　村上敏子

水の音草の葉色に秋立ちてものを思ふに安けきかな

○　鎌倉　齋川嘉女子

わかき日のおもひで長き袖つめてさらに寂しき我心かな

○　徳島　中村玉野女

秋の宵もののことごとく靜まりし中よりひゞくこほろぎのこゑ

○　秋田　紅　ばら

秋風に十畝の畑の芥子散りて殘月かゝる湖添ひの村

○　橫濱　小豆澤しげ子

天地のはてなき如くはてもなき悲しき事のみてる天地

○　信濃　靜　子

玉床の籬の木に影うつす野菊の花の有明の月

○　米國　村越光子

秋すぎぬますらひの身よ夕べごとつゆ草ふみてきみ思ふかな

○　奈良　幸田靜子

初秋の風は單衣にさむかりききみと舟やる湖の朝

○　丹波　細見文子

五日ほど館なれば籬越えて野菊の晴れに物思ひ行く

○　岡島　白鳳女

人戀ひてながむる庭も秋雨の今日もひねもす紫苑にふりぬ

○　千葉　浪の少女

あなあやしわが胸に住む羽ぬけ鳥飛ばむとしては悲しめるなり

○　札幌　俣野恭子

そぼふるや青葉の丘の夏の雨白帆の海に朝の虹みる

○　豐原　山口天都子

夜となりぬ冷き海の青き香は風に吹かれてふところに入る

○　吳　野道枝

天の川空の流れもきゝぬべき靜けき夜なり君の戀しき

○　岩代　雪子

いさゝかの風に露散る萩の花人戀ひて泣く少女子に似て

○　豐後　菅原尾花女

悲しみもなげきも知らぬそのかみふりわけ髪の頃もありしを

○　千葉　戸村登志子

裏庭や母とも呼べず逝きし子の赤き衣を秋風に干す

○　岡山　林榮子

去年の秋舟浮べたる兄あらず佇む湖畔萩みだれ散る

○　下關　冨木美津子

たれこむる秋雨の日やふる郷のはらからせつに戀しかりける

○　靜岡　坂口八千代

雨の夜はしづかにふけて人おもふこゝろしめれる如くなるかな

○　靜岡　後藤文子

儚なりぬ愛うまるゝ如くにもかの夕雲をのぞみ見るかな

○　信濃　つゆ

ふるさとの鎮守まつりのよかぐらを慕ひつゝきく春の夜の笛

○　三河　岡瀬昇子

胸の糸麻と亂れて星あまたながるゝ夜なり祖に指くる秋

○　和歌山　小瀬田富美子

秋の色深みゆくらし嵯峨の野は蟲も夜毎になきまさりつゝ

○　備前　正子

湖近く雁鳴く聞けば故郷に機織りおはす母ぞ戀しき

○　岡山　林榮子

子供等をあつめて星の物かたり爺はすなりはつ秋の夜

○　大阪　波花子

秋の夜の月もくまなきかゝる宵生るゝちごは美しからむ

○　仙臺　南雪代

窓を打つ落葉の音に默したる美しき子は啞となりけん

○　佐渡　古藤英子

おばしまに初雁聞きし其夜より母ます方の戀しうなりぬ

○　弘前　紅うばら

いと甘き香などをかげど秋雨のじめじめふれば冷えゆくこゝろ

○　奈良　美穂子

いと青くはれ渡りたる大空に少女の想ひ責きても見ばや

○　東京　朝倉たかえ

罪深き下界の穢洗ひ去る思へば霹と雨よあらしよ

○　廣島　井伏せん子

紅葵暮破りて降りし大雨の後にさみしくこほろぎのなく

○　名古屋　ひろ子

白萩の亂るゝ垣や故郷の吾が家こひし學びやの窓

○　佐渡　木岡綠子

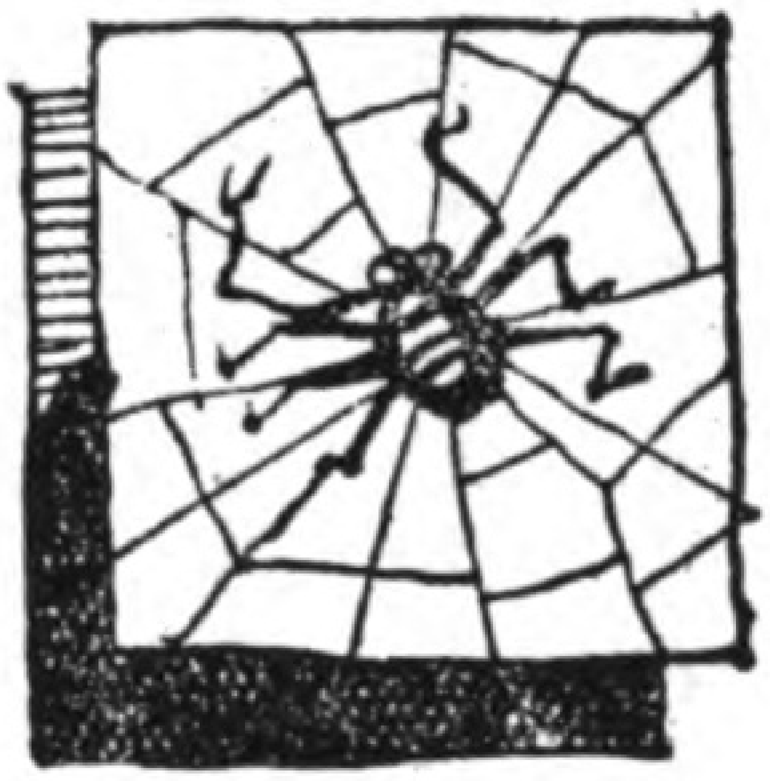
しぐるゝや小萩が原を兄上に泣いて責はれし昔戀しき

○　三島　遠山露子

細行けば月よき磯のさゞれ石みな白玉の音を立つる哉

○　京都　大井光子

秋雨や朱塗の鳥居ぬれて立つもとゆせまり來夕暮のいろ



日記文

初秋の一日

德島　中村玉野女

朝、細き霧の様な秋雨が蕭々と降つて枯れかゝつた桐の葉が鮮に光つてゐる。私は起きて手水を使ふと、すぐ鏡臺の前に坐つた。鏡には蒼白い痩れた顔が映つてゐる。髪を梳くと澤山脱けて落ちる、下に敷いた新聞の上に拔毛が堆く溜つた。晝前、富田の家よりお萩を澤山皿に盛つて送つて來る。父母と姉と妹と一家五人賑はしく喰べる。「萩」といふ名、何となく秋らしき感じしてなつかし。夜、雨上りの青空を白い雲が西へ西へと流れてゐるのを、見ながら暫らく戸口に立つてゐたが、寂しくなつたので、七時頃床に入つた。ポタリ、ポタリと雨垂の音が枕頭に絶えず響く。靜かな中に床下あたりで微かに蟋蟀が啼いてゐる。〔壹等〕

噴火日記

鹿兒島　ゆかり

庭先きの芙蓉、今日から咲き始める、うすとき色の可愛らしい花、この花を限りなく愛でゝゐらした緑様、今は何うしてお在で遊ばすやら。

夜、阿蘇山の噴火をみる、好い月夜だ、阿蘇の連山は夜霧にこめられてはつきりしないが、旺んに燃え上る紅い焔が、いひやうなく美しい。自分は重れ草履引つかけて、庭に下りる澄みきつた月が頭上に照つてゐる、暫くはうつとり見つめてゐたが、自分はふ「即興詩人」の一節アントニオがフエデリゴとベスビオ山に登る所を思出して、もう愉しくつて愉しくつてたまらなかつた、あの時も丁度今夜のやうな月夜だつたといふではないか、あゝ月夜――、噴火――燃ゆる思ひ――まあ何といふコントラストなんだらう、自分は月光あびたまゝ梧桐によりかゝつて心ゆくまで泣いた。〔貳等〕

樂しき日

千葉　戸村登志子

十六日、東京から從兄妹の雪さん、春ちやん、武夫さんが來る筈なので、學校の講習もそこ〳〵に濟ませ、生憎掃除番に當つたのを岡本さんに代つて戴いて歸る。呼息をはづまして我家の門に近づくと、弟と蟬を取つて居る見馴れぬ坊ちやん！、はつと思ふと、二階には白の洋服の人リボンの式部樣、夜は皆して歌留多を取る。都の人の腕の華やかさ、床に就いても話に花が咲いて、一時過ぐるまで語りつゞけた。

十七日、造花の講習休み、弟と春ちやんとは腕白者の寄集りで木へ昇るやら、水を浴びるやら、おまけに力を自慢する積りで、弟がお寺の前の地藏尊を轉ばして寺男の劍突を喰つた。

武夫さんとお父さんと兄さんとは二階で烏鷺の合戰、時々聲高な笑ひが漏れる。雪さんと私は母ちやんの料理のお手傳ひ。

夕方二人で散歩に出ると、惡戲者が二人來る。驚かしてやらうと生籬に隱れて居ると、春ちやんの聲で「本當だよ、僕のお母さんが言つたよ、諒さんは兄さんのお嫁さんだつて」と話しながら來る。雪さんと嫣然顏

見合せて私は真赤になつて俯いた。「まあ来たよ」といふので、仕方がないからわつと驚かすと、立ち止つた春ちやんがぱつちりした眼を円くして「やい兄さんのお嫁さんー」と呼ぶ。と、雪さんは指輪の光る可愛い拳で、默つて撲ぐる真似をしていらつしやつた。（二等賞）

さびしき日

駿河　君栄

六日、けふも雨、雨の音ほと〳〵と胸に沁みいる。母の病やゝよろしけれど、未ださつぱりとし玉はず。小妹花子さへ心地あしとて、枕を列べて床に就く。

つれ〴〵なるまゝに文庫とり出で、古きうつしゑなど見る、同窓の君たち今如何に暮し玉ふらん、永き星霜、机を列べ卓を囲みて、姉妹の如く睦び合ひ、末永く交をと誓ひしも、一度校を退けば便りさへ交はさぬが多し。女の罪か否が罪か、

入相の鐘ひゞく頃ほひ、雨にぬれて父上帰り玉ふ。十時、小妹と母とを看護しつゝ床につく。雨尚歇まず、風さへ加りて、樹の葉の相搏つ音いとゞ物凄し。（秀逸）

小春日和

東京　竹内とみ子

お部屋の掃除を終つてから、純子様へのお返事を書いて居ると、小窓の障子にさつと鳥の影がさして消えた。まあ、何誰かお出でなさる知らせかしらと獨り心に呟きながら、尺に餘る江戸川をする〳〵と巻いて袋に納め、封じ目に小さく香と書いた上へ花瓶を載せ。其のまゝ縁へ出て見ると、心地好く澄み渡つた瑠璃色の空にうつりよく、木々の紅が雨上りの露を帯びて鮮かに光つて居る、座布団を持ち出して干して居ると、桔梗や女郎花が咲いてる隙なら、垣根のあたりに、百舌鳥が頻り啼いて居る。井戸端ではざあ〳〵と水の音が絶えず、今日はお洗濯や張り物が沢山に出来さうだ。（秀逸）

或る朝

京都　藤浪雪江

「雪」と呼ばれて吃驚して起きて見ると、夜はもうすつかり明け離れて居る、目覚しの鳴るのも知らなかつたのかしら、アゝまう〳〵、真人と二人自働車に乗つて、ベルを鳴らして走つて居たと思つたのが夢で、あのベルの音は時計だつたかしらと、可笑しくもあり、未来があの様にと嬉しくもあり 思はずニツコリすると、怪訝な御顔で「早く〳〵」と御急ぎになる、あはてゝ台所へ急ぐと、昨日の夕飯の跡が其儘、あゝ〳〵是から火を起して、御飯を炊いて 御汁をこしらへてと思ふと、胸がわく〳〵手が振える、真人が遅刻なされたら、姑の口さがないお大様に、何や彼や 言はれるとの此間の御言葉、あゝ又そんな事をと思ふと……えゝ如何してこうまあ火が起きないのかしら、

洗濯日記

東京　宮島しづく

庭の井で洗濯を始めた、手を動すたびに、水がザハ〳〵と零れる、水の末は一筋になつて破垣の縁を擦すつた、雞が二三羽餘念なく餌を拾つてゐる、小猫が足許へ来てじやれる、シートと叱りつけたら、鈴を鳴らしながら柿の木に駈け上つた、一寸洗濯の手を止めて其の方を見上げたら、青い葉の間に柿の實が見事に垂れてゐる、やがて二枚の單衣物を洗

ひ上げた、秋の空は高く晴れて、和かな日が庭一面にあたつてゐる。

秋の花

千葉　鈴木孝子

四日、朝露にしとど濡れた庭の白萩は今が眞盛り、冷たい風の吹く度に、ほろ〳〵散る。ぢつと目を閉ぢて歌を思ふ。

五日、秋の弱い日光は、亂れ咲いた女郎花や紫苑をゆるう照して居る衣縫ふ手を止めて澄み渡つた空を見上げたら、軒のあたりを赤蜻蛉が勢よく飛んでる。

六日、鉢の夕顔が一輪咲いた、夕闇の中に純白の大輪、何と謂ふ氣高い、そして優しい花だらう、そつと口嗽をすると、夢の樣な甘い香ひが低く漂ふ。

コスモス

京橋　伊東幸子

朝、澁谷の里の叔母様から秋草に添へての御手紙を使の人が持つて來て下すつた。水色のリボンで結へた花の中に、美しく咲いたコスモスのあるを見て、三年前の病院生活を偲ふ。病院の庭には此花が澤山あつて風にハラハラと散るのを、胸を病むで見る私は悲しかつた。

まだ夏は殘つてゐるとみえて、お晝過に夕立があつた。十三四の風體の娘が、向方の家の軒下で雨宿りをしながら、お錢を勘定してゐた。

夜、晴れ渡つた空には星が一ぱい輝いて銀砂を撒いたやう、秋風涼しく通ふ窓のもとで、平家物語を讀めば、どこやらに蟋蟀のなくのが聞える。

祭日の前夜

岐阜　牧野米子

明日はお祭り、氏神様のお祭りもいよ〳〵明日になつた。日本晴れの上天氣で、鎮守の森では白い幟が、はた〳〵と風になびいて居る鳶が頻りに空高く鳴く。

親類からのお客様が都合四人で、こんな賑やかな嬉しいことはない。お土産も澤山にもらつた。お母さんと自分は、正午過ぎまで、御馳走拵えで忙しかつた。

御馳走はお鮨位で、何も珍らしいものはなけれど、只一つ松茸の御飯だけは、町ではまだ容易に喰べられない御馳走だ。

話に夜を更して、打ち揃つて寢んだのが十二時過、月の光が水の樣であつた。

葉月の一日

熊本　白萩

何時になく曉方近く目が醒めたから、起きて直ぐ裏門から彷徨ひ出た未だ空には二つ三つの星さへまたゝいてゐる。朝露深く立ち罩めた野路にしつとりと置いた白露踏んで、精一杯、清い空氣を吸ふ心地よさ、夢の如き野末にゆらめく白い影を追ふて、しとゞに裾をぬらした甲斐あつて 氣高い白百合を一本手にした時は、眞實に嬉しかつた。

午後は清い薫りに醉ひながらお針と親しんだ、夕方早く妹様と二人で裏の葡萄棚の下で汗を流して、浴衣の袂涼しく縁に端居してゐると、夕闇ほのかに月見草が匂ふて眞實に好い夜頃である。

髮結

近江　平塚ゆかり子

母様が「今のうちだから」とやかましく仰有るので、今日は思ひ切つて島田に結ふて見ようと、かもじ元結など持つて家を出た。道々出來上りの樣子を想像しながら、いつか髪結さんの家まで來た。可愛らしい襟足の子さんが、セツセと結直しをしてゐる。今しがた若いお嫁さんが、初々しい丸髷の出來上つた所、赤い手柄がチラツと見えるが、顔は鏡臺で見えない。「有難う」と立上つた途端、「あらつ」と互ひに顔見合せて吃驚した。私と同じ級だつたお文さんだもの、一月ばかり前に隣村へ嫁いたとは聞いてゐたが、眞逆道照所で逢はうとは夢にも思つてゐなかつたのに。それにしても、よく似合ふこと、「よく出來ましたよ」と肩を叩くと眞赤になつて「初めてよ」とニツコリしながら、氣遣しげに髷を押へて見て恥入る。私は傘に來る年の春が偲ばれた。

歸省日記の終りに

下野とよ子

四十日の休暇は、夢のやうに過ぎ去つてしまつた、歸省日記の最後の頁も、いま記し終つた。

あゝこの四十頁、それは悉く、樂しい記事を以て充たされてある。私はこの日記の終りに於て、始めて强く、我が家の温かみを感じた。

明日よりは、新に、學窓日記の稿を起さう、そして百頁二百頁と、また來る夏の歸省の日まで、私は此稿を續けやう、淸い樂しい思ひ出の種を、その每日の頁にのこして。

雨の一日

鈴木銀杏子

昨日からの雨は、今日になつても降り止まないで、鬱陶しいこと限りなし、鵜は羽根をふくらして、三羽とも庭の隅にうづくまつて居る、私は机に倚つて、昨日戴いたお友達の御手紙の返しを認めて居ると、隣家との間に、バサリと桐の葉が落ちた音がして、逝く秋の淋しみといふ小さい聲が、私の胸に溢れる、それが筆のさきへまで走る、前十時私は平凡なメイムが恨めしい樣な氣がして、新聞も雜誌も讀む心にはならず、ひれもす机の前で、本見るともなく歌作るともなく、雨の日曜を送る、まことにつまらない日だ、夕方稲の香が小窓から訪れて、蘇生したかの樣に、故鄉の小川をなつかしく思つた。

留守居日記

みどり

主人が出て行つた後へ葉書が參りました、と千代が持つて來た、「稚坊が見たいから、御寫眞を一枚是非送つて下さい、お母さんも、兄さんも皆が左樣言つて居ますから。姉より、」とある。私は去年の今頃はお母さんに、お前はまだ赤ン坊の樣だネと笑はれて居たが、早や子供の寫眞を望まれる身となつたかと思ふと、何だか極りが惡い樣な、耻しい中にも嬉しい樣な氣がする、寫眞を撮るには何の着物が好く似合ふだらうかとサンぐ着せたり脫がせたり仕た揚句、漸くメリンスに大きな蝶の形の着物を出し、是が一番よく似合と獨り合點して何にも知らない赤ン坊に明日は是を着て寫眞を撮つて「おばさん」に送らうれと獨言。

秋の夜

四谷みち子

夕方、庭のダリアの花があんまり可愛らしいので、折りに出掛る途端チリリンと格子の開く音がする、郵便かと思つて飛び出したら、廊下で

パツタリ出會つたのは一郎さんだつた。尺八を持つてるので「合奏？」と聞いたら、笑つて答へない。面白い人だ。少ししたら、案の如く下女が迎へに來た。奥の六疊で妙子が箏で、一郎さんと千鳥合奏の最中。前髪を思ひきりふくらましたマガレツトに白い繻のリボン。眞白い頸が瓦斯のせいか青く見える、柱によりかゝつて目をつぶつた一郎さんの眞白な横顔が、あざやかに笛の面を追つてゐる。私は、微笑を浮かべた母様の満足らしい面を、ぢつと見詰めたまゝ泣きたかつた。

朝の光榮

美作　田鶴子

「むして培ひ咲き花得てよ」と、兄様から御文に添へて賜はつたモーニングローリー、未だ一度も聞かない名前、直譯すれば「朝の光榮」、はて何んな花かと種を下したその日から、樂しんで〳〵毎日氣をつけてゐた甲斐の現はれて、今朝始めて開いた、可愛い花！、其はやつぱり、こちらの朝顏であつた。西洋の方はこの花に依つて、早起の良習慣を作り、從つて朝の光榮に浴する――とでも云ふ意味で、こんな名前をつけたのではなかろうかと、私は思つた。

日曜の日記

千葉　戸村水枝

朝、生け花の稽古をする。材料は椿、流しを一本折つて了つたので、書齋の本箱の上へ置く。鷄小屋で鷄が勝聞しげに鳴くから行つて見ると、弟が掌に小さい卵を載せて來る。「姉さん、ミノルカの初産！」と見せる「おや綺麗なこと」「僕が貰ふよ」と指に唾液を附けて卵に着いて血を拭いて居た。

午後、芳子さん來訪、いつもの樣にエスを連れて。生け花を見附けて眞似兵だの衞兵だのと惡口をたゝくから、妾も負けずにしやべる。不圖聞くと鷄の鳴聲、「春ちん見てお出でよ」弟は「今度はどれが卵を産んだのだらうかと駈けて行つたが」直ぐ歸つて「エスの奴、失敬よ、鷄小屋に這入つて居たが僕大きい石を投げてやつた」「當つて！」芳ちやんが訊く、「當つて死んだよ」と言つて居る處へのそ〳〵エスが來て、其處へごろりと寢る、「この嘘つき」と芳子さんが、こはい風をして見せると、弟は「そんな顏をするとお嫁さんに貰つてやらないぞ」と空威張りに威張つて行つて了ふ。

花妻日記

東京　柏葉

お愛さんが來たのを幸ひ、久々で髷に結つて貰ふ、室に入れば大鏡の中に、くつきり映る丸髷姿！、我知らずにつこりした。赤い手柄が派手ぢやあないかしら、時計が五時を打つ、旦那樣お歸りの頃とお居間を片付けて、お机の上の青磁の花瓶に、水色の花を一輪さして、短劍姿のお寫眞の傍へ置く。と、御門の開く音、はつとして駈け出れば、もう玄關で靴をぬいてゐらつしやる「お歸り遊ばせ」と、靜に兩手をついてお迎へ申す、鍔のついた帽子と紫のお包受け取て後に從ひ、長い廊下をお室へとお伴する。

「濱さん」と振返つてお呼び遊すので「はい」と申上げて、一寸頭を仰げば輝いたお目の中に愛を含んで、ぢつと私を見てゐらつしやる「あらホヽ御用ではございませんの？」「濱さん」又繰返して仰有る「あの夜の濱さんに逢つた樣だ……」私は思はず下を向いて了つた。



美文

母と子

山形 阿部英子

萩野様の嬢様の天長節のお仕度を、頼まれて縫ふて居る、秋萩に蝶々の模様の目のさむる様な友禪の重ねです、學校から歸つて來た雪子は、「母様只今」と本包みを置いたまゝ、ぢつと其袷を絎けて行く私の手先きを見つめてゐる、世が世ならこんな物の一重や二重は何時でも出來るものを、あゝ九ツにもなれば着たいであらう、父なき我子の顔をみて「雪ちやんや、母アさんがネ、精出してお仕事をしてお前にも拵へて上げるよ」雪子はそと涙をふいて、「母アさん、私そんな物着たくて泣いたのぢやないの」母をなぐさめやうとして言つた言葉にかへつて私は泣かされた、(一等)

姪の寫眞

四谷 志良藤子

「藤さん、寫眞が來ましたよ」、と母様のお聲、お座敷へ飛んで行く、何んて可愛らしいのでせう、お人形様位ぢやないわ、鈴の目をぱつちりと向ふを見つめて、檔の唇を思はせ振り曲げて結んで……、朝鮮へ行て居つしやるお姉様の赤ちやんです、父様、母様のお顏つたら溶けてしさいさう、手から手へ小半時。

「もう宜いか」と言つて父様は寫眞を懐になすつてツとお立ちになる、番町の親戚へ御披露に行かれるのです「お祖父様におなりなすつて大喜びね」と申しますと、母様が「藤さんも叔母さんですよ、少ししつかりなさい」だつて、御自分はお祖母様になつたのに、(二等)

弟の前途

備後 葉がくれ

弟は今日も腦が悪いと言つて寢てゐる、原因は身の行途が暗いのを案じる餘りらしい、本當に如何してやつたらよいのだらう、養家には二人も男子があとから出來るし 實家には遺産はなくなるし、養家へ持つて行つた財産で勉强して立たうと思へば、勉强するのなら實家へ歸へつてくれといはれるし、實家へ歸れは僅かに殘つた財産も使はうとするし、どうしたらよいのだらう、學ぶに期をはづしてはと、姉様は弟の爲に花の盛りを嫁入りもせず女事務員にまでになつて、弟を學校へ御入れなすつたけれど、姉様だつていつまで一人でゐられるものでもなし、嗚呼兩親あつたらこんな苦勞はしまいに……(三等)

裁縫

美濃 秀子

「裁縫なんか私達にはむかないわれえ」……女である事を忘れて、其の

時間の早くたちます樣、少しでもテニスする間の長くてあれかしと、とんでもないことを祈つた昔が、今はなか〳〵に恨めしい、朝夕家に居るやうになつたら、母樣は「一枚にそんなに長くかゝるやうではもし他家へ嫁つたら如何するの」……二言目にはいつもこれ、またかと澁々して居る中に、追々早く出來る樣になつた、面白くもなつた、一年後の今日では、以前に呉服屋に仕立てさせた着物を、「これはお家で御作り遊ばして？」なんて聞かれると、顔から火が出る程に辛い。（秀逸）

夏やせ

大阪　月江

お湯から上がつて御化粧して髪を結げる、前髪がうまくならないので三度計り直した、淡水色の巾廣リボンを髪にくい付けて、姿見の前に立つと、薄つすりはいた御粉の香りがパツと浮く、思ひなしか首のあたりから細そりとなで肩に見える、少し痩せて嬉しいこと、

縁に立つて外を眺めてゐると秋さんが來た、「月さん、痩せたのねエ、夏に痩せ戀にやせたる女かな、ホヽヽヽ詩的よ」、「まア嫌」

白い秋さんの横顔に、淡く岐阜提灯の灯影が流れて、庭の夕暗の内に白い木槿の花がはつきと浮いて居る、萩の繁みに鈴虫が鳴く、（秀逸）

葡萄の實

奥野　伊都子

マア綺麗！　庭の大きな棚にぶら〳〵下つて居るのも美しいけれど、熟しに〳〵た葡萄をかう取り入れたのもうつくしい、紫のはつぶが圓く

て大きく、そして西洋種のやうに黒くなく、丁度ルビーのやう、そのあでやかな色をあらはに出さずに上に白い粉がかゝつて、ほんに美人がベールを被つたやう。御近所へお上げするとて籠ごしらへ遊ばす母上と姉さまの御顔までがうつくしく、そして嬉しそうに見える。（秀逸）

其の前日

本郷　彌生

着物は出來るし道具も揃ふて、唯そは〳〵と用も何も手につかずにやがて來る日にあくがれて居たもの、愈々明日と思ふと、何だか身を堅くしばられるやうで、いつそ矢張り呑氣にお人形でもいぢつて居たい樣な氣にも成る、慈愛深き父母の許より纜を解いて浮世の海とやらへ漕ぎ出るのだが、そこにはどんな暴風が起つてゐるかも知れない、暗礁も有らう、淺瀬もあらふと思ふと、怖ろしいやら、嬉しいやら、淋しいやらで、つい涙が溢れてくる。

我身の秋

四谷　みち子

なつかいし紫の靄か、淡い光たゝへて、初秋の街はくれかゝつた、青ガラスの中から色の白い若い女が三四人さゞめきながら出て來たが、私の姿を意味ありげに見かへり〳〵行過ぎた、なまめかしいはなやかな笑ひ聲が、ねたましい樣にすさびた私の胸に流れる、もう六時だ、つかれた樣な笛の音が靜まつた廣い街にひゞく、あゝ私は何處まで行つたら光ある道を見ひ出し得よう、このまゝうゑてつかれて何處かに行倒れる

のではなからうか。

水蜜桃

福島　萬野貞子

何と云ふ立派な桃だろう、春私が家を出る時には、まだ堅い／＼つぼみであつたのが、美しく花が咲いて、いつかまたこんな大きな實になつた、きのふの様だか早半歳、あゝ私は其間に何を待たのだらう、羽二重の様な皮をとると、タラ／＼と流れる甘露…、母の慈愛は私の全身にめぐつた、

月はさえ、虫の音哀れに、秋の夜は長い、

水彩畫

愛知　近藤秋草

朝からそぼ降る雨に、なんとなく心地が悪いので、午後は離れで仕事をする、いつしか眼は上に懸けてある額に移つた、あゝこの水彩畫は二とせ前の夏、兄様が描いて下さつたのだ、磯馴松の間、白砂の上に佇みて、遠波近波の寄せてはかへす伊勢海の景色を眺めつゝあるあの少女はなんて可愛ゆい姿であらう、あゝ今一度あんな姿になつて見たい、思へば都の空がなつかしい。

美しい山河

鹿兒島　ゆかり

コスモスの真盛り、木芙蓉もけふから三つほど咲きはじめる、法師蟬が鳴いて秋の氣は天にも地にも満ちみちてる、例のやうに朝の深呼吸をへて花園を一まはり、露しとゞな道芝ふんで後の山による、錦江の静かな湾を見下して櫻島に對する、美しい湾！　高い山！　あゝこのなつかしい故郷を後に都へ上る日は近づいた、母と妹をおいてこの山この海にわかれて行くのは何だか悲しい氣持がする。

戸隠街道

信濃　優栗子

木陰の無い戸隠街道は、風も無いのに白い砂がぼーつと立つて居る。七曲り中の坂道に疲れきつて、足はなか／＼はかどらない、右側の崖の小笹がさや／＼と揺らいだと思ふと、すーつと涼しい風が吹いて来た。平安の神代櫻が、崖下にこんもりと見える。桂山の一本松は茶屋の軒端から涼しげに見える、氣ばかりあせつて、疲れた足は矢張り進まない。

ふるさと

滋賀　野の花

「思へば遠し…」と寄宿の窓に流石に聲低う歌ひては只戀ひに戀ひたりしこの故郷に、今日は心安き身を小窓に倚せて彼方此方打ち見やれば稲の穂分くる山の松風、緑の野縫ふ川瀬の水、實に昔見ゆる景色なるかな、おゝ幽かに聞こゆる列車の音、三年のむかし希望に満ちしわが少女の身を乗せて、花の都にいでたたしめしもあれよ、今は世に亡き嚴父上のひたすら止め給ひしも耳にだにせず、ただ學ばむの思ひにのみ駆られて心強くもふりすてたりし山よ川よ、あはれ、その頃は浮世の旅の厨く

まで我に辛きものとは思はざりしを、
父母ゐますこの里、平和みてるこの村、今はなかなか戀はしうて。

大雨

備後 けん子

墨の様な夕立雲がむら〳〵と天へ捲き上げられると、見る中に冷い風が颯あッと吹いて、大粒の雨がポッリ、耳を掩ふた子供等が逃げ込む間もあらせず、きらり、がら〳〵がらッ、忽ちざあーと来る雨に、蓮の葉破れ、茎も折るゝかとばかり、電は二條三條つゞけさまに池の面にたばしる。降る吹く光る鳴る、まことに世も滅するかと思ふ様の荒れ方、これも一時、あたりがすうと明るくなつた、かすかにごろ〳〵の音が聞える。池の水は増してあふるゝばかり、西の山には夕日がきら〳〵さして白山が嶺から有明の峯へかけてさても浮びけりな、七彩の虹。

茶の湯の一時

近江 村西まさ子

今し嬢子様は、蝶形に結ばれたなつめ入の巾着の紐をとかうと遊ばす白魚のやうな御手にはめられた二つの指環は、キラ〳〵と目に映つた。漆のやうな美しい御髪を、恰好のいゝ桃割に遊して、巾びろの白たけながのよく似合ふこと、オリーブ色の御召物に緋の御み帯きりりとしめられた御姿！　折々御もらし給ふ御笑顔の御可愛いらしい事！、私はぢつと見入てゐると、床の間から置時計が節おもしろう何か歌ひ出した、皆様は此室内にみち〳〵た、平和な空気によつてでもゐらつしやるかのやうお庭の方からすつと入つたそよ風に、今活けたばかりの白萩が、ホロホロとこぼれた。

昔をしのぶ

大阪 双葉

瓜は棚に、柿は背戸にあり、貧しきながらも七色の品々調へ、亡き夫の精霊を祭る、佛前には思出多き新婚當時の寫眞を飾りつ、これを見るにつけ、遼東の露と消え給ひし時は、父の顔さへ分たぬ孤兒の今學校に通ひ行く姿を、唯一目生き給ひし我が夫にも見せ、よく育くみしとのお言葉を受け得る身ならば、今日迄の女手一つに送り来し此の苦勞も夕立晴れし心地こそすれ、今は其甲斐も泣けど叫べど……、唯願はくば草の下より此の子の行末幸あれと守り給へかし等繰り言かけて、今更ながら歎く折節、表より歸り来る兒の、母ア様、佛様はいつ入らつしやるの、父つ様は今に入らつしやるつて、お隣の伯母様が言つて入らッしたわと云ふに涙にあたりは見えずなりぬ。

秋晴の日

神戸 木村ゆり子

リンリンリン始業を告げる鐘の音が園内に響き渡ると、今迄お庭の山の上やら池の邊りやらに、三三五五打連れて遊びて餘念なかつた愛らしい子供達は小さい其手を引きつれて長い廊下を遊戯室へと急ぐ、空は拭ふた様に晴れ渡つて、軽い白雲が高い處をとんでゐる、木の葉が風にサラサラとゆるいで何か私語いてゐるやう、園内はいと静かで、すべての

物に秋の聲がある遠くの遊戯室から床しいオルガンの音が流れて來た。

夜の港

千葉 高木照子

秋の風は靜に鬢の毛をなぶる、十三夜の月は今東の山を離れた、さらさらと小波が渚を洗ふ毎に、月の影は細かに碎ける、眠つた様な浮島の端からは、船の灯が苫を洩れて赤く光る、すぐ前を、夜の漁に行くのであらう、ぎーぎーと櫓の音高く二三艘の漁舟が通つた、あとはたゞ靜かな波の音ばかり。

朝

瀧野川 奈美子

塵埃な權現の森も、一段低い畑の柳も、一面に朝霧が漸く罩めて、風がそよそよと葉末を滑つて氣持よく頬を撫でる、早草は可愛く閉じた唇に美しい露をのせてゐる、垣一ぱいにまつはる牽牛花は、眼覺める計り美しく咲いてゐるが、矢張り眞紅なのが一番いゝ、例日の様に端からそれを數へながら葉隱れのを出してやつた、

忘れられぬ日

京都 直子

兄様が遼陽の戰で戰死をとげられてから、巡り巡りて七年の法事が今日つとまつた、洋服や白衿紋附の方々が廣い本堂へづらりと、御靈になると、御經が靜かに初まつた、あたりが靜まるにつれて御出發の折の勇ましいお姿が、ありありと見えて思ひは七年の昔にかへつた姉様が高く飾られた佛前に伏目勝にお立ちに成つた時は、思はず涙をこぼした、黑い御髮をじみな束髮にして、黑羽二重のお裾れに、お召と同じ紋を織出した黑繻珍の丸帯の目立たぬおつくりは、一しほ御心の中も讀まれて淋しい心地がした。

私の少女時代

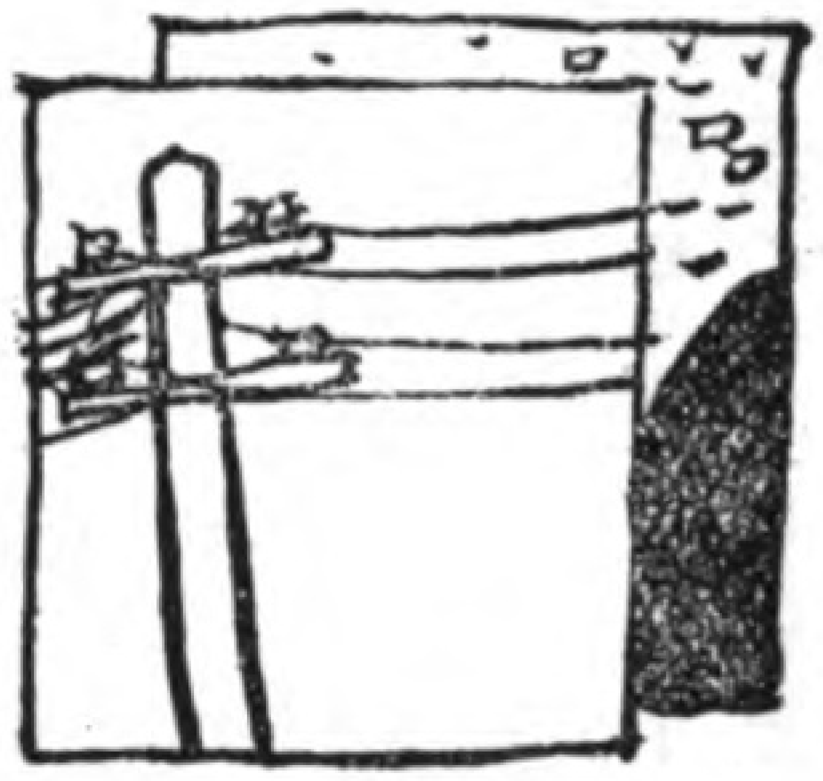
東京 登美子

あゝ、今は何の悲しみもなく世を過す身なれ共、過去のことを思ひ出せば、まことに涙の種なり、丁度私の少女時代に、都に遠き片田舎に住居せし時家にありては嫂きゝ母の膝下にいつくしまれながら、門外へ出づれば、「ヤア混血兒ー　混血兒が來たし」と、あゝ何たる惡しき言の葉なりしぞ、聞く度毎に君の眼に露宿せしも幾度なりしかいかに離り種とはいへ、かくまで我身なのゝしらなくともよきものをと、人なき折には水鏡にうつす姿も涙に曇りし。

あゝ此の花

志摩 西操子

清子が精を込めて培つた朝顔は今朝見ると、美しい花が咲き揃つてゐる、赤白紫とりどりにえも言はれぬ眺めである、あゝ此花を見るにつけても思ひ出される、清子は今頃三途の川を渡りかけたであらうか、鬼籍の咲いてゐるあたりで迷つてゐはすまいか、反魂の力あるなれば、せめてこの綺麗な花を一と目見せてやらうものを。



書簡文

入學せる弟へ

長野　あや子

嬉しとは實に今日の御たよりに候、心痛め　し競爭試驗に見事及第なされ、明日よりは立派なる商船校の生徒とならるゝちう、一重に日頃御勉强の結果と母上も妾も涙し　て喜び合ひ候、まして御身が御滿足お得意いかばかりぞと、推し參らせ候、晴勢に暗き妾なれば　今後の心得などくどうは申間敷候へど、唯、「父君の御遺訓是れのみは深く胸底にたゝみて忘れ給はぬ樣吳々も願上候、母上も妾も世に望と申して　は只々御身が立身出世のみ、望遠鏡片手に船橋に立ちて、おごそかに命を八方に傳ふる、英姿颯爽たる未來の船長を心にゑがきつゝ、ひたすらに其の日を待ち暮し居り候、取敢へず御祝のみかしこ。(一等)

寫眞を貰ひて

大阪　辰　子

夏子樣、只今は可愛い光ちやんのお寫眞ありがたう、パッチリと活々した眼元、あなたに全然だわ、ふつくりとした頰、小さな口元、何て可愛いんでせう、お近くだつたら毎日でも抱つこまして頂くのに、ほんとに考へて見ると可笑しいものれ、つい此間までマガレットにカシミヤの袴裾短かな學生姿でしたのに、もうこんな可愛い人の母ちやんにおなりなすつて、水の滴る樣な丸髷に眞紅の手柄うつりよく　この天使の樣な光ちやんお相手に御良人と樂し　く物語り給ふお姿、目に見えるやうです、一しほお美しい事でせう、早くお目にかゝり度うございます。

四五日前から、裏庭に、お好きな桔梗や秋菊が咲き初めてよ、實に秋草はしほらしくて、淸い月の夜などはまた格別ですれ、夏子樣、ほんとにこの趣ある眺めの去らぬ中に、是非一度お出で下さいませな、お待ち申て居ます。(二等)

悲しき秋の實り

東京　く　れ　な　ゐ

大洪水の後を今日見ました、千住の方へ行かなけ　ればならぬ用事がありましたから……、武藏野の秋は實にいたま　しうございます、萬頃の稻田のことぐく黃色になつて伏したのを、豐かに實つたの　かと見れば、腐つて黃色くなつたのです。凡ての野菜物はあとか　たもなく泥にそみ、水にとろかされて、靑色わづかに點々、何といふみじめなことでございませう、家は壁がきれいに洗ひ落され、疊はくさり　器具はうしなひ、子供の着てゐる着物には白いかびさへ見え　ます、大洪水後の實況を見て眼に淚がにじみました。(三等)

仲善しの友に

濱町　櫻　子

奈保子さん、御手紙ありがたう、私れ、二三日このかた頭痛がして仕

方がなかつたの。

蟲が昨日あなたのお手紙拜見して、あまり面白いものですから、病氣なぞ何處へか飛んで行つてしまつてよ、ですけれどあなたもずゐぶん無情よ、面白い文章の一番終りに、私の大きらいな蛞の話などを書いて、折角面白い愉快な蟲を慄とさせるのですもの、ほんとうにそんな大きいのが居たんですの、あなたのお宅へ伺ふのが恐ろしくなりましたわ、一番よかつたのは漫畫よ、亘さんがお母さまのお乳をくはへて居た處を備されて泣き顔の寫生には、私は可笑くつて吹き出したわ、それから多滿子さんがお團子をポチに奪はれた處、頻るの親友でも、玉さんの顔がポチと絶交と云つた樣れ、私同情してよ、私も二三日のうちに書いて上げます。（秀逸）

姥よりの手紙

神戸　倭子

假初の御患とのみ思ひ參らせしお嬢樣、急に病重らせ給ひ、敢無くも昨夜九時遂に御永眠遊され候、御幼少の頃より御育て申上げ、御行末かけて御幸願ひ參らせし甲斐も無く、勿體なき御事乍ら、我子に先立たれし心地して、人目無くば御骸に取りつきても泣かまほしき許り涙せきあへず候、何時ぞや若樣よりの御文御覽ぜせられ、甚く驚き且つ悲嘆に沈ませ給ひしが、此度の御病ひもとかと存じられ、逝かせ給ふ前の日など御心地よげに四方山の御話遊ばされ候ひしも、今はそれさへ御形見の御言の葉となりしこそ悲みにて候へ、御最後に、姥や兄樣に呉々も母樣を御恨み下さるなと云つて……と涙乍らに御枕の下より御取り出し遊ばされしは、何時の間に物し給ひけん、此御遺書にて候、御里方母兄樣の御怒りも候由にて、若樣御呼び歸へしの儀も無之、一としほ御懇しく存候。（秀逸）

寄宿舎の妹に

東京　紫房

久々で御便りありがたう、此頃は靜楠さんと御二人きりの由、どんなにか淋しいでせう、併し氣の合つた方だからまた却てよいでせう、羨しい事れ、あの高い十疊の室に二人でどんな方面の話が出るでせう、定めし前途の空想？　それとも相變らずの通つた話ぢやないかしら、此間のやうに雨ばかり降つて居ると、猶更話に更けるでせう、手でも握り合つて……

考へると一番其時代がなつかしい、でも此頃は敏夫が可愛くなつていつでも笑ひの種を蒔いては皆にお腹を抱へさせてよ。

今度の日曜には丁度藤さんが歸るさうですから、ぜひあなたにも入らつしやい、澤山御馳走しますよ。（秀逸）

奇勝通信

山梨　小百合

今日金溪ホテルを立ち出で昇仙橋を越えて色々見物致しました、

岩傳ひ歩み心地に横越えて
神の御國にわれはさまよふ

ほんに此邊は神國と申しても過言ではありません、彼の耶馬溪と並び稱せらるゝ御嶽四十八景の中でも、尤も佳絶な所です、瀞を渡りますと、名も優しい仙娥瀧、それより奇岩怪石を飛び越えて瀧壺近く下りますと、飛沫は袂を濡して冷氣自ら身に迫ります。

山姫が衣な衣な裳に下り立ちて

清けき水に澄みますとよ

曾一條の細徑を辿り行けば、夕の松島に返ります、懐かしい名でしよう、昨日のお便は其處で認めました。

呉の梅子様へ

東京　つゆ子

お手紙どうも恐れ入りました、何がお目出度うで御座いますの、竹村さんからもそんな事云ッておよこしなさいましたが、とんだ噂が廣まつたものですね、私が九月中にお嫁に行くのだつて！　ホヽヽヽ私にも云はないで誰がそんな勝手な事を定めて下さいましたの。

いくら梅子さんがマダムにおなり遊ばしたからつて、そんなに私迄引張り込まなくてもいゝ事よ、私に默つて結婚して呉へ飛び逃げて行らしたのはあれ誰方でしたか、私はそんな眞似を致しません、ほんとに私が嫁くのなら、樂隊で廣告でもして踊りますわ、そりや私だつて一生家に居て弟の厄介にならうとは思ひませんから、拾らつて下さる人があれば何處へでもまゐりますけれど、それは三年の後だか、五年の後だか、其頃には貴女はいゝお母様におなり遊ばすでせう。御質問の御返事まで。

秋のおとづれ

三河　翠山　靜子

この頃同窓會がありました、集まつて見ると、まあどうしませう、私が一番年若様」美しい若い人達のする事に恍惚りしました、學校時代の事、顔を揃ふて別れた友達の面影など、一齊に甦つて色々と懐しい哀しい思ひが湧きました。最う一層若くなつて見度いと いふ平凡な望哀も感じました。けれども人は過去の夢をたべるよりも、やはり現實に生きた方がより多く意味がありませう。

銀座より

京橋　伊東幸子

都の秋は一入哀れが深うございます、人通りの繁き此往來で蟬のぬけからを見出したり、電車の轟々となる音や、自働車の騒々しい響の中にゐながら、桐の葉が風にバサと落ちるんですもの、歡樂の後の凋落といふやうな感じがひし〳〵と胸に迫つてまゐります、萩女郎花など色美しく咲き亂れて、霧おく夕の野に啼く蟲の聲は面白いでせうけれど、都では、まして此銀座あたりでは、そんな詩趣は得られません、秋、蟋蟀が、電燈の光の洩らぬ暗いどぶの中で、寂しげに啼いてゐるのを聞きます、同じ蟲仲間でも、宿命はかくも違ふものかと、哀感をそゝられるやうな氣が致します、山里の秋は、淋しい中にも美しく賑やかでございませう、御便りおきかせ下さい。

寫眞に添へて

愛知　鯉江もと子

先日にお寫眞を有難う、私嬉しいやらお懐しいやらで、出したり眺つたり、母も兄が澄子様、まあお立派にれえつて申しました、ほんとに同じ水道の水で産湯を使ひながら雲と墨、でも心強う御座います、こんな美しいお友達があつて……あの白魚の様な指輪輝く御手、この松の根のやうな手、思はず苦笑を漏しました。

澄子様私のは御覧の通り正札附の田舍娘で、着つけない着物を不器用な體へつけたものですから、いよ〳〵田舍臭然としてゐます、矢張私に

は木綿絣の節袖に、手拭の細縞近り、蒸氣斜に抱へて萬歳屋っゝかけてゐた方がいゝやうです、ホヽヽ。

友よりの秋信

長崎つゆ子

又秋がまゐりました、後の山も前の野も女郎花の眞盛り、崖の下には萩の花が美しう咲きました。そこら一面稲ももうすつかり穂が出揃つて、日中には稲の間に白い花が見られます、今日始めて朝早く起きて、露ながらの女郎花を覚束ない手付で活けて見まして、ミン／＼と喧しかつた蝉の聲も聞えず、蛙の聲も千草にすだく虫と變つて、趣深い秋の氣は此山里に充ち／＼て居ります。やがては果樹園の柿も色づきませうし、前の畑の新芋でも掘つて、昔の寄宿舎を忍ぶのも面白う御座いませう、汽車ならば一日の旅、思ひ切つて御來遊ばしませんか、御待申上て居ります。

遊學中の妹へ

牛込輝子

御手紙たしかに拝見しました、けれど少しは故郷の家の事も考へて御覧なさい、今度入學するに付て父の厳しい反對のあつた其中に立つて、やう／＼に許して戴いたお母様と私との苦勞を、苦しい中から出して居る學費、それは御許も御存じの筈、それを今更着物が見すぼらしいからいやとは、東京の學校は衣服の展覧會ですの、そんな學校ならば、此先も思ひやられますから、すぐ様退學して歸國なさい、故里にも技藝學校が有りますから、其所へでも入學したらよいでせう、委しい事はいづれお母様からお便りが有る筈です。

鋸山便り

牛込華子

一昨日より此所房州保田町に参り居り候、誠に人氣のよき所にて、居心地よく、景色も三方山にて前は海といふ貴女のお好きそうな所に候、今日は少し天氣悪しく候へ共、突然從兄が友人二人伴ひ参り候故、急に思立ち、日本寺と申す所へ参り候、田舎の事とて笑ふ人もなければ、着物高く端折りあげ、長襦袢一枚の足元かろく、勇みて出掛け、麓より草履にはきかへ、鋸山へ登り候、此山は頂きまで程よく足場の付きたる登よき山なれ共、何分かゝる所に慣れぬ私はホト／＼閉口致し候、「富士山へ登るのもこんなの」と申し、從兄に笑はれ申候、此分にては先々登山の話は當分沙汰止みに致すべく候。

此撫子岩路にて岩の上に咲けるを見出し、兄にやつと折りてもらひ、紙入にはさみ置きたるにて、今日の紀念に一花お目にかけ候。かしこ

不運を訴ふる友へ

長野　濟水あや子

おなげきは御もつとも、十分御察し申ます。けれど元子様、誰にだつて多少の苦勞は御座います、いつもエデンの園に遊ぶ様な氣持で暮して行く人はおそらく一人だつて有りますまい、恨あり怒あり涙ある此世に生れて、總べての苦痛煩悶に打かつてゆくこそ、人間の本分で御座いませう、餘りくよ／＼なされてはお體にさはります、何も前世のならひと思召して、もつともつとお心を廣くおもち遊ばせ、人間は未來の事を案んじたら、それこそ一日も安心しては居られません。

「前途の事は神之を知しめす」から、何事も神におまかせして、これ

からは心平らかに月日を送らうではありませんか、都のお住居ばかりも御窮屈でせう、ちと山家へもお出掛あそばせ。

諏訪湖畔の宿より

信濃　ゆり子

今この宿へ着きました、今朝淺間溫泉の宿を出た時は、細い雨がしたしたと降つて居ましたが、鹽尻の長いトンネルを越した頃、さらりと晴れました、岡谷の渡し場からこゝまで、夕暮の湖上を小さい舟で横ぎりました、三里はあると船頭が、静かに艪をかきながら云ひました。

湯上りの濡れ髮を涼しい風に吹かれながら、斯うして欄干に寄つて眺めた湖畔の夕暮は、とてもスケート場となつて居た雪の湖上とは思へません。

遊學中の子供に

長崎　吉武いし子

其許の事秀様より聞き及び、安心致し候、當方にても父上始め皆無事御安心なされ度く候、武雄はやはり例の腕白にて困り居り候も、兄さんは何時かへるのくとたづね候事いぢらしく候、庭の柿も昨今が丁度たべ頃と相成申候、其れにつけても御許が居たら、例の柿の木住居をして居る事ならんと、昨夜も父上とうわさ致し候、並に少しなれども思ひ出草にもと差し送り申候まゝ、御賞味下され度く候、されど過食はなさるまじく候、時節柄れ冷えせぬ樣、先日送りし腹卷きぜひ御着用成さる可く、注意致し候、今更申までも無き事ながら決してく惡友の誘ひにおち入り給ふな、秋は勉强の節とか隨分おはげみなさるべく、其れのみれんじ申居候。かしこ

秋の夜友の許に

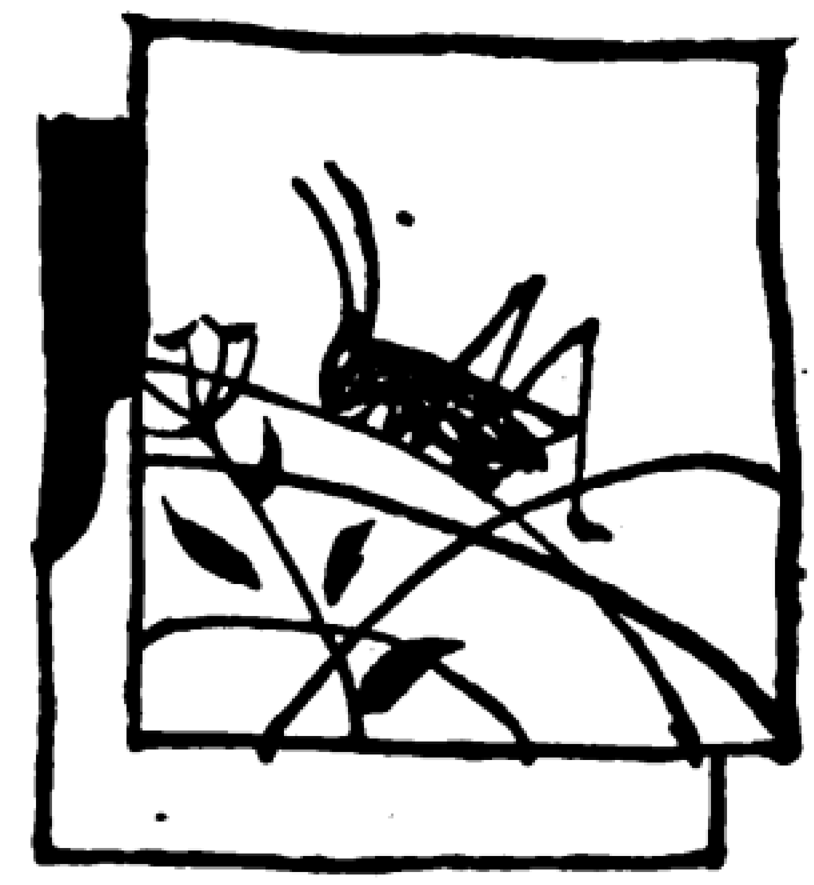
露　子

常には市の中心の華娟と嘲笑さるゝお座には、秋の夜こそ中々に趣高う候、籠飼ひの蟲の聲より細き音にはあらで、活々と力ある聲して鈴蟲松蟲きりぎりす蟋蟀など競爭してなき申候、此頃はバイオリンも餘程御上達遊ばされ候由、妹も漸く六段を了り、歌ものかける樣なるもやみ申候間、何卒御令妹御同道、バイオリン御携帶にて、此月をそらす御出かけ下され度候。かしこ

旅行先の友へ

深川　中村ふく子

あなたはほんとに奇拔の事お好きれ、わたし、今頃どの邊をぶらついて居るのだらうと思つてたら、まあ驚いた！　一週間山の中で暮して、今やつと喜美子さんのお宅へお着だつてれ、然し折角の御休暇なんですもの、思ふ存分お歩きなさい、男の方も及ばないあなたですもの、仕方がないわ、まあ何でもよござんすが、此下旬お歸へりになつたら、旅行談に嘆花が咲くことでせう、お待ちして居ります。



俳句

天　大和　堀好子

こんな夜に桔梗は咲くか月一つ

地　横濱　多摩井姪子

酔へば泣く夫うとましや暮の秋

人　大阪　藪鶯

いぢらしう又朝顔の一つ咲き

秀逸

添乳して吾も諸寝や縁の月　三池　藤田桃江

萩抱いてしとゞにぬれし初袷　福島　木村つね子

桐の花に故郷戀ふる女かな　千葉　加瀬涼子

蠅の足冷たくさわる今朝の秋　大阪　樋口さく

薬袋の煤けて壁に秋暮るゝ　四谷　春野綾子

一匹は姉にゆづりぬくつわ蟲　美作　田鶴子

別れ來て淋びしさに折る野菊かな　廣島　野の花

穂より穂に雀追はるゝ野分哉　東京　瀬田みどり

公園の噴水細し雲の峰　清國　横山ろく子

君が代や見わたす稲の花くもり　京都　神田めき子

稲刈りて足元寒き案山子哉　波島　齋藤ふじ子

父亡くて今年うらみの新酒哉　美濃　右近

つくづくと泣きたうなりぬ雨の萩　三河　岡瀬昇子

蟋蟀や野中の寺の宵明り　丹波　細見文子

神苑の水に尾を打つ蜻蛉かな　廣島　ほたる

飛びも得ぬ蝶々哀れ草の露　岐阜　牧野米子

隧道の切間明るき紅葉哉　東京　竹内とみ子

夕立の痩せし月の白さ哉　大阪　武田信子

白粉の花に暮れゆく車井戸　京都　内藤久子

牛の乳しぼる灯を置く野菊かな　神戸　荒牧とく子

朝寒や一夜とまりの琵琶法師　大分　菅沼妙子

生れしは男子なりけり菊日和　大阪　あい子

秋雨や針のあなより貧昏るゝ　長野　花川とく子

奉納の黒髪ふきぬ秋の風　三河　はる子

稲妻や門司と釜山な一跨ぎ　和泉　北野くま
秋風や青き蛙の寒げなり　福島　木村つれ
鐘の音に寺の由來を聞く夜かな　佐賀　河下ゆい
雑兵の片手侘しき砧かな　宇都宮　稲原ひろ子
水青く蘆花白し利根の秋　札幌　俣野恭子
鶉鳴いて靈靜かなる花野かな　石見　青々女
鈴蟲や捨てられもせずかき松葉　下関　松尾まき子
積み藁の雨の響や雁來紅　下関　山水芳子
孫連れて日待によばふ野路遠き　靜岡　中島浜子
琴歌も時にふるはし秋の風　愛知　日野路子
霧の音に小蝶の眠る日和哉　横濱　中木幸子
朝鮮のはてをも照らす御代の月　本郷　壬生此花女
月出でゝ砧打たんと思ひけり　備前　横谷都子
菊咲くや妹戀しと夢に見し　大分　三重野梓子
夕顔や裏に網打つ妻わかし　志摩　こと子
秋の雨女の足のしろさかな　芝區　鈴木ひさ子
雨たくる女たゝずむ月夜かな　愛知　もと子
雁とんで十里のあなた時雨哉　麴町　寄賀こと子
月すむや世を忍び音の想夫戀　駿河　恭子
白蓮の泥に染りし出水かな　牛込　輝子
野菊より野菊にかくる蜘蛛の網　大阪　寺部琴
古琴を横にもなさん萩の池　日本橋　佐藤光子
馬子の歌奈良へは三里明月夜　四谷　佐藤望子
旅籠屋の窓に富士見る月夜かな　近江　浅野重子
雨にさめ露に色づく萩の花　京橋　圖子

秋晴や阿蘇の煙り直に立つ　神戸　藤森いち子
蜘蛛の巣に落葉模樣や秋の月　山形　物河日和
明月に櫟ちけり嵯峨男　神戸　山本愛子
新世帶緒のゝれんに初しぐれ　宇都宮　太田文子
蘆蓬々艪の音高き潮岬哉　栃木　加藤房江子
崩れども澄む墓の井や鷄頭花　岩代　木田ゆき子
蟲干やなき母偲ぶ振りの袖　岩代　露子
蘭の香に女詩人の苦吟かな　美濃　山澤栞
大岩の穴より見ゆる秋の海　長野　瀧澤シゲミ
夕顔や蘭煮ろ女美しき　千葉　大熊椿子
放れ馬かけ行く町や霧の峰　岐阜　酒井富子
琴の緒の切れて音あり秋の風　大阪　藤田きよ子
女郎花我子の墓にしをれけり　備前　山田英子
夕榮や白鷺の城の壁赤き　姫路　松本靜子
網干しさ秋暑き香の漁村かな　朝鮮　池田かよ子
過去七日或は露も秋じけり　岐阜　右近
一群の雁や入江の夕月夜　岡山　曉花子
小流に紅葉流ふ花野かな　廣島　加藤しすい
秋の露ちるや廢寺の塔の上　廣島　加藤かほる
灯して萩に君まつ夕べかな　廣島　野菊
空蟬のなさから一つ地藏堂　信州　恒子
張板に日は斜めなり赤蜻蛉　新潟　吉田かほろ子
ちぎれ飛ぶ雲の行方や今朝の秋　大阪　松浦長子
秋風や初瀨の女の頰冠り　根岸　文子
寺女誰れ細々の灯に砧かな　東京　長谷川かな

讀者倶樂部

▲皆様の中にほんとに御氣の毒な、御兩親もないとか、學問をいたしたいけれ共學資が缺乏して居るとかいふ様な御方がありましたら澤山の方は出來ませんが、一二人位は御世話いたしたいと思ひます、御遠慮遊ばさないで御通知を願ひます、宅の番地は記者様に御聞合せ下さいまし。(千駄ケ谷カーネーション)

▲近頃渡米志望の婦人の方が多數有る様ですが私も同じ希望にて昨年の春渡米致し、加州大學の諸師の宅にスクールガルをなし居ります、日本と異ひまして、貴賤の別なく、實に自由で、人の世話にならずして樂に通學が出來ます、又た知つて居る婦人の内に、スクールガルをなして大學に通うてをらるゝ御方、或は日本にて高女卒業してきて眞人と共に日々美觀事業に眞劔になつて働いて居らるゝのもあります、けれど日本にて立派な教育を受けた婦人或は無教育の婦人が只だ空想と虚榮心より此國に來りて、案に相違して失望の末賤しいことをしてをる人もあります、とかく誘惑の多い所なれば、完全なる保護者あり意志の堅き御婦人でなき以上は、決しておいでなさらないやうに斷ります、眞人たる人の人格、品性を知らずになす寫眞結婚などは、とかく不幸の本となります、——米國の女子技藝中、草花栽培は私は好んで研究致して居りますから、知つて居る事だけは、時間の有るかぎり御答へ致します、私は御地の女子技藝學校に居りました者です（北米羅村北子 K. F. 2375 Shattuck Ave Berkeley Cal. U. S. A.）

▲東京は大變の水だつたさうですが、皆様は御變りもございませんか、蘇澳は生蕃征伐で大さわぎして居ります。（臺北吉亭庄川端田中きわの）

▲千代子様、お尋れのダリヤは、種子でも少し手入れさへよければ、年内に立派に花を見られます、富子様外御三方、朝顔の種類は無數ですから、お望みの種類御申越し下さい、喜んで交換に應じます、又皆様のお望みに從ひ種子のある限り、どなたにも、實費で御分讓致します。（信州三留野驛青木恒子）

▲沼津に七日の避暑を終へて、後ち鵠沼に一泊する事となりましたから、千代子さんの本を宿の女中に聞いて見ました、女中は片彩愛っしふ「へー、なんですか、よく尋れる方が有りますので、宅でも近頃評判になつてゐます……」と語つた要領、別に言ふ程でもありませんが、——御宅は母様と妹様の三人暮しで、學校はお作に書いてある通り、お針りへ三年ほど通はれたそうなるが、只今はお宅でしてらつしやるさうです、年は十九で、お美しいとの事、スッキリ背が高く、東京でお召し物など隨分ハイカラで、中々すましてゐらつしやるさうです。（右近）

▲私の家に、四ヶ月許りになる、猫の子が、三疋居ります、二疋は女で、虎で、一疋は黒で、男です、若し、皆様の中に、御入用の方が、御座いましたら、下名へ。（小石川區大門町一番地小佐野）

▲あはれの妻様へ申します、嘸々お心細くお暮しの事と誠にお氣の毒に存じ候、しかし厚き信仰により夫の君を健康者となされては如何、神信仰には財產もいらず、學問もいらず、たゞ至誠の人とならば神はたしかに救ひ給ふものにて肺病とても全快いたせし人多く御坐候、祭神は造化の三神と國常立の神にして萬物の本源とも申すべき宇宙の大神なれば、精神修養して神の心にかなひ候へば、御利益あることうたがひなく候、もし御心にかなひ候へば、御眞人様の御年と病名とを御申越下されたく、尊き神に仕ふる私共のことなれば、手數かゝりたりとて一錢の報酬もうけ申さず、御助り下さらば此上なき喜びに御座候。（大和生駒郡安堵村天神社内にて神の使女）

▲内藤千代子様の天女降臨大變面白く拜見いた

しました、然し千代子様、貴女そんなに御交際なすつてもよくつて?、お母様に密告致しますよ、でもお達筆でゐらつしやるのね、嫂さんと相並んでいづれ劣らぬ文壇の花ですわ。(白樺)

▲記者様、俳句など團體で投書するのに、一枚のはがきに數名の句を一緒に認めては採用になりませんか、又半紙などに認めて送つては如何ですか。(廣島白百合會)——やはり一枚に一句づゝに願ひます、又半紙に認めたのは採用しません。

▲韓國も最早韓國ではなく、大日本朝鮮になりましたので、知人の家にゐる韓人五名は、皆頭髪をヅル〳〵坊さんにして仕舞ひました。そして夏なのに、頭は冬だなんて申してゐます。(朝鮮釜山長生將純子)

▲羅島の沖の石様御察し申ます、私の姉も、嫁きましてから、十年になりますが、同じ運命に今尚苦しんで居ります、澤山ありし財産も、なくして、今では、異郷にあるかなきかの、侘住居なして居ります、くよ〳〵、思召さず、御心廣く御持ち遊ばしまして、御身御自愛遊ばせ、其の中、夫の君にも、あなたの誠心に、御感じなさいまして、御安心の事と、存じます、私も陰ながら、一日も早く、御安心遊ばされます事を祈ります、尚、御差支御座いませんでしたら、御住所御知せ下さい、御手紙差上度う御座います。(兵庫縣氷上郡佐治村肥田せい子)

▲こんな田舎では野菊や堇は澤山有りますけれども、珍らしいものが御座いません、種子か苗かお持ち合せのお方はどんなのでもお惠み下さいませんか。(久留米市青蓮町藤川方敏子)

▲本紙愛讀諸姉君たちのうちにて、不幸寄るべなきようの御方も在し候はゞ、小兒の世話傍々家事を手傳つては下さいますまいか、及ばずながら行く〳〵の御身の末その他の御事情に及ぶかぎりの御盡力もつくす考へですが、但し宅は二十年來の産婆ですから、職務修行御のぞみあらば、それもお力ぞへいたします、御國も年齢もかまひません。(大阪市北區富田町濱ノ側北入東側産婆村田千代)

▲私本年十九歳で、就能女學校卒業、それより家にて茶、生花、琴など修めた者ですが、東京にて中流以上の家庭へ小間使若しくは令孃の附添として行儀見習に上りたうございます、初奉公。(名古屋市西區鹽丁穗田文子)

▲相模の石田則子様　相模の八重様へ、あの私鈴子と申します不束者、どうぞ御見知り置き遊ばして、まだ見ぬ同國の御二方様をどんなにか御慕ひ申し上げて居ります、御差支なくば御二方に御交際願ひたう御座ひますから、恐入りますが下名まで御住所御もらし御願ひ致します。(相模厚木柳川鈴子)

▲私は四十一年に當地の縣立高女學校を卒業して、小學校本科正教員の試驗にも合格致し、目下小學教師を職と致して居りますが、此の度何處か善良な家庭へ、家庭教師とまでゞは無くとも、お手傳ひに上り度いので御座いますが、(但し軍人の家庭)何卒御世話下さいませんか、くわしき事は手紙にて申上ます。(松本清江)

▲誌友の諸姉様、私は今年の六月に或る病院で手術を受けましたが、手術が少し大きかつた爲め、少し靜養しなければいけない、と醫師にすゝめられましたから、何處か淋しい漁村へでも參りたいと思つて居りますが、御心當りがございますなら誌上で御教へ下さいまし。(牛込美代子)

▲私、去る春、日本の或信用ある會社から草花の種子を取寄せて蒔きましたが、或花は幾度試みても發芽いたしません、モシヤ、古い種子であつたかも知れません、それで今度は愛讀者の内から本年の新らしい種子を送つて頂きたいと思ひ升、それは、紫草、葉げいとう、貝細工の三種です、お持ちの方は小匙に一杯づゝにてよろしいですから、見本としてお送り下さいませ、着次第繪はがきをさし上げます。(ミセス吉田晴

江 906 K. st. Jacoma, Wash.)

▲本鄕の小谷麗生様、もしや明治で御同級だつた方じやなくつて?、色の白い、可愛らしい、…何だかあの方の様な氣がしますわ。(深川るつき)

▲東京小石川夏菊様、日本の古切手を御持の由相當の代價で是非私に御賣り下さい、就ては種類ありますか、詳細至急御一報下さい。(北海道札幌郡月寒村吉田牧場吉田榮子)

▲九月號の卯の花様、柳田富美子様、御いたわしう存じます、妾もいろ〳〵事情のある身でございます、何卒此上ながら御身御大切に御無事ならん事を祈ります。(土佐にて雛賀)

▲親愛なる姉様達よ、妾は並に研究の爲め英語文の交換會を開きました、何卒續々交換して下さい、併せて繪葉書の交換をも願ひます。(大阪堂島濱二ノ一三〇柳島内塩主麻子)

▲私は櫨かほる紀州の片田舍に本誌を愛讀して唯一の慰藉を得て居るものですが、特に名流婦人方の御經驗談には非常に心を刺激されて、善い教訓を受けて居ります。(かげらふ)

▲靜岡の寺島いと子様、私は生來頭髮があかいので困つて居ります、よつて貴嬢の御説の五倍子の粉で洗つて見たいと思ひますが、五倍子は何處で求めたら宜しいですか、其分量と幾日ぶりに洗つたら宜しいか委しう誌上で御知らせ下さいませ、早速ためして見たいと思ひ升から。(岡山春芳)

▲妾は攝津の或海邊に住む田舍娘でございます夜になりますと松の間よりさえ渡つた淋しい秋の月を拜し、又月下に松蟲すゞ蟲の可愛ゆき音など耳にすれば、ほんとに都に住ませ給ふ誌友の姉様方に一夜なりとも聞かしてあげたらといつも思ひます。(攝津淋しき睡蓮)

▲神谷郁子様には、近眼の食療法御存じの由、ぜひとも御伺ひ致し度候に付、御住所誌上にて御聞かせ給はり度願上候。(近眼女)

▲記者様、私も昔より女學世界愛讀者ですよ、いづれ米國の事も御知らせ申し上げます、此の次には口繪の良いのでも御送り申しましよう。(シヤトル市南中俊子 T. Minaminaka. 219. Washington st Seattle, Washington U. S. A.)

▲誌友の皆様、朝顔の種子御入用でしたら、女學世界の如き好き雜誌か、繪はがき(五枚以上)を御送り下されば、本年產の朝顔種子を送ります。(大阪市南區天王寺大道三丁目松澤豐子)

▲美術研究の資料になる樣な各地の寺院、古美術品の繪葉書、或は寫眞をお送り下さいませんか、特に京都奈良地方の方々にお願ひ致します御禮には相當の價格の當地繪葉書其他のものを差上げます。(仙臺市國分町二十二鈴木春子)

▲記者様、私は女學世界第拾卷第九號からの愛讀者ですが、それも間接に愛讀してゐますが、投書する事は出來ませんか。(京都柴田ふみ子)

——自由に御投書下さいまし。

▲私は此頃うれしい事がございます、女學世界が納本になつた其の日に本屋にもう賣つて居る事です、夫れもつまり先生方のお力によつて早く發行されるのでございませう、とうれしく存じます、毎日々々女學世界の出るのを樂しみにして居ります、月末になりますと本屋へお百度よく皆に笑らはれますが、私は誰が何と申そうとも、之れ許りは一生拜見するつもりで居ります。(淺草新片町長濱すゞ)

▲和歌の浦浜様御作の溫泉場めぐり拜見いたしまして、まことになつかしく存じました、私山中、山代、粟津へは二三度もまゐりましたの、そして蓁原溫泉の紅屋の嬢さん……飛さんと申しても四十路を越した人ですが……も存じて居ります。(小樽區大町二ノ四橋本久子)

▲東都野村様の「母を偲ぶ」、西都の雪子様の「親ごゝろ」、實にわが身の心地せられて、思はず袖をぬらし候。(大阪みき子)

▲花すゝき様、私ほんとに心から御同情申し上げますよ、ほんとに貴女も薄命でゐらつしやる

のネ、どう言つて御なぐさめして宜いやら、九月のあれ、讀みかけて、涙をぬぐひました、御勉强遊ばせ、私は戀ふことが言へません、私の住居は遠く離れた筑紫野の末です、斯う言ふ西のはてにも、熱い涙を流して君に同情する可憐の處女あるを知ろし召せ、君よとこしへにまさきく在せ。(肥前にて夕霞)

▲記者樣に御伺ひいたします、皆樣が御だしになります長い有益な文は、中紙に書きますか、原稿紙に書きますか、それからすべて振りがなをつけるのでございますか。(美濃の梨枝子)——中紙でも原稿紙でもよろしく、又振りがなは成るべく附けてあつた方が好都合です。

▲私は明治四十一年十一月十五日發行の本誌こころの日記希望に候得共、孤島の事とて手に入る術なきに付、御持合せの御方あらば南洋植物の種子と御交換御願いたし度、種類は御指圖又は御都合にて面白き庭木になる植物の種子見計ふてなりと御送附申上べく候かしく。(小笠原島母島永口れい子)

▲京都の小畑靜子樣、遠く亞米利加迄も美しき繪葉書をお惠み下され、有り難う存じます、貴女樣の住所を記した手帳を失くして申譯がありません、御住所を知らせて下さいな。(S, Kubo. 1525 18 Th St. Denver, Colo, U. S. A.)

▲一月發行の「マダム振り」及び「嫁ぐ人」お持ちの方は御惠み下さいませんか、御禮には女學世界以外の雜誌を御贈り致します。(大阪西區椿本町三二二森よし子)

▲信濃齊木恒子樣、先月の誌上に人工媒助法を御出しになりましたネ、私も一昨年試みましたら、大變結果が好う御座いましたので、昨年も行りました、人工媒助を行ふた種子は、播く時から、どんな花が咲くかとそれが樂しみですわネ。(京都鶯の宿)

▲皆樣の内で、珍らしい朝顏の種子お持ちの方がございましたなら、何卒下名まで御送り下さいまし、田舍少女に相當な御禮はいたします。(越後柏崎下町橋本とふ)

▲御望みの御方と繪葉書交換致しますから、お申越し下さい、黑衣女樣、お氣の毒に存じます私にでもかなふ事なら何んでも御相談下さい、及ばずながら同情致します。(米國ユタ州オクデン市信子。K. No Pw P. O. Box. 593. Ogdan. Utah U. S. A.)

▲あわれの妻樣へ、御投書拜見致しまして深く御同情申上げます、つきましては至急に申上げたきことが御ざいますから、どうぞ御住所御姓名おもらし下さいまし。(京都市兩替町上ル神谷都子)

▲種子を蒔く、芽生える、成長する、花が咲く、彼の君へも手折つて贈る、……此の刹那々々の感興が、只今の私に於ける全生活なのです、皆樣、園藝種子の御交換を願ひます。(信州三留野驛青木恒子)

▲米國の深雪樣、私も元は信州の者で御座います、どうか御交際下さいまし、色々御話いたしたい事も伺ひたい事も御座いますから、どうぞ下名へ御手紙御願いたします。(本鄕區千駄木林町一八一種口香久子)

▲福岡縣の名所の繪はがき澤山持つて居ます各地の名所繪はがきと交換して下さい。(博多上對馬小路岩崎方柴田つぎ)

▲記者樣、私は四五年前五ヶ年程度の高等女學校を卒業しまして、只今小學校に奉職して居るのですが、どこか一年ばかり修學して中等敎員になれる學校は御座いますまいか。(丹後磯千鳥)——ちとむづかしいでございませう、學校では高等師範、女子英學塾、青山女學院等がありますが、年限が皆な長うございます、止むを得なければ檢定試驗を受ける外はありますまい。

▲八月號にお出しなすつた、福岡のせい子樣の茄子の御飯蒸し、私も早速實驗いたしました、ほんとに結構で御座いました、少し御飯に色はつきますが、(伏見忠子)

新刊紹介

◎婦人常識の養成　下田歌子著

著者下田女史の學問、文才、思想の博大なるは天下萬衆の知悉するところ、此の編は主として年少なる婦人の常識を養成する目的を以て記されたるものなれば、その內容も極めて平易通俗なるものなれども、そこは流石に一代の名婦人の說なり、その說くところ人生百般に渉つて着眼頗る高く凡て婦人の智識を養成するに必要なる事項は擧げてこれを網羅し、事に臨みて實例を引き、物に應じて比喩を設け、歷史上の事實を引證し、世間に有觸たる事柄を僕ひ來つて自由自在に使ひなこしたる說明ぶりは尋常一般の女流學者は勿論、讀書萬卷の博士達にも一寸眞似られぬところなるべし。即ち現代婦人の覺悟、婦人と慈悲、婦人と勇氣、婦人と信念、宗教、教育、常識、學問、職業手藝、禮式、音樂、遊戯、交際、趣味、衞生、思想等の各項に亘つて餘蘊なく記述されたり價一圓五十錢實業の日本社發行。

◎政界の寵兒　山本龜城著

その年齢がらいへば大抵四十から五十位、其地位からいへば、大抵、次官、局長、知事、總監といふ顔觸れで、いづれも將來大臣たるべき資格のある政界の特種人物を月旦評したものである。即ち人格の勝れたると、頭腦の明敏なると手腕あると、才能の秀たると、品性の高きと各各その特性を以て競ひつゝある人の品評でよく其の人を活現してある。政界といつても政黨者流を一人も加へず、專ら官吏のみを品騭したのは官僚全盛の今日、此の方面の萬歳を歌ふたものである。價三十八錢博文館。

◎活勵的心身修養法　田生正明著

心身修養法は現代の處世上に人格の基礎を作るものなり、偉人凡人の差別なく、いづれもその性格に應じてそれ〳〵鍛錬の必要あることいふまでもなし本書は專ら實務者に向つて修養の方法を說きたるものにして、生理上、心理上に出入し、其方法、作用を講究し、營養、運動、執務、姿勢　呼吸等の物質的より、自信の養成、餘裕の淘汰、樂天方法等精神的に至りて深く研究したるものなり。價三十八錢博文館。

◎新洋行土産（下卷）　巖谷小波著

前に上卷發行の際大體を紹介して置いた樣であつたが、今度の下卷は專ら渡米實業團な機會として米國の見聞を記されたものである。元より少數時日の間に廣く見、普れく覗つたといふ方であるから、自然その觀察は深刻、徹底といふ主義ではなく、寧ろ汎く、一般的にあつさりと記された樣である。その代り觀察は萬般の事項に行渡つて、一局部に偏せず、一階級に固着せず、殆も日光が萬物を照す如く、普遍的に行渡つて何物をも包擁し、何物をも網羅して洩らす處なく記述されたのは、本書の特色で、他の歐米觀察記等に見られぬ價値がある。これ固より實業團といふ團體な觀察すべき好機關の然らしめたものであるとはいへ又著者の頭腦の多角形的で如何なるものも消化するといふ一大能力の然らしめたものである。即ち「渡米私議」「渡米百談」「渡米餘談」「アメリカ話」「渡米電報」等數編を集めて、上卷よりも寧ろ趣味深き樣に見える。價一圓三十錢博文館。

◎水蔭叢書　江見水蔭著

著者は明治文壇才人の淵叢たる硯友社中の驍將である。中にも紅葉山人の豔麗精妙の筆致は天下既に多大の渇仰者を醉醉せしむ、水蔭氏の筆は寧ろ氣骨を以て勝り覇氣を以て優る、而して其想は奇想天外、時として巧みに讀者を欺いて作者想像中の別天地に誘ふの狡猾手段を弄するところ中々に老手といふべし、卷中「女房殺」は當年世評嘖々たる好編、「旅役者」「林間の高塔」「水椽記」などはまづ一種のローマンスといつてよい、「潮心の響」「案務苦」は凄婉の作「新潮來曲」「紙子くらべ」等は寧ろ作の爲めに巧を弄したるの嫌ひあるも水蔭氏の筆致、特色はこの一編に發揮し盡されたるの觀あり(定價貳圓)博文館發行。

◎家庭鮓のつけかた　與兵ずし主人著

むかしから江戸名物の一に數へた與兵衛ずしの主人が、家庭に向つて鮓の造り方を敎へたものである。鮓は古くから行はれていろ〳〵變遷をしてゐるが、飯を應用した料理の內では最も美術的のものであるけれども家庭に行はれてゐるものは極く變則で僅かに五目ずしや海苔卷位に限られてゐるが、この書は握り鮓でも卷鮓でも素人に出來る樣に詳しくこしらへ方が說明してある、殊に材料の選び方つくり方に就て、與兵衛傳來の秘訣が說いてあつて極めて有益なものである。定價七十錢日本橋區通一丁目大倉書店

◎近代的婦人　玉井紅花著

近代的婦人といふ言葉は近來の流行語である。婦人の自由、婦人の覺醒、婦人の開放は、近世の科學を敎へられた婦人に依つて唱へ出され頗る大なる精神的の問題とならんとしつゝあり本書は即ちこの近代的婦人に向つて其の問題を解決せんとしたものである。價三十錢本郷區西片町研商會發行。

◎講談文庫武勇傳(後編)　博文館編輯局選

尤も通俗的で且つ尤も傳奇趣味に富んでゐるものは何といつても講談である、これは實に武士道の發達に伴ふて自然に生れて來つた演義的物語の一つである。この編朝夷三郞、朝鮮虎狩、吉野落關原前記、摩天嶺十勇士、其他十數編いづれも勇壯活潑骨躍り肉動くの槪がある。價五十五錢。

◎最新倫敦繁昌記　田中湖人著

世界漫遊は現代の尤も價値ある流行物である。隨つて海外より齎らし來る、土産話的の著述又大に歡迎さるゝは自然の趨勢であるが、本書は世界第一の都會たる倫敦市を社會的に觀察したもので、市の表面の繁華、裏面の怪奇、外形と內情と、珍らしいもの、名高いもの、奇異なるもの、感心すべきもの、馬鹿らしきもの其他一切の風俗習慣凡て此の市の特色といふ特色は槪れ網羅して見物好に滿足を與へてある、その觀察は精透奇警、且つ新鮮で文章は平易、明快、間々滑稽の筆を弄して噴飯せしむるの妙がある定價金一圓博文館。

◎結核菌物語　醫學士　廣澤汀波著

病の源を成す結核菌が人體にあつて如何なる蹟をなすかの狀態を、結核菌か人と擬つて物語體に記したもので、興味を以て讀む間に自然、病菌跋扈の狀態を知つて衛生上の智識を知得する事を得る良書である、定價二十錢博文館。

懸賞募集

日常生活の教訓

〆切　十月二十五日限

日常生活より得來りたる趣味ある教訓を募る

一日には一日の教訓あり、天は猥りに人に一日の光陰を與へず、必らず何等かの意味を感得せしめざれば止まざるなり。故に日常生活は平凡なる如くにして其實極めて大なる人生の意義を含むことを知るべし。

日常生活より得來れる百般の事項を趣味深く味ひ、人事人情の委曲を詳かに觀察して處世の要道を知り、兼ねて常識を養ひ、品性を陶冶し、かくして無趣味不健全に流れんとする現代の生活をして尤も價値あるもの光輝あるもの、品位あるものたらしめんとするは吾人の宿望なり。

今回この主意を以て普く江湖の諸君子に日常生活より得たる（健全なる思想を含める）教訓的文字を募らんとす。冀くはその韞蓄したまへる金玉の文を割愛したまはん事を。（但文體は隨意なれども、成るべく事實を描きて理論に走らざるものを望む。）

賞金

▲壹等	金參拾圓	一名
▲貳等	金拾五圓	一名
▲參等	金拾圓	二名
▲四等	金七圓	五名
▲五等	金五圓	十名

規程

△原稿は普通原稿紙十五枚以上の事

△原稿の終に住所姓名を記する事

△宛名は博文館女學世界とし封皮に特記する事

△當選の文は十一月中旬發表す

△賞等は發表の當日現金にて發送す

才媛文壇懸賞募集（十月十二日〆切）

▲美　文（二十字詰十五行以內）

▲日　記（二十字詰十五行以內）

▲書簡文（二十字詰十五行以內）

▲有益な實驗（十五行以內）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、有益な實驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館內女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

△いろ〳〵の實驗（賞壹圓以下）

每月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊
增刊四回：一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年九月廿六日印刷納本　第拾卷第拾參號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

最新發明 肺病 肋膜 新藥に就きて

獨逸ドクトル 高平氏報告（醫事週報二七號報告再錄）

新治療劑主藥の肺結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本藥服用後は常温下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を增進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（敬稱上住所姓名を秘す）**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盜汗女子三年前發病遂に末期重症の動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々喀血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を增加せり

●兵頭某 **肋膜炎**（喀血無し肺病初期の疑あり）胸部痛み食不振身體卅一歳男倦怠盜汗。咳嗽。頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歷を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	微効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治
龍谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥として報告する義務あるを信ず又効力多大にして持長服藥するも副作用なく殊に**喀血**と其豫防に可驚効あるを以て醫藥の傍ら服用最も妙ならん吾人は病者に向って新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸む と共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく普者にも療法あり）遠慮なく送料郵券二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代 貰ひ得らる、故是非一讀あれ益する處多からん。之れにより全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週金二圓
貳週參圓九十錢
參週五圓七拾錢
四週七圓貳拾錢
五週九圓

東京神田竪大工町 療養院 製藥所 **村尾明治堂**
電話本局參千七百五十二番（私書函神田）
振替口座東京壹四參壹九番（本局第三號）

勿驚みやけ油の愛用者百萬以上となれり

金五千圓左の方法に依り慈善事業へ寄附するヿとせり

みやけ油瓶のレッテルを剝ぎ取り其他慈善會へ御寄附になれば本舗にて一枚五厘（本年中）にて御引替す

村井弦齋先生の賞讚を博し又

宮内省御買上の光榮ある日本一の最良髮油は全國中みやけ油あるのみ

外に墨拔洗粉・スキ油。ビンツケ等好評嘖々



近時みやけ油御愛用の方に對し。混合物ある品を**椿**と稱ひ粗惡の類似品を賣附る姦商あれば必ず「東京人形町のみやけ油」と御名指しの上御求めなさい

●販賣所は全國有名吳服店小間物化粧品藥屋等にあり

女（發付の一）

新文章新文學の泉源地 ★ 青年文士の登龍門

文章世界

第五卷第拾貳號（九月十五日發行）正價金廿錢 郵稅二錢

■小說 **一夜**（花を尋ねて廻る蝶のやうな生活をしてゐる男の醜い不安を描けり、獨身者の嘆き一面を窺ふべし。）‥正宗白鳥

（文章講談）
▽寫生文を學ぶ人々に　阪本文泉子
▽日本辭書の種類と其特色　松井簡治
▽文章上達の五法則　菊池晚香

●詩に入つて來た三味線‥蒲原有明
●謠ひ物に表はれた國民性‥秋田雨雀
●斷片語（編者獨得の心熱的評論。文壇の近事を縱横に論斷せり。）‥‥岩野泡鳴
●肥えた人より瘦せた人へ（感想を寄せたる書簡文）‥‥白柳香湖

■論說 **インキ壺**（直接經驗に根據せる人世觀と藝術觀との披瀝なり）‥‥田山花袋

◎新傾向の歷史、態度及び特徵‥‥荻原井泉水

小品
▼朝（作者の特得の女性描寫）‥‥水野葉舟
▼裾野（富士の裾野の特色を乘合馬車に仍つて描き出せり）‥‥西村渚山

◎技巧としての印象主義‥‥柴田柴庵

■紀行 **北伊豆日記**（旅の印象を描いて自ら首尾あらしめたる新式の紀行文）前田晁

（評釋）
▽邪路に入れる短歌　窪田空穗
▽秋の新題の句　內藤鳴雪
▽旅の夜　前田夕暮

●脚本の根本的二要件‥中村春雨
●在宅日（文壇の或家する一情景を描いて讀者自ら其空氣に觸れしむる者あり）水上清波
●ダンヌンチオの新作小說カストレ、フジオ（其の梗概を說いて更らに作者の藝術を評論せり）
●詩二篇（長詩）‥‥‥加藤介春

■**秋六景**（明治文壇の大家の文中より秋に關する優秀の描寫を選拔し、并つて、これに徹底せる詳釋を加へたり、各家の特色自ら分明す。）

◎**文叢**（現代の青年文士が苦心の餘に成れる短篇小說、敍事文、抒情文、評論文、書簡文、小品文、はがき文、俳句、短歌及びコマ村淨を文壇の諸大家が最も嚴正に、最も愼重に選評せるもの毎號百十頁餘に涉りて滿載。）

（後付の四）

◀發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替口座東京二百四十番　博文館▶

家庭日常寶典

家事整理墨縄

博文館女學世界編輯局編纂

明治四十四年

家庭日記

洋裝總クロース金文字入
美本紙數五百餘頁

正價卅八錢
郵稅拾錢

家庭日記は最も進歩したる。且つ最も文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規模を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の內容は左の如し。

（要目）

▲收入明細表
▲支出日計表
▲出納計算及殘高表
▲家計分類出納表
▲出納分類表
▲貸附契約一覽
▲保險契約一覽
▲諸關係掛金一覽
▲租稅一覽
▲年中行事豫記
▲家庭重要記錄
▲我家の家族
▲家庭紀念事項
▲戶籍表
▲崇廟祭祀日錄
▲通學要錄
▲兒童生育要錄
▲健康要錄
▲衣類目錄
▲財產目錄
▲貸借關係錄
▲音物贈答日誌
▲通俗日誌
▲親族名簿
▲備人名簿
▲知人名簿
▲備忘錄

（附錄）

●家計安全法
月收百三十圓、七十五圓、五十圓にて見積りたる生活費の內譯

本書內容の一班

本書は始めに一年三百六十五日の日欄を置き、七曜干支を順記し、以て日々の天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、食品、花曆の各項を抄記して月令の栞となし次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき約二百頁に涉る家庭重要記事を始め、交際、通信音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し綠れて財產、衣類等の品目を揭記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前揭附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識にして其他これに必要なる諸規則をも網羅せり。

●家庭修養訓
●婦人の交際心得
●一年間の仕事配置
●衣類器具の整理
●日常心得草
●室內裝飾法
●看護上の注意
●結婚式上の心得
●細君小言十ヶ條
●音物贈答の注意
●四季折々の料理
●惡習慣矯正法
●盆栽の趣味
●簡易治療法
●一家經濟の枝折
●健康長壽の術
●姙產婦の心得
●火の元の用心
●衛生美容法
善惡當座占ひ

家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來有觸れる日記簿とは全然面目を異にし統一あり秩序あり教訓あり趣味ある日記にして眞に一家の重寶たる實質を具備せり

（後付の五）

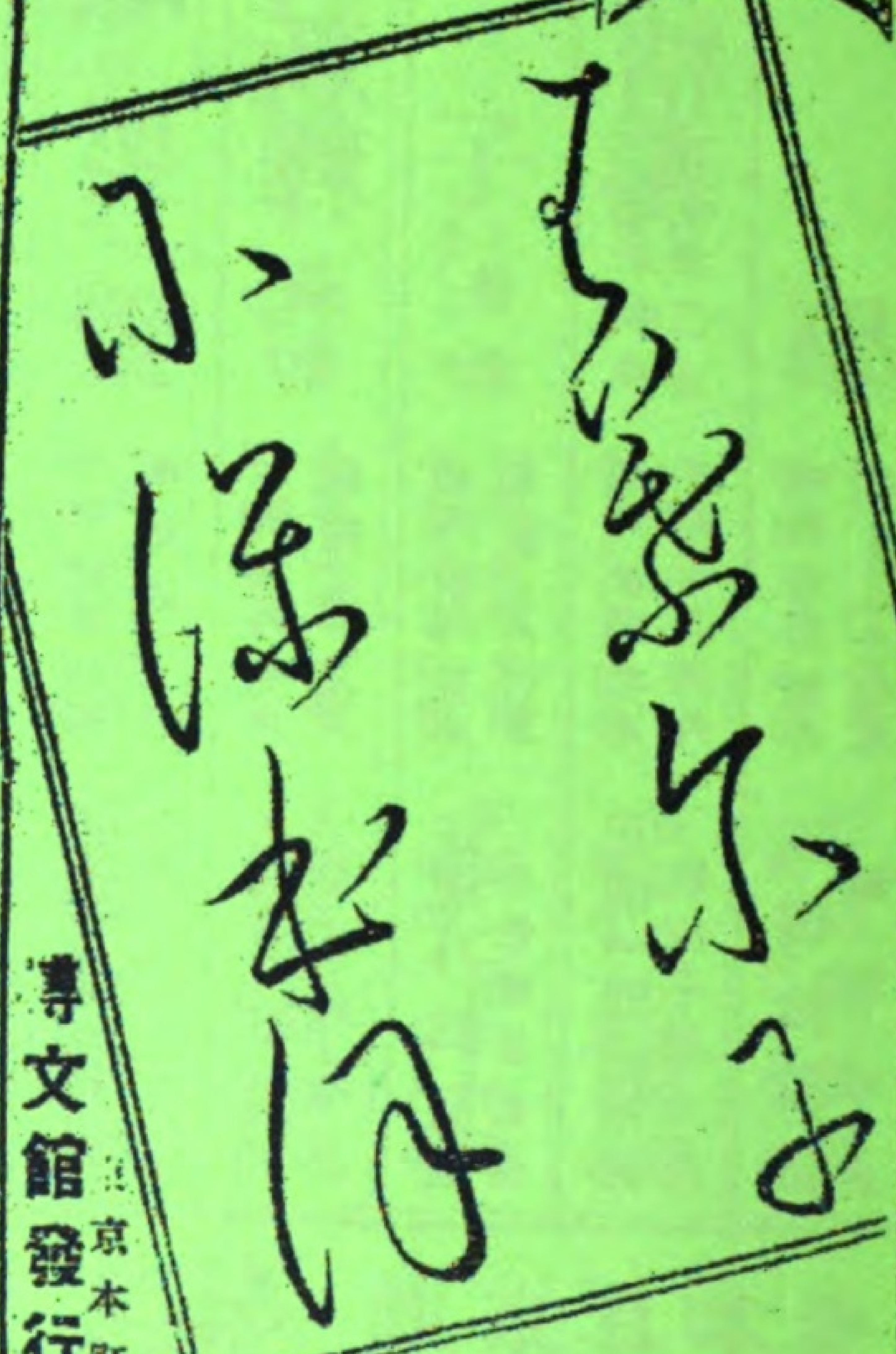
東京日本橋本町三　博文館　振替東京二百四十番

故新岡久賴君筆

いろは三體帖

半紙判折本　正價四拾錢　郵稅四錢

本書の書體は下の如し
當時婦人の手簡詠歌の
認め方には斯くの如き
書體尤も歡迎せらる。



博文館發行　東京本町

成女學校校長　宮田脩君序

日本女學校教頭　豐岡茂夫君著

女氣質と修養

感觸に捉はれ、欲の奴隷となるは女性なり、情火燃えて、盲目なるも女性なり、意馬脆く、躓き易きも女性なり、女性の修養は、高く聖き絕對の靈光に觸れしむる、と同時に、其の天職に關する日常の智能に富ましめざるべからず、本書の說く所は、理想と與に現實あり、靈輝き肉躍る、女は自ら省み、男も讀みて、他山の石とせよ。

全一册洋裝
菊半截美本
紙數三百頁

▽近刊△

女（後付の七）

☛ 本誌愛讀者の近所の書

- 文學士 久保天隨君校訂 ■訂正 日本外史 洋裝四六判特製 紙數八〇〇頁 正價七拾五錢 小包料拾貳錢
- 文學士 久保天隨君註釋 ■日本外史新釋 自卷一至卷十二 全部十二冊 和裝菊判美本 各三〇〇頁內外 正價一冊參拾錢 郵稅一冊六錢
- 少年世界編輯部編 ■明治少年節用 洋裝三六判特製 紙數六〇〇頁 正價七拾五錢 郵稅八錢
- 文學士 久保天隨君著 ■唐詩選新釋 自卷一至卷五 全部五冊 和裝菊判美本 各二五〇頁內外 正價一冊參拾錢 郵稅一冊六錢
- 文學士 菊池謙二郎君編 ■東湖全集 洋裝菊判特製 紙數一一三三頁 正價貳圓五拾錢 小包料十六錢
- 中條工學士校閱 井上繁次郎君編 ■建築師要覽 洋裝袖珍特製 紙數四七六頁 正價壹圓貳拾錢 郵稅四錢
- 文學士 久保天隨君著 ■古文眞寶新釋 前集 和裝菊判美本 紙數六三二頁 正價七拾五錢 小包料八錢
- ■同 後集 和裝菊判美本 紙數七〇〇頁 正價八拾五錢 小包料拾貳錢
- 文學士 久保天隨君著 ■文章軌範精義 上中下 全三冊 和裝菊判美本 各四〇〇頁內外 正價一冊四拾錢 郵稅一冊八錢
- 文學士 久保天隨君著 ■四書新釋 大學 和裝菊判美本 紙數一二〇頁 正價拾五錢 郵稅四錢

販賣用電話 本局二六二〇番

發兌元 東京日本橋

女(後付の八)

女(後付の九)

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著

家庭百科全書

全部五十册——每月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◎紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

編	書名	著者
第一編	新家庭訓	三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
第二編	四季料理	宮中臣民兩派料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
第三編	裁縫指南	女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著
第四編	和洋菓子製法	東京治庖會講師 龜井まき子女史著
第五編	茶道と香道	水原翠香女史著
第六編	諸流生花指南	琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
第七編	育兒の務	醫學士 田村良鐵君 朝夷孤舟君 共著
第八編	簡易治療法	新潟縣高田高等女學校敎諭 藤井靜子女史著
第十三編	教育お伽噺	少年世界記者 木村小舟君著
第十四編	女德の養成	前田長太君著
第十五編	家屋と庭園	内山正如君著
第十六編	魚鳥家畜の飼養	農業世界記者 鹿野化骨君著
第十七編	女子作文法	遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
第十八編	子女の教養	私立高等女學校長 棚橋絢子女史著
第十九編	家庭の趣味	文學士 大森兜山君著
第廿編	家庭遊戯法	高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著

販賣用電話 本局二六二〇

發兌元

東京日本橋

婦女必讀の大全書

第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎮子女史著

第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

第十一編 **編物指南** 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編 **婦人の生理と衛生** 青山學院教授 牧野清子女史著

第廿一編 **書道手引** 歌道書道專攻大和會々長 井田秀生君著

第廿二編 **歌の手引** 大和田建樹君著

第廿三編 **刺繡術指南** 刺繡術專門 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南** 山田興松君著

第十三編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第十四編 **室内装飾法** 近藤正一君著

【第一章】總論（室内装飾の要旨●家屋の構造と室内装飾の關係●装飾の四季外十六項）【第二章】四季の座敷飾の一（春の室内装飾●初春の書院飾●初春の床間飾外八項）【第三章】四季の座敷飾の二●夏の床間飾（夏の室内装飾●首夏の床間飾の二外八項）【第四章】四季の座敷飾の三（秋の室内装飾●初秋の書院飾●初秋の床間飾外七項）【第五章】四季の座敷飾の四（冬の室内装飾●初冬の書院飾●初冬の床間飾外七項）【第六章】器具調度の配置とその飾り方（床の間の飾り方●床脇違ひ棚の装飾●床脇地袋棚の装飾外二十七項）第七章 各室特殊の装飾法（日本式座敷飾●書院は如何に装飾すべきか外三十一項）

第十七編 **衣服の調整** 石崎篁園君著

●緒言●衣服の目的及び効用●衣服の區別及び種類●衣服の沿革●衣服の原料●機織（織方の區別、機の種類、機の織方、織物四十八種、織物の産地）●染色（色合四十種、季節と色合、色の調和、綿糸の染方、織物の染方、染返色上げ出法、洋服色上法、模様紋所）●裁縫（衣服各部名稱、裁縫器具、運針法、積り方、裁ち方、縫ひ方、繼ぎ方、解き物及屑布取扱法、綿の入れ方）●洋小物裁縫（機械使用上の心得、附屬機械の種類及使用法）シャツ、ヅボン下、ネクタイ、前掛、涎掛）●古代服（闕腋の袍、半臂、下襲、和單大帷、表袴及大口、小直衣、衣及び出衣、奴袴、狩衣、半尻、水干、垂、長絹、大口、素襖、大紋、唐衣、裳、袿、打衣、單、五衣、汗衫、裳衣、袴、時服）●現代女裝（肌着、半襦袢、長襦袢、蹴出、半衿、下着、合着、上着、比翼、腰帶、下帶、帶締、帶揚、帶留、扱、浴衣、湯巻衣、袴、小袿、細長、湯具、帷子、單衣、羽織、袴、袷、袖、布イ、振袖、頭巾、前垂、足袋）●現代男子服裝（春の部、夏の部、秋及冬の部）●洋服（イブニングコート、フロックコート、モーニングコート、背廣、外套）●流行、衣服の取合せ法（子供衣服、祝着、婦人向衣服、婦人羽織、帶、其の他●禮服（男子禮服同洋裝、女子禮服同洋服）、婚禮服、喪服●衣服と禮式●衣服と衛生●衣服の撰び方●衣服の新方附帶●衣服のしみ●衣服整理法（畳物、入物、仕別、出納、整理）●衣服保存法（汚點、濕氣、蟲蝕、黴、垢、破損、風通、蟲干、防蟲法、容器納、置場、洋服保存法）●洗濯法 木綿物、毛織物、絹布及麻布、一般の心得、簡易洗濯劑製法及火熨斗湯熨斗法）●洋洗濯法●衣服汚拔法●結論

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座東京二四〇番

森鷗外君 巖谷小波君 坪谷水哉君序 今井翠巖君著

最近調査

女子東京遊學案內

◉附 東京實測明細地圖

全一冊洋裝四六判美本
紙數約七百餘頁
各學校寫眞版十五頁挿入
正價五拾八錢郵稅拾錢

女子遊學の好指針

近時女子教育の勃興と共に、各種の女學校年を逐つて其數を增し現今都下のみにても實に百を以て算するに至れり。而して從來地方の女子が是等の學校に遊學する案內として刊行したるもの甚だ多きも、而も此種の編作は概ね粗漏杜撰、單に各學校の規則を拔萃配列したるが如きものに過ぎず甚だしきに至りては、數年前既に廢滅せるものをも其儘記載し却て遊學者を惑はしむるの恐あり概して遊學者の良指針たり、好伴侶たるべきものなかりしは、著者夙に遺憾とせし處なり、是に於て本書は此缺陷を補はん爲めに普く都下各學校に亘りて其最近の組織、學則、校風等を詳細に調査し、凡ての遊學に關する事項の細大漏さず左の各項に區別說明せり、されば女子の將來志望する學校撰擇の上に好指針たるは勿論亦敎育界の一班を窺ふことを得べければ各學校の經營上絕好の良參考書なり。乞ふ一本を備へよ。

▶本書目次◀

同君著 ◉最近調査

男子東京遊學案內

洋裝四六判美本 紙數六百二十頁
定價 五拾八錢 郵稅拾錢

增訂再版四十三年九月現在

▼附錄………東京實測明細地圖

東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇番

第壹卷以下數版重ぬ

名家小説

裝釘……洋裝菊判總

明治の世、新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閲すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず。大家相踵ぎて出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に、或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競ひて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の濃艶、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粹を極む。まこと一代の偉觀と稱すべき也。されど珠玉聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時あり散逸。本館此處に思ふところあり、名家小説文庫を發刊し、毎卷千頁の大冊子となし、諸大家の集中尚も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉に明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

露伴叢書

前編（九百七十餘頁）正價金貳圓 小包料拾貳錢

後編（九百九十餘頁）正價金貳圓 小包料拾貳錢

前編目次

▼自傳 ▼ひげ男 ▼夢がたり ▼客舍雜筆 ▼二日物語 ▼新學士 ▼是は〱 ▼地獄谷日記 ▼夜の雪 ▼迷霧 ▼醉郷記 ▼莽雜考 ▼饒舌 ▼和合樂 ▼珍饌會 ▼莽雜話 ▼縁の糸 ▼川舟 ▼獅子庵 ▼元祿時代の雜劇 ▼休暇傳 ▼大さ話 ▼伊能忠敬 ▼番朱唇 ▼緣外緣 ▼まき筆日記 ▼折々草

後編目次

▼椀久物語 ▼冷干氷 ▼日蓮上人 ▼うつしゑ日記 ▼春の山 ▼箱根草 ▼二宮尊德 ▼當世外道の面 ▼鉄道孝行 ▼突貫紀行 ▼遊行雜記 ▼封じ文 ▼夢日記 ▼醉興記 ▼旅の心得 ▼鐵三鍛 ▼ひとよ草 ▼易心後語 ▼知々夫紀行 ▼自縄自縛 ▼新浦島 ▼春の一日 ▼蹄鐵 ▼鄭成功 ▼文明の庫

澁柿叢書

全一册（紙數壹千餘頁）正價金貳圓 小包料拾貳錢

本編目次

▼釜煮 ▼妻の心 ▼猿冠者 ▼戲火 ▼聚樂殿 ▼島勘左衛門 ▼是非もなき ▼不老術 ▼新粧法 ▼歩と歩 ▼眞に武士 ▼親の面 ▼五月女坂 ▼三千石 ▼男の面 ▼油井正雪 ▼大石内藏之助 ▼碧玉盤 ▼大鳳乾之介 ▼他流試合 ▼脱走兵 ▼振武軍 ▼密告 ▼此の戀

來月三日は何の日？

申す迄もなく我が天長の佳節にて常に子女の指折り數へて此祝日を待ちつゝあり子女の母は此日の裝ひに兎や角と心を惱ましつゝあるが如きも其等の苦慮は我が中野屋洋服店に御相談あらば苦もなく解決致します經濟的に簡便に而も頗るハイカラーに作るを以て理想とし其特長を世間から認められて居る店ですから安心して御用命が出來ます併し餘り切迫してからの御注文は立て込んで居て御斷りする樣なことがありますと甚だ不本意ですから豫め御手廻しなされ御注文下さる樣願上候

○男女格安出來合ひ服及びベビースボックス（嬰兒洋裝）澤山陳列仕り有り候に付御來店御一覽下され度候

○朝鮮へも出張致し居候に付同地の方も例の通り澤山御注文を乞ふ○宿所は龍山太陽館に御座候

（本　店）横濱市辨天通り　（電　話　三四四番）

（東京出張所及び地方係）東京神田鍛冶町　（電話本局二九〇一番）

中野屋洋服店

◎東京市内御注文のお方は電話本局二九〇一番。端書なれば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下されば雛形と切れ地見本持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたす樣調進致します



中野屋洋服店で賣る
化粧水は如何なる品



當店に於て發賣するデリケート化粧水は曾て舶來したることなき歐米化粧界にて絶大の賞賛を得たる逸品なり當店百方試用の結果香氣の高尙なると●顏のあれ●白粉やけ●はたけ●日やけ●ひゞ等に著しき特効あるを認め汎く大方の紳士淑女に頒たんとす幸に御試用の上好評あらんことを希ふ

【用法】御婦人方は日常白粉下として用ゆれば色を白くし皮膚の美を發揮すると不思議なり紳士は髭剃り後に用ゆれば爽快を覺え至極妙なり

【定價】大一瓶五拾錢、中一瓶三十錢、送料各八錢

▲讀賣中女學世界愛讀者に限り遞送無料

【見本進呈】郵券五錢御送附あらば見本一瓶送呈す

【御申入】御資は本店へ東京市及び地方は

女（後付の十六）

女學世界
（毎月一回廿六日印刷納本）
（明治三十四年十二月第三種郵便物認可）　第拾卷第拾參號　（明治四十三年九月廿六日印刷納本）

學生諸君

諸君の多くは暑中休暇を利用して故山を訪づれ給ひしなるべし

因て問ふ朝夕敬慕に堪へざりし

母堂並に姉妹の方々は

健在にあられしか如何

若も病苦に悩みつゝあらば

歸來直に婦人の擁護者たる

中將湯

を送りて其身神を安んぜしめよ

是れ孝道の第一歩にして又友愛の第一著なり

中將湯は子宮血の道より起る左の諸症を全治す

●子宮病　●血の道
●内膜炎　●腟加答兒
●白帶赤帶　●こしけ
●下腹痛み　●胸先差込
●氣ふさぎ　●癇高ぶり
●夜眠らず　●物を苦にす
●逆上頭痛　●腰足冷込
●脊肩こり　●產前產後
●つはり　●難產流產
●月經不順　●經期腹痛

定價

四日分	參拾五錢
一週間分	六拾錢
二週間分	壹圓拾錢
三週間分	壹圓六拾錢
五週間分	貳圓五拾錢

本舖

東京市日本橋區馬喰町四丁目
津村順天堂本店
振替口座六〇八番
電話本局一六十二番
一六十三番

大阪市堺筋大寶寺町南
津村順天堂支店
振替口座三一六二番
電話南二十五番

（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）